

昭和52年度

京都市埋蔵文化財調査概要

昭和 52 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人

京都市埋蔵文化財研究所

昭和 52 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市は平安京の建都に始まり千二百年余の永い歴史を有する古都であり、市域内には平安京跡とその周辺部には数多くの遺跡が点在している。都市機能の整備と近代化のための再開発などに伴い、文化景観や遺跡が壊される機会が多くなった。その対策として遺跡保護の法的措置が講じられるようになった。

京都市では、昭和 47 年に京都市遺跡地図・台帳が作成され、周知されている埋蔵文化財包蔵地内で工事などをするときには、事前の届出の義務が法令で定められている。この頃から遺跡保護のための行政指導や発掘調査を市が直接担当するようになったが、それまでは京都府や大学他の任意の調査団体などが遺跡の発掘調査に関わり大きな成果を挙げてきた。

その後、遺跡発掘の事例が増加し、遺跡の保護と調査体制を整備充実するために、関係する調査団体と京都市が協力し、昭和 51 年 11 月 1 日に財団法人京都市埋蔵文化財研究所が設立された。

遺跡の発掘調査事業を中心にして、その成果をまとめた報告書を刊行し、あわせて講演や、京都市考古資料館などで展示の機会を提供して、遺跡への理解と関心を深めるための普及事業も積極的に実施するなど、市民をはじめ大方の埋蔵文化財保護への支援と理解を高めることを目的としている。

本書は、研究所が実施した昭和 52 年度の発掘調査、試掘・立会調査の各概要について報告するものである。

本来、この「京都市埋蔵文化財調査概要」は、研究所年報として各年度の 1 年間の発掘調査概要、試掘・立会調査概要その他について紹介し、研究所の諸事業の全貌の概略を周知することを目的とするものである。

年報については、昭和 58 年 3 月に昭和 56 年度の「京都市埋蔵文化財調査概要」が刊行されたのが最初である。昭和 51 年度から 55 年度の調査概要については、30 年余の時間が経過するなかで、あらためて編集を進めてきたが、今ここに、昭和 52 年度の調査事業概要報告書として本書を上梓することになった。ご参考になれば幸いである。

平成 23 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 52 年度に実施した、発掘調査(第 1 章)、試掘・立会調査(第 2 章)の年次報告である。
- 2 本書中に示した方位は、大半が磁石によったが、一部天測を行った現場もある。水準高は、一部京都市水準点を使用したか、大半は任意である。
- 3 本書中の地図は、京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1 : 2,500)を参考にし、作成した。
- 4 長岡京の条坊呼称は、調査時には既往の呼称(旧呼称)を使用していたが、長岡京連絡協議会の取り決めにより、新呼称を用いた。
- 5 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 6 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。
- 7 国庫補助事業による調査は、『平安京跡発掘調査概報』1977 年および『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II、『六勝寺跡発掘調査概報』1977、『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和 52 年度、『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 年、『中臣遺跡』建設省国庫補助による発掘調査概要 1977 年に報告している。区画整理による調査は、『鳥羽離宮跡』区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和 52 年度に報告している。また、一部の調査は『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』などに報告している。既報告のものは書名を文末に記した。
- 8 各報告は上村和直が編集・執筆した。また、それ以外に本書作成には調査業務職員および資料業務職員があたった。

目次

第1章 発掘調査

I 昭和52年度の発掘調査概要 …… 1

II 平安宮・京跡

1 平安宮内裏跡 ……	3
2 平安宮大極殿跡 ……	4
3 平安宮朝堂院跡1 ……	5
4 平安宮朝堂院跡2 ……	6
5 平安宮兵庫寮跡 ……	8
6 平安宮造酒司跡1 ……	10
7 平安宮造酒司跡2 ……	12
8 平安宮西雅院跡 ……	15
9 平安宮左兵衛府跡 ……	17
10 平安宮太政官跡 ……	19
11 平安宮西院跡 ……	21
12 平安宮主水司跡 ……	22
13 平安京左京四条三坊十五町 ……	24
14 平安京左京六条一坊二町 ……	26
15 平安京左京六条二坊十二町 ……	28
16 平安京左京七条一・二坊、東市跡 ……	30
17 平安京左京七条三坊十四町 ……	33
18 平安京左京八条三坊一町 ……	37
19 平安京左京九条一坊四町、 羅城門跡 ……	41
20 平安京右京二条四坊十二町 ……	42
21 平安京右京五条四坊十三町、 六条四坊十六町 ……	44
22 平安京右京六条四坊七町 ……	46
23 平安京右京七条一・二坊、西市跡 ……	49
24 平安京右京九条一坊、西寺跡1 ……	62
25 平安京右京九条一坊、西寺跡2 ……	64
26 平安京右京九条一坊、西寺跡3 ……	66

27 平安京右京九条一坊、西寺跡4 ……	68
----------------------	----

III 白河街区跡

28 尊勝寺跡 ……	70
29 得長寿院跡 ……	72

IV 鳥羽離宮跡

30 鳥羽離宮跡29次調査 ……	74
31 鳥羽離宮跡30次調査 ……	76
32 鳥羽離宮跡31次調査 ……	78
33 鳥羽離宮跡32次調査 ……	80
34 鳥羽離宮跡33次調査 ……	82
35 鳥羽離宮跡34次調査 ……	84
36 鳥羽離宮跡35次調査 ……	86
37 鳥羽離宮跡36次調査 ……	89

V 中臣遺跡

38 中臣遺跡8次調査 ……	90
39 中臣遺跡9次調査 ……	92
40 中臣遺跡10次調査 ……	95
41 中臣遺跡11次調査 ……	115

VI その他の遺跡

42 北野廃寺 ……	116
43 相国寺旧境内1 ……	119
44 相国寺旧境内2 ……	121
45 相国寺旧境内3 ……	123
46 法成寺跡 ……	125
47 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内 ……	128
48 常盤仲之町遺跡 ……	130
49 弁天島経塚 ……	132
50 広隆寺旧境内 ……	136

51 史跡・名勝嵐山 ……………	141	58 深草寺跡 ……………	164
52 檜原遺跡 ……………	142	59 伏見城跡 ……………	166
53 中久世遺跡1 ……………	147		
54 中久世遺跡2 ……………	149	第2章 試掘・立会調査	
55 法観寺跡 ……………	158	Ⅰ 昭和52年度の	
56 旭山古墳群 ……………	160	試掘・立会調査概要 ……………	168
57 深草遺跡 ……………	162		

図 版 目 次

図版1 平安京左京四条三坊十五町	1 調査区全景（南から）
	2 SK466（北東から）
図版2 平安京左京六条二坊十二町	1 調査区全景（南から）
	2 建物跡（南西から）
図版3 平安京左京七条一・二坊、東市跡	1 No.2 トレンチ第1面全景（東から）
	2 No.2 トレンチ第3面全景（東から）
図版4 平安京左京七条一・二坊、東市跡	1 No.3 トレンチ第2面全景（西から）
	2 No.4 トレンチ全景（東から）
図版5 平安京左京七条一・二坊、東市跡	1 No.5 トレンチ全景（東から）
	2 No.6 トレンチ第3面全景（東から）
図版6 平安京左京七条三坊十四町	1 第5面全景（南から）
	2 中央セクション断面（東から）
	3 土壌検出状況（東から）
図版7 平安京右京七条一・二坊、西市跡	1 No.0 調査区全景（東から）
	2 No.1 調査区全景（東から）
図版8 平安京右京七条一・二坊、西市跡	1 No.2 調査区全景（東から）
	2 No.3 調査区全景（東から）
図版9 平安京右京七条一・二坊、西市跡	1 No.4 調査区全景（西から）
	2 No.5 調査区全景（西から）
図版10 平安京右京七条一・二坊、西市跡	1 No.6 調査区全景（西から）
	2 No.7 調査区全景（東から）
図版11 平安京右京九条一坊、西寺跡2	1 A区全景（北西から）
	2 B・C区全景（東から）

図版 12 得長寿院跡	1 調査区全景（南から） 2 SD23 断面（東から）
図版 13 中臣遺跡 10 次調査	1 D -18 区 4 トレンチ 3 号住居（北から） 2 D -18 区 5 トレンチ掘立柱住居群（東から） 3 B 区全景（東から）
図版 14 中臣遺跡 10 次調査	1 E-16 区 6 トレンチ 1 号住居（東から） 2 E-22 区 6 トレンチ 2 号住居（北から）
図版 15 北野廃寺	1 調査区全景（北から） 2 基壇全景（東から）
図版 16 中久世遺跡 1	1 調査区全景（西から） 2 SD 5 南溝（西から）
図版 17 中久世遺跡 2	1 SD 3 セクション断面（北から） 2 SD 1 木製品出土状況（北から）
図版 18 中久世遺跡 2	出土遺物 1
図版 19 中久世遺跡 2	出土遺物 2

挿 図 目 次

図 1 平安宮内裏跡	調査位置図 …………… 3
図 2 //	調査区配置図 …………… 3
図 3 //	東壁断面図 …………… 3
図 4 平安宮大極殿跡	調査位置図 …………… 4
図 5 //	調査区配置図 …………… 4
図 6 //	南壁断面図 …………… 4
図 7 平安宮朝堂院跡 1	調査位置図 …………… 5
図 8 //	調査区配置図 …………… 5
図 9 //	北壁断面図 …………… 5
図 10 平安宮朝堂院跡 2	調査位置図 …………… 6
図 11 //	調査区配置図 …………… 6
図 12 //	北壁断面図 …………… 6
図 13 //	遺構平面図 …………… 7
図 14 平安宮兵庫寮跡	調査位置図 …………… 8
図 15 //	調査区配置図 …………… 8

図 16	平安宮兵庫寮跡	西壁断面図	8
図 17	〃	遺構平面図	9
図 18	〃	調査区全景	9
図 19	平安宮造酒司跡 1	調査位置図	10
図 20	〃	調査区配置図	10
図 21	〃	南壁断面図	10
図 22	〃	遺構平面図	11
図 23	平安宮造酒司跡 2	調査位置図	12
図 24	〃	調査区配置図	12
図 25	〃	西壁断面図	12
図 26	〃	遺構平面図	13
図 27	平安宮西雅院跡	調査位置図	15
図 28	〃	調査区配置図	15
図 29	〃	北部トレンチ西壁断面図	15
図 30	〃	南部トレンチ平面図	16
図 31	平安宮左兵衛府跡	調査位置図	17
図 32	〃	調査区配置図	17
図 33	〃	南壁断面図	17
図 34	〃	遺構平面図	18
図 35	平安宮太政官跡	調査位置図	19
図 36	〃	調査区配置図	19
図 37	〃	北壁断面図	19
図 38	〃	遺構平面図	20
図 39	平安宮西院跡	調査位置図	21
図 40	〃	調査区配置図	21
図 41	〃	北壁断面図	21
図 42	平安宮主水司跡	調査位置図	22
図 43	〃	調査区配置図	22
図 44	〃	調査区断面図	22
図 45	〃	遺構平面図	23
図 46	平安京左京四条三坊十五町	調査位置図	24
図 47	〃	調査区配置図	24
図 48	〃	東壁断面図	24
図 49	〃	遺構平面図	25
図 50	平安京左京六条一坊二町	調査位置図	26

図 51	平安京左京六条一坊二町	調査区配置図	26
図 52	〃	北壁断面図	26
図 53	〃	遺構平面図	27
図 54	〃	調査区全景	27
図 55	平安京左京六条二坊十二町	調査位置図	28
図 56	〃	調査区配置図	28
図 57	〃	南壁断面図	28
図 58	〃	遺構平面図	29
図 59	平安京左京七条一・二坊、東市跡	調査位置図	30
図 60	〃	No.3 トレンチ北壁断面図	31
図 61	〃	遺構平面図	32
図 62	平安京左京七条三坊十四町	調査位置図	33
図 63	〃	調査区配置図	33
図 64	〃	調査区実測図	34
図 65	〃	土壌 19・20・23・25 実測図	35
図 66	〃	出土土器実測図	36
図 67	平安京左京八条三坊一町	調査位置図	37
図 68	〃	南区断割北壁断面図	37
図 69	〃	第1・2面遺構平面図	38
図 70	〃	第3・4面遺構平面図	39
図 71	〃	南調査区全景	40
図 72	〃	北調査区全景	40
図 73	平安京左京九条一坊四町、	調査位置図	41
図 74	羅城門跡	調査区配置図	41
図 75	〃	東壁断面図	41
図 76	平安京右京二条四坊十二町	調査位置図	42
図 77	〃	調査区および遺構配置図	42
図 78	〃	南壁断面図	42
図 79	〃	調査区全景	43
図 80	平安京右京五条四坊十三町、	調査位置図	44
図 81	六条四坊十六町	1 トレンチ東壁断面図	44
図 82	〃	遺構平面図	45
図 83	〃	1 トレンチ全景	45
図 84	〃	2 トレンチ全景	45
図 85	平安京右京六条四坊七町	調査位置図	46

図 86	平安京右京六条四坊七町	調査区配置図	46
図 87	〃	南トレンチ拡張区南壁断面図	46
図 88	〃	調査区平面図	47
図 89	〃	南トレンチ拡張区全景	48
図 90	平安京右京七条一・二坊、西市跡	調査位置図	49
図 91	〃	調査区配置図	50
図 92	〃	No.2 トレンチ北壁断面図	50
図 93	〃	No.0 トレンチ遺構平面図	51
図 94	〃	遺構平面図	52
図 95	〃	No.0 トレンチ SE 3 出土遺物実測図	55
図 96	〃	No.0 トレンチ SE20 出土遺物実測図	56
図 97	〃	No.0 トレンチ SX25 出土遺物実測図	57
図 98	〃	遺物実測図	58
図 99	〃	木製品実測図 1	59
図 100	〃	木製品実測図 2	60
図 101	〃	金属製品・石製品実測図	61
図 102	平安京右京九条一坊、西寺跡 1	調査位置図	62
図 103	〃	調査区配置図	62
図 104	〃	北壁断面図	62
図 105	〃	遺構平面図	63
図 106	平安京右京九条一坊、西寺跡 2	調査位置図	64
図 107	〃	調査区配置図	64
図 108	〃	B 区西壁断面図	64
図 109	〃	A 区遺構平面図	65
図 110	〃	D 区遺構平面図	65
図 111	〃	B・C 区遺構平面図	65
図 112	平安京右京九条一坊、西寺跡 3	調査位置図	66
図 113	〃	調査区配置図	66
図 114	〃	遺構実測図	67
図 115	〃	根石出土地点および建物復元図	67
図 116	平安京右京九条一坊、西寺跡 4	調査位置図	68
図 117	〃	調査区配置図	68
図 118	〃	東西セクション北壁断面図	68
図 119	〃	遺構平面図	69
図 120	〃	調査区全景	69

図 121 尊勝寺跡	調査位置図	70
図 122 //	調査区配置図	70
図 123 //	北壁断面図	70
図 124 //	遺構平面図	71
図 125 得長寿院跡	調査位置図	72
図 126 //	調査区配置図	72
図 127 //	西壁南部断面図	73
図 128 //	遺構平面図	73
図 129 烏羽離宮跡 29 次調査	調査位置図	74
図 130 //	調査区配置図	74
図 131 //	南区西壁断面図	75
図 132 //	遺構平面図	75
図 133 烏羽離宮跡 30 次調査	調査位置図	76
図 134 //	調査区配置図	76
図 135 //	西壁断面図	76
図 136 //	遺構平面図	77
図 137 烏羽離宮跡 31 次調査	調査位置図	78
図 138 //	調査区配置図	78
図 139 //	北壁断面図	79
図 140 //	遺構平面図	79
図 141 烏羽離宮跡 32 次調査	調査位置図	80
図 142 //	調査区配置図	80
図 143 //	北壁断面図	81
図 144 //	遺構平面図	81
図 145 烏羽離宮跡 33 次調査	調査位置図	82
図 146 //	調査区配置図	82
図 147 //	西壁断面図	82
図 148 //	遺構平面図	83
図 149 烏羽離宮跡 34 次調査	調査位置図	84
図 150 //	調査区配置図	84
図 151 //	S トレンチ北壁断面図	84
図 152 //	遺構平面図	85
図 153 烏羽離宮跡 35 次調査	調査位置図	86
図 154 //	A 区北壁断面図	86
図 155 //	A 区遺構平面図	87

図 156	鳥羽離宮跡 35 次調査	C 区調査区配置図	88
図 157	〃	C 区北壁断面図	88
図 158	鳥羽離宮跡 36 次調査	調査位置図	89
図 159	〃	調査区配置図	89
図 160	〃	遺構平面図	89
図 161	中臣遺跡 8 次調査	調査位置図	90
図 162	〃	調査区配置図	90
図 163	〃	南壁断面図	90
図 164	〃	遺構平面図	91
図 165	〃	2 区全景	91
図 166	中臣遺跡 9 次調査	調査位置図	92
図 167	〃	調査区配置図	92
図 168	〃	西壁断面図	93
図 169	〃	第 1 面遺構平面図	93
図 170	〃	第 2 面遺構平面図	94
図 171	〃	調査区全景	94
図 172	中臣遺跡 10 次調査	A・B 区調査区配置図	95
図 173	〃	調査位置図	95
図 174	〃	B 区南壁断面図	96
図 175	〃	A・B 区遺構平面図	96
図 176	〃	B 区 SE 1 出土遺物実測図	97
図 177	〃	C 区調査区配置図	98
図 178	〃	C 区遺構平面図	98
図 179	〃	C 区北壁断面図	99
図 180	〃	D-10 区調査区配置図	99
図 181	〃	D-10 区 1 トレンチ西壁断面図	99
図 182	〃	D-17 区調査区配置図	100
図 183	〃	D-17 区 2 トレンチ北壁断面図	100
図 184	〃	D-17 区 3・4 トレンチ平面図	100
図 185	〃	D-18 区調査区配置図	101
図 186	〃	D-18 区 5 トレンチ西壁断面図	101
図 187	〃	D-18 区遺構平面図	102
図 188	〃	D-18 区 3 号住居出土土器実測図	103
図 189	〃	D-18 区 SX 1 出土土器実測図	104
図 190	〃	D-19 区調査区配置図	105

図 191	中臣遺跡 10 次調査	D-19 区 1 トレンチ南壁断面図	105
図 192	〃	E-13 区調査区配置図	106
図 193	〃	E-13 区 3 トレンチ北壁断面図	106
図 194	〃	E-13 区遺構平面図	107
図 195	〃	E-16 区調査区配置図	108
図 196	〃	E-16 区 4- 2 トレンチ北壁断面図	108
図 197	〃	E-16 区 4 トレンチ平面図	108
図 198	〃	E-16 区 6 トレンチ 1 号住居平面図	108
図 199	〃	E-16 区 1 号住居出土土器実測図 1	109
図 200	〃	E-16 区 1 号住居出土土器実測図 2	110
図 201	〃	E-22 区調査区配置図	111
図 202	〃	E-22 区西壁断面図	111
図 203	〃	E-22 区 2 号住居平面図	112
図 204	〃	E-22 区 2 号住居出土土器実測図	112
図 205	〃	E-27 区調査区配置図	113
図 206	〃	E-27 区 1・2 トレンチ西壁断面図	114
図 207	中臣遺跡 11 次調査	調査位置図	115
図 208	〃	調査区配置図	115
図 209	〃	2 トレンチ東壁断面図	115
図 210	北野廃寺	調査位置図	116
図 211	〃	調査区配置図	116
図 212	〃	セクション西壁断面図	116
図 213	〃	中世遺構平面図	117
図 214	〃	奈良時代遺構平面図	118
図 215	相国寺旧境内 1	調査位置図	119
図 216	〃	調査区配置図	119
図 217	〃	東壁断面図	119
図 218	〃	遺構平面図	120
図 219	〃	調査区全景	120
図 220	相国寺旧境内 2	調査位置図	121
図 221	〃	西壁断面図	121
図 222	〃	遺構平面図	122
図 223	〃	調査区全景	122
図 224	相国寺旧境内 3	調査位置図	123
図 225	〃	1 トレンチ平面図	123

図 226	相国寺旧境内 3	2 トレンチ平面図	124
図 227	//	3 トレンチ平面図	124
図 228	//	1 トレンチ全景	124
図 229	法成寺跡	調査位置図	125
図 230	//	調査区配置図	125
図 231	//	A 区東壁断面図	126
図 232	//	A 区遺構平面図	126
図 233	//	B 区遺構平面図	126
図 234	//	A 区全景	127
図 235	//	B 区全景	127
図 236	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	調査位置図	128
図 237	//	調査区配置図	128
図 238	//	西壁断面図	128
図 239	//	遺構平面図	129
図 240	常盤仲之町遺跡	調査位置図	130
図 241	//	調査区配置図	130
図 242	//	中央セクション断面図	130
図 243	//	遺構平面図	131
図 244	//	調査区全景	131
図 245	弁天島経塚	調査位置図	132
図 246	//	調査区配置図	132
図 247	//	遺構実測図	133
図 248	//	調査区全景	133
図 249	//	出土青白磁実測図	134
図 250	//	出土青白磁	134
図 251	広隆寺旧境内	調査位置図	136
図 252	//	調査区配置図	136
図 253	//	南壁断面図	137
図 254	//	遺構平面図	137
図 255	//	調査区全景	137
図 256	//	出土瓦拓影・実測図 1	138
図 257	//	出土瓦拓影・実測図 2	139
図 258	//	出土平瓦拓影	140
図 259	史跡・名勝嵐山	調査位置図	141
図 260	//	遺構平面図	141

図 261	榎原遺跡	調査位置図	142
図 262	〃	調査区配置図	142
図 263	〃	Dトレンチ北壁断面図	143
図 264	〃	第1面遺構平面図	143
図 265	〃	第2面遺構平面図	144
図 266	〃	遺物実測図	145
図 267	〃	調査区全景	146
図 268	中久世遺跡 1	調査位置図	147
図 269	〃	調査区配置図	147
図 270	〃	C区東壁断面図	147
図 271	〃	遺構平面図	148
図 272	中久世遺跡 2	調査位置図	149
図 273	〃	調査区配置図	149
図 274	〃	北壁断面図	149
図 275	〃	弥生時代遺構平面図	150
図 276	〃	長岡京期から平安時代遺構平面図	150
図 277	〃	遺物実測図 1	151
図 278	〃	遺物実測図 2	152
図 279	〃	遺物実測図 3	153
図 280	〃	遺物実測図 4	154
図 281	〃	遺物実測図 5	155
図 282	〃	遺物実測図 6	156
図 283	〃	遺物実測図 7	157
図 284	法観寺跡	調査位置図	158
図 285	〃	調査区配置図	158
図 286	〃	西壁・南壁断面図	158
図 287	〃	遺構平面図	159
図 288	〃	調査区全景	159
図 289	旭山古墳群	調査位置図	160
図 290	〃	調査区配置図	160
図 291	〃	E-10号墳石室実測図	161
図 292	〃	調査区全景	161
図 293	深草遺跡	調査位置図	162
図 294	〃	No.2トレンチセクション断面図	162
図 295	〃	遺構平面図	163

図 296	深草寺跡	調査位置図	164
図 297	〃	調査区配置図	164
図 298	〃	西壁断面図	164
図 299	〃	遺構平面図	165
図 300	〃	調査区全景	165
図 301	伏見城跡	調査位置図	166
図 302	〃	調査区配置図	166
図 303	〃	Aトレンチ北壁断面図	166
図 304	〃	遺構平面図	167
図 305	昭和 52 年度の試掘・立会調査位置図		169

表 目 次

表 1	昭和 52 年度発掘調査一覧表	168
表 2	昭和 52 年度試掘・立会調査一覧表	172

第1章 発掘調査

I 昭和52年度の発掘調査概要

昭和52年度に実施した発掘調査件数は59件を数える。59件の内訳は、平安宮12件、平安京15件（そのうち西寺関係5件）、白河街区2件、鳥羽離宮跡8件、中臣遺跡4件、その他の遺跡18件である。以下、主な調査成果を紹介する。

平安宮・京跡 平安宮造酒司（6・7）では東西方向の築地状高まりと、その南側で東西溝、さらにその南側で道路跡を検出した。築地跡は造酒司の南限築地と想定される。道路跡上面には砂礫や瓦を敷き詰め、轍とみられる小溝を検出した。この道路は平安宮内の東西道路で、中御門大路の延長にあたる。また、（7）では平安宮ではじめての検出となる掘立柱倉庫が検出された。この倉庫跡は現地保存され、地表にタイルで柱跡を明示している。左兵衛府（9）では平安時代前期の南北溝を検出し、位置的にみて左兵衛府西限となる可能性がある。またこの溝の出土遺物は、平安時代前期の編年基準資料となる重要な一括の土器群である。

平安京の調査では、左京四条三坊十五町（13）で平安時代から近世にいたるまでの掘立柱建物・井戸・土壇・石敷き・溝などが検出されており、土壇から中国龍泉窯の青磁椀・皿が良好な状態で出土している。左京六条二坊十二町（15）は西本願寺の東側、七条三坊十四町（17）は東本願寺の東側に位置し、どちらも本願寺が建立される以前の墓地（土壇墓群）が検出された。（15）の土壇墓群は長方形・方形・円形の形状で、木箱や桶を棺に用い、人骨が良好に遺存していた。人骨は頭位を北にして安置する墓が多い。七条通の上下水道管設置工事に伴う調査は、左京七条一・二坊・東市跡（16）、右京七条一・二坊・西市跡（23）にあたり、弥生時代から近世の遺構・遺物を大量に検出し、当該地の変遷を知る上で重要な発見となった。特に西市外町（23）の井戸・土器溜・溝などから、平安時代中期の編年基準資料となる土器類や、「承和五千文」と記された荷札木簡・櫛・物差し・印鑑・斎串・桧扇・下駄・皿・漆器皿など多量の木製品が出土している。

西寺跡（24）は東僧坊の礎石据付穴、（25）は伽藍南辺部で築地跡を検出した。（26）は東寺西門通のガス埋設工事に伴う調査で、礎石建物と井戸を検出した。井戸は井籠組の大型井戸で、土器類や木製品・銭貨などが出土している。（27）では西小子坊の基壇と雨落溝を検出し、伽藍復元の資料を得ることができた。

白河街区跡 推定尊勝寺跡（28）では大型建物の礎石据付穴を検出した。建物は身舎に庇と孫庇が付属する大型南北棟で、南北の規模は不明であるものの、得長寿院か尊勝寺の三十三間堂と推定される。

鳥羽離宮跡 東殿・田中殿地区で調査が多く実施された。平安時代後期の鳥羽離宮期の遺構は少なく、後世の遺構を検出した。主な遺構としては田中殿（31）で建物基礎、東殿（32）で南北

溝2条、東殿南限(33)で南北溝、東殿北西部(36)で東西道路などを検出した。

中臣遺跡 遺跡北西部の折上神社に隣接する9次調査(39)では平安時代から室町時代の遺構を、遺跡中央部の10次調査(40) A・B区では平安時代前期の掘立柱建物と井戸を検出し、古代から中世にかけての集落の一端を明らかにすることができた。遺跡中央部から南部にかけて、道路建設に伴う10次調査D・E区では、中臣丘陵南端部を取り囲むように弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居や掘立柱を検出した。また、竪穴住居からは土器類も多く出土し、中臣遺跡の土器編年や集落の変遷を研究する上で貴重な発見となった。丘陵の東側、山科川沿いの10次調査E-27区では、縄文時代中期から後期初頭の土器が出土し、遺跡が当該期までさかのぼることが明らかとなった。

その他の遺跡 その他では寺院の調査に重要な調査成果がみられる。北野廃寺(42)では初めて奈良時代の建物基壇と掘立柱建物を検出した。建物跡は奈良時代と平安時代前期の2時期みられるが、いずれも火災によって焼失している。建物基壇は遺跡の位置関係から講堂、掘立柱建物が僧坊と推定される。広隆寺旧境内北側(47)では古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居と掘立柱建物、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物、鎌倉時代から江戸時代の土壇墓群を検出している。旧境内南東部の弁天島経塚(49)では平安時代後期の16基の経塚が検出された。経塚からは鏡・柄香炉・飾り金具・刀子・北宋銭などの金属製品、ガラス玉・水晶玉などの玉類、輸入陶磁器の青白磁合子など多種多様の副納品が出土している。南西部(50)では飛鳥時代のT字形の建物地業を検出した。建物跡は柱跡は未検出であるものの、位置関係から東院の回廊と推定される。また、土壇からは飛鳥時代の瓦がまとまって出土している。榎原遺跡(52)では弥生時代から室町時代の遺構を検出し、平安時代前期の緑釉陶器や灰釉陶器が良好な状態で出土している。中久世遺跡(53)では弥生時代中期の方形周溝墓1基を検出した。埋葬主体部は削平され遺存していない。中久世遺跡(54)では北西から南東へ向かっての流路を検出した。流路は弥生時代中期から平安時代まで、河道や河幅を変えながら流れている。流路内からは縄文時代晩期の土器、弥生時代中期の土器・石器・木器、長岡京期から平安時代前期の土器・木製品・銭貨が出土した。特に弥生時代中期の遺物が多量に出土し、中久世遺跡の中心部に近いことを予想させる成果であった。旭山古墳群(56)は南端の3基の古墳と分布調査を実施した。分布調査の結果、新たに多くの古墳を確認し、これまで六条山古墳群とされていたものと一連の古墳群を形成していることが明らかになった。伏見城跡(59)では桃山時代の遺構は後世に削平され遺存していなかったが、家紋軒瓦が出土した。

II 平安宮・京跡

1 平安宮内裏跡

経過 今回の発掘調査は、工場の新築に伴うもので、当地は平安宮内裏推定地南部中央にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北8m、東西約4.5mの長方形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.25～0.55m)、第2層茶褐色混礫砂泥層(0.1m)、第3層茶色砂泥層(近世から中世包含層:0.3m)、第4層淡茶灰色泥砂層(近世から中世包含層:0.15m)、第5層暗茶色砂泥層(平安時代包含層:0.2m)、第6層黒灰色泥砂層(平安時代包含層:0.15m)、第7層茶灰色混礫砂泥層(地山)である。第5層上面で遺構を検出した。第5層上面で検出した遺構には、土塙、柱穴、井戸、集石遺構がある。集石遺構(SZ 1～3)は、一辺約2m、深さ0.2～0.35mの不定形である。埋土は黄茶色砂泥で拳大の石を入れる。平安時代後期の土師器を含む。遺構の時期は、集石遺構が平安時代後期、他の土塙(SK 1・2)、井戸(SE 1)などは近世である。

遺物 遺物の種類には、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶器、軒丸瓦・軒平瓦、泥面子、銭貨などがある。時期は、奈良時代から江戸時代である。奈良時代の土師器・須恵器は第5・6層から、平安時代後期の土器類は集石遺構から出土した。

小結 今回の調査では、近世の遺構が多く、平安時代の遺構は集石遺構のみであった。これは定型化しておらず、間隔も不揃いなため性格は不明である。また、奈良時代の遺構は検出できなかったが、遺物が出土し、付近に遺構があった可能性がある。

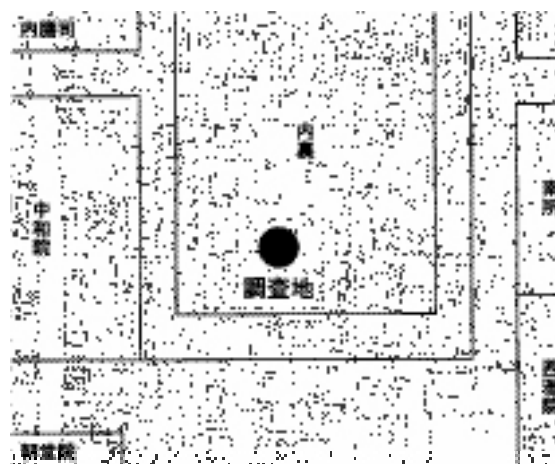


図1 調査位置図(1:5,000)

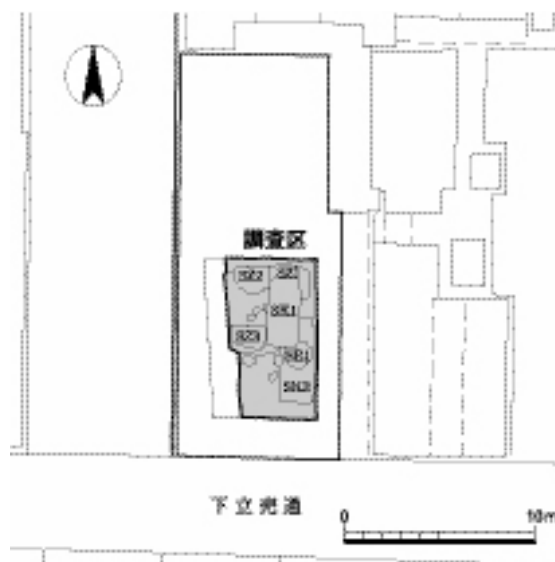


図2 調査区配置図(1:400)

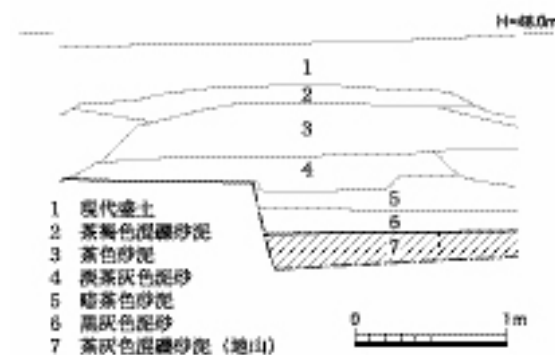


図3 東壁断面図(1:50)

2 平安宮大極殿跡

経過 今回の発掘調査は、マンションの新築に伴うもので、当地は平安宮大極殿院推定地（白虎楼付近）にあたるため、調査地内で6箇所の試掘調査を実施し、残存状況を踏まえ、調査地の西側に南北12m、東西約7mの逆L字形の調査区を設定し、調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代盛土層（約1m）、第2層暗褐色泥砂層（近世包含層：0.2～1m）、第3層黄褐色砂泥層（地山）である。第3層上面で遺構を検出した。

第3層上面で検出した遺構には、土塋（SK 1～3）、井戸（SE 1・2）、土取穴（SK 4～6）などがある。大規模な土取穴が一面に見られ、本来の遺構面が部分的にしか残存していない。遺構の時期は、近世から現代である。

遺物 遺物は整理箱で4箱出土した。遺物の種類には、陶器、磁器、瓦などがある。時期は、古代から現代である。布目のある瓦が包含層などから少量出土した。

小結 今回の調査では、近世以降の土取穴が多く、平安時代の遺構は残存していなかった。ただ、調査区北端では遺構面が地表下0.4～0.5mと浅く、この周辺に遺構が残存している可能性がある。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978年報告

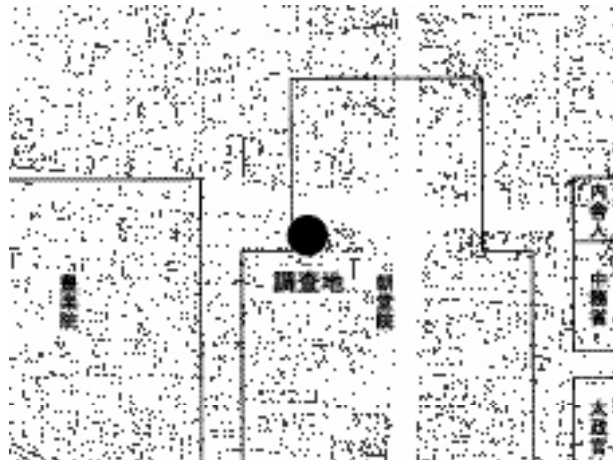


図4 調査位置図 (1:5,000)



図5 調査区配置図 (1:500)



図6 南壁断面図 (1:150)

3 平安宮朝堂院跡 1

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮朝堂院暉章堂推定地にあたるため、調査地内で3箇所の試掘調査を実施し、残存状況を踏まえ、調査地の北側に南北6m、東西約4mの長方形の調査区を設定し、調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（約0.25m）、第2層明茶色泥砂層（近世包含層：約0.15m）、第3層濃茶色砂礫層（近世後期包含層：約0.15m）、第4層黄褐色砂泥層（地山）である。第4層上面で遺構を検出した。

第4層上面で検出した遺構には、土壇、段、落込みがある。南側3分の1は大規模な落込みで遺構は検出できなかった。北側では本来の遺構面が部分的に残存し、土壇を検出した。遺構の時期は、すべて近世後期以降である。

遺物 遺物は整理箱で4箱出土した。遺物の種類には、土師器皿、陶器、磁器、塩壺蓋、軒平瓦・平瓦などがある。時期は、古代から現代である。平安時代の軒平瓦・布目のある瓦が、北側の包含層から少量出土した。

小結 今回の調査では、大半が近世以降の落込みで、遺構面はほとんど残存していなかった。ただ、調査区北端では遺構面が地表下0.4～0.5mと浅く、周辺に遺構が残存している可能性がある。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-II 1978年報告

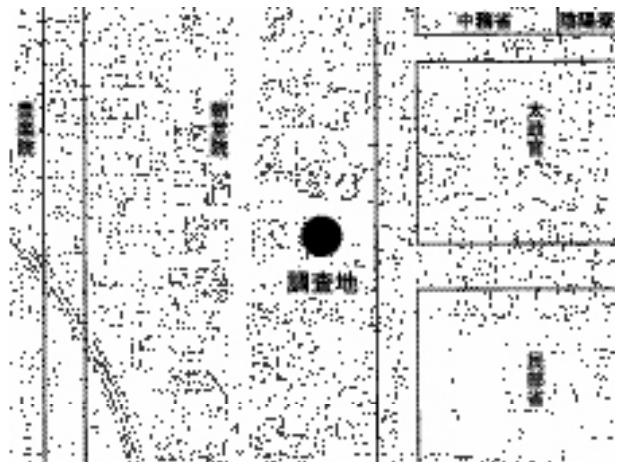
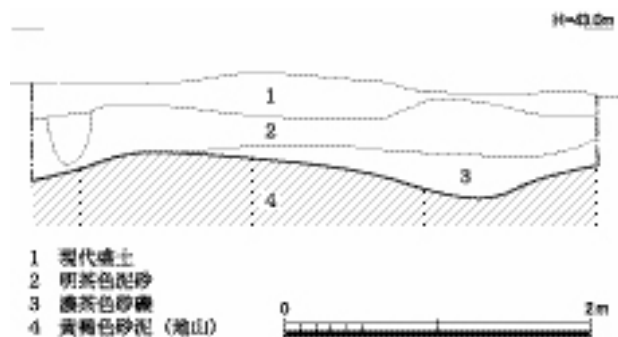


図7 調査位置図 (1:5,000)



図8 調査区配置図 (1:400)



- 1 現代盛土
- 2 明茶色泥砂
- 3 濃茶色砂礫
- 4 黄褐色砂泥 (地山)

図9 北壁断面図 (1:50)

4 平安宮朝堂院跡 2

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮朝堂院康楽堂推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地の中央北側に南北3 m、東西10 mの長方形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(約0.7 m)、第2層灰褐色粘質土層(耕土:約0.2~0.3 m)、第3層暗茶褐色粘質土層(整地層・包含層:約0.15 m)、第4層黄褐色粘質土層(地山)である。第3層上面を第1遺構面、第4層上面を第2遺構面として調査した。

第1面で検出した遺構には、落込み、南北溝、不整形土壌、円形土壌、井戸(SE11)などがある。時期はすべて近世後期以降に属する。

第2面で検出した遺構には、土取穴(SX8・12・13、SK10)、南北溝(SD9)、土壌、柱穴などがある。土取穴は全域で検出し、遺構面は部分的に残存している状況である。SD9は調査区東部で検出した。幅1.4 m以上、深さ0.4 mで底部は平坦である。土壌、柱穴は残存した遺構面の全面で検出した。時期はすべて近世頃に属する。

遺物 遺物は整理箱で60箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器(杯・甕)、灰釉陶器、陶器、

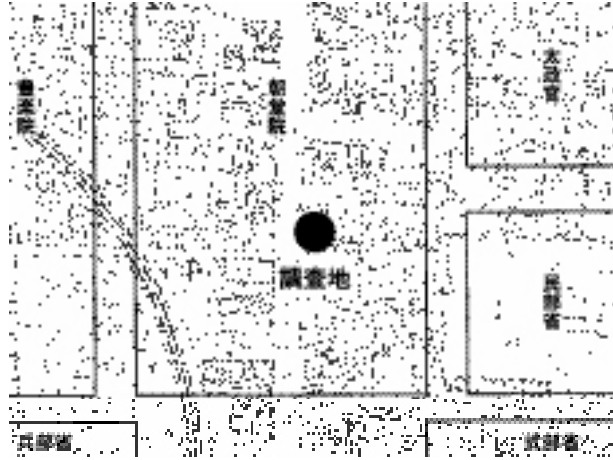


図10 調査位置図(1:5,000)

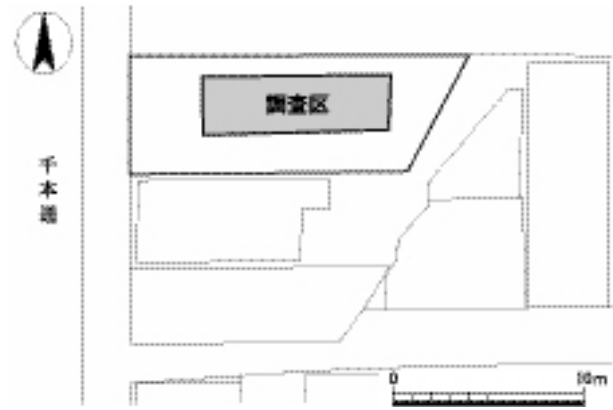


図11 調査区配置図(1:400)

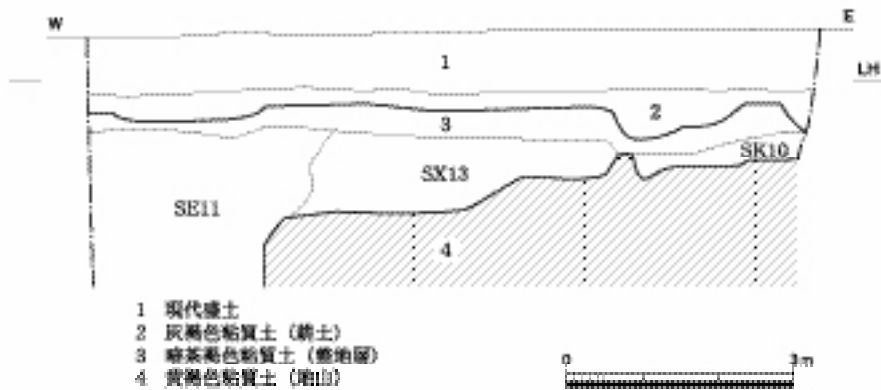


図12 北壁断面図(1:100)

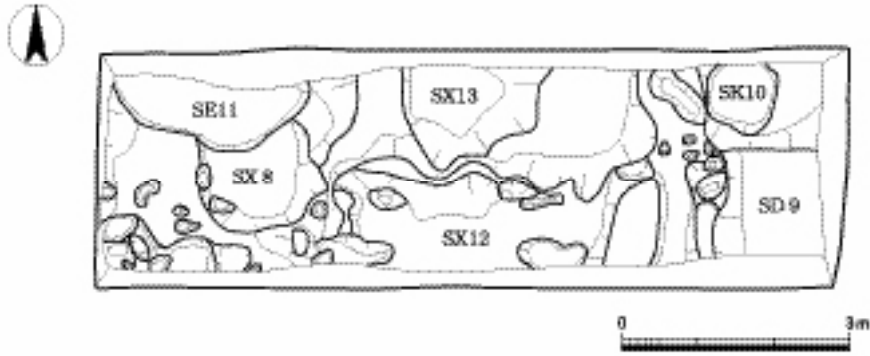


図13 遺構平面図（1：100）

磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、凝灰岩片などがある。大半は瓦類で土器類は少ない。時期は、平安時代から近代である。平安時代の軒瓦は十数点出土し、時期は前期のものが多く、中期・後期のものはやや少ない。

小結 今回の調査では、大半が近世以降の土取穴で掘削され、遺構面はほとんど残存しておらず、平安時代の遺構は未検出である。ただ、当該期の瓦類が大量に出土したことや、整地層などから出土した凝灰岩片は近接地に当該期の遺構の存在を窺わせる。

また、近世の遺構は、周辺に存在した所司代屋敷に関連したものと考えられる。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978年報告

5 平安宮兵庫寮跡

経過 今回の発掘調査は、京都市立仁和小学校校舎建設に伴うもので、当地は平安宮漆室・兵庫寮間の南側推定地域にあたるため、調査を実施した。

調査地内にL字形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層(0.8～1.2 m)、第2層暗茶褐色砂礫層(江戸時代包含層：0.3～1.8 m)、第3層黄褐色粘質土層・黄褐色砂礫層(地山)である。第2層は北東部方向に下がる。第2層上面で遺構を検出した。

第2層上面で検出した遺構には、井戸、土壇がある。井戸SE 1は円形で、径1.8 m、深さ5 m以上である。土壇SK 1は楕円形で、1.8 m×2.2 m、深さ0.6 m、埋土中に土師器を多量に含み土器溜状を呈する。SK 2は全体の形状は不明である。

第3層上面では遺構は検出できなかった。

遺物 遺物は整理箱で10箱出土した。出土遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、陶器、磁器、瓦、銭貨、鉄釘、銅製品、石製硯、竹製品などがある。遺物の大半は土壇から出土した土師器である。平安時代の遺物は、瓦があるが、他はほとんど出土していない。

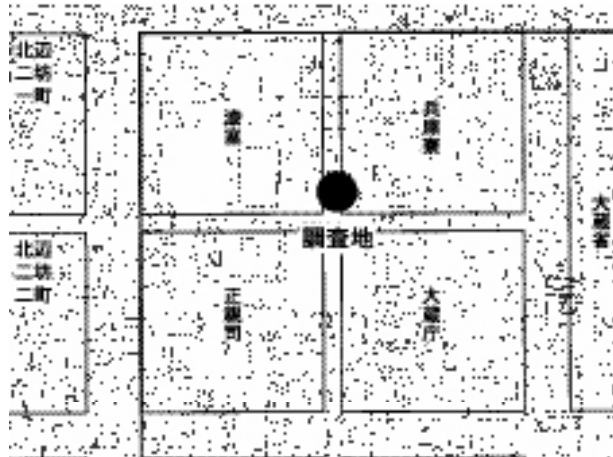


図14 調査位置図 (1:5,000)

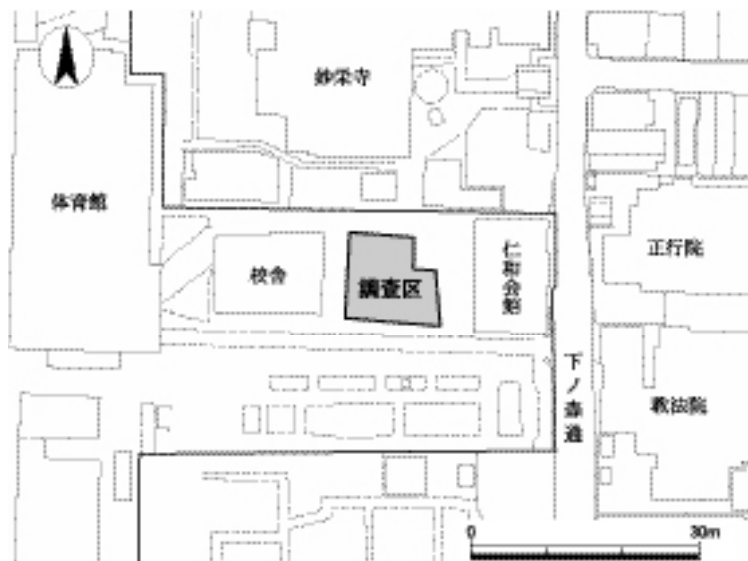


図15 調査区配置図 (1:1,000)



図16 西壁断面図 (1:100)

小結 今回の調査では、検出した遺構はすべて江戸時代中期以降で、平安時代の遺構は検出できなかった。調査地は、江戸時代中期頃までに土取りなどの目的で削平を受け、その後整地し、遺構が造られたと推定できる。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

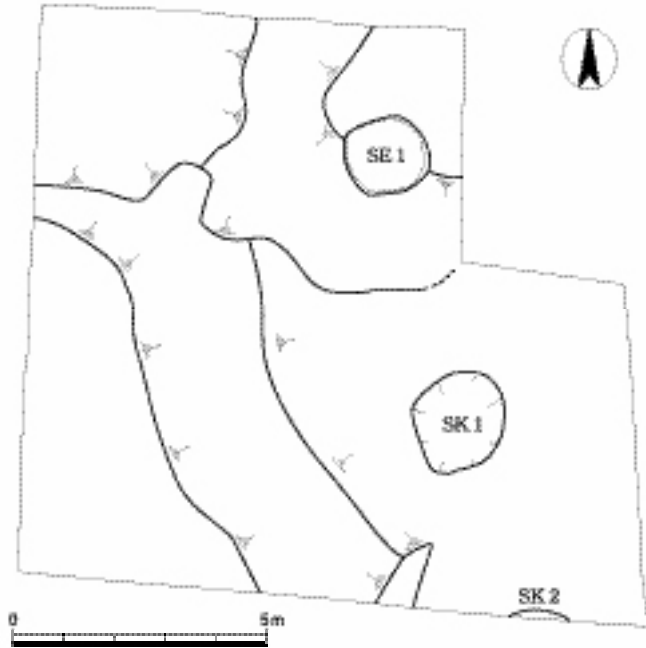


図17 遺構平面図 (1:150)



図18 調査区全景 (西から)

6 平安宮造酒司跡 1

経過 今回の発掘調査は、京都市休日急病診療所新築工事に伴うもので、当地は平安宮造酒司推定地の南東部にあたるため、調査を実施した。造酒司3次調査にあたる。

調査地内に東西43m、南北約18mの長方形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層（現代盛土層：0.6～0.9m）、第2層（近世包含層：0.1～0.25m）、第3層（中世包含層：0.1～0.25m）、第4層砂礫層（平安時代包含層：0.05m）、第5層黄灰色砂礫層（地山）である。調査区北西部（築地推定部）は南部より第5層が0.4m段状に高く残り、第4層はない。第5層上面で平安時代から近世の遺構を検出した。

平安時代の遺構は、調査区北西部の高まりと、その南側で東西溝SD 2（幅2～3.8m、深さ0.3～0.5m）、さらに南側で道路SF 1を検出した。他に土壌SK 3・4も同時期である。SD 2・SF 1は調査区中央より東側では近世の遺構により削平される。

室町時代・江戸時代の遺構は、全面で土壌・溝を検出し、中央部で江戸時代の掘立柱建物跡、南

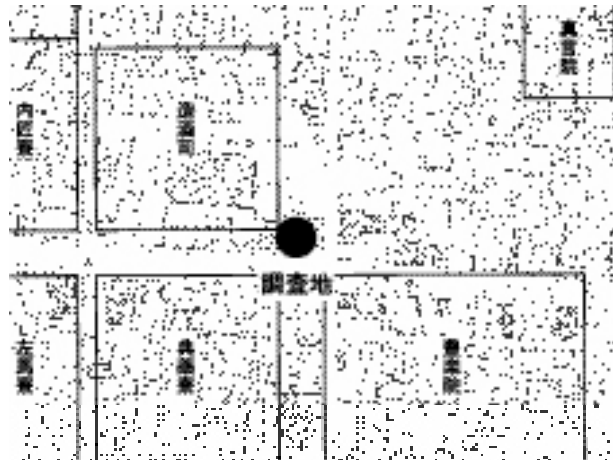


図19 調査位置図 (1:5,000)

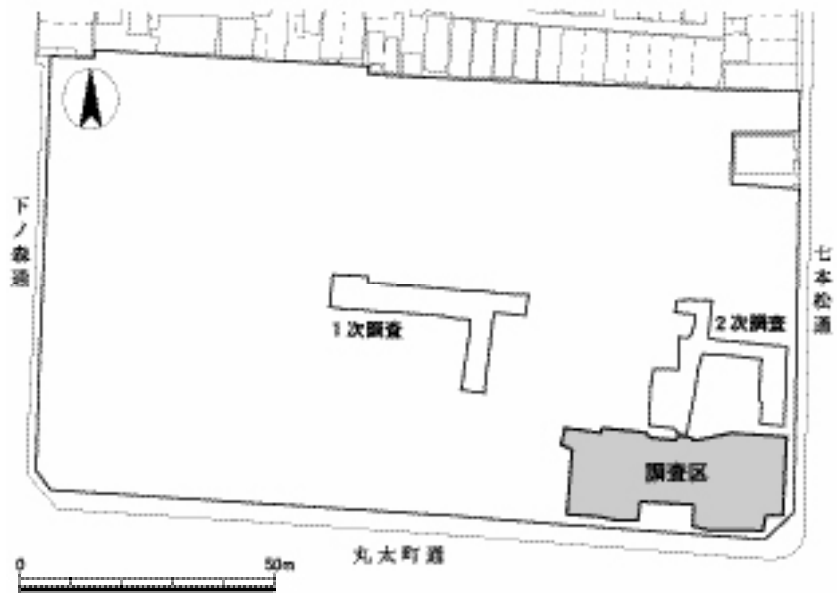


図20 調査区配置図 (1:1,500)

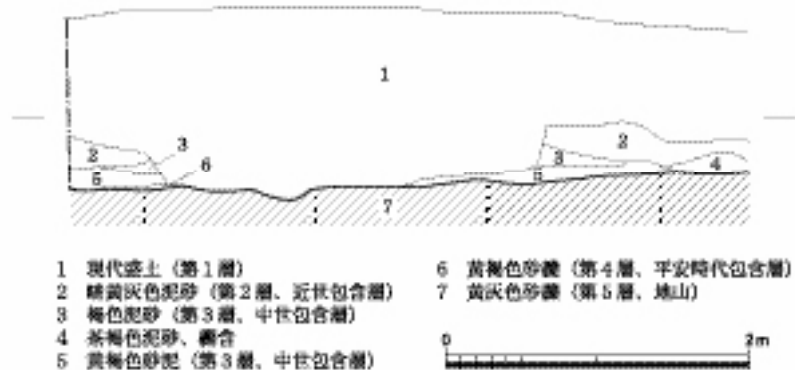


図21 南壁断面図 (1:50)

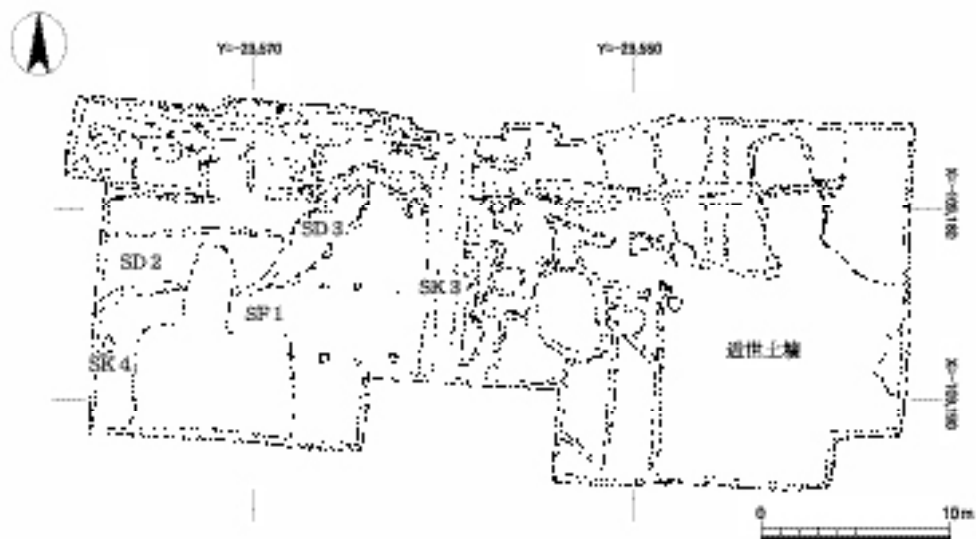


図 22 遺構平面図（1：400）

東部で近世土層を検出した。

遺物 遺物は整理箱で 150 箱出土した。平安時代の遺物が大半で、瓦類がもっとも多い。SF 1 上面からは多量の瓦片が出土した。SD 2 からは均整唐草文軒平瓦（幡枝栗栖野瓦窯出土のものと同範）が出土した。SD 2 下層からは土師器も一括出土した。築地位置にあたる部分では加工痕の残る凝灰岩を検出した。

小結 今回の調査では、近世の遺構によって平安時代の遺構の残存状況は悪かったものの、造酒司南東部の状況を確認することができた。

検出した遺構は、宮内推定復元によれば、北西部の高まりが造酒司南側築地、SD 2 が築地外溝にあたる。SF 1 は宮内東西道路にあたり、中御門大路の延長部にあたる。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 13 冊 1995 年報告

7 平安宮造酒司跡 2

経過 今回の発掘調査は、京都市社会教育センター・中央図書館新築工事に伴うもので、当地は平安宮造酒司推定地の南部にあたるため、調査を実施した。造酒司4次調査にあたる。

調査地内に1次調査区を除き、北側に東西約55mの逆L字形（2区）、南側に東西約53m、南北20mの長方形の調査区（1区）を設定し、1区は遺構の検出に伴い南北に拡張した。

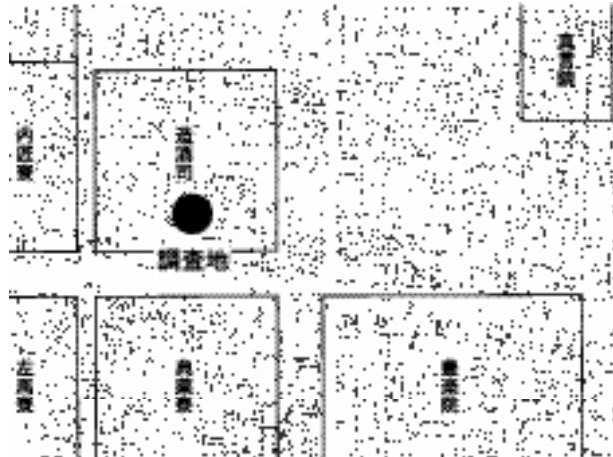


図23 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査区の基本層序は、第1層（現代盛土層：0.5～0.7m）、第2層（近世包含層：0.1m）、第3層（中世包含層：0.1m）、第4層砂礫層（平安時代包含層：0.1～0.2m）、第5層暗黄灰色粘土層（地山）である。1区中央より北側は、南部より第5層が一段高くなり、第4層がない。2区では第2～4層がなく、第6層上面は1区より約1m高い。第5層上面で平安時代から近世の遺構を検出した。

平安時代の遺構には、1区南北中央の高まりと、その南側で東西溝SD 2、さらに南側で道路SF 1を検出した。1区北部で、掘立柱建物SB 1、柵SA 2、全域で土塙SK 5～

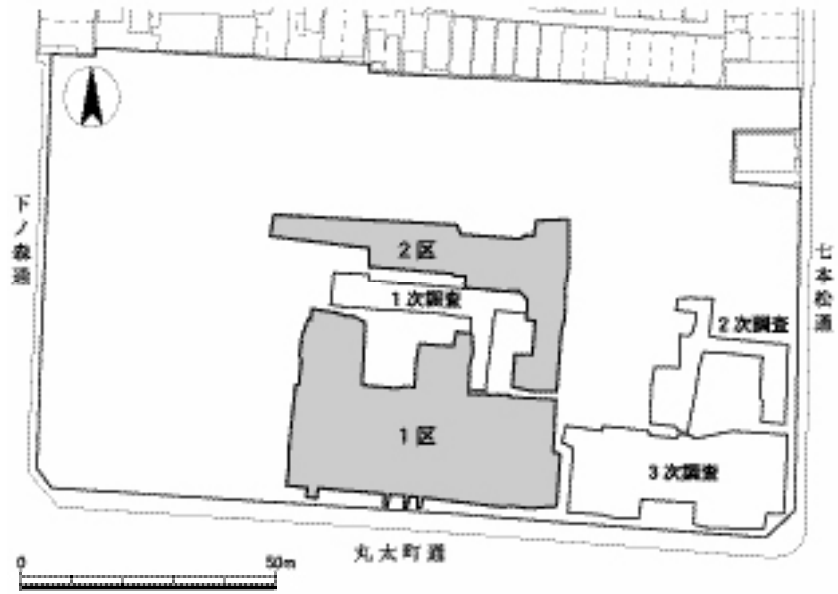


図24 調査区配置図 (1:1,500)

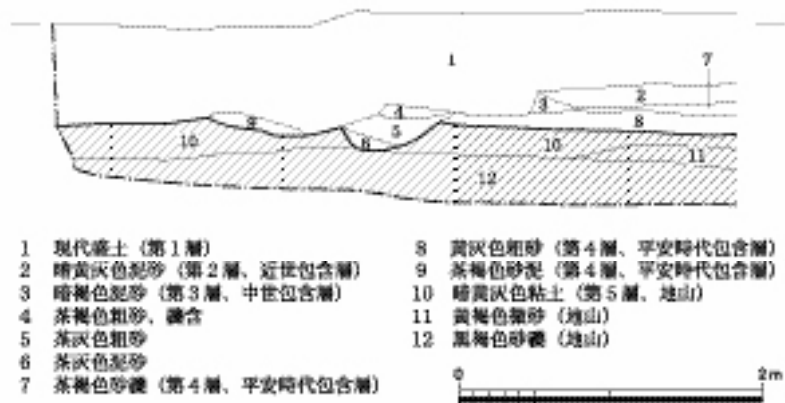


図25 西壁断面図 (1:50)



図 26 遺構平面図 (1 : 400)

17を検出した。SB 1は3間×3間の総柱建物 (7.2 m × 6 m) で、掘形は方形 (一辺約 1.1 ~ 1.4 m) で、根固め石が残存するものもある。南側柱筋はSA 2と揃う。東西柵SA 2は、柱間隔 2.1 mで、掘形は方形 (一辺約 0.6 ~ 0.8 m) である。東西溝SD 2は幅約 2m、深さ 0.3 ~ 0.5 mで、埋土は上層が暗褐色砂泥、下層が黄色粘土を含む暗褐色砂泥である。西側では南北両岸に杭跡が多数検出でき、ここに橋が推定できる。SF 1は東西道路で、上面に砂礫・瓦片が粗く敷き詰められており、轍と考えられる小溝を十数条検出した。

室町・江戸時代の遺構は、調査区全域で掘立柱建物跡、土壇、溝、井戸を検出した。

遺物 遺物には、土師器（杯・皿・蓋・椀・高杯・壺・甕・竈）、須恵器（杯・皿・蓋・壺・甕・硯・横瓶）、軒瓦などがある。時期的には平安時代の遺物が大半で、瓦類が最も多い。中近世の遺物は少ない。特に1区SK 4、2区SD 2からは、平安時代前期のまとまった土器類が出土した。瓦類の多くは道路部分から出土した。

小結 検出遺構は、宮内推定復元によれば、2区中央部の東西高まりが造酒司南面築地、SD 2が築地外溝にあたる。SF 1は宮内東西道路にあたり、中御門大路の延長部にあたる。また、SA 2の中央間は、造酒司域（1町）のほぼ東西中央に位置し、築地部に南門を推定すると、その北側の目隠し塀と考えられる。SB 1は造酒司域南東部に位置する高床倉庫と推定できる。いずれにしても、造酒司南部中央の遺構配置が明らかになったことは大きな成果である。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

8 平安宮西雅院跡

経過 今回の発掘調査は、信愛保育園の増改築に伴うもので、当地は平安宮西雅院推定地域にあたるため、調査を実施した。

調査地は、平安宮西雅院北西部にあたり、北から南に下がる傾斜地に立地する。

調査地の北側に 2.5 m 差の東西方向の崖があり、崖の上段に長方形の北部トレンチ、下段に十字型の南部トレンチを設定した。

遺構 北部の基本層序は、盛土層 (0.2 m)、第 1 層 (黒褐色土混礫、黒色土混小礫、黒灰色土: 0.8 m)、第 2 層 (明茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、暗灰色泥土: 1.8 m)、第 3 層 (淡灰色砂質粘土、地山) である。顕著な遺構は検出できなかった。

南部の基本層序は、盛土層 (暗茶褐色土: 0.4 ~ 0.6 m)、第 1 層 (黒褐色粘質土: 0 ~ 0.2 m)、第 2 層 (黄褐色粘質土: 無遺物層、地山) である。第 1 層では顕著な遺構は検出できず、第 2 層上面で遺構を検出した。

第 2 層上面で検出した遺構は、西端部では土壇 SK11、中央部では掘立柱建物跡 SB 4、南部・東端部では溝・土壇などである。時期は、出土した遺物から、SK11 が平安時代中期、他はいずれも近世である。SK11 は南北 1.9 m、東西 1.4 m 以上、深さ 1.1 m で、埋土は上層は黄褐色砂質土 (土師器・須恵器・緑釉陶器の細片を含む) で、中層は黒灰色土 (暗黄褐色粘質土ブロックを含む)、下層は暗黄褐色粘質土 (礫を含む) である。

遺物 遺物の種類には、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、軒丸瓦・軒平瓦、銭貨がある。平安時代の土器・軒平瓦は SK11 からまとめて出土し、後世の遺構

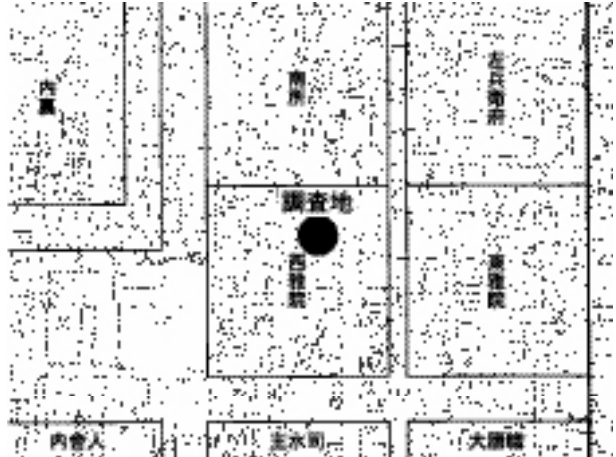


図 27 調査位置図 (1 : 5,000)

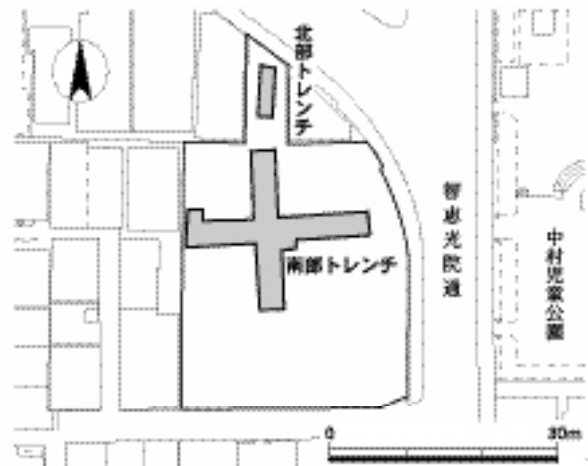


図 28 調査区配置図 (1 : 1,000)

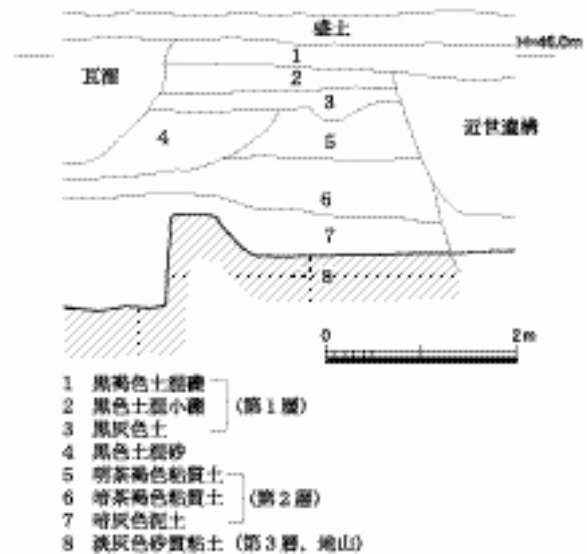


図 29 北部トレンチ西壁断面図 (1 : 80)

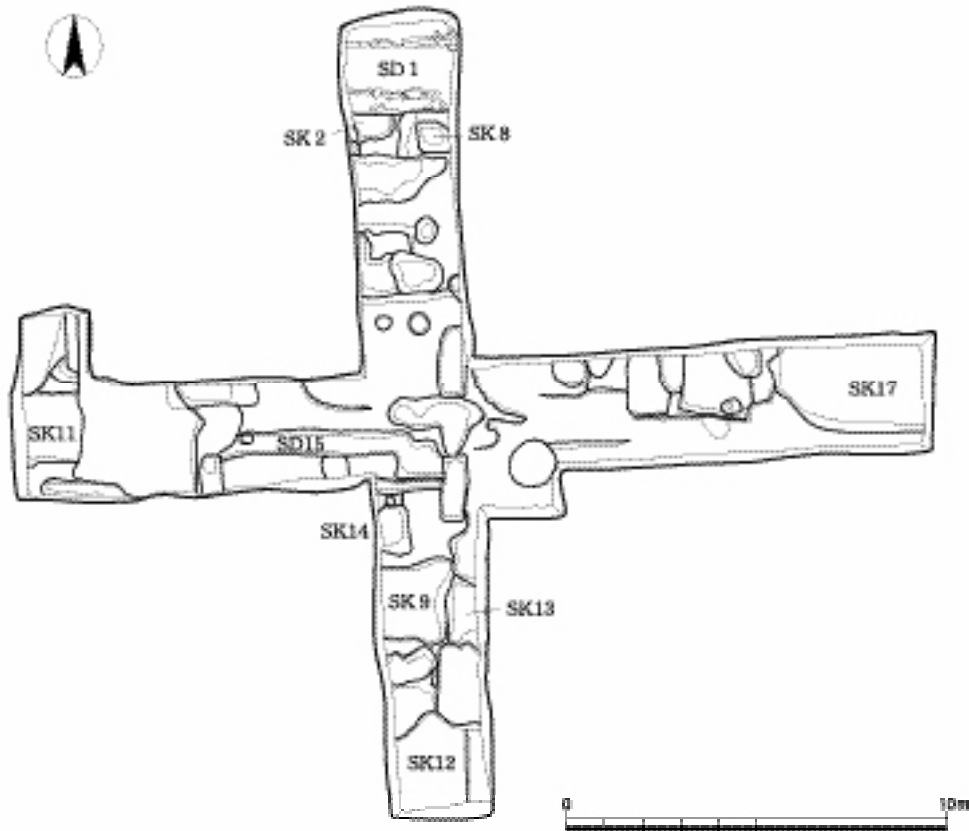


図30 南部トレンチ平面図（1：200）

からも若干出土した。他の遺構からは、近世の遺物が出土した。

小結 今回の調査では、近世の遺構により、平安時代の遺構はほとんど削平を受け、SK11を1基検出したにとどまった。当地域は、近世には所司代下屋敷が存在したことが知られる。調査地北側は盛土し、南側は削平を行う。このような整地が近世に行われたと推定され、当地域の土地利用を考える上で重要な資料となった。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978年報告

9 平安宮左兵衛府跡

経過 今回の発掘調査は、社屋改築工事に伴うもので、当地は平安宮左兵衛府推定地の南西部にあたるため、調査を実施した。

調査地内での基礎掘削時に多量の瓦が出土したため、試掘調査を行い遺構を確認した。この後、調査地全域に南北8m、東西7mの長方形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.6m）、第2層褐色砂礫層（0.05m）、第3層暗茶灰色砂泥層（約0.5m）、第4層灰色砂礫層（整地層：約0.1m）、第5層黄灰色粘質土・砂礫層（土壘か、包含層、約0.7m）、第6層茶灰色泥砂層（地山）である。第4層上面で第1面、第5・6層上面で第2面を検出した。検出した遺構には、井戸、溝、溝状落込み、整地層などがある。

第1面で検出した遺構には、南北溝SD1、溝状落込みSX2・3などがある。SD1は調査区西側で検出し、SD4埋没後の整地層に伴う溝である。幅1.4m以上、深さ0.64mで、断面U字形である。埋土は暗茶灰色砂泥で、特に中層に遺物が集中した。上層は瓦片が多い。

第2面で検出した遺構には、南北溝SD4、南北溝状遺構SX5がある。SD4はSD1の下層で検出した。幅2.5m以上、深さ0.65mで、底部は平坦である。埋土は北部では大量の遺物と木炭片の堆積で、茶褐色砂泥である。SX5は調査区東側で検出し、幅1.3m以上、深さ0.2mで、

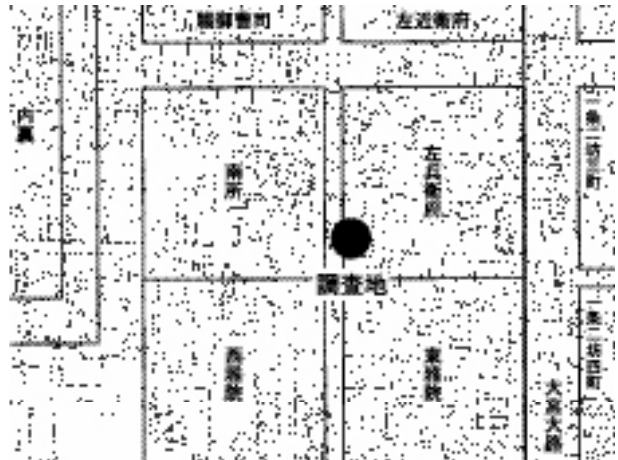


図31 調査位置図（1：5,000）



図32 調査区配置図（1：500）

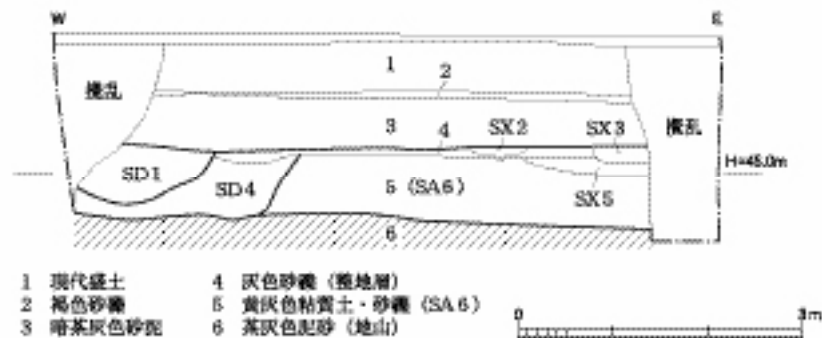


図33 南壁断面図（1：80）

埋土は細砂で2層に分かれ、下層で多量に遺物が出土した。第5層(SA 6)は強く締まり、両側溝との関連から土塁の可能性もある。

遺物 遺物の種類には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器、ミニチュア土器(高杯)、土製品、石製器具、鉄鎌、瓦類などがある。大半は土器類で、SD 1・SD 4・SX 5から出土した。時期は、平安時代から近代である。

小結 今回の調査で検出したSD 1・SD 4およびそれに関連する遺構は、左兵衛府西限に関連する可能性が高い。また、出土遺物では、SD 1が10世紀中頃、SD 4が8世紀末～9世紀初頭の基準資料となり、重要な発見となった。

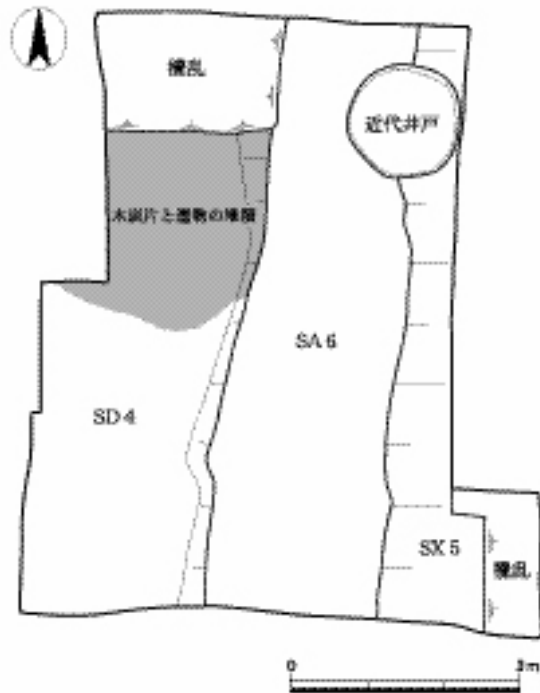


図 34 遺構平面図 (1 : 100)

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978 年報告

10 平安宮太政官跡

経過 今回の発掘調査は、工事に伴うもので、当地は平安宮太政官推定地の南東部にあたるため、調査を実施した。太政官の1回目の調査である。

調査地内に南北7.5m、東西9mの長方形の調査区を設定し、後にSK2の規模を確認するため南東部を拡張した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.4~0.6m)、第2層黒灰色泥砂層(現代包含層:約0.4m)、第3層灰褐色砂礫層(約0.1m)、第4層茶褐色砂礫層(無遺物層:0.1~0.3m)、第5層茶褐色粗砂礫層(無遺物層:0.2m)、第6層淡黄灰色泥土層(地山)である。第6層上面で遺構を検出した。

検出した遺構には、土壇(SK1~4)、壇状高まり(SX1)などがある。

SK1は、大型の土取穴と考えられる。SK2は、南北溝状を呈し、幅2.3m、深さ0.5mである。土壇はいずれも近世に属する。

SX1は、砂礫を整地して積み土した遺構で、高さ約0.3mである。性格は不明である。積み土から遺物が出土していないので、時期は不明である。

遺物 遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、磁器、陶器、塩壺蓋、軒丸瓦、凝灰岩片などがある。大半は土器類で、土壇から出土した。時期は、平安時代から近代である。

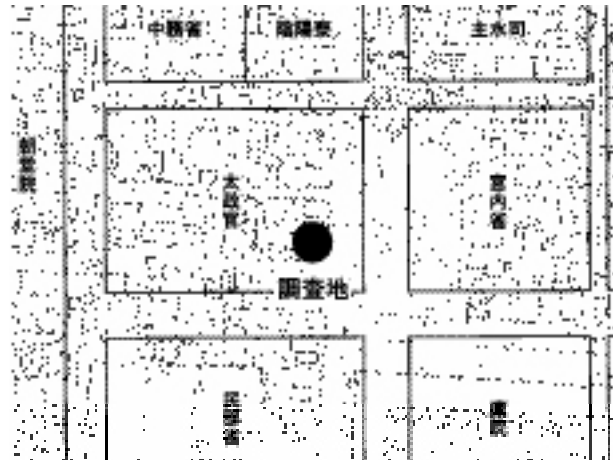


図35 調査位置図(1:5,000)



図36 調査区配置図(1:500)

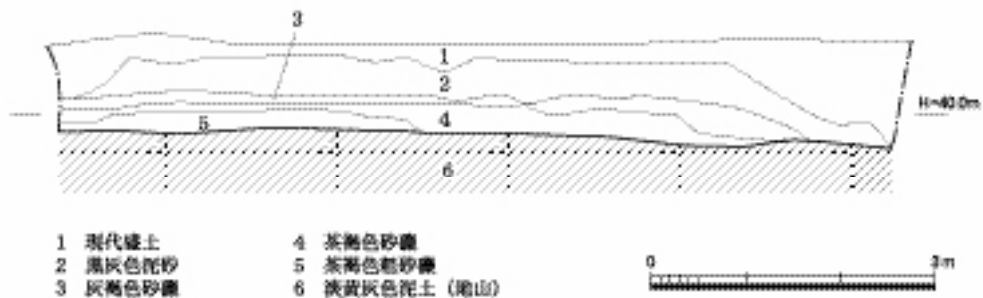


図37 北壁断面図(1:80)

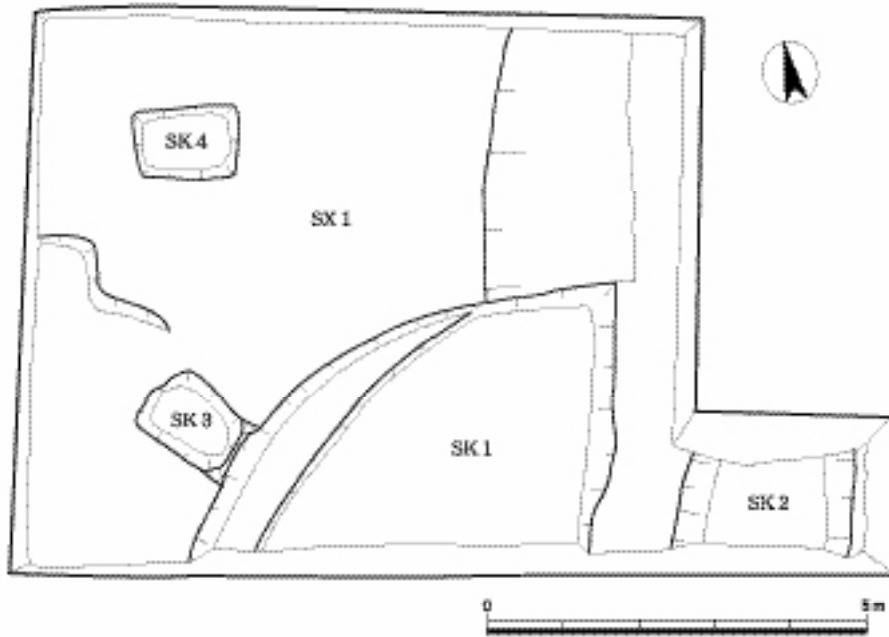


図 38 遺構平面図（1：100）

小結 今回の調査では、明確な平安時代の遺構は検出できなかった。しかし、平安時代の遺物
が出土しており、壇状高まりなども当該期の建物などに関連する遺構の可能性もあるが、性格は
不明である。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978 年報告

11 平安宮西院跡

経過 今回の発掘調査は、ビル新築工事に伴うもので、当地は平安宮西院推定地の北端部にあたるため、調査を実施した。

調査地の北側に東西 2.5 m、南北 10 m の長方形の調査区を設定した。調査は 1977 年 7 月 25 日から 8 月 12 日まで実施し、調査面積は約 25 m² である。

遺構 調査区の基本層序は、現代層 (0.6 m)、第 1 層暗茶灰色泥砂層 (0.3 m)、第 2 層黄褐色泥砂混礫層 (0.1 m)、第 3 層茶褐色泥砂層 (0.1 m)、第 4 層黄灰色泥土層・茶褐色砂礫層 (地山) である。第 1 層から第 3 層には中世・近世の遺物を包含する。第 4 層上面で遺構を検出した。検出した遺構は、井戸、土壇、柱穴などである。

井戸は調査区北端部で検出し、円形で、径 1.7 m、深さ 1.7 m である。埋土は大きく 4 分層でき、多量の瓦、鉄滓などが出土した。土壇・柱穴などは調査区北部で検出した。

遺物 遺物は整理箱で 12 箱出土した。出土遺物の大半は井戸から出土した瓦類で、金箔軒平瓦・桐紋飾り瓦などがある。特筆すべき遺物には、井戸から出土した多量の鉄滓・韃の羽口などがある。平安時代の遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器などがある。

小結 今回の調査では、平安時代に属する遺構は検出できなかったが、当該期の遺物が出土し、周辺に当該期の遺構が遺存した可能性は高い。なお、当地域は、桃山時代の聚楽第跡の推定範囲にも該当し、検出した井戸は聚楽第に関係すると考えられる。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告
第 13 冊 1995 年報告

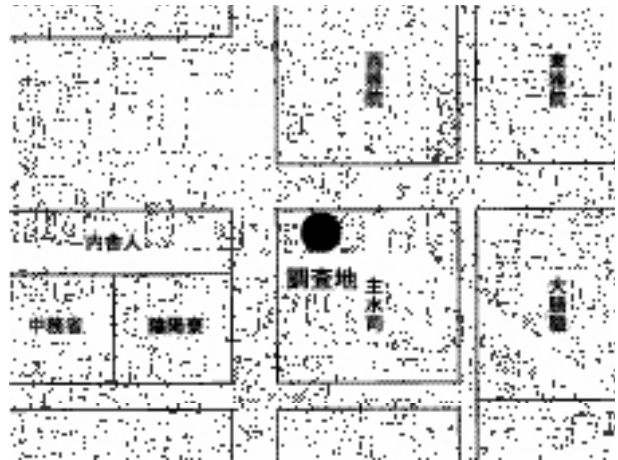


図 39 調査位置図 (1 : 5,000)

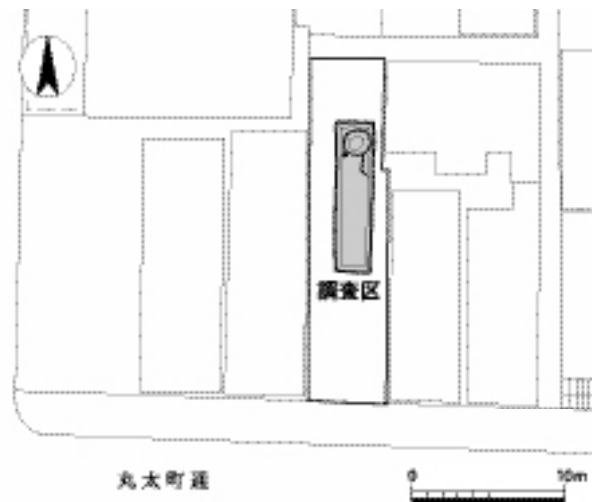


図 40 調査区配置図 (1 : 500)

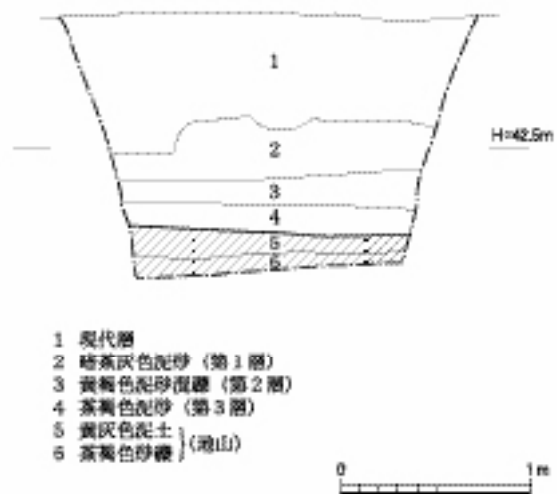


図 41 北壁断面図 (1 : 40)

12 平安宮主水司跡

経過 今回の発掘調査は、丸太町ビル新築工事に伴うもので、当地は平安宮主水司・醬司推定地の東部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に地下壕・現代攪乱をさけて、A区・B区の調査区を設定し、必要に応じて拡張した。

遺構 調査区の基本層序は、A区では第1層現代盛土層（0.6～1.2 m）、第2層淡黄灰色泥砂層（地山）、B区では第1層現代盛土層（0.8 m）、第2層暗茶色砂泥層（近世包含層：約0.2 m）、第3層淡黄灰色泥砂層（地山）である。両地区とも地山上面で遺構を検出した。

A区では、溝、柱穴、瓦溜などを検出した。南北溝 SX 1 は調査区南部で検出し、幅0.9 m、深さ0.8 mで約4 m確認した。埋土は茶褐色砂泥などで土師器が多量に出土した。南北溝 SD 2 はSD 1 に削平されるが、瓦が多く出土した。SX 1・SD 2 は平安時代に属し、他は近世の遺構である。

B区では、土壌、溝、柱穴などを検出した。

土壌 SK 8 は調査区北西部で検出し、土器溜の様相を示している。土壌 SK10 は調査区南部で検出し、南北溝状を呈する。幅0.6～0.8 m、深さ0.1～0.15 mである。土器類を多数含む。SK 8・SK10 は平安時代に属し、他は近世の遺構である。

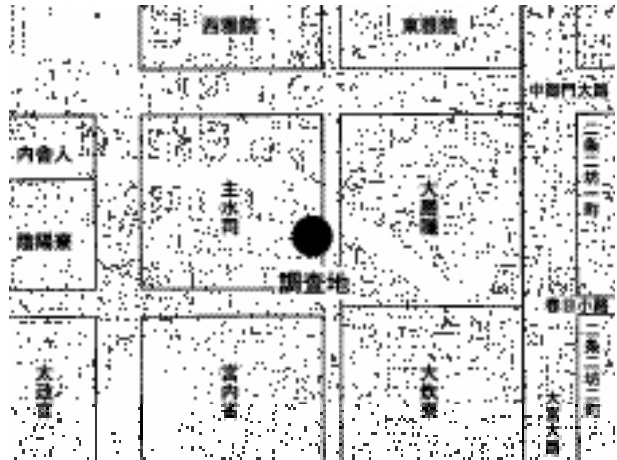


図42 調査位置図（1：5,000）



図43 調査区配置図（1：500）

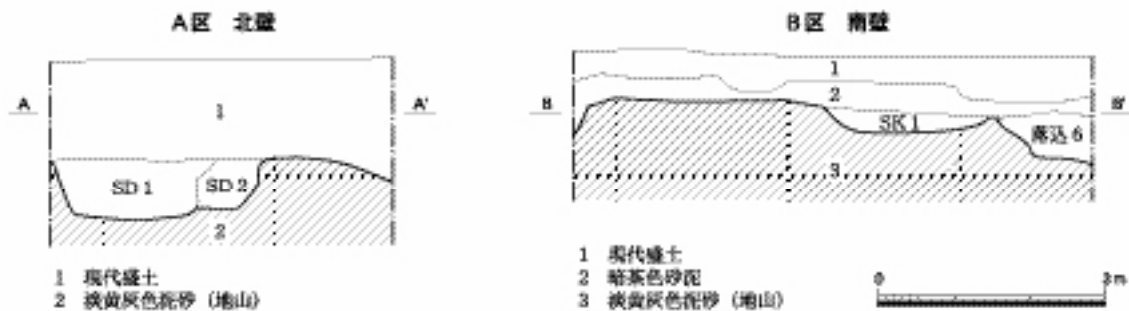


図44 調査区断面図（1：100）

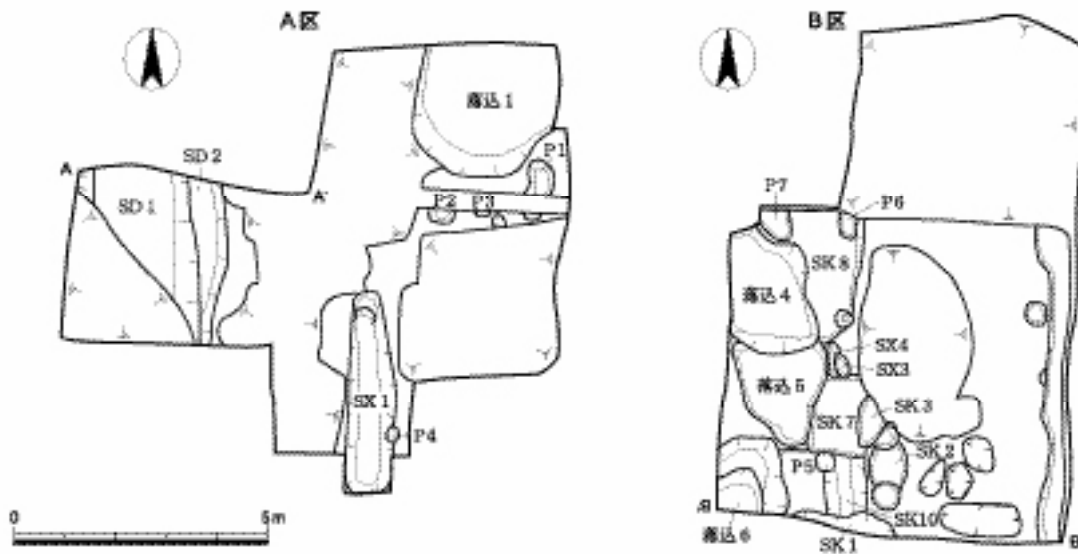


図 45 遺構平面図 (1 : 150)

遺物 遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、磁器、陶器、塩壺蓋、軒丸瓦、金箔瓦、墨書土器、鉄釘などがある。大半は土器類で、土壌などから出土した。時期は、平安時代から近代である。A区 SX 1、B区 SK 8・SK10 出土遺物は、平安時代初期の一括遺物である。

小結 今回の調査では、攪乱が激しく遺構の残存状況は悪かったが、平安時代の南北溝を数条検出し、主水司西限に関連する遺構の可能性もある。また、SK 7は金箔瓦などが出土し、聚楽第に関連する遺構と考えられる。

出土遺物では、平安時代初期の一括遺物を良好な形で確認した。なかでも煮沸形態の量が多く、供膳形態土器との比較検討の上で良好な資料である。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978 年報告

13 平安京左京四条三坊十五町（図版1）

経過 今回の発掘調査は、日本興業銀行新築に伴うもので、当地は平安京左京四条三坊十五町にあたる。

調査地内に逆L字形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層茶灰色砂泥層（近代・現代整地層：約1.4 m）、第2層灰褐色砂泥層（近世包含層：0.3 m）、第3層淡灰色泥砂層（0.1 m）、第4層灰橙色泥土層（0.2 m）、第5層黒褐色泥土・灰色粗砂の互層（地山）である。

第2層上面で第1・2面、第3層上面で第3面、第4層上面で第4・5面の遺構を検出した。

検出した遺構には、土塙、掘立柱建物、柱穴、井戸、溝、石敷、瓦溜などがある。時期は平安時代から近世に至る。遺構面の時期は、出土遺物などから第1・2面は近世から現代、第3面は中世（室町時代）から近世、第4・5面は平安時代から中世と推定できる。

遺物 遺物は整理箱で13箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、三彩陶器、灰釉陶器、緑釉陶器、陶器、磁器、銭貨、金属製品、土製品、埴塙、塩壺、木製品、漆器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。時期は、弥生時代から江戸時代に至る。

SK466・467からは中国製の青磁・白磁・青白磁などが出土した。そのうち青磁の椀2点と小皿2点は完形で出土した。14世紀代に中国で製作されたもので、いわゆる天龍寺手とよばれるものに属する優品である。

小結 今回の調査では、平安時代から近世の多種・多様な遺構を数多く検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。

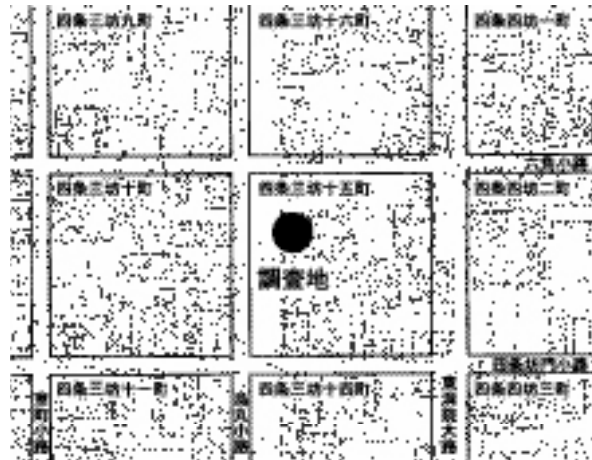


図46 調査位置図（1：5,000）



図47 調査区配置図（1：1,000）

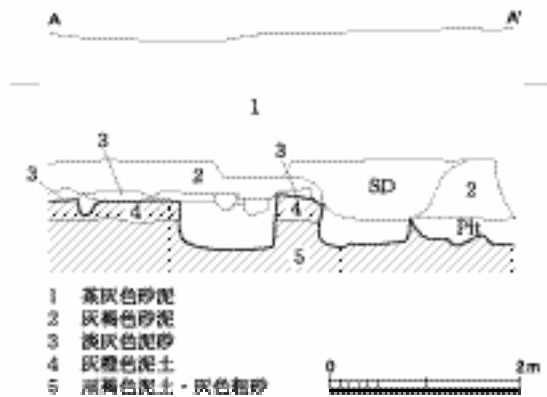


図48 東壁断面図（1：80）

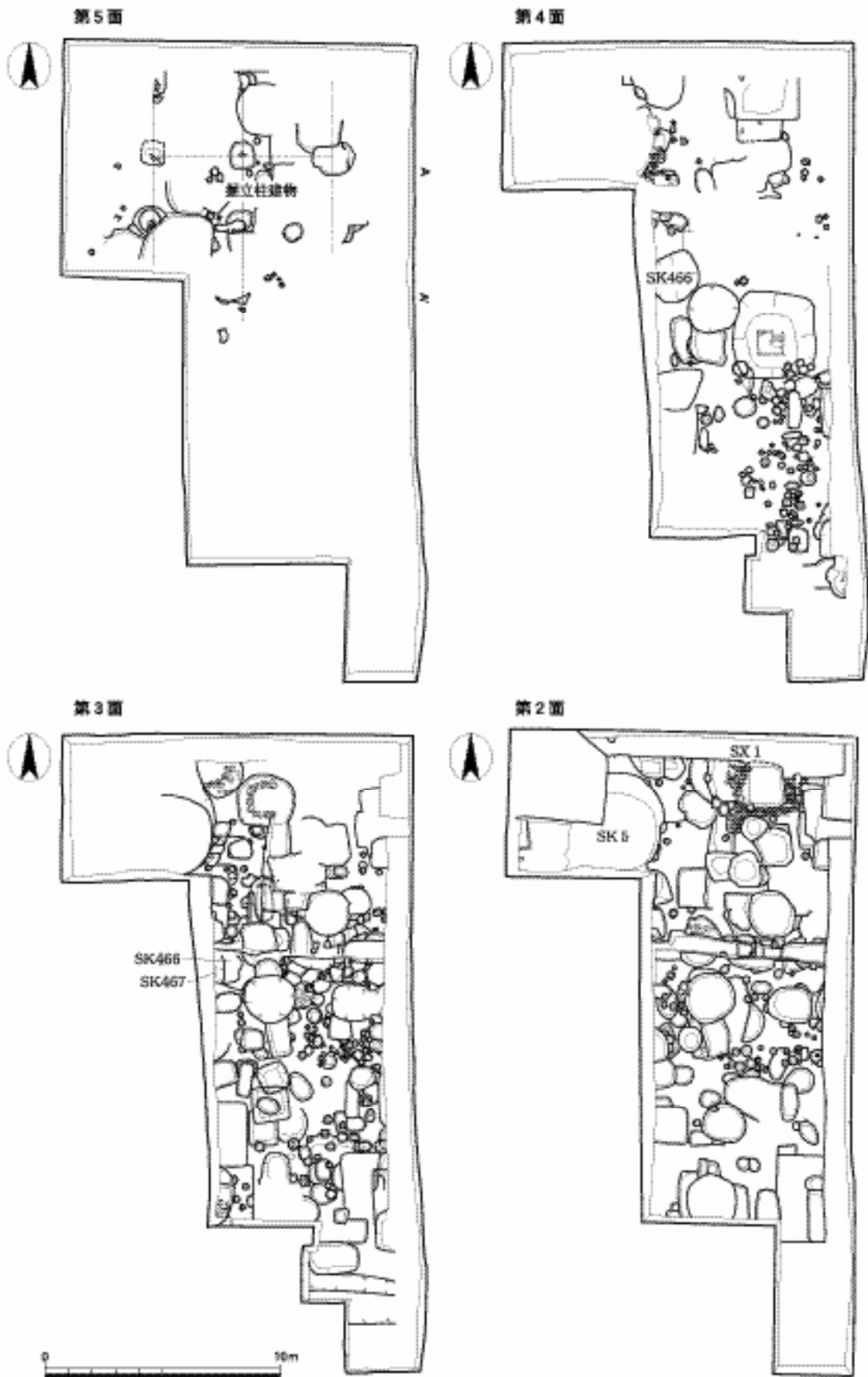


図49 遺構平面図 (1:250)

14 平安京左京六条一坊二町

経過 今回の発掘調査は、京都市立光徳小学校校舎建設に伴うもので、当地は平安京左京六条一坊二町の南東部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に長方形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代整地層（0.6 m）、第2層暗褐色砂泥層（0.2 m）、第3層淡茶褐色砂礫層（地山）である。第3層上面を第1面とする。地表面の標高は28.5 mである。

第1面で検出した遺構には、井戸、溝、土壇、柱穴などがある。

調査区北部で検出した井戸 SE 1 は、掘形が楕円形（幅 2.5 m × 2 m、深さ 1.6 m）、井戸側は方形（一辺 0.9 m）で横棧縦板組である。埋土は茶褐色混礫砂泥が中心で土師器などが出土した。

調査区北部で東西溝を2条並行して検出した。断面U字型で、幅 0.9 ~ 1 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。

土壇・柱穴は全域で検出し、形状・規模とも種々である。

遺構の時期は、埋土に含まれる土器などから鎌倉時代である。

遺物 遺物は整理箱で2箱出土した。出土遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、磁器などがある。

小結 今回の調査では、平安時代の遺物は出土したものの、遺構は検出できなかった。検出した遺構は鎌倉時代の遺構が主体を占め、当地区の変遷を知る上で貴重な資料となった。

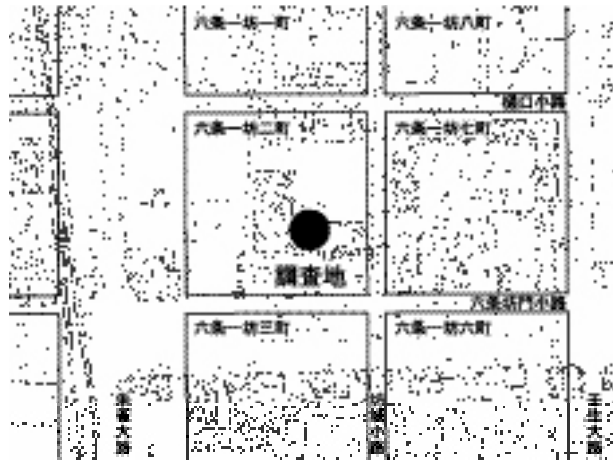


図 50 調査位置図（1：5,000）

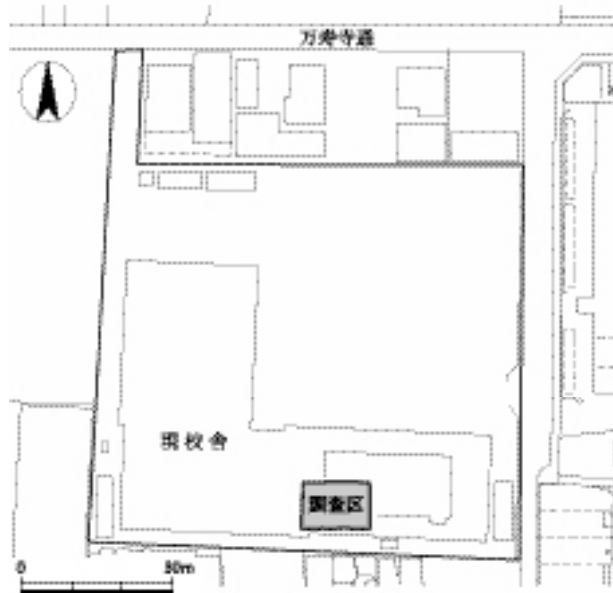


図 51 調査区配置図（1：1,500）

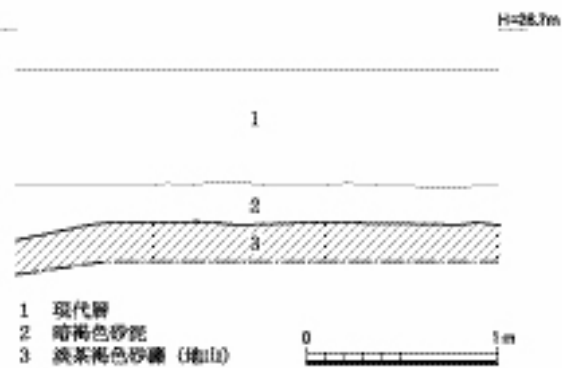


図 52 北壁断面図（1：40）

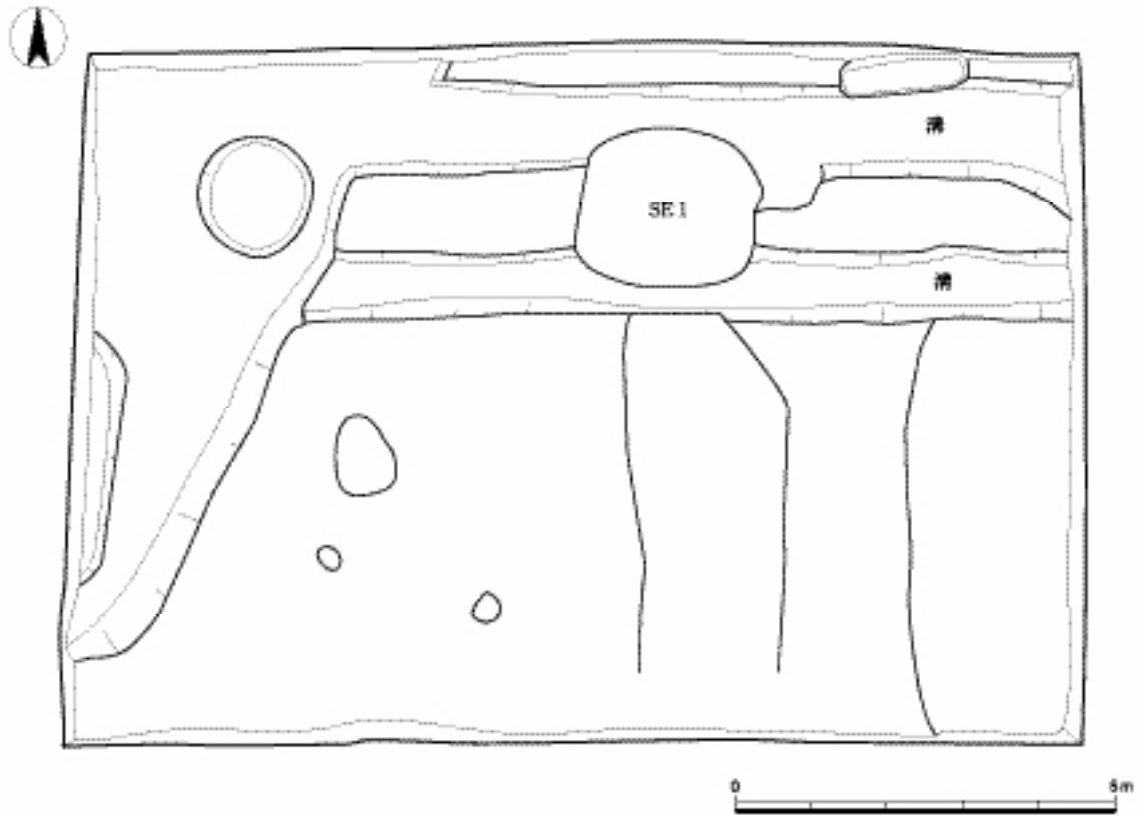


図 53 遺構平面図 (1 : 100)



図 54 調査区全景 (北西から)

15 平安京左京六条二坊十二町 (図版2)

経過 今回の発掘調査は、店舗新築工事に伴うもので、当地は平安京左京六条二坊十二町の南部にあたる。京都市文化観光局文化財保護課が試掘調査を行い、遺構が残存していたため、調査を実施した。

調査地内にL字形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近代盛土層 (0.7～0.8 m)、第2層褐灰色泥砂層 (0.4 m)、第3層褐灰色泥砂層 (0.2 m)、第4層黄灰色泥砂層 (0.4 m)、第5層暗灰色泥砂層 (0.05 m)、第6層黄灰色砂層 (地山) である。第3層・第4層上面で遺構を検出した。

検出した遺構には、土壇、土壇墓、掘立柱建物、柱穴、井戸、竈、溝などがある。時期は平安時代から近世に至る。

土壇は全域で検出し、形状・規模も多様である。土器を多量に含むもの、集石のものなどが見られる。

土壇墓は調査区西側で検出した。方向は長軸が南北方向のものが多いが、斜方向のものも見られる。また、中央部ではかなり重複して作られている。形状・規模は長方形で長辺1 m、短辺0.5 m程度のものが16基と多く、方形で一辺0.7 mのものが4基、円形で径2.5 mのものが1基ある。長方形のものには、木棺を据えるもの (屈葬) と直葬のもの (屈葬) がある。方形・円形のもの、木棺・桶を据え座棺である。

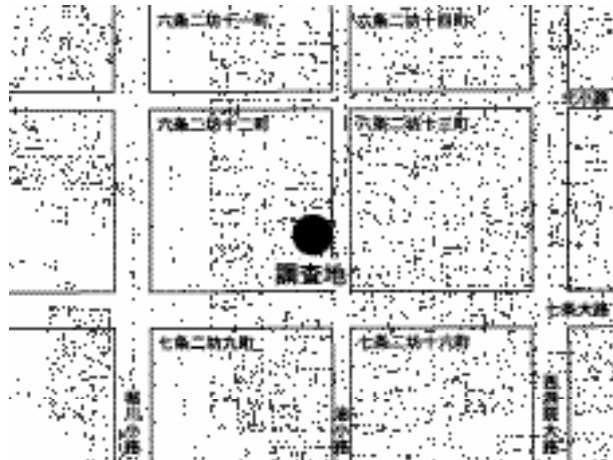


図55 調査位置図 (1 : 5,000)

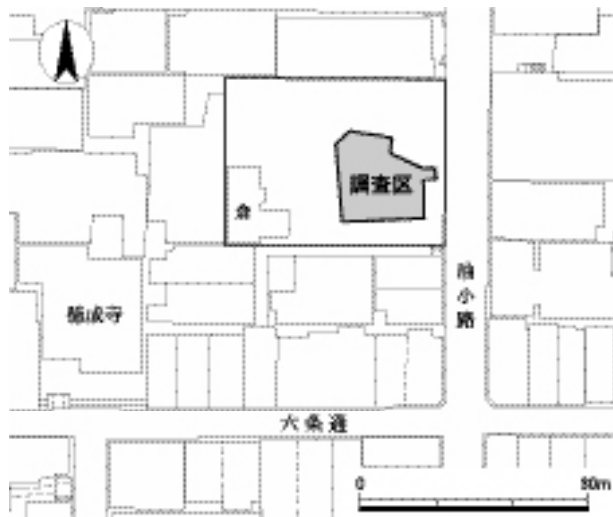


図56 調査区配置図 (1 : 1,000)

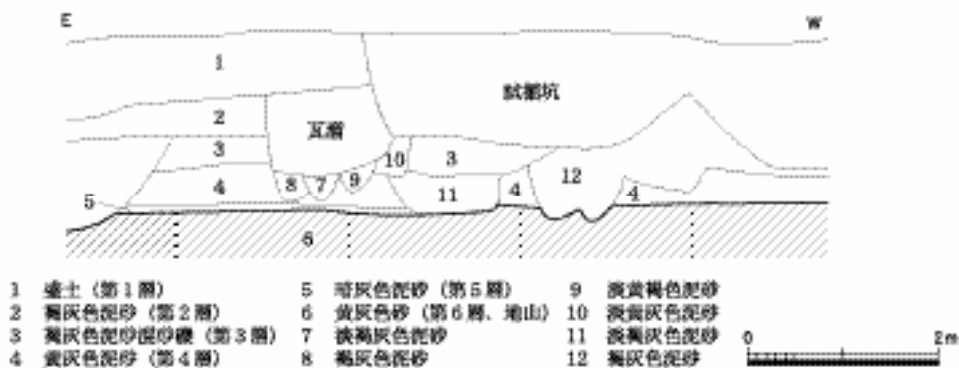


図57 南壁断面図 (1 : 80)



図 58 遺構平面図 (1 : 100)

すべて土葬で、副葬品は殆ど無い。時期は桃山時代から江戸時代前期である。

柱穴は全域で多数検出したが、まとまったのは3棟である。掘立柱建物は、東西1間×南北3間の南北棟 (SB 1) と、重複して1間×1間の東西棟 (SB 2)、その南側で1間×おそらく3間の東西棟 (SB 3) を検出した。SB 1の柱間は東西2.4m、南北1.8m等間。方位は北で東に振る。SB 2は東西2.4m、南北1.5m。SB 3は東西おそらく1.35m等間、南北1.95mである。SB 2・3はほぼ方位に沿う。

井戸は調査区南西部で検出した。円形で径1.2mである。

竈は調査区北西部で南北に約2m離れて2基検出し、いずれも東側が焚口である。南側は円弧状で南北1.2mで中央部が凹み焼ける。

南北溝は調査区東部で検出した。幅2.3m以上、深さ1.2m以上である。

遺物 遺物は整理箱で17箱出土した。遺物の種類には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、陶器、磁器、銭貨、釘、木棺・木製数珠、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。時期は、弥生時代から江戸時代に至る。

小結 今回の調査では、平安時代から近世の遺構を多数検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。特に近世の土塚墓は残存状況が良く、墓地の状況が明らかとなった。

16 平安京左京七条一・二坊、東市跡（図版3～5）

経過 今回の発掘調査は、七条通市電撤去後の上下水道管設置に伴うもので、当地は平安京左京七条一・二坊、東市にあたるため、調査を実施した。調査地はいずれも七条大路上に位置し、七条一坊十二町の南側（No.1トレンチ）、櫛笥小路との交差点（No.2トレンチ）、大宮大路との交差点（No.3トレンチ）、猪隈小路との交差点（No.4トレンチ）、五町・東市南側（No.5トレンチ）、十二町・東市外町南西側（No.6トレンチ）にあたる。

調査は道路中央部に、東西長さ約10m、南北幅約5mの長方形のトレンチを6箇所設定した。

なお、No.1トレンチは、重機掘削後、遺構が残存していないことがわかったので、直ちに埋め戻して調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、各トレンチによって異なる。最も残存状況の良かったNo.3トレンチでは、第1層アスファルト・近現代整地層（0.8m）、第2層耕土・床土層（0.25m）、第3層暗青灰色泥土層（0.25m）、第4層暗茶灰色泥砂層（0.4m）、第5層暗茶褐色砂礫層（0.25m）、第6層茶褐色砂礫層（地山）である。第3層上面で第1面、第4層上面で第2面、第5層上面で第3面、第6層上面で第4面の遺構を検出した。

検出した遺構には、柵、土塼、方形土器溜、柱穴、井戸、溝、埋甕などがある。時期は近世の攪乱が多く、中世から近世の遺構を多く検出し、平安時代以前の遺構は少ない。

No.2トレンチ 第1面は現代（SD1、SX6）から近世（SX2、SK3・4）、第2面は鎌倉

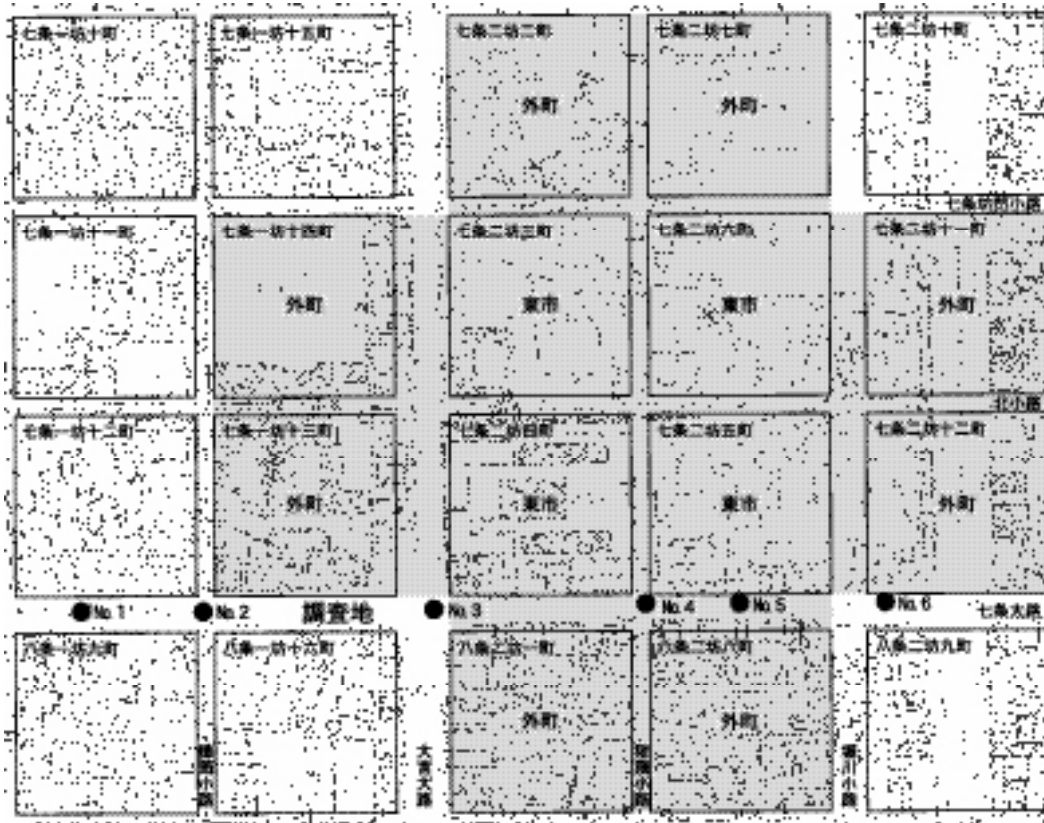


図59 調査位置図（1：5,000）

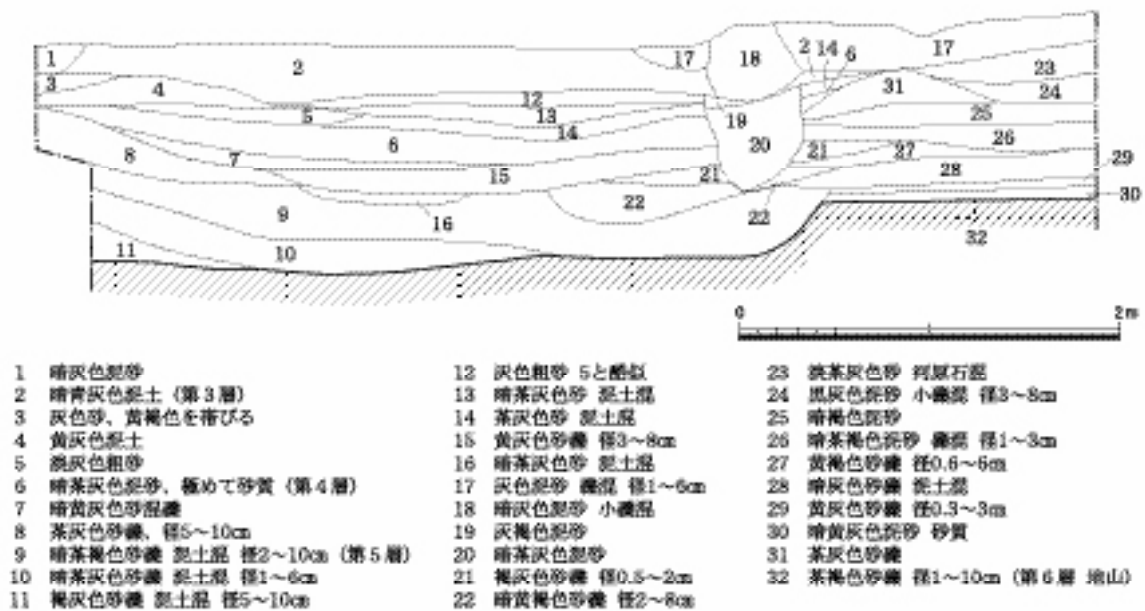


図 60 No.3 トレンチ北壁断面図 (1 : 40)

時代から室町時代 (SD 7~9 など)、第 3 面は平安時代後期から鎌倉時代で SD20 は平安時代後期の七条大路北側溝である。

No.3 トレンチ 第 1 面は現代から近世 (SD 4、埋甕 SK 3)、第 2 面は江戸時代 (柵)、第 3・4 面は室町時代以降 (SD 6 など) である。

No.4 トレンチ 遺構面は 1 面で、時期は近世 (SD 5、SE 2 など) である。南部の SX 3 は整地を行って堅く締まっており、道路面と推定できる。

No.5 トレンチ 遺構面は 1 面で、時期は中世から近世である。ベースの黄褐色泥土から古墳時代・弥生時代の土器が出土したが、遺構としてはまとまらない。

No.6 トレンチ 第 1 面は近代 (SD 1 など) から近世 (SK 1・9・11、SE 1~3 など)、第 2・3 面は室町時代以降 (SD 2・4・14・16 など) である。

遺物 遺物は整理箱にして 58 箱出土した。出土遺物の種類には、弥生土器甕・壺、土師器杯・椀・皿・高杯・甕・小壺・耳皿・羽釜、須恵器鉢・鉢、瓦器椀・鍋・羽釜・壺・ミニチュア羽釜、瓦質土器壺・火舎、陶器皿・甕・壺・鉢・播鉢、磁器椀・皿・鉢・壺、軒丸瓦・軒平瓦、土製坩堝・塩壺、木製箸・曲物などがある。時期は、弥生時代から近世で、平安時代以前は少なく、中世・近世のものが大半を占める。

小結 今回の調査は、全域が七条大路の路面にあたるため、平安時代の遺構は、No. 2 トレンチで七条大路北側溝と考えられる SD20 を検出したにとどまる。他の調査区も中近世の遺構が深くまで及ぶなど、後世の攪乱が多く、平安時代の遺物は出土したものの、遺構を確認するには至らなかった。後世の遺構内から弥生時代・古墳時代の遺物が少量出土し、遺構は検出していないが、近接地に当該期の遺跡が存在した可能性が高い。

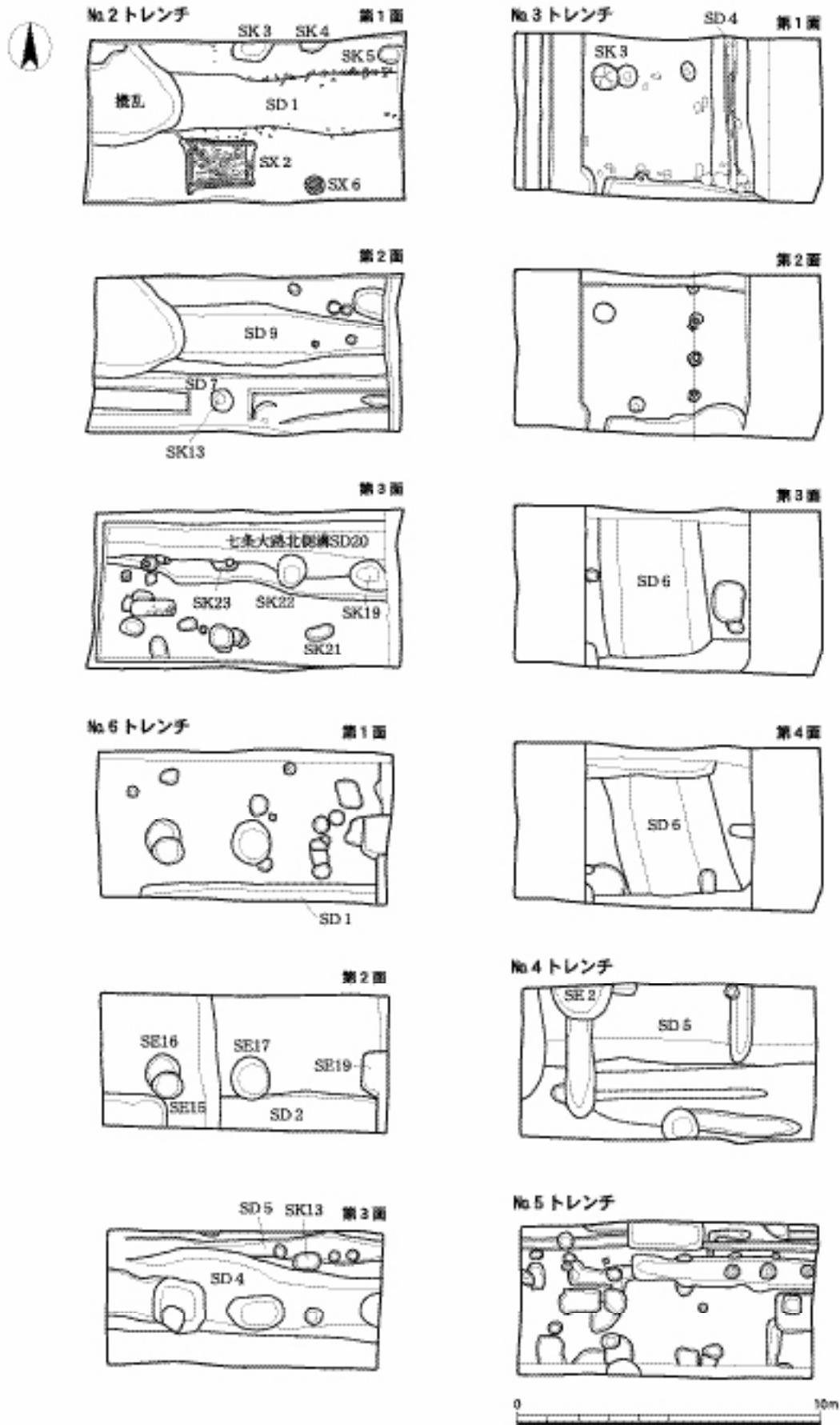


図 61 遺構平面図 (1 : 200)

17 平安京左京七条三坊十四町 (図版6)

経過 今回の発掘調査地は、京都市下京区廿人構町に所在し、平安京の条坊では左京七条三坊十四町に該当する。調査地点の西方には烏丸通が南北方向に延長しており、この烏丸通における地下鉄建設に伴い発掘調査が実施されている。東本願寺前では中世の土壌が多数検出されており、東本願寺前古墓群として知られる。この場所に社屋が建設されることに伴い発掘調査を実施した。

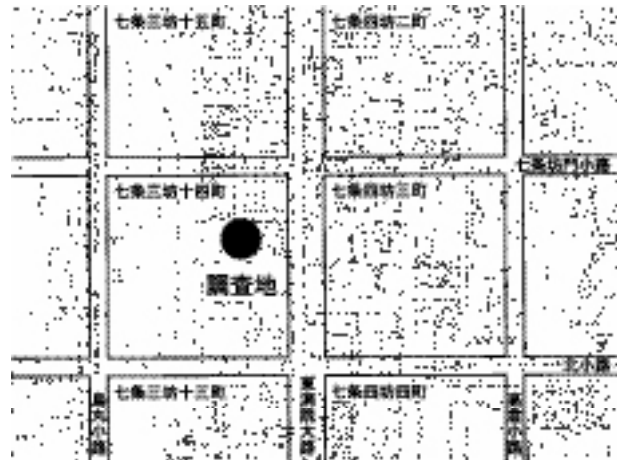


図 62 調査位置図 (1 : 5,000)

調査区は、調査対象地内中央に東西約 10 m、南北約 9 m の範囲に設定した。

遺構 調査区内の基本層序は、現地表面から現代盛土・焼土層が厚さ約 0.7 m、洪水砂礫層が厚さ約 0.25 m、固く締まった黒褐色泥砂層約 0.05m、暗茶褐色泥砂・暗灰褐色泥砂層が厚さ 0.2 ~ 0.25 m、黒灰色泥砂層が厚さ約 0.2 m、淡緑灰色砂泥層が厚さ 0.2 ~ 0.3 m、以下基盤層である暗褐色砂礫層となる。

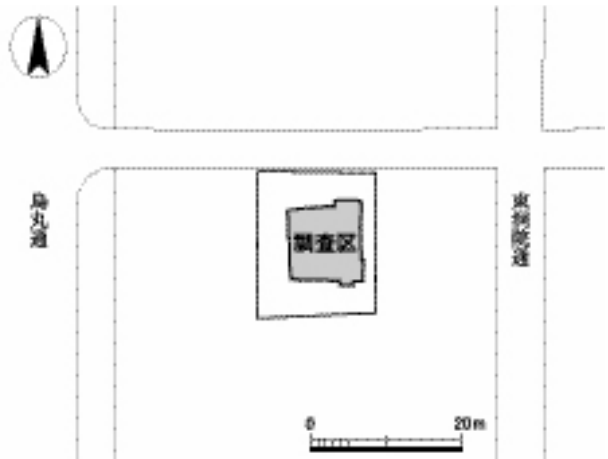


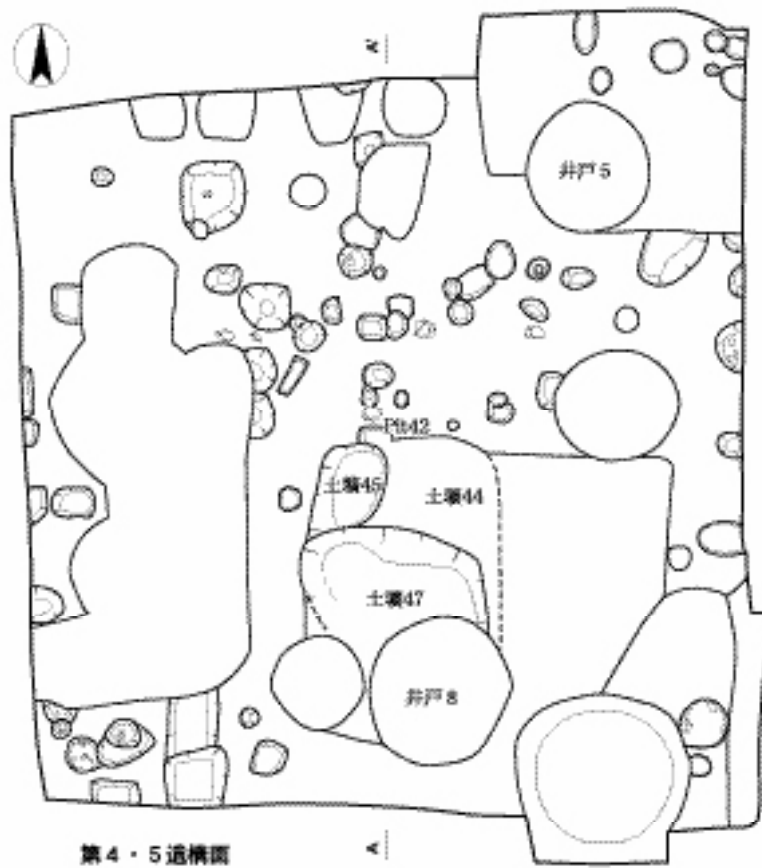
図 63 調査区配置図 (1 : 1,000)

洪水砂礫層は、灰褐色砂礫や灰褐色粗砂層からなり、鴨川の氾濫堆積物である。この上面まで機械掘削を行い、以下、手掘りによる調査を行った。

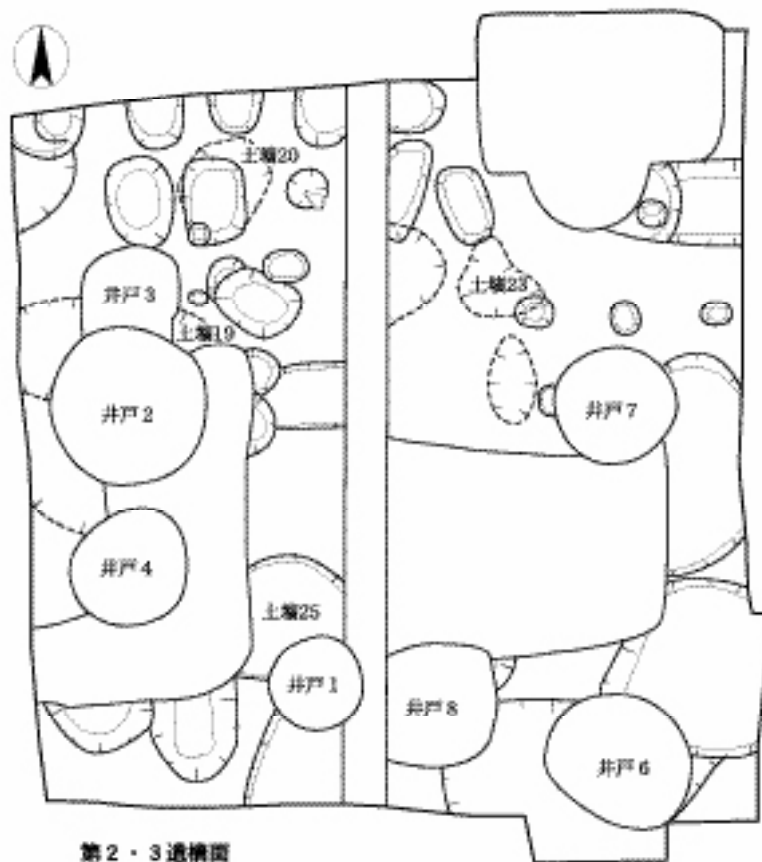
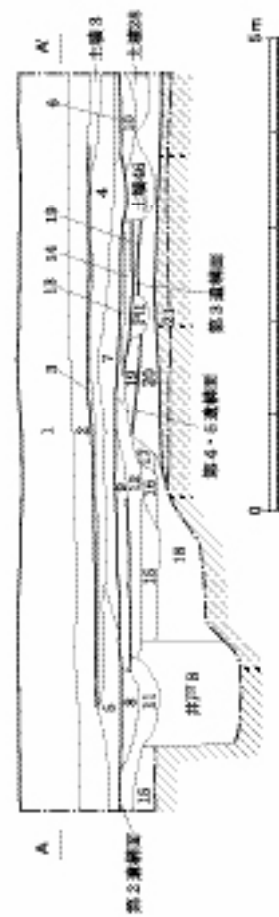
暗茶褐色泥砂・暗灰褐色泥砂層上面では礎石を 10 数基検出したが建物としてのまとまりはない。出土遺物から江戸時代前期と考えている。

暗灰褐色砂泥層上面 (第 2 遺構面) および下層に堆積する黒灰色泥砂層上面 (第 3 遺構面) では、土壌を多数重複して検出したが、各土壌の重複状況は不明瞭である。土壌の検出状況から、集石を伴うもの、土器を集積するもの、甕を埋納するものなどの形態がある。中には礫や土器が盛り上がりを示すものもあることなどから、断面を観察しつつ 2 ~ 3 面に掘り別けて調査を行った。集石土壌の 1 基からは、鉄釘や骨片が出土した。土器集積土壌の中には、土師器を多量に使用し中央部が盛り上がるものもあり、銭貨、小型模造土器などを埋納し、焼土・炭が含まれる。1 基からは骨片が出土した。埋甕土壌は、底面の形状から甕などの容器を据えたと考えられる土壌で、1 基には焼締陶器の甕底部が据えられていた。土壌群は、出土遺物から室町時代前期と考えられる。

淡緑灰色砂泥層上面 (第 4 遺構面) では、40 数基の柱穴を検出したが、後世の遺構により削平を受けたり、調査区が狭小なこともあり、建物としてはまとまらない。底面に根石を据えるもの



第4・5透構面



第2・3透構面

- | | | | |
|----|------------------|----|--------------|
| 1 | 現代盛土～基本盛土層 | 12 | 黒灰色泥砂 |
| 2 | 黄褐色泥砂層 準大礫層 (洪水) | 13 | 黄褐色泥砂 |
| 3 | 黄褐色泥砂 粗く締まる | 14 | 黒灰色泥砂 |
| 4 | 茶褐色泥砂 | 15 | 黄褐色泥砂 |
| 5 | 黄褐色泥砂 | 16 | 黄褐色泥砂 |
| 6 | 黄褐色泥砂 | 17 | 黄褐色泥砂 |
| 7 | 黄褐色泥砂 | 18 | 黄褐色泥砂 |
| 8 | 黄褐色層 (φ2～5cm) | 19 | 黄褐色泥砂 |
| 9 | 黄褐色泥砂 礫、土器片含む | 20 | 黄褐色泥砂 |
| 10 | 黄褐色泥砂 礫層 | 21 | 黄褐色泥砂 礫 (崩山) |
| 11 | 黄褐色泥砂 礫層 | | |

図64 調査区実測図 (1:80)

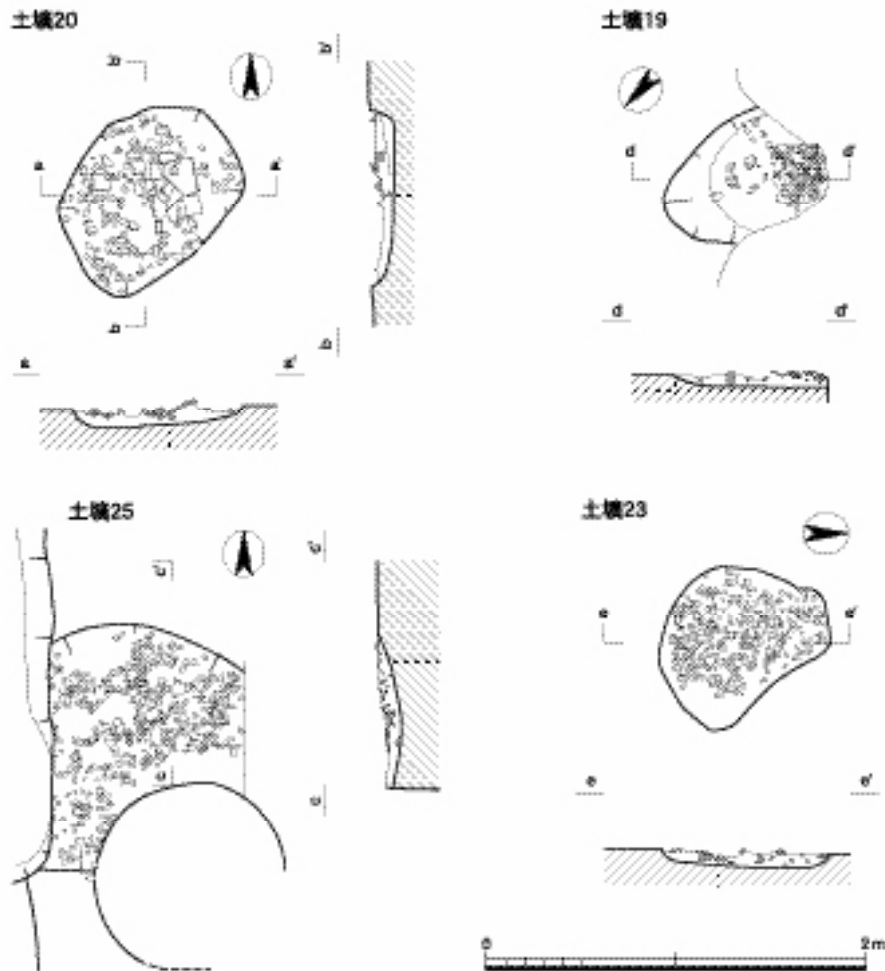


図 65 土壌 19・20・23・25 実測図 (1:40)

もある。

下層に堆積する暗褐色泥砂層は、上半に径 5～20 cm の礫を多量に包含している。淡緑灰色砂泥層上面での遺構検出状況から、淡緑灰色砂泥層は整地土層であり、暗褐色泥砂層と礫は整地土層を形成するための基盤層と考えることができる。出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代と考えられる。

遺物 遺構や土層からは、平安時代後期から室町時代に属する土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などの土器類のほか、小型模造土器、銭貨、鉄釘、滑石製品などが出土した。

図 66 の 1～31 は土壌 25 から出土した土師器で、胎土から赤色系 (1～6) と白色系 (7～30) がある。31 は小型模造土器である。32～39 は黒灰色泥砂層から出土したもので、35 は赤色系、32～36 は白色系の土師器、37 は小型模造土器である。38 は瓦器小型壺、39 は瓦器鍋である。

小結 今回の調査では、地下鉄烏丸線の調査成果が、さらに東方へ広がることを確認することができた。その一つは、いわゆるウグイス色を呈する淡緑灰色砂泥層を検出できたことであり、平安時代後期以降の当該地の開発を示す土層として注目できる。

一方、室町時代の土壌群は、銭貨、小型模造土器などの出土遺物および、同定は行っていないが、2 基の土壌から骨片が出土したことから、同様の形状を示す土壌は、土壌墓である可能性を指摘

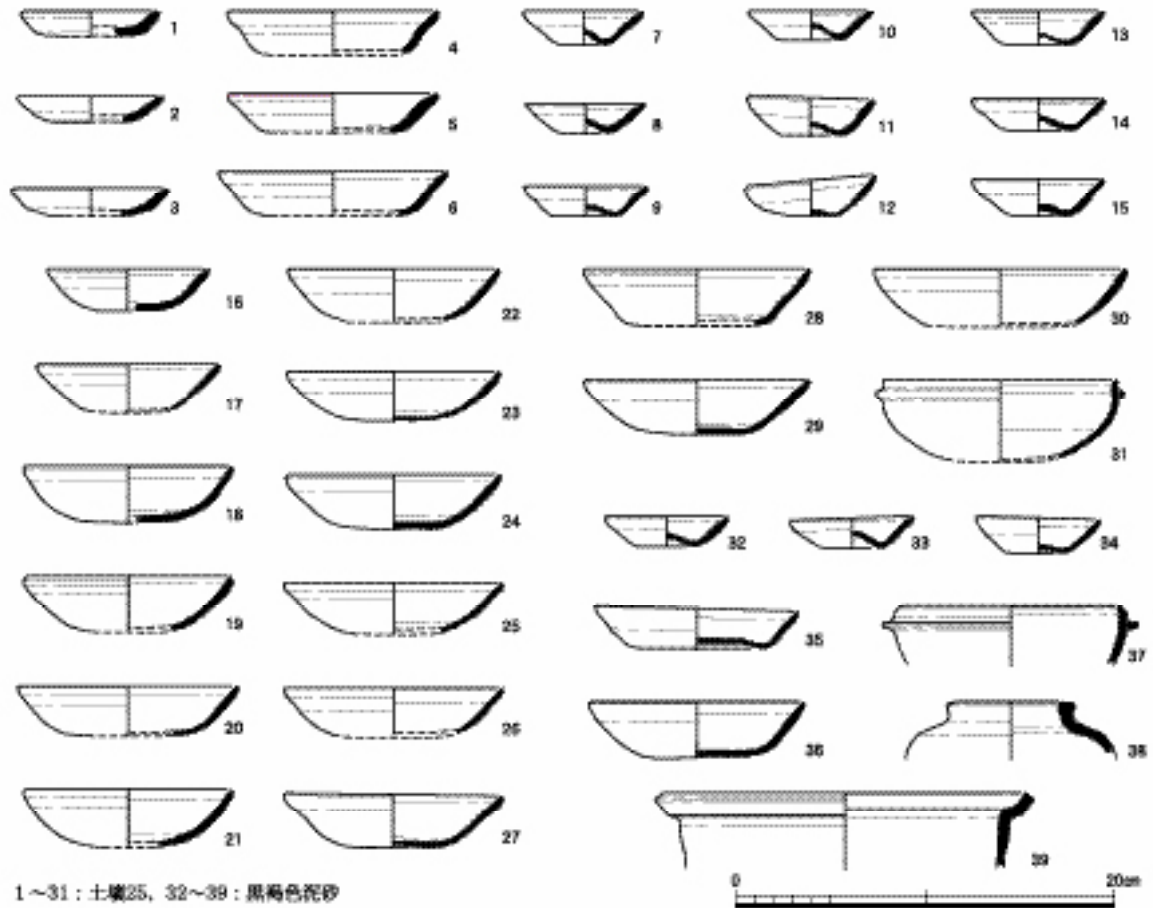


図 66 出土土器実測図 (1:4)

できた。当該地で土壌から骨片が確認できた事例としては初例である。烏丸線の調査でも、今回の調査で検出した土壌と同様の形状を示す土壌群は多数検出されている。東本願寺を含めた一帯が墓域であることがほぼ確定でき、中世の都市空間を考える上で重要な成果と言えよう。

18 平安京左京八条三坊一町

経過 今回の発掘調査は、京都第3タワーホテル新築に伴うもので、当地は平安京左京八条三坊一町の南東部にあたる。

調査地内に南北6m、東西24mの長方形の調査区を、北側（北区）と南側（南区）に2箇所設定した。

遺構 調査区の基本層序は、近現代の盛土・耕作土層、第1層暗褐色泥土層（0.03m）、第2層暗褐色泥砂（約0.2m）、第3層褐灰色泥砂（約0.2m）、第4層黄褐色砂質土（約0.2m）、第5層灰褐色砂礫層（地山）である。第2層上面で第1面、第3層上面で第2面（鎌倉時代後半）、第4層上面で第3面（鎌倉時代前半）、第5層上面で第4面（平安時代以前）の遺構を検出した。

検出した遺構には、土壇、土壇墓、柱穴、井戸、土器溜などがある。時期は古墳時代から近世に至る。

第1面では、全面で土壇・集石遺構を検出した。土壇は長方形から不定形のものまであり、不揃いである。土壇内に土器を据えたものを3基確認し、人骨を検出した土壇もあり、大部分が墓と推定できる。時期は室町時代以降である。

第2面では、南区で井戸・柱穴などを検出し、北区で土壇を多数検出した。北区の土壇は墓と考えられる。時期は鎌倉時代後半である。

第3面では、両地区から柱穴・土壇・焼土溜りなどを検出した。焼土溜り内や周辺から埴塼・

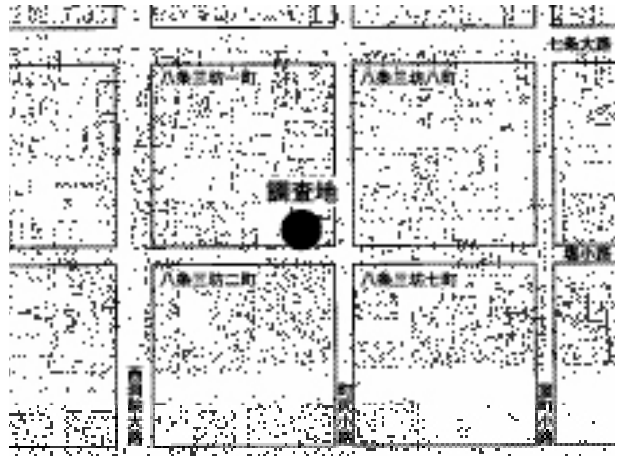


図 67 調査位置図（1：5,000）

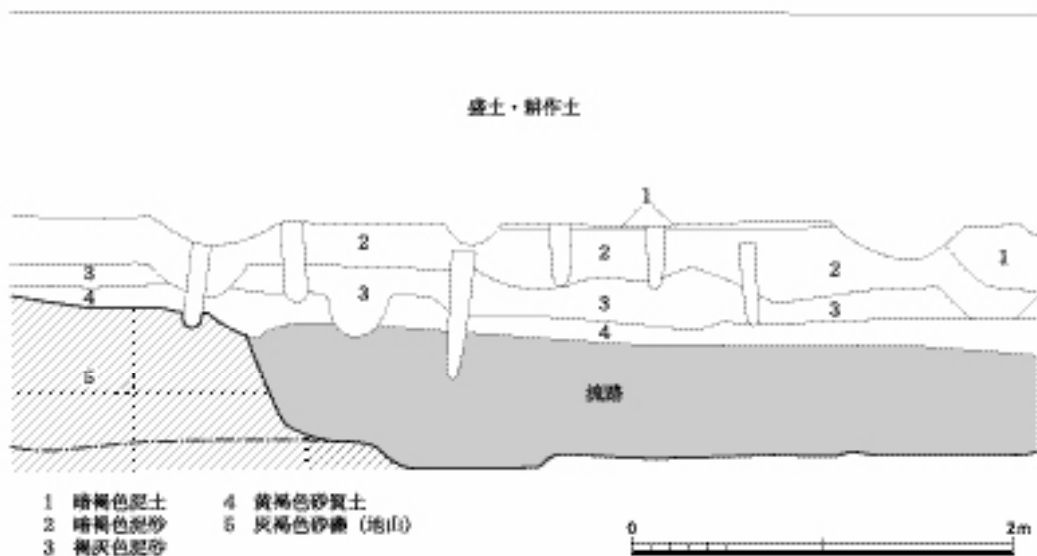


図 68 南区断割北壁断面図（1：40）

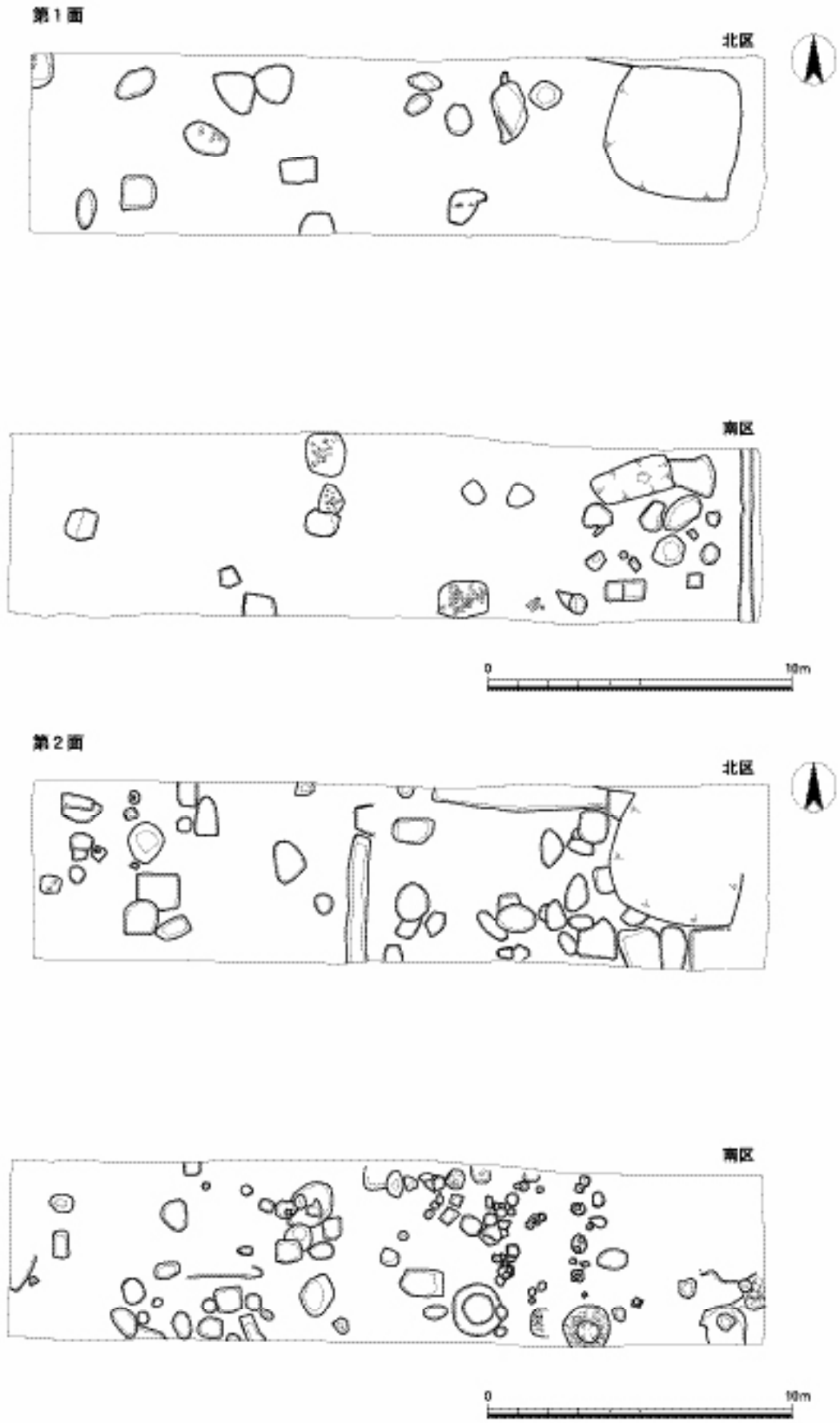
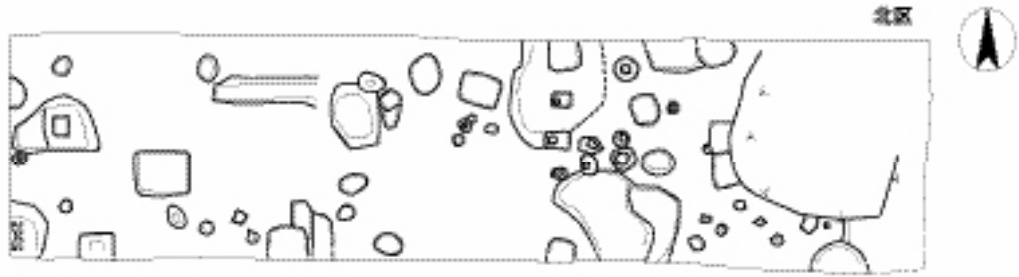


图 69 第 1・2 面遺構平面图 (1 : 200)

第3面



第4面

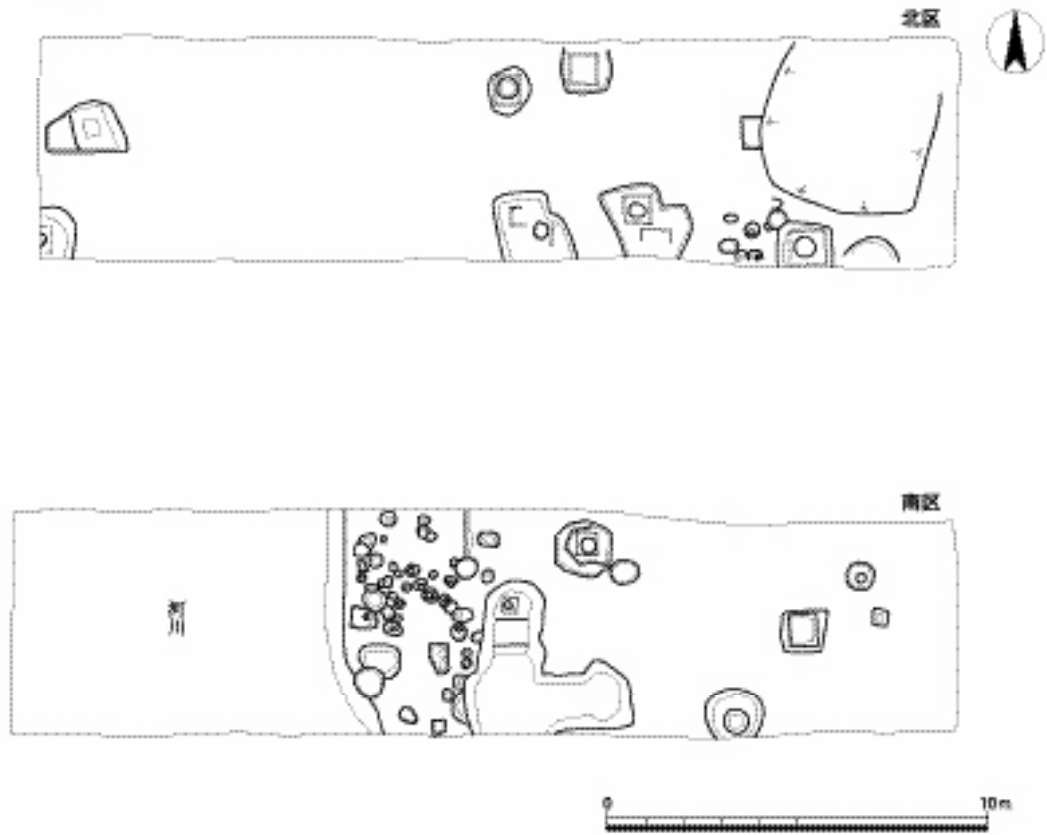


图70 第3・4面遺構平面図（1：200）

鋳型などが出土したことから、当地域で金属製品の生産を行っていたことが推定できる。時期は鎌倉時代前半である。

第4面では、両地区から柱穴・土壇・井戸などを検出した。時期は平安時代後期である。また、南区東側では古墳時代から平安時代の遺物を包含する河川を検出した。

遺物 遺物は整理箱で145箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、磁器、銭貨、釘・飾金具、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・■などがある。時期は、古墳時代から江戸時代に至る。

小結 調査の結果、平安時代から室町時代に至る遺構を多数検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。さらに、東本願寺前などで室町時代の墓地を確認しており、当該期に周辺が墓地として利用されていたことが窺える。また、鎌倉時代には金属製品の工房が存在したことが明らかとなった。



図 71 南調査区全景（西から）



図 72 北調査区全景（東から）

19 平安京左京九条一坊四町、羅城門跡

経過 今回の発掘調査は、羅城門確認のための調査である。

調査地内の南東部を試掘し、堆積状況を確認し、東西 6.6 m、南北 4.2 m の調査区を設定して調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層現代盛土層（約 1 m）、第 2 層暗灰褐色砂泥層（近世整地層：約 0.3 m）、第 3 層は暗黒褐色砂泥と暗青灰色泥砂の互層（約 0.8 m）、第 4 層赤褐色砂礫と黄褐色砂の互層（地山）である。遺構は第 3 層中で検出した。

検出した遺構は、溝、落込みなどである。

第 3 層中で検出した SD 3・落込みは、鍋取川の流路または氾濫原で、いずれも多量の近世陶磁器が出土した。

遺物 遺物は整理箱で 10 箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦類、鉄製品、木製品、銭貨などがある。大半は土器類で、第 3 層を中心として出土した。時期は、平安時代から近世である。

小結 今回の調査では羅城門に関する遺構は、全く検出できなかった。これは、鍋取川の氾濫がかなり広範囲にわたって影響を及ぼしたためと考えられる。遺物包含層の下はすぐ地山となっており、平安時代の遺構は削平されたものと推定できる。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978 年報告

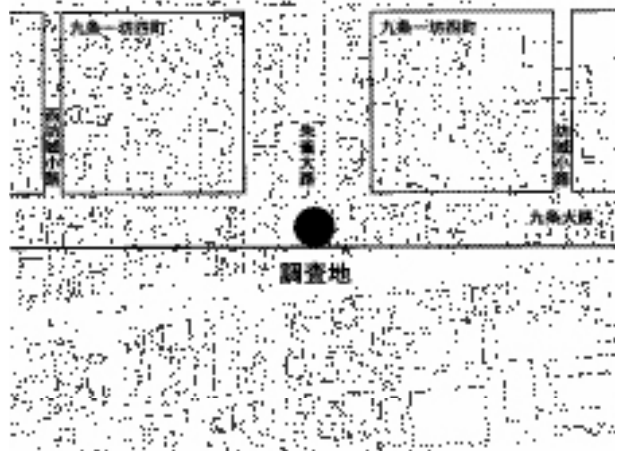


図 73 調査位置図 (1 : 5,000)



図 74 調査区配置図 (1 : 500)

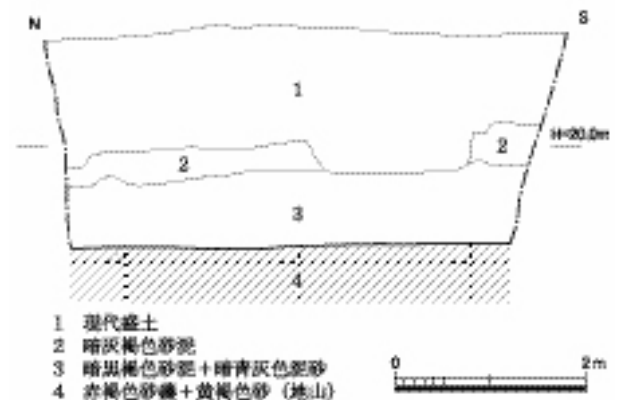


図 75 東壁断面図 (1 : 80)

20 平安京右京二条四坊十二町

経過 今回の発掘調査は、安井小学校増築工事に伴うもので、当地は平安京右京二条四坊十二町にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北 14 m、東西 9 m の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層現代整地層 (0.5 m)、第 2 層旧耕作土層 (約 0.2 m)、第 3 層遺物包含層 (約 0.05 m)、第 4 層砂礫と粘質土の互層 (地山) である。遺構は第 4 層上面で検出した。検出した遺構は、暗渠、水溜状遺構などである。

暗渠は旧耕作に伴うもので、近世のものと室町時代のものが各 1 条ある。水溜状遺構は杭と板で護岸したもので、近世である。

遺物 遺物は整理箱で 5 箱出土した。遺物の種類には、土師器、陶器、磁器などがある。時期は、平安時代から近代である。大半は近世で、平安時代のものは少ない。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構は検出できなかったが、少量ながら当該期の土器が出土したことは、調査地周辺に遺構が存在することを示唆するものである。

『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊 1997 年報告

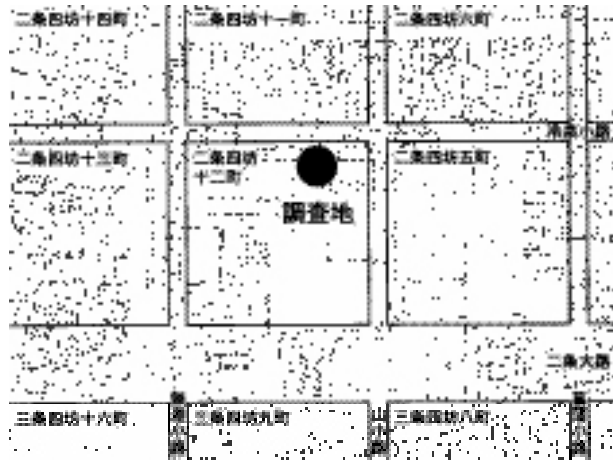


図 76 調査位置図 (1 : 5,000)

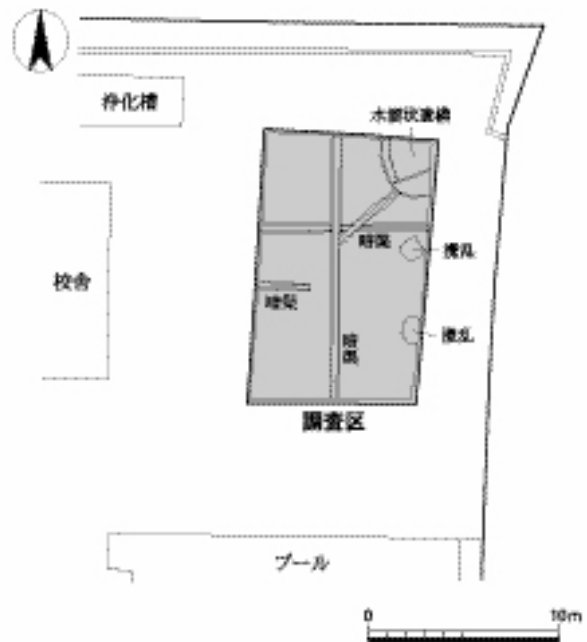


図 77 調査区および遺構配置図 (1 : 400)

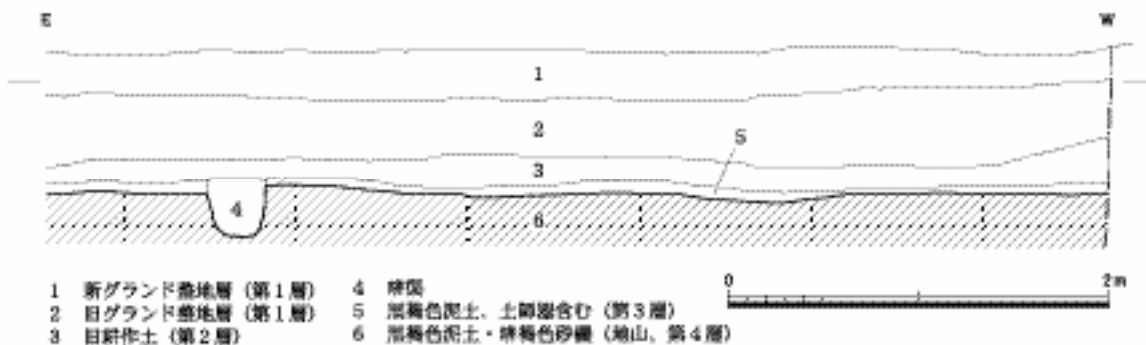


図 78 南壁断面図 (1 : 40)



図 79 調査区全景（西から）

21 平安京右京五条四坊十三町、六条四坊十六町

経過 今回の調査は、京都市右京区西小路・高辻・葛野大路、および南区吉祥院西ノ庄・中河原に及ぶ広域下水道工事に伴うもので、平安京右京五条・六条四坊にあたるため、立会調査を実施した。その結果、葛野大路通の高辻―五条間で、土層の詳細な観察、遺構・遺物の有無の確認のため2箇所のトレンチを設定し、道路内を発掘調査することとなった。調査区は北側の1トレンチと南側の2トレンチに分かれ、1トレンチは五条四坊十三町、2トレンチは六条四坊十六町にあたる。

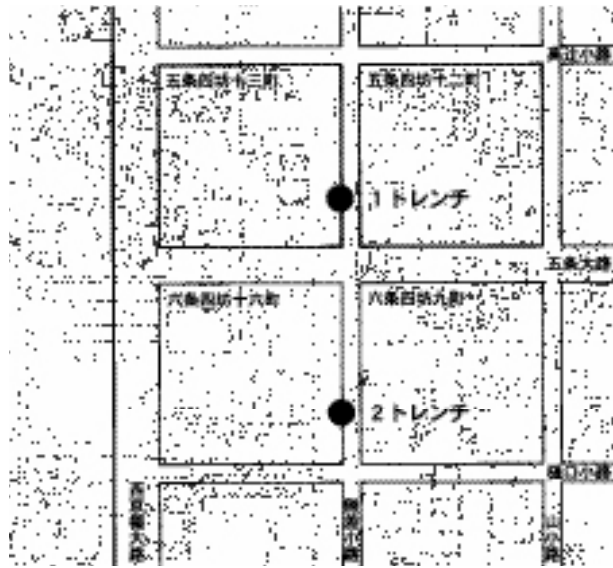


図80 調査位置図 (1 : 5,000)

トレンチは南北 20 ~ 30 m、幅 4 m を設定し調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、1・2トレンチ共に第1層現代整地層（盛土・旧耕作土：1.2 m）、第2層黄灰色砂泥層（約 0.4 m）、第3層暗灰色粘質土層（湿地状の堆積、包含層：約 1 m）、第4層茶灰色砂層（包含層：約 0.1 m）、第5層茶灰色砂礫層（地山）である。遺構は第2層上面で検出した。

1トレンチでは中世の溝状遺構・土壌、2トレンチでは時期不明の自然流路を検出した。また、断割り調査で平安時代前期から中期の包含層を検出したが、遺構は確認できなかった。

遺物 遺物は整理箱で5箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、白磁などがある。平安時代の遺物は土師器杯・皿、須恵器杯、黒色土器甕などがあり、中期以前である。中世の遺物は土師器皿、瓦器鍋、白磁椀などがある。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構は検出できなかったが、少量ながら当該期の遺物包含層を確認できた。遺物は2次堆積によるものと判断でき、平安時代中期まで低湿地あるいは、流路が存在した可能性が高い。

『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1977年度 1978年報告

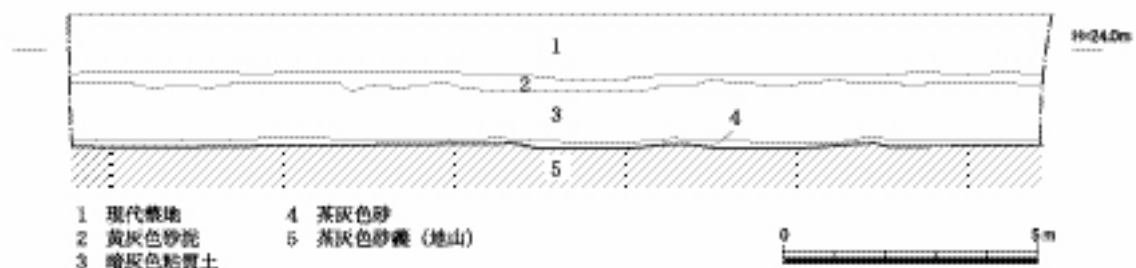


図81 1トレンチ東壁断面図 (1 : 150)

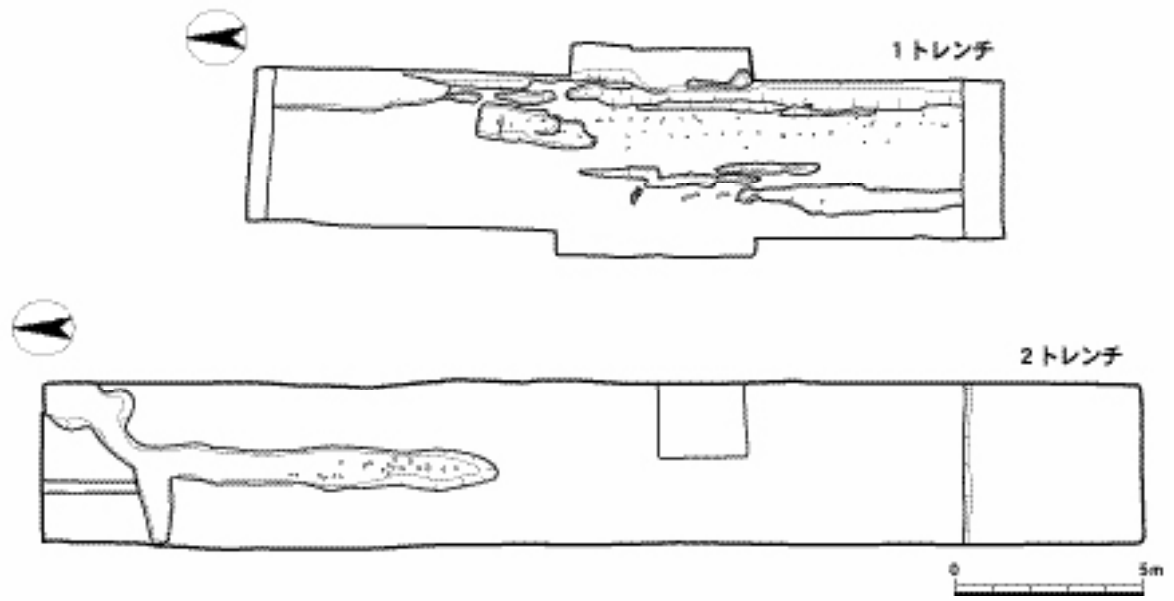


図 82 遺構平面図 (1 : 200)



図 83 1トレンチ全景 (北から)



図 84 2トレンチ全景 (北から)

22 平安京右京六条四坊七町

経過 今回の発掘調査は、マンション新築に伴うもので、当地は平安京右京六条四坊七町の西部および西京極遺跡にあたる。遺跡は桂川左岸自然堤防上に位置し、北から南に下がる段丘上に立地する。西京極遺跡の1回目の調査である。

調査地内に幅2mの調査区を、最北部に逆L字形トレンチ、北側に南北トレンチ（北トレンチ）、中央から南側に2本の南北トレンチ（南トレンチ）、南部に東西トレンチを設定して調査を実施した。北トレンチ、南トレンチ東側、南部東西トレンチで遺構を検出し、北トレンチ北部と南トレンチ東側南部では遺構が密集するが、他の場所は希薄であることがわかった。このため、南トレンチ南部で拡張区を設定して調査を行った。遺構面で平面実測・写真撮影を行い、最後に部分的に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（1.3 m）、第2層（旧耕土：0.1 m）、第3層灰色粘土層（床土：0.4 m）、第4層茶灰色粘質土層（約0.2 m）、第5層黄灰褐色粘質土層（地山）である。第5層上面で遺構（弥生時代以降）を検出した。

検出した遺構には、土壌、溝、柱穴、流路などがある。時期は弥生時代から近世に至る。

拡張区では、幅9.5 m以上、深さ1.1 mの流路を検出し、北から南に流れる。埋土は茶褐色粘土と青灰色粘土層の互層で、各層に弥生時代の遺物を含む。

他の地区の遺構については性格が不明である。

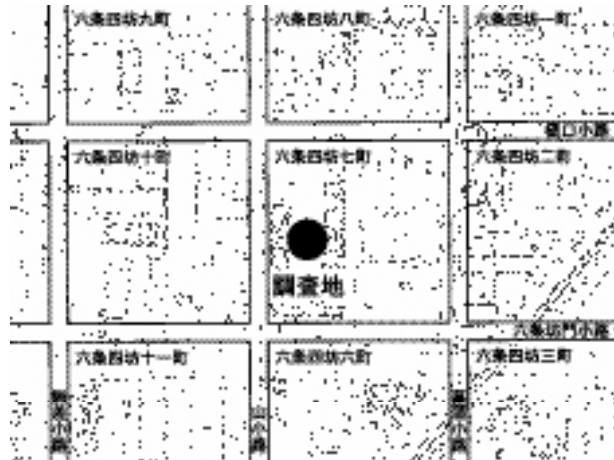


図85 調査位置図（1：5,000）

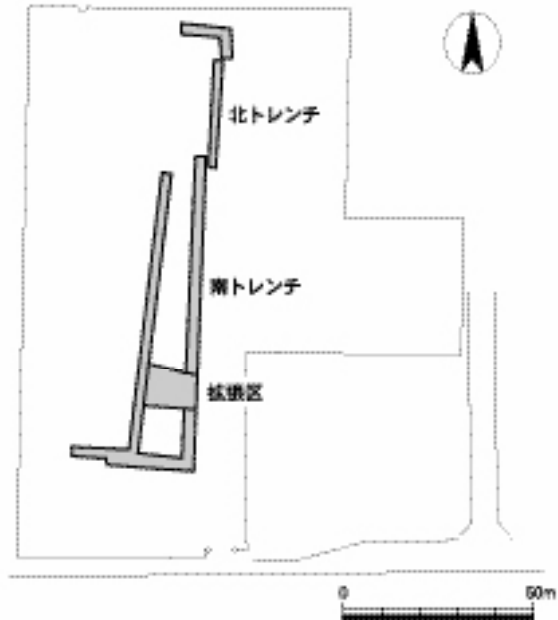


図86 調査区配置図（1：2,000）

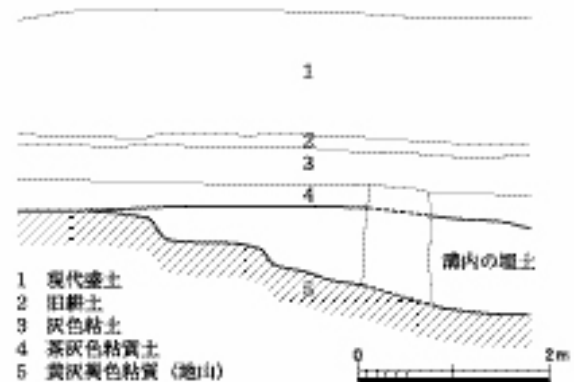


図87 南トレンチ拡張区南壁断面図（1：80）

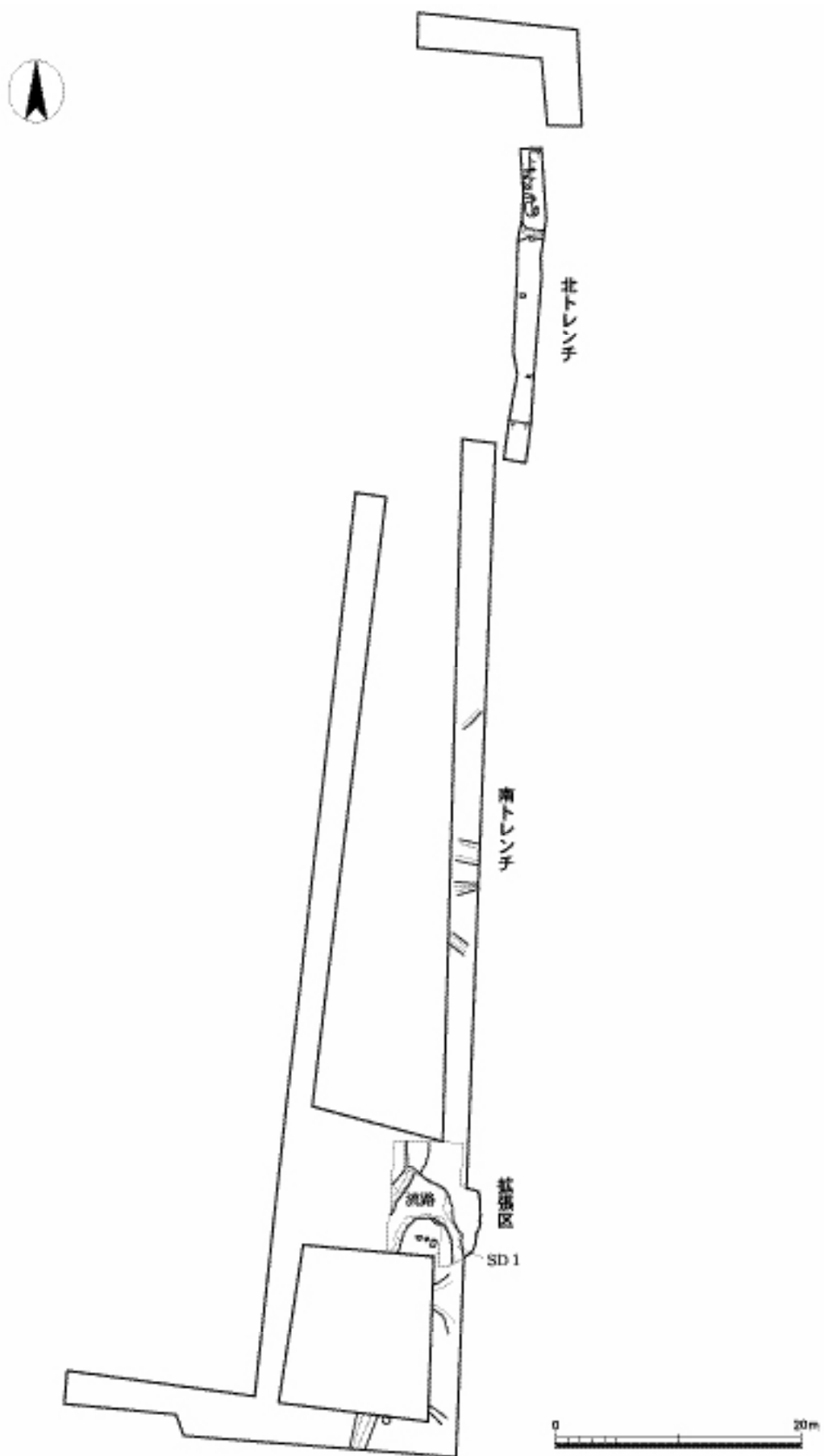


図 88 調査区平面図 (1 : 500)

遺物 遺物は整理箱で24箱出土した。遺物の種類には、弥生土器壺・甕・鉢・高杯、石器類などがある。弥生土器の時期は、弥生第Ⅱ様式～第Ⅳ様式である。

小結 今回の調査は、西京極遺跡内で初めての調査で、弥生時代中期の遺構を検出した。これによって当遺跡の内容と変遷を知る上で貴重な資料となった。当遺跡周辺には、西院月双町遺跡・山ノ内遺跡などの弥生時代から古墳時代の遺跡が分布し、京都盆地中央部の集落分布を復元する上で重要である。



図 89 南トレンチ拡張区全景（北から）

23 平安京右京七条一・二坊、西市跡（図版7～10）

経過 今回の発掘調査は、七条通市電撤去後の上下水道管設置に伴うもので、当地は平安京右京七条一・二坊、西市跡にあたるため、調査を実施した。調査地は、七条一坊十三町・西市外町（No.6トレンチ）、七条二坊四町・西市（No.4・5トレンチ）、五町・西市（No.2・3トレンチ）、十二町・西市外町（No.0・1トレンチ）にあたる。

調査区は道路中央部に、長さ約10m、幅約5mの長方形のトレンチを6箇所（No.1～6）設定した。

No.1トレンチの西側に、長さ約45m、幅6～7mの長方形のトレンチNo.0トレンチを設定し、同様に調査を実施した。また、発掘調査中の立会調査でNo.0トレンチ西側で井戸SE20を検出したため、発掘調査に切り替え、調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、各トレンチによって異なるが、最も残存状況の良かったNo.0トレンチでは、アスファルト・現代整地層（0.5m）、第1層旧耕土・床土層（0.25m）、第2層灰黒色土層・黒灰色シルト層（近世以降包含層：0.2m）、第3層黒灰色泥土層（中世・近世包含層：0.15m）、第4層暗灰黒色土層、第5層灰色砂泥・暗灰色泥土の互層（地山）である。第3層上面で第1面、第5層上面で第2面の遺構を検出した。

No.0トレンチ 第1面では、掘立柱建物、柱穴、集石、柵、土壇、井戸などを検出した。A区・C区全域で柱穴、集石を多数検出した。A区では、建物としてまとまらなかった。C区では西部



図90 調査位置図（1：5,000）

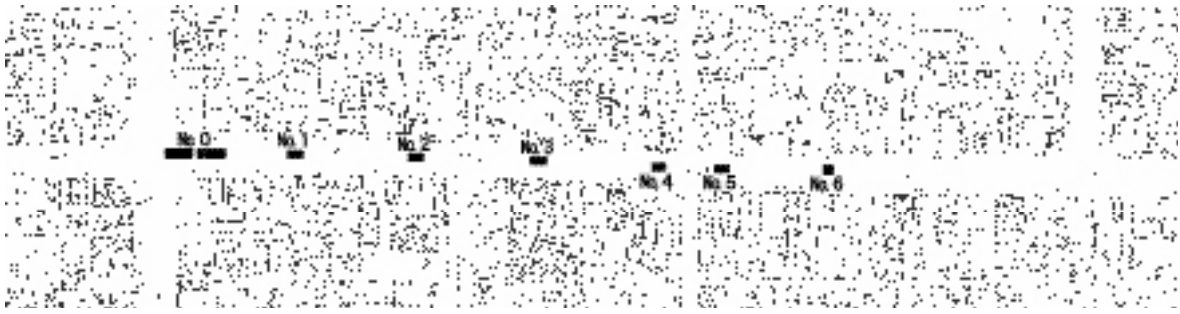


図 91 調査区配置図 (1 : 5,000)

で東西1間以上×南北1間以上、中央部北側で東西2間×南北2間以上の南北棟、南側で東西2間×南北1間以上の南北棟、東部で東西2間以上×南北2間以上の南北棟の掘立柱建物を検出した。柱穴掘形は0.2～0.3 m程度で底に石を据えるものもある。他の柱穴は建物としてまとまらない。C区中央部で南北方向の柵を検出した。5間以上で南北ともに調査区外に続く。柱間は0.9～1 mである。土壌は全域で散在して検出した。規模・形状ともに多様である。井戸はA区北東部、B区北東部で検出した。A区のもは掘形方形で一辺0.9 m以上で中央に径0.3 mの曲物を据える。B区SE 4は掘形楕円形で推定一辺1.9 m以上で、一辺0.35 mの方形縦板組で底部中央に一辺0.2 mの升を据える。遺構の時期は鎌倉時代から室町時代に属する。

第2面では柱穴、集石、土壌、井戸、土器溜、溝などを検出した。A区全域で柱穴、集石を多数検出したが、建物としてまとまらなかった。A区全域・C区西側では、土壌を散在した状態で検出した。規模・形状ともに多様である。C区中央部南辺で井戸SE 3を検出した。SE 3は掘形径約2 m、井戸枠は下部(A)が一辺0.75 m、深さ1 mの方形横棧縦板組で、井戸枠各角に板を乗せ、その上部に径0.9 m、深さ1.2 m以上の桶状井戸枠を据える(B)。底部に一辺0.5 m、深さ0.25 mの升を据える。SE 3 Aから冨壽神寶16枚・土器類・木器類、Bからは貞観永寶3枚・寛平大寶1枚・土器類・木器類が出土した。C区西部で検出したSK25は、SD12の北肩から北側に広がる土器溜で、南北幅約2 m、東西幅約6 mである。多量の土器類が出土した。C区全域で溝を検出した。SD13は東西溝で幅約0.5 mで、北方は不明である。南側一部は板で護岸を施し、西端は石・板で留める。この溝はSK25より下層で検出し、SD 5・12などよりも一時期古い。SD 5は南北溝で幅約0.4 m、深さ0.1 mで調査区外に続く。両側は板を横に使い護岸を施す。

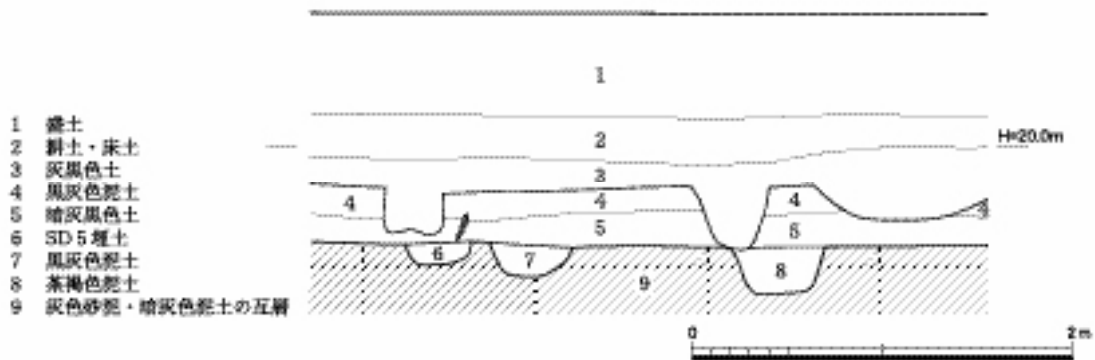


図 92 No.2 トレンチ北壁断面図 (1 : 40)

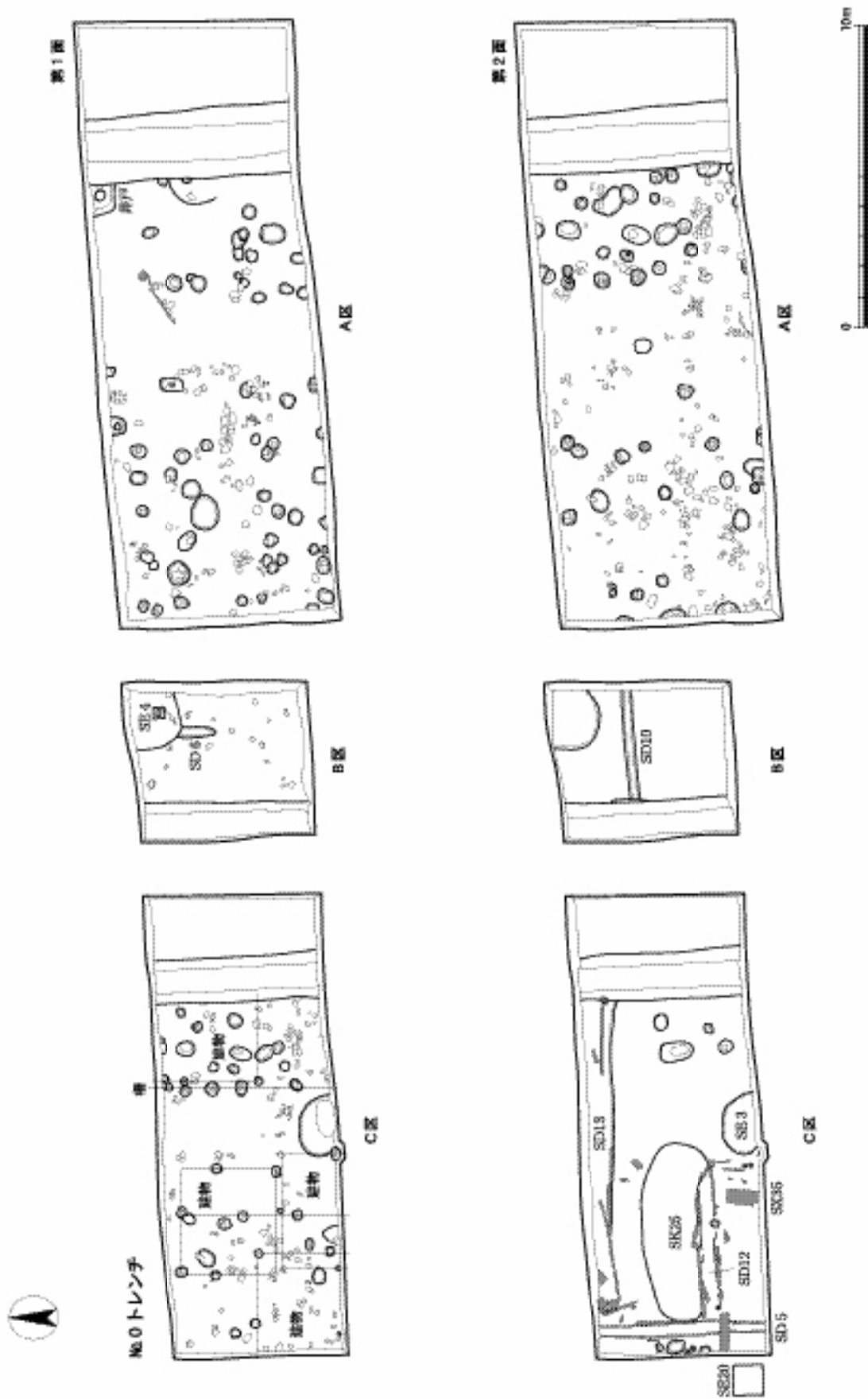


図 93 No.0 トレンチ遺構平面図 (1 : 200)

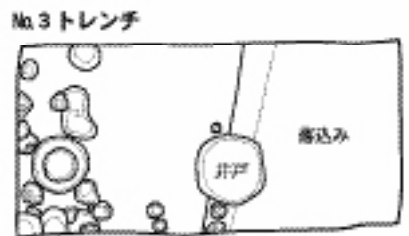
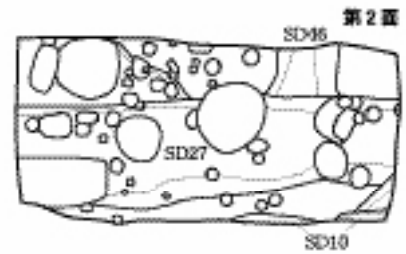
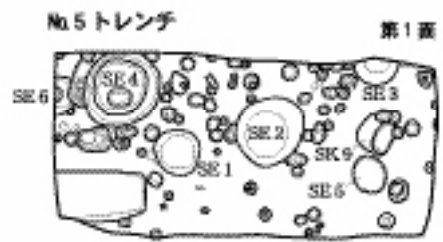
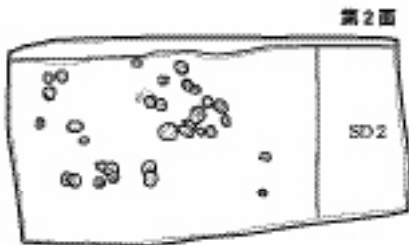
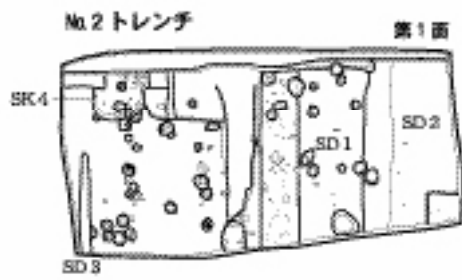
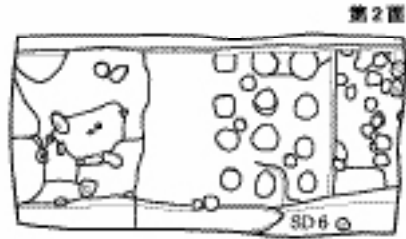
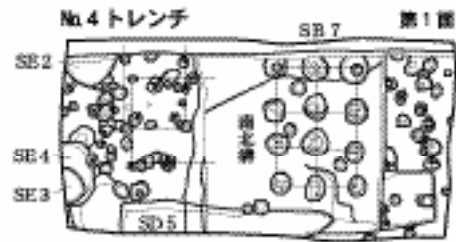
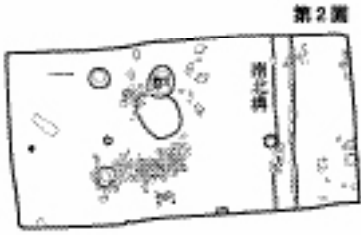
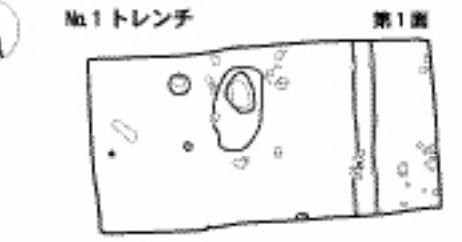


図 94 遺構平面図 (1 : 200)

SD12は東西溝で幅約0.4m、深さ0.2mで、両側は板を横に使い護岸を施す。西端はSD5東肩で止まり、東端は斜めに板をあてる。C区南西部で検出したSX35は、SD12の南肩に接して長方形の板を敷き、その上に土師器甕・杯、須恵器瓶子、富壽神寶5枚を配した遺構である。遺構の時期は平安時代前期に属する。

No.0トレンチ南西側の立会調査でSE20を検出した。井戸の掘形は不明で、井戸枠は一辺0.9mの方形横棧縦板組である。隆平永寶1枚・承和昌寶33枚・長平永寶16枚・鏡益神寶1枚、土器類、木器類が出土した。SE20も平安時代前期に属する。

No.1トレンチ 第1面では、柱穴、土壌、溝などを検出した。全域で柱穴を散在した状態で検出した。建物としてはまとまらない。土壌は少数で、全域に散在した状態で検出し、規模・形状ともに多様である。時期は鎌倉時代から室町時代に属する。

第2面では、南北溝、炉跡、土壌、集石などを検出した。調査区東側で南北溝を検出した。幅約0.6m、深さ0.3mで南北端は調査区外に続く。東側は縦板で護岸を施し、西側は石組み護岸が一部残る。調査区中央で炉跡を検出した。方形石組みは東西2.5m、南北1.2mに復元でき、石組み内には厚い灰層が堆積し、石組み西側には径0.5m、深さ0.25mのピットがあり、焚口と推定できる。また、周辺からは鉾滓が付着した土師器甕・杯・皿などが出土し、金属生産の跡と想定できる。土壌は少数で、調査区北側で散在した状態で検出した。規模・形状ともに多様である。時期は平安時代前期に属する。

No.2トレンチ 第1面では、柱穴、土壌、溝などを検出した。全域で柱穴を検出した。柱穴底に石を据えるものも見られる。建物としてはまとまらない。全域で土壌を少数散在した状態で検出し、規模・形状ともに多様である。調査区北西部で検出したSK4は、楕円形で1.4m×1.2mで、深さ0.4mである。調査区東側・中央・西辺で南北溝を検出した。SD2は第2面で検出した溝で、この時期まで残存する。SD1は浅い南北溝で、幅約1mと推定でき、杭を全面に打ち込む。SD3は南北溝で、幅0.15m、深さ0.05mで、2.5m確認した。時期は中世から近世に属する。

第2面では、柱穴、溝などを検出した。調査区北東部で柱穴を多数検出した。柱穴底に石を据えるものも見られる。建物としてはまとまらない。調査区東部でSD2を検出した。東側に下がる南北溝で、幅2.5mまで確認したが、調査区外に続き、深さは0.2mである。時期は鎌倉時代に属する。

No.3トレンチ 遺構面は1面で、柱穴、土壌、井戸、落込みなどを検出した。調査区東部で柱穴を検出した。柱穴底に石を据えるものも見られる。建物としてはまとまらない。調査区東部で土壌を散在した状態で検出し、規模・形状ともに多様である。調査区南東部で井戸を検出した。掘形は径0.75m、深さ約0.4m、底部に径0.45mの凹みがある。井戸枠は確認できない。調査区東部で落込みを検出した。東側に下がり、幅2.5mまで確認したが、調査区外に続き、深さは0.2mである。時期はすべて近世に属する。

No.4トレンチ 第1面では、掘立柱建物、柱穴、井戸、溝、土壌などを検出した。調査区東辺部・西部で多数の柱穴を検出した。西部では南北1間×東西2間以上の東西棟、東西1間×南北3間

以上の南北棟の掘立柱建物を検出した。柱穴掘形は径 0.2 ～ 0.3 m 程度で底に石を据えるものもある。他の柱穴は建物としてはまとまらない。調査区中央部の近世の南北溝の底部で、南北 3 間 × 東西 2 間の総柱南北棟 SB 7 を検出した。掘形径約 0.5 m で、底に石を据えるものもある。調査区西辺で井戸を 3 基検出した。SE 2 は円形で径 1.3 m である。SE 4 は円形で径 1.7 m である。SE 3 は円形で径 1 m で、SE 4 を切る。いずれも井戸枠は確認できない。調査区中央・南辺で溝を検出した。中央部の南北溝は、幅 5.2 m、深さ 0.5 m で、南北に続く。断面逆台形で底部は平坦である。SD 5 は SD 6 の残り、西端は止まり、中央部は南北溝によって削平を受ける。調査区全域で土壌を散在した状態で検出し、規模・形状ともに多様である。時期はすべて近世に属する。

第 2 面では、柱穴、土壌、溝などを検出した。調査区東部・西部で柱穴を少数検出した。建物としてはまとまらない。調査区東部で土壌を少数検出した。規模・形状ともに多様である。調査区南辺で検出した東西溝 SD 6 は、幅 0.6 ～ 1.2 m、深さ 0.4 m で、南側は調査区外に続く。時期は中世以降に属する。

No.5 トレンチ 第 1 面では、柱穴、土壌、井戸などを検出した。調査区全域で柱穴を多数検出した。建物としてはまとまらない。調査区全域で土壌を少数検出した。SK 9 のように中に石を据えるものもある。規模・形状ともに多様である。調査区北側で井戸を 6 基検出した。SE 1 は円形で径 0.4 m である。SE 2 は円形で径 1.8 m、深さ 1.4 m である。底部は径 1.1 m で凹む。SE 3 は円形で径 1.2 m、深さ 0.3 m である。SE 4 は円形で径 2 m、深さ 1.6 m である。底部は径 1.4 m で凹む。SE 5 は円形で径 1.1 m、深さ 0.35 m である。底部は径 0.4 m で凹む。SE 6 は円形で径 1.1 m、深さは不明である。底部は径 0.7 m で凹む。いずれも井戸枠は確認できない。時期は中世から近世に属する。

第 2 面では、溝、落込みなどを検出した。調査区中央で東西溝 SD27 を検出した。断面逆台形で幅 2.5 ～ 2.8 m、深さ約 0.3 m で、調査区外東西に続く。底部は平坦である。SD27 に取り付く溝 SD46 を調査区北東部で検出した。調査区南東隅と南辺で落込みを 3 箇所検出した。落込みは SD27 に切られており、それよりも古い。時期は落込みが平安時代以前、溝 SD10 は平安時代前期に属する。

No.6 トレンチ 遺構面は 1 面で、柱穴、土壌、溝などを検出した。調査区中央部から東側全域で柱穴を検出した。建物としてはまとまらない。調査区全域で土壌を検出した。かなり規模が大きく、形状は方形、円形のものなどがある。調査区南部で東西溝 SD 2 を検出した。幅 1.5 m 以上、深さ約 0.3 m で、南側の肩は調査区外である。底部は平坦である。時期は SD 2 が平安時代前期、他の遺構は中世から近世に属する。

遺物 遺物は整理箱にして 256 箱出土した。出土した遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、磁器、銭貨、釘、石製品、金属製品、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。時期は、平安時代から近世までのものがある。平安時代のものでは No.0 トレンチの SE 3・SE20・SK25 が時期的にまとまるので、これを図示した。

SE 3 出土土器類には、土師器杯 (1・6～13)・皿 (2～5)・鉢 (17)・甕 (14～16)、黒色

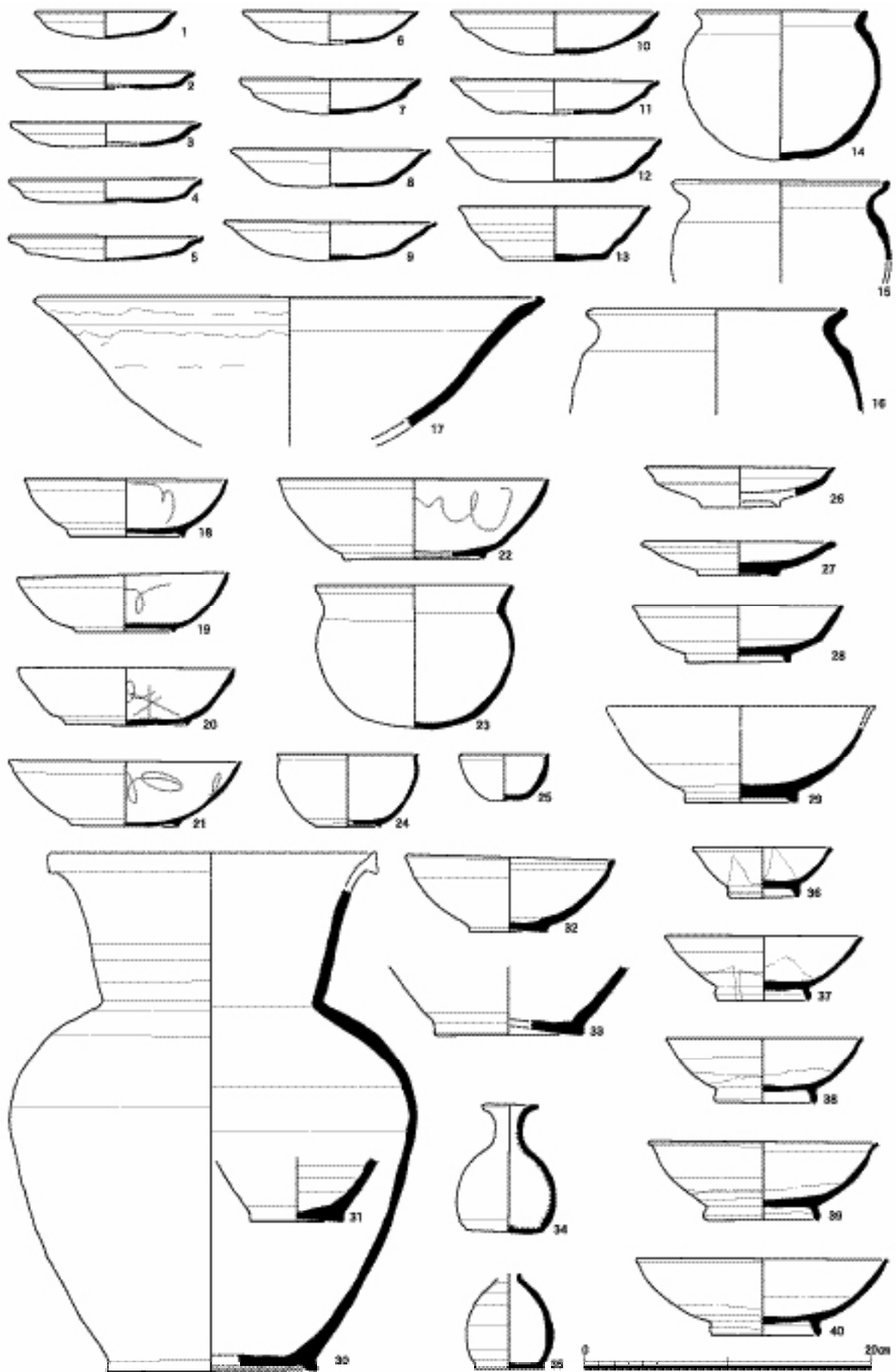


図 95 No.0 トレンチ SE 3 出土遺物実測図 (1 : 4)

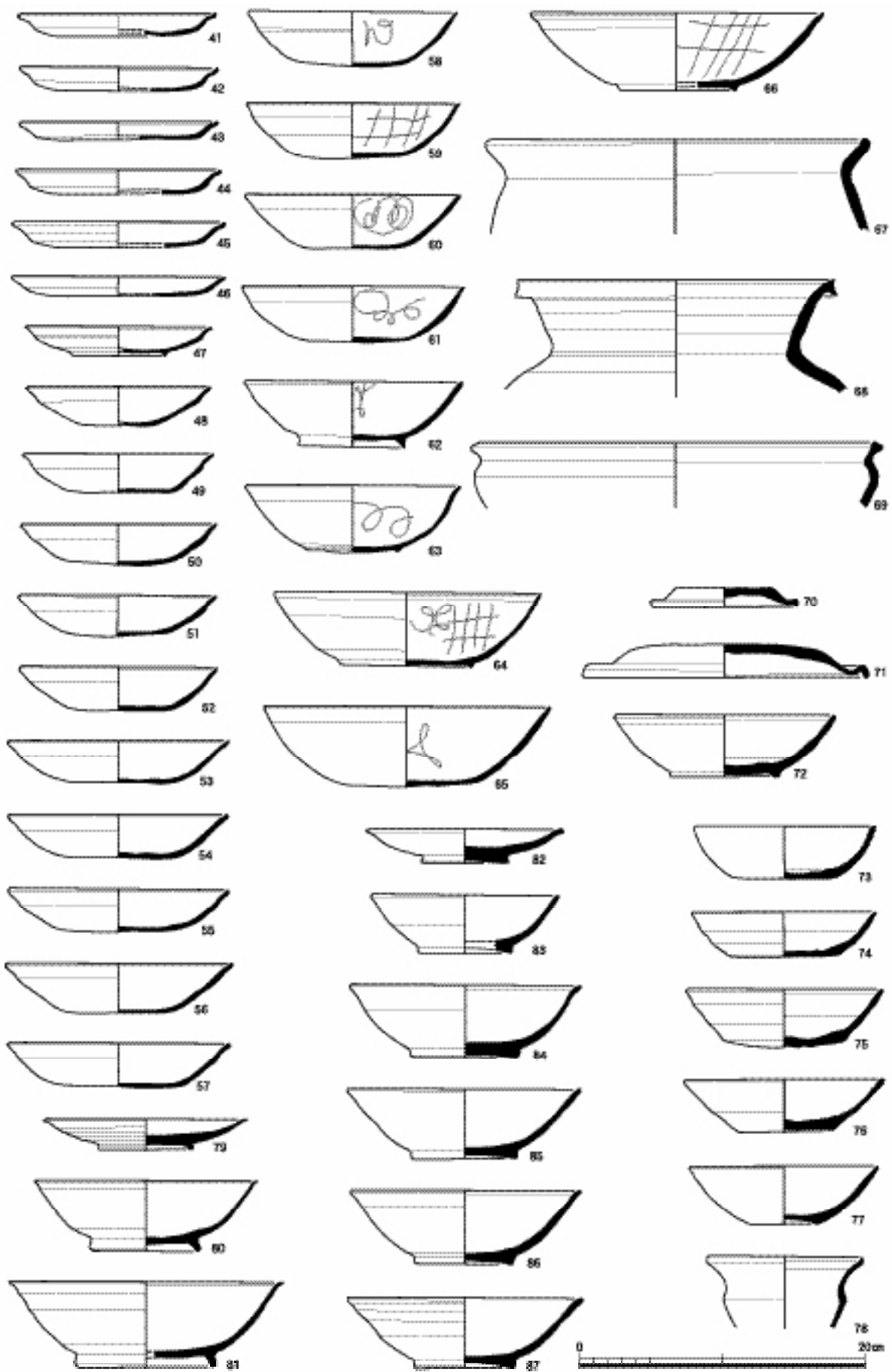


図 96 No.0 トレンチ SE20 出土遺物実測図 (1 : 4)

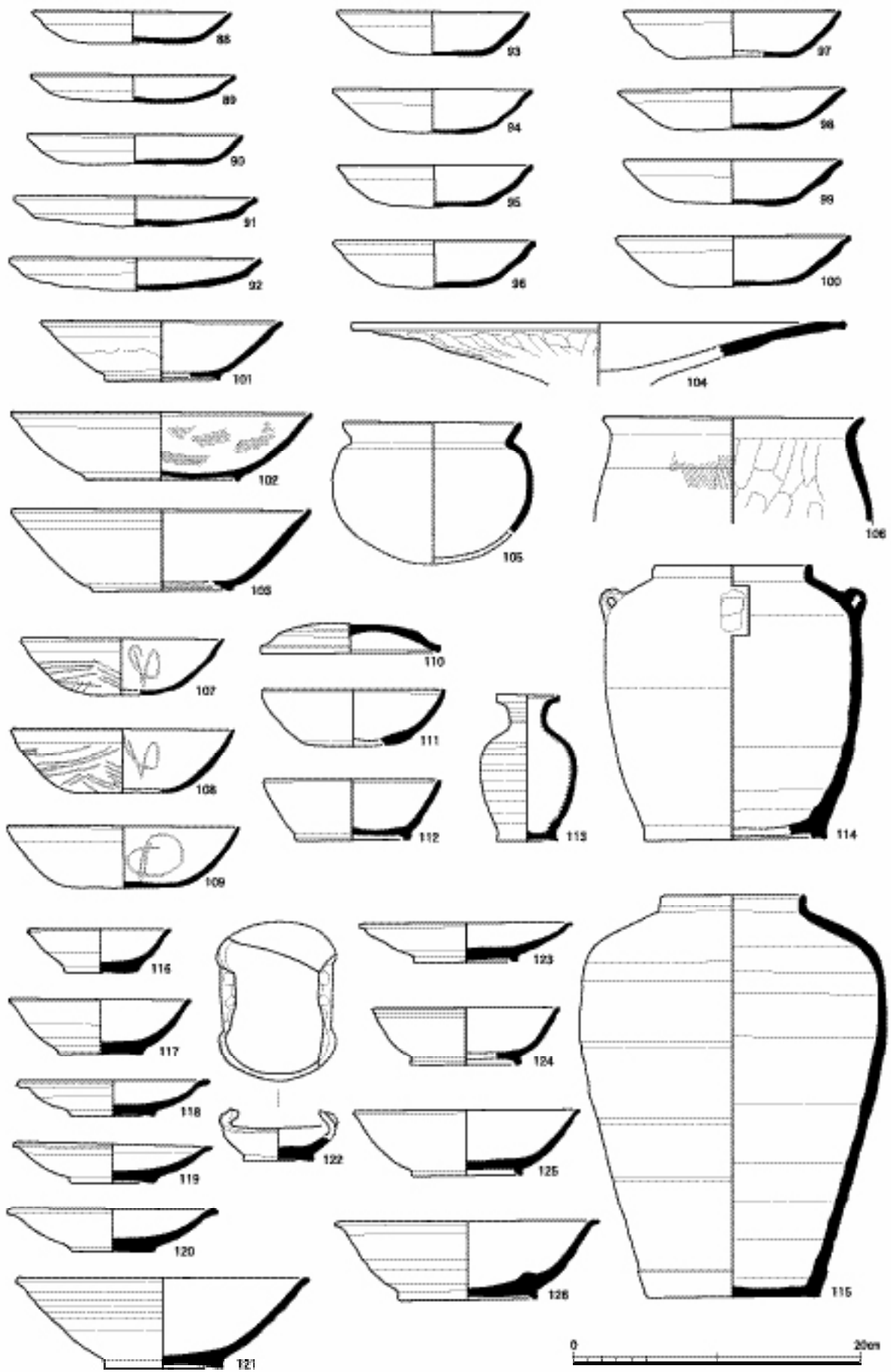


図 97 No.0 トレンチ SX25 出土遺物実測図 (1 : 4)

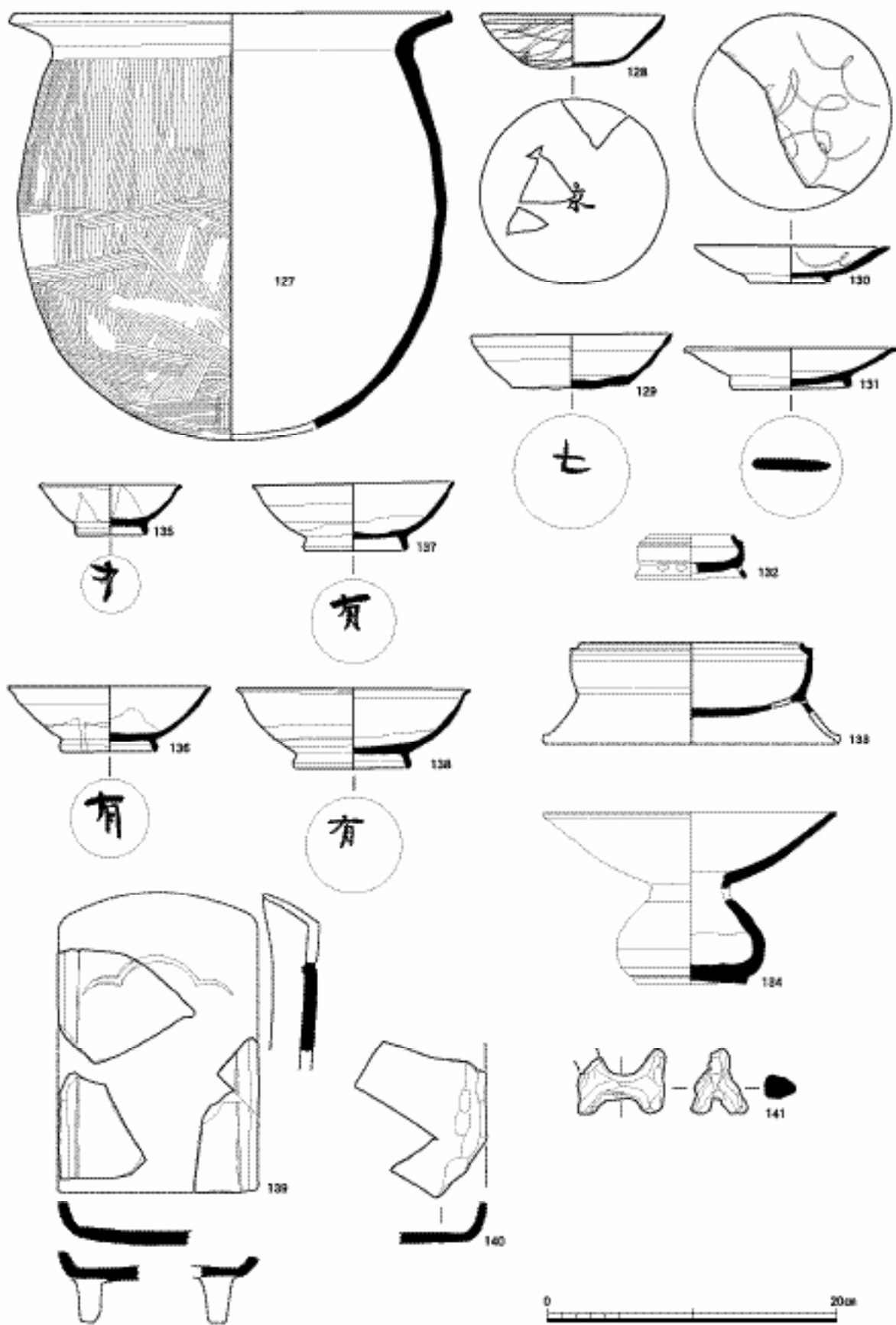


图 98 遺物実測図 (1 : 4)

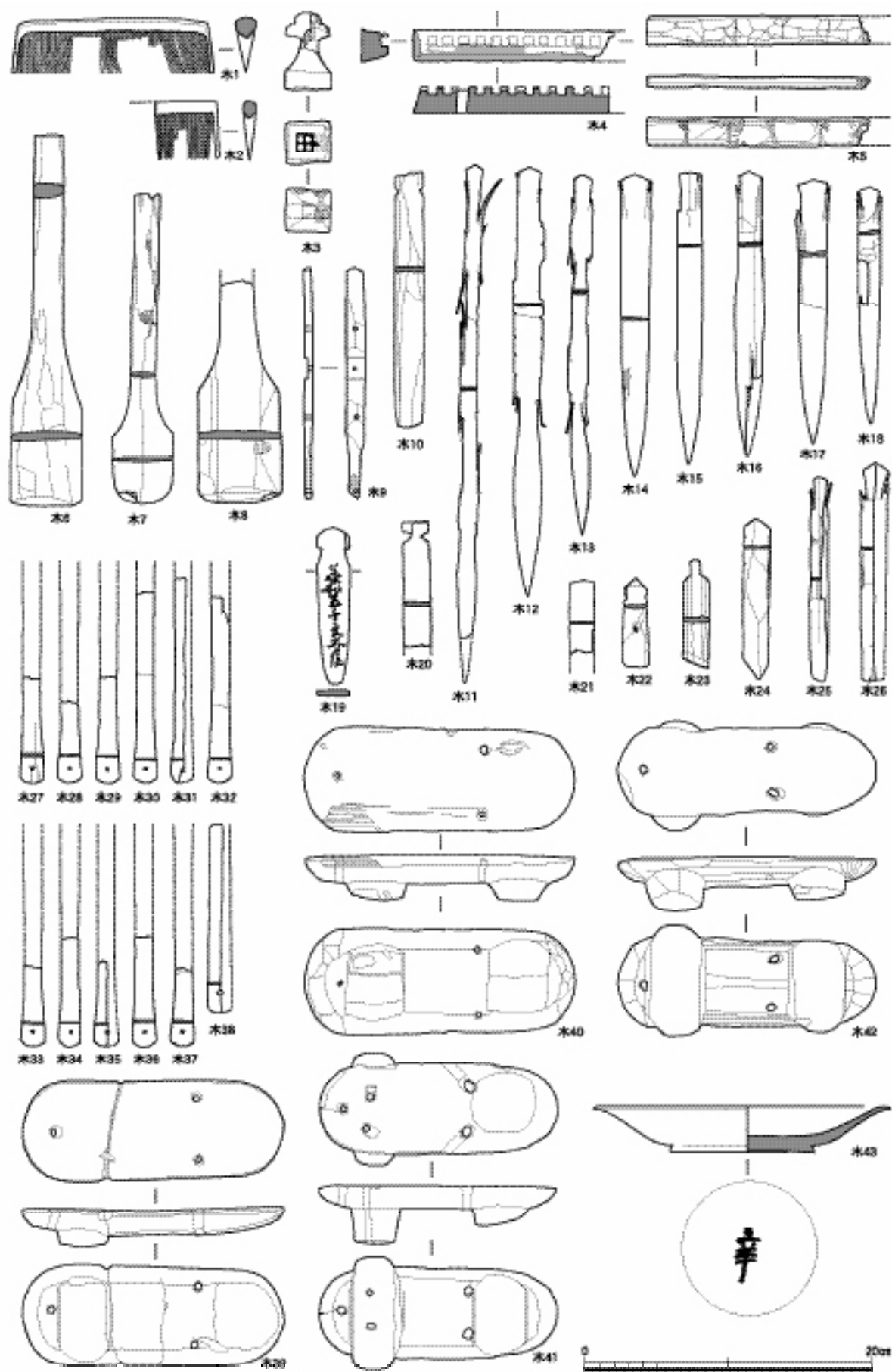


图99 木製品実測图1 (1:4)

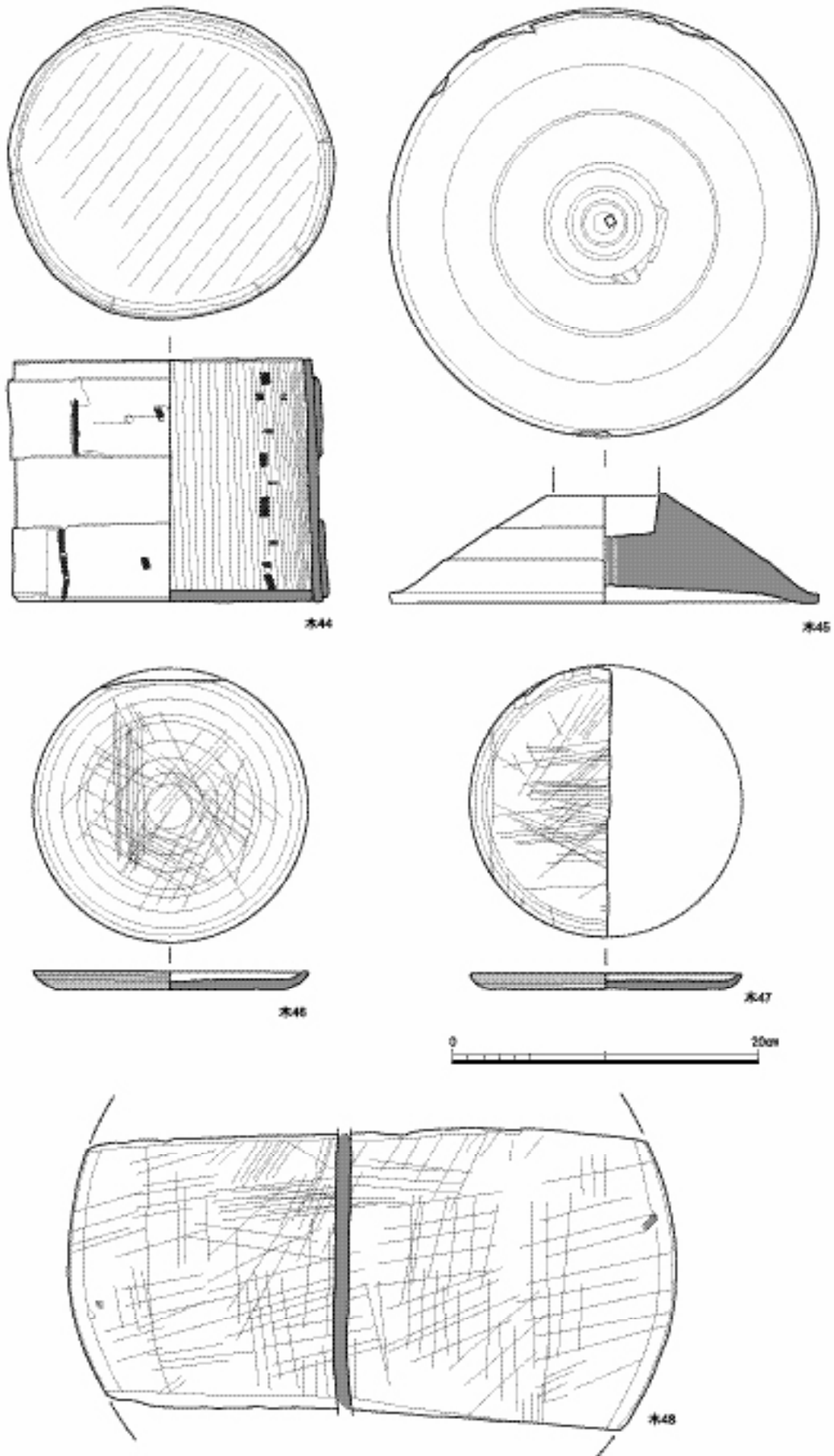


图 100 木製品実測図 2 (1 : 4)

土器 椀 (18～22)・甕 (23)・鉢 (24・25)、
須恵器杯 (32)・鉢 (33)・壺 (30・31)、緑釉
陶器杯 (26～29)・小壺 (35)、灰釉陶器椀 (36
～40)・小壺 (34) などがある。

SE20 出土土器類には、土師器皿 (41～
47)・杯 (48～57)・甕 (67)、黒色土器椀 (58
～66)、須恵器蓋 (70・71)・杯 (72～77)・
鉢 (69・78)・甕 (68)、緑釉陶器皿 (82)・椀 (83
～87)、灰釉陶器皿 (79)・椀 (80・81) など
がある。

SK25 出土土器類には、土師器皿 (88～
92)・杯 (93～100)・椀 (101～103)・高杯
(104)・甕 (105・106)、黒色土器椀 (107～
109)、須恵器蓋 (110)・杯 (111・112)・小壺 (113)・四耳壺 (114)・壺 (115)、緑釉陶器椀 (116・
117・121)・皿 (118～120)・耳皿 (122)、灰釉陶器皿 (123)・椀 (124～126) などがある。

その他の出土土器類には、土師器甕 (127)、黒色土器皿 (130)、墨書土器 (128・129・
131・135～138)、緑釉陶器香炉 (132・133)・唾壺 (134)、須恵器風字硯 (139)・円面硯 (140)、
土馬 (141) などがある。

木製品には、櫛 (木1・2)、物差し (木4・5)、木簡「承和五千文安継」(木19)、木印 (木3)、
皿 (木46・47)、柄杓、しゃもじ (木6～8)、斎串 (木10～18・20～26)、桧扇 (木27～
38) 曲物 (木44)、下駄 (木39～42)、台 (木45)、漆器皿 (木43)、部材 (木9) などがあり、
櫛・物差し・木印はNo.0 トレンチ SE 3、木簡はNo.0 トレンチ SE20 から出土した。

石製品には、罽帯 (石1)、硯 (石2) などがある。

金属製品には、釘 (金1～6)、飾金具 (金7～11)、銅鐘などがある。

小結 今回の調査では、平安時代から近世の遺構・遺物を多数検出し、当地域の変遷を知る上
で貴重な資料となった。調査範囲が狭く、中近世の遺構が深くまで及んでいるため、平安時代の
遺構の残存状況は全体的に良くないが、No.0 トレンチでは、時期のわかるまとまった土器群が出
土し、貴重な資料を得ることができた。また、No.5 トレンチ SD27、No.6 トレンチ SD 2 はこれま
での平安京の復元から、七条大路北側溝と推定できる。このことから平安京復元の一助となった。

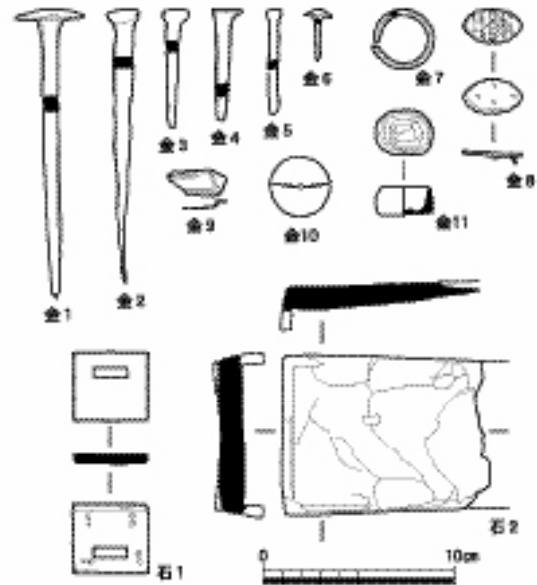


図101 金属製品・石製品実測図 (1:4)

24 平安京右京九条一坊、西寺跡1

経過 今回の発掘調査は、児童公園内ちびっこプール建設工事に伴うもので、当地は西寺東僧房推定地の南部にあたるため、調査を実施した。調査は西寺跡10次調査となる。

西寺跡の発掘調査は大正8年(1919)に講堂跡の土壇で実施され、大正10年(1921)に土壇周辺が国の史跡に指定された。本格的な調査は昭和34年(1959)に京都府教育庁文化財保護課が初めて実施し、東僧坊の礎石や基壇を検出している。

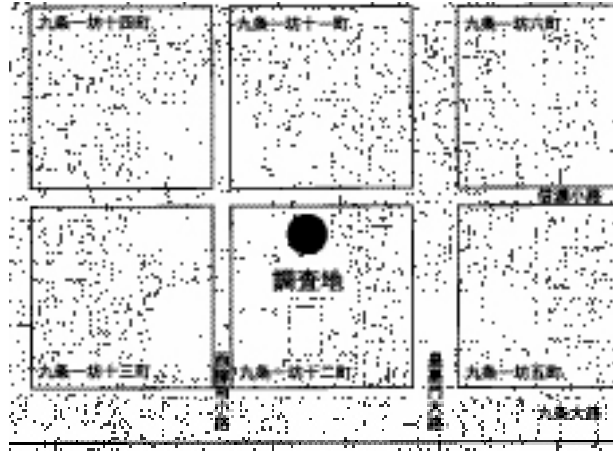


図102 調査位置図(1:5,000)

調査地内に東西20m、南北6mの調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.1m)、第2層バラス層(約0.1m)、第3層黒灰色土層(耕作土:約0.1m)、第4層黄褐色混礫粘土層(地山)である。第4層西部では焼土・灰を含む層が部分的に堆積する。遺構は第4層上面で検出した。

検出した遺構は、南北溝、礎石据付跡、土壇、柱穴などである。

中央部では、第4層が東西幅約14mで南北方向に高く残存し、既往の調査から南北基壇と推定した。基壇積み土は全く確認できず、削平を受けたと考えられる。上面では礎石据付跡3箇所などを検出した。礎石据付跡は径1~1.5

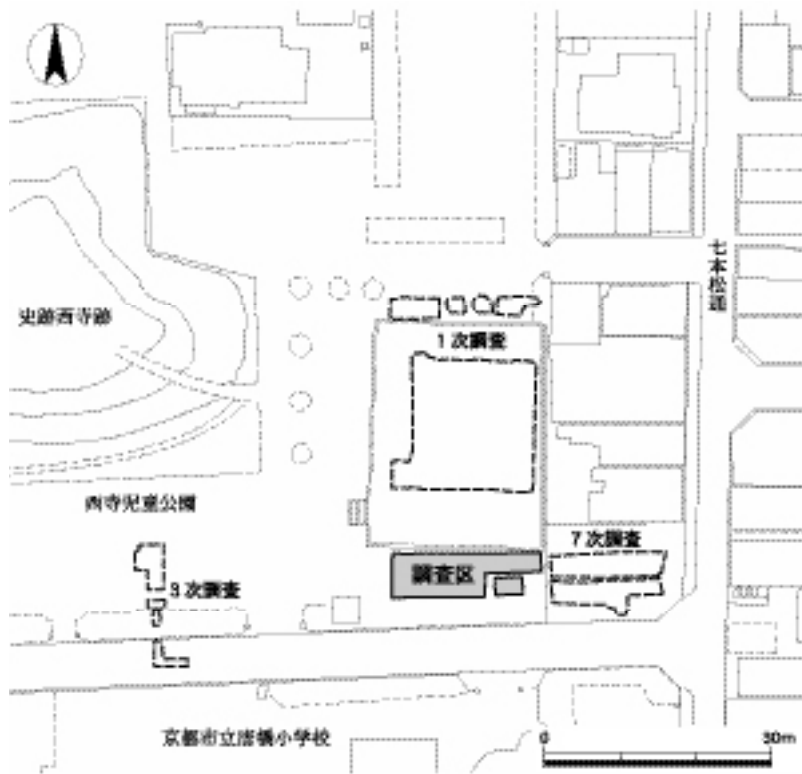


図103 調査区配置図(1:1,000)

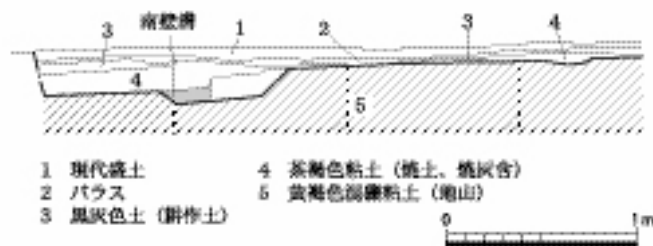


図104 北壁断面図(1:40)

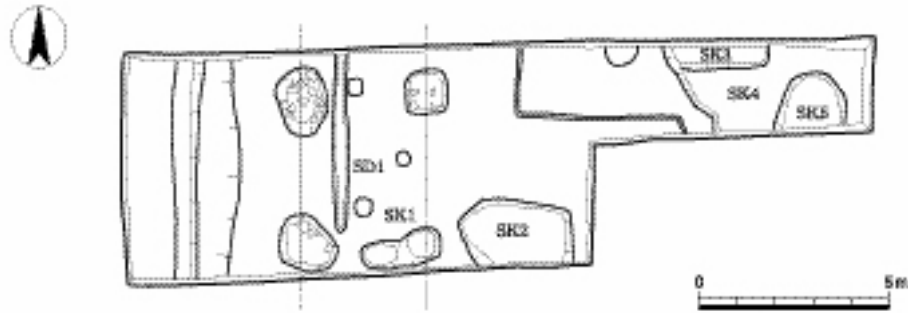


図 105 遺構平面図 (1 : 200)

mで内部に根石を据える。桁行 3.72 mで、庇の出 3.42 mである。側柱礎石据付跡から西側約 3 mで南北溝 (幅 0.5 m、深さ 0.2 m) を検出し、雨落溝と推定した。東側部については攪乱が激しく残存状況が悪かったが、瓦片・少量の焼灰の堆積が確認でき、基壇東辺と推定した。

遺物 遺物は整理箱で 46 箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類、緑釉平瓦、銭貨、凝灰岩片などがある。大半は瓦類で、西側雨落溝などから多量に出土した。時期は、平安時代のもものが主である。

小結 今回の調査では東部で攪乱が激しく遺構の残存状況は悪かったが、東僧房の基壇幅を知ることができた。既往の調査と考え合わせ母屋が 4.2 m、庇の出 3.42 m、雨落溝まで 2.4 mと推定できる。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978 年報告

25 平安京右京九条一坊、西寺跡 2 (図版 11)

経過 今回の発掘調査は、京都市立唐橋小学校校舎建設に伴うもので、当地は西寺・唐橋遺跡推定地域内で、西寺南大門推定地東側にあたるため、調査を実施した。調査は西寺跡 11 次調査となる。

南大門東側築地延長上に A 区を設定し、部分的に土層を確認した後に、その北東側に B・C 区、A 区の東側に D 区を順次設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層暗灰褐色砂泥層（盛土：0.3 m）、第 2 層灰褐色泥砂層（耕作土：0.2 m）、第 3 層灰褐色泥砂層（包含層：0.15 m）、第 4 層暗茶褐色砂泥層（0.1 m）、第 5 層暗茶褐色砂泥層（地山）、第 6 層灰褐色砂礫層（地山）である。第 3 層上面で平安時代の遺構を検出した。遺構面の標高は 19.36 m である。

第 1 面で検出した遺構には、溝、築地、柱穴群、土壇などがある。

A 区で検出した東西溝 SD 6 は幅 1.6 m、深さ 0.3 m で、埋土は 2 層に分かれ、上層は淡褐色砂泥で焼土・瓦を多量に含み、下層は青灰色泥砂である。溝の南側は灰褐色粘質土で堅く締まっており、築地と推定できる。同様の土は D 区南側でも確認し、東西築地と推定できる。B 区でも東西・南北方向の小溝を検出した。

柱穴群、土壇は全調査区で検出し、特に B 区で多く見られるが、掘立柱建物としてまとまらない。

検出した遺構の時期は、伴出した遺物から、それぞれ平安時代と推定できる。

遺物 遺物は整理箱で 10 箱

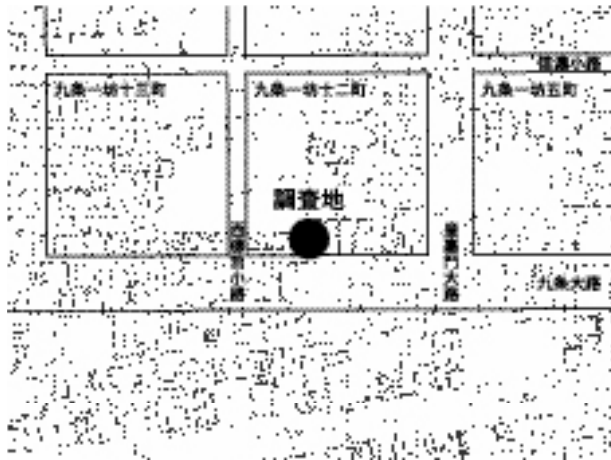


図 106 調査位置図 (1 : 5,000)

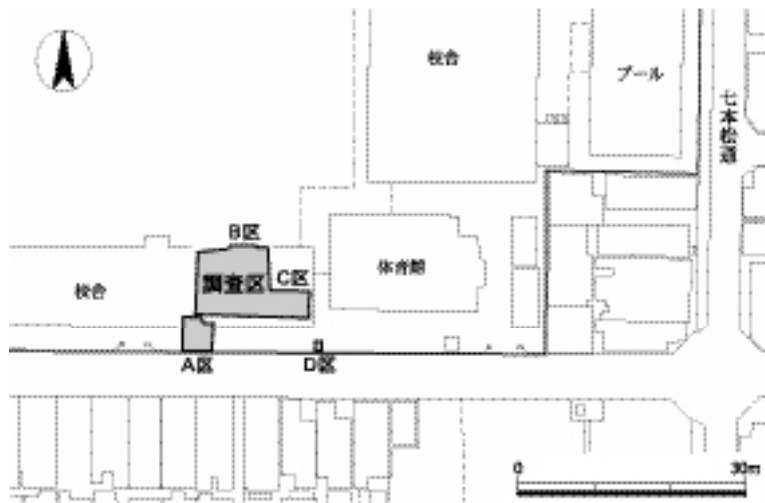


図 107 調査区配置図 (1 : 1,000)

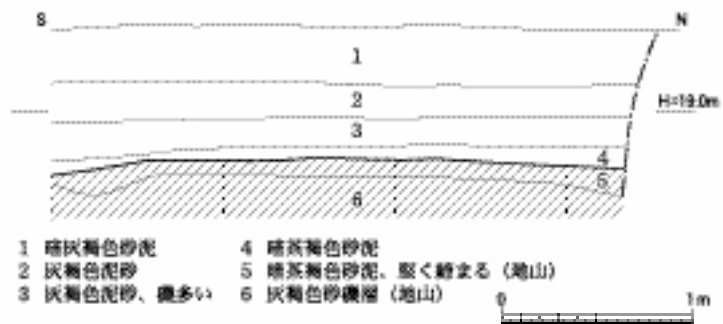


図 108 B 区西壁断面図 (1 : 40)

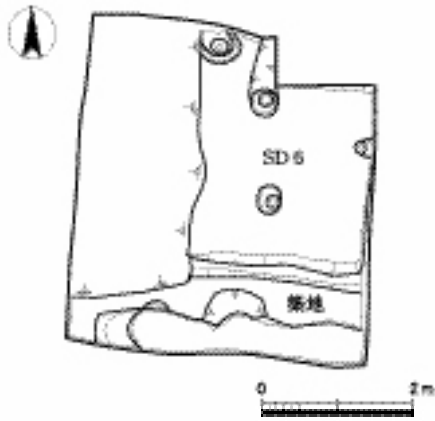


図 109 A区遺構平面図（1：100）

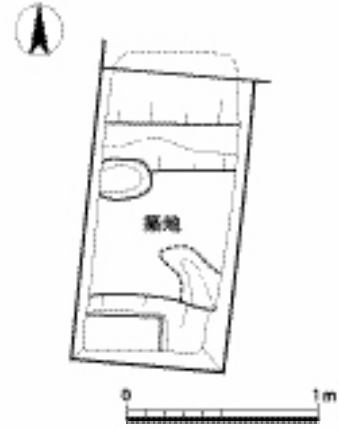


図 110 D区遺構平面図（1：40）

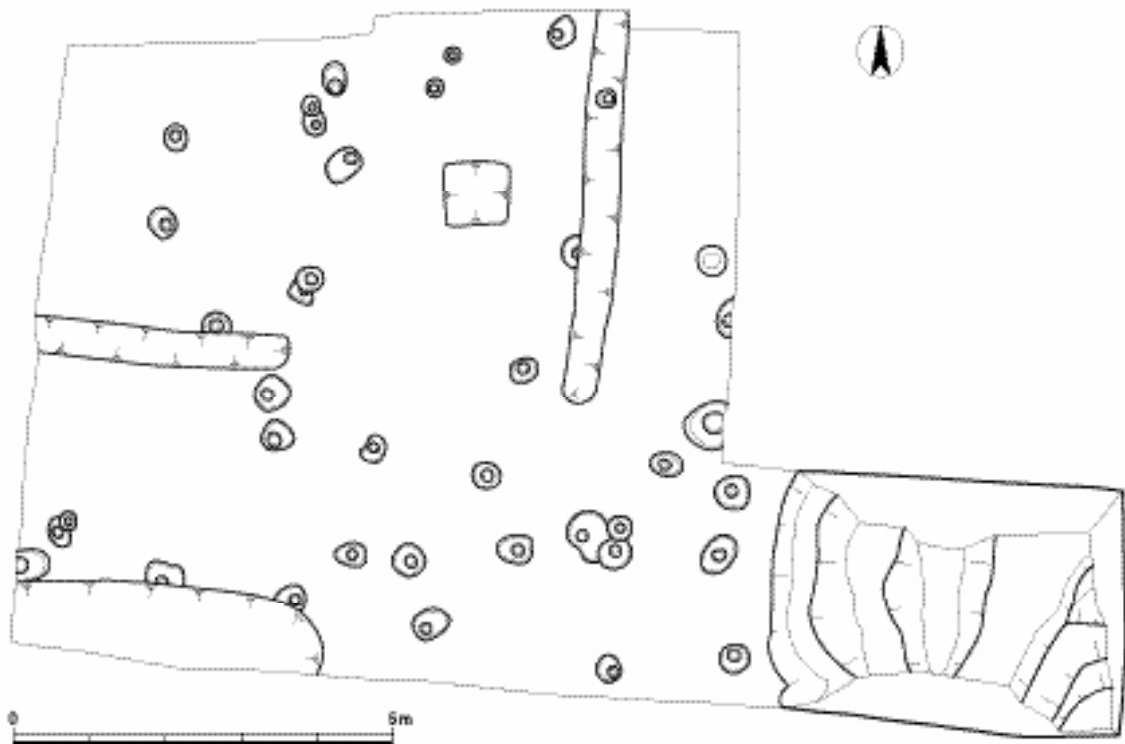


図 111 B・C区遺構平面図（1：100）

出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、銭貨、凝灰岩片などがある。

遺物の大半は瓦類で、SD 6 からまとまって出土した他、溝・土壇などからも出土した。C区土壇からは平安時代以前の土師器甕・高杯などが出土した。

小結 今回の調査では、A区・D区で東西方向の築地と北側で溝を検出した。これらの遺構は、これまでの西寺伽藍推定復元から、南大門に取り付く東側築地（南限築地）と内溝と推定できる。南限築地は初めての検出であり、伽藍の復元の一助となろう。築地内では多数の遺構を検出したが、性格は不明である。

26 平安京右京九条一坊、西寺跡3

経過 今回の調査は、東寺西門通内のガス管理設工事および道路改修工事に伴うもので、当地は西寺伽藍北辺部にあたるため、立会調査を実施し、遺構検出箇所では発掘調査を実施した。調査は西寺跡12次調査となる。

調査区域は、道路北側と南側である。八条中学校西側の南北道路との交差点（A地点）では、3.5 m四方の調査区を設定した。

遺構 交差点部（A地点）での基本層序は、第1層現代層（アスファルト・旧耕土：0.5 m）、第2層遺物包含層（0.6～1 m）、以下井戸埋土（約1.2 m）、褐色砂礫層の地山である。遺構の標高面は18.8 mである。

検出した遺構は、井戸で、掘形は方形（一辺3 m、深さ1 m）である。方位は真南北である。井戸枠は方2.4 mの蒸籠組で、2段分残存していた。各材は、厚さ0.9 m、幅0.3 mで両端を納組みする。埋土は青灰色粘質土・茶褐色砂礫で、遺物が多数出土した。上部は井戸枠を撤去した際に流れ込んだと推定できる。

交差点から約60 m西（B地点）で、6箇所の礎石据付跡を検出した。掘形は円形で（一辺0.3 m以上）内部に根石を据える。東西間隔は約2.7 mで、南北間隔は約5.4 mである。

交差点から約155 m西（C地点）で、東西方向の凝灰岩列を2列検出した。長さは北側が2.9 m、南側が3.3 m残存し、南北間隔は0.4 mである。

検出した遺構の時期は、伴出した遺物から、それぞれ平安時代と推定できる。

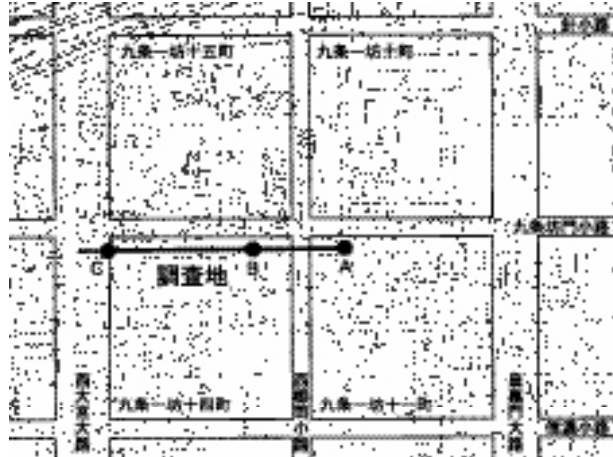


図112 調査位置図（1：5,000）

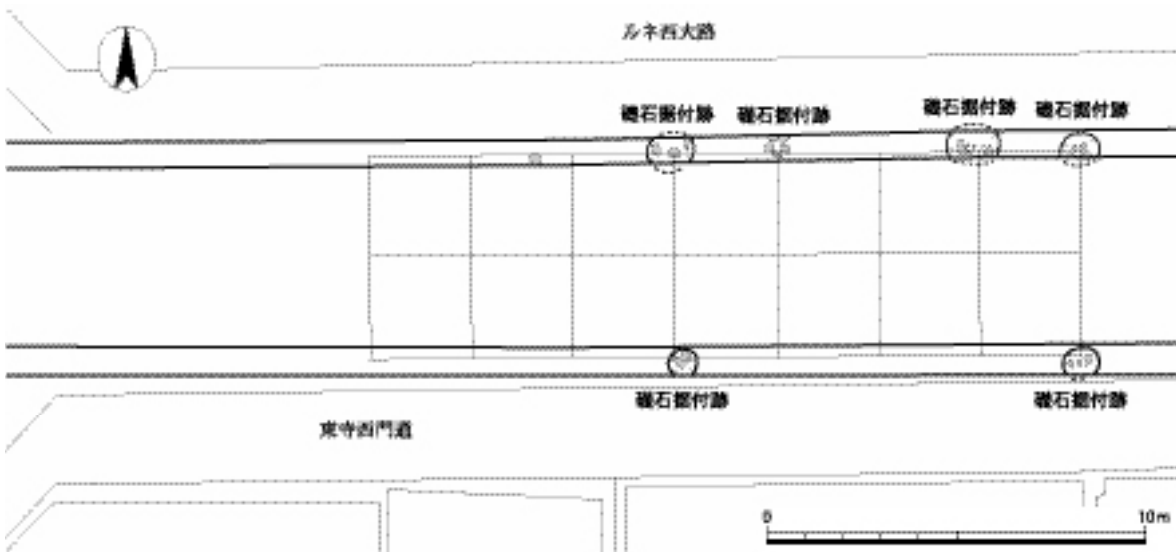


図113 調査区配置図（1：200）

遺物 遺物は整理箱で40箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器、瓦、土製品、銭貨、木製品がある。

遺物は井戸からまとまって出土し、大半は土師器で他は少ない。木製品には櫛・独楽などがある。

小結 今回の調査で検出した井戸は、規模がかなり大きく、食堂院の北東にあたり大衆院に関する井殿と推定できる。

西側の建物は食堂院の北西にあたり、5次調査の検出建物などから考え、桁行7間×梁間2間の東西棟を復元でき、大炊殿と推定できる。

さらに西側の凝灰岩列は、これまでの推定復元から西寺境内の西限築地下の暗渠溝と推定できる。

このように今回の調査では、伽藍北部の状況が明らかとなり、復元の一助となろう。

『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978年報告

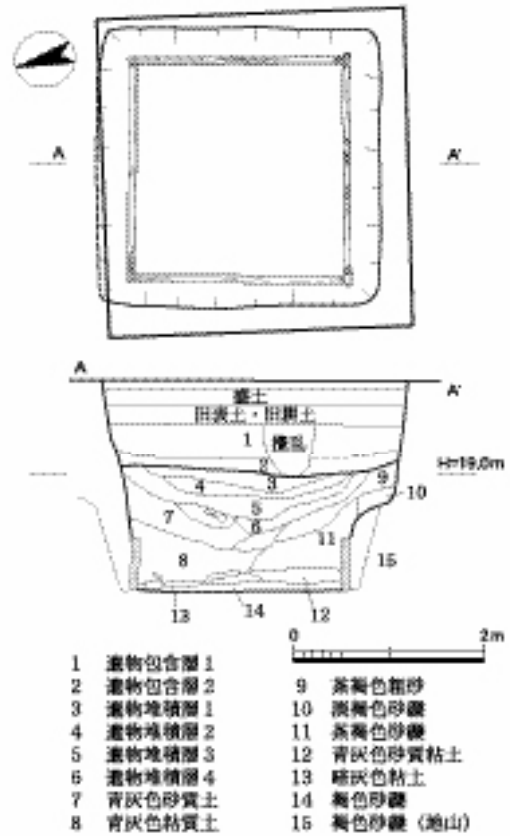


図 114 遺構実測図 (1 : 80)



図 115 根石出土地点および建物復元図 (1 : 600)

27 平安京右京九条一坊、西寺跡4

経過 今回の発掘調査は、天理教唐橋分教会新築に伴うもので、当地は平安京右京九条一坊、および西寺西小子坊中央部にあたるため、調査を実施した。調査は西寺跡13次調査となる。

調査地内に長方形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.2～0.3 m）、第2層灰褐色泥土混礫層（0.2 m）、第3層灰褐色砂泥層（0.2 m）、第4層黄灰色砂泥層（0.1～0.2 m）、第5層黄褐色泥砂層（基壇構築土）、第6層灰褐色砂礫層（地山）である。地表面の標高は20.8 mである。

第1面で検出した遺構には、南北基壇、南北溝、瓦溜などがある。

基壇は長さ13 m以上、幅8.5 m、残存高0.3 mである。基壇は、黄褐色の砂と粘土で粗い版築を行う。上面では礎石据付跡（方形、一辺1.3 m、深さ0.2 m）を5箇所検出したが、根石はほとんど残存していない。据付跡の位置から、梁間2間（3 m等間）、桁行（2.7～3 m）を2間分確認した。

基壇端の西側0.6 mで南北溝を検出した。溝は断面U字型で、幅0.8～1 m、深さ約0.2 m、埋土の上層は暗茶褐色粘質土、下層は暗灰褐色砂礫粘質土で、土器・瓦が出土した。

南北溝は調査区東部で、柱穴は全域で検出した。時期は、遺構埋土に含まれる土器から、いずれも平安時代である。

遺物 遺物は整理箱で38箱出土した。遺物の種類には、弥生土器、土師器皿・甕、須恵器杯・壺・甕、緑釉陶器、灰釉陶器、軒丸

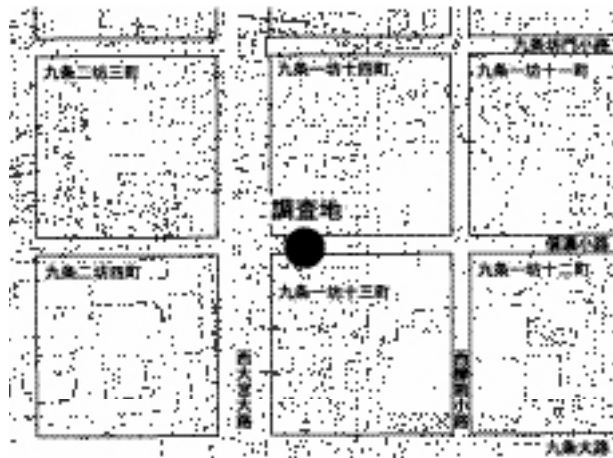


図116 調査位置図（1：5,000）

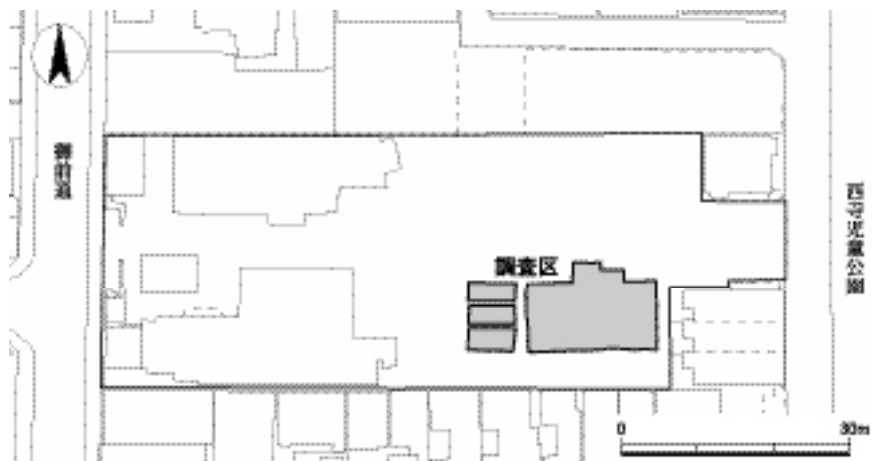


図117 調査区配置図（1：1,000）

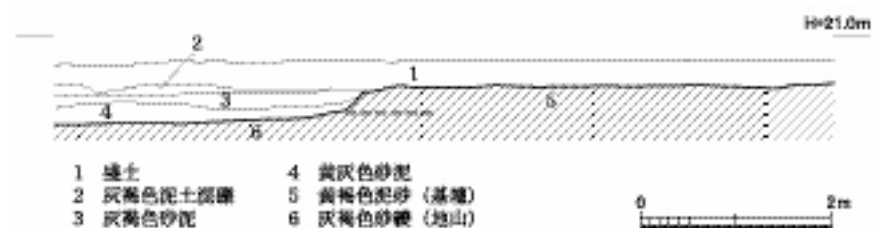


図118 東西セクション北壁断面図（1：80）

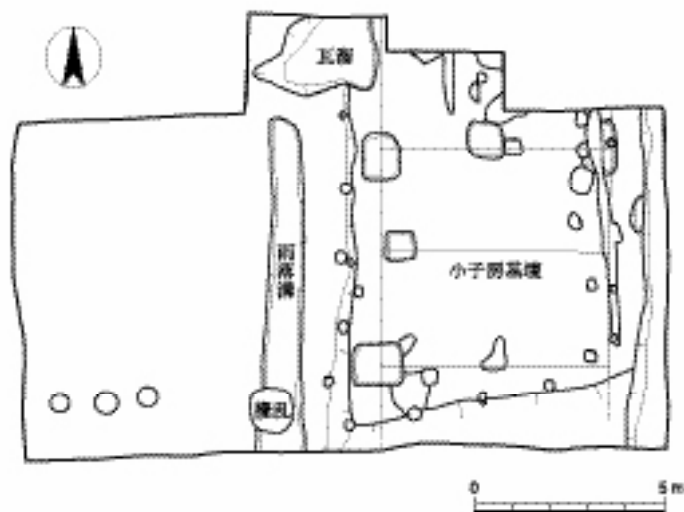


図 119 遺構平面図（1：200）

瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。瓦類が最も多く、瓦溜をはじめ包含層から出土した。

小結 今回の調査では、南北基壇および西側雨落溝を検出した。この位置は推定伽藍復元の西側小子坊にあたる。東側小子坊は15・16次調査で検出し、その際に確認した礎石据付跡の間隔と今回の検出したものとは同一であることが判明した。



図 120 調査区全景（東から）

III 白河街区跡

28 尊勝寺跡

経過 今回の発掘調査は、象彦製品倉庫新築工事に伴うもので、当地は尊勝寺推定地の西部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に東西 12 m、南北 8 m の長方形の調査区を設定した。後に礎石据付跡東側の確認のため東側を拡張した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層現代整地層 (0.3 ~ 0.4 m)、第 2 層暗茶灰色土層 (耕土 : 0.25 ~ 0.4 m)、第 3 層暗黄灰色砂土層 (0.1 m)、第 4 層茶褐色砂泥・白色砂の互層 (版築層 : 約 0.2 ~ 0.4 m)、第 5 層暗茶色砂泥層 (地山) である。第 4 層上面で遺構を検出した。

検出した遺構は、礎石据付跡、土壇、版築層がある。版築層は土と砂を 6 層程度交互に積んで叩き締めており、かなり締まった層である。版築層の底部は一定で、厚さは西端で 0.4 m、東端 (礎石 8 付近) で 0.2 m である。

版築層の上部で礎石据付跡を検出した。礎石据付跡根石 1 ~ 7 は掘形規模が約 2 m の円形で、深さは 0.8 m 残存し、底部は平坦である。埋土は泥土層と砂泥層を交互に埋め、下層に小礫と径 0.2 ~ 0.4 m の河原石を入れ、上層に径 0.4 ~ 0.5 m の大型の河原石を密に入れる。礎石据付跡根石 8 は、掘形規模が約 1.2 m の円形である。中には 0.2 ~ 0.4 m の河原石を入れる。礎石据付跡心々間の距離は、南北間隔 (根石 1 ~ 3、4 ~ 6) が 3.9 m 等間で、東西間隔は 9.3 m (根石 1 ~ 4)、4.6 m (根石 4 ~ 7)、3.9 m (根石 7 ~ 8) である。建物は礎石据付跡の配置から南北棟と推定で

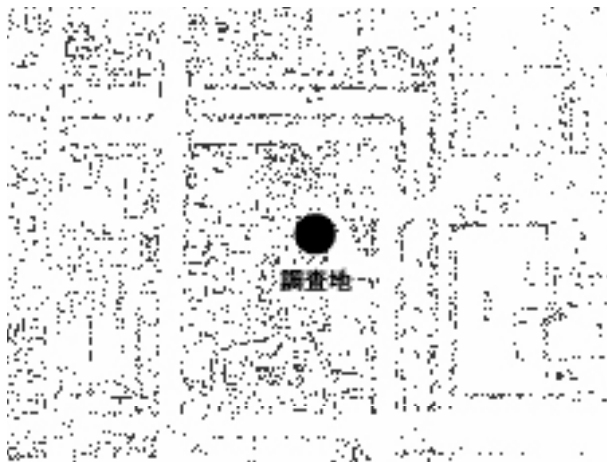


図 121 調査位置図 (1 : 5,000)

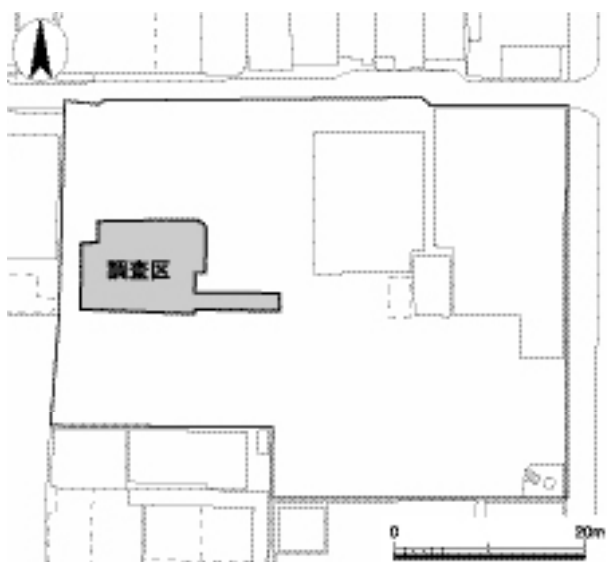


図 122 調査区配置図 (1 : 800)

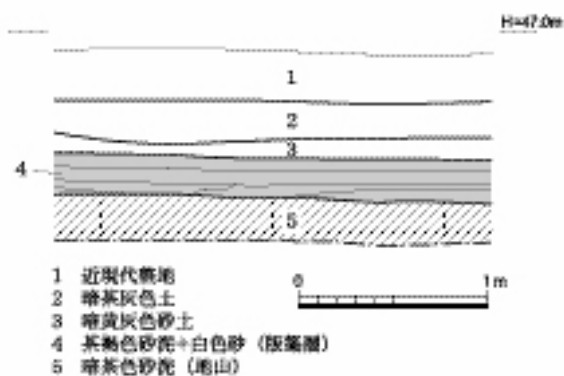


図 123 北壁断面図 (1 : 40)

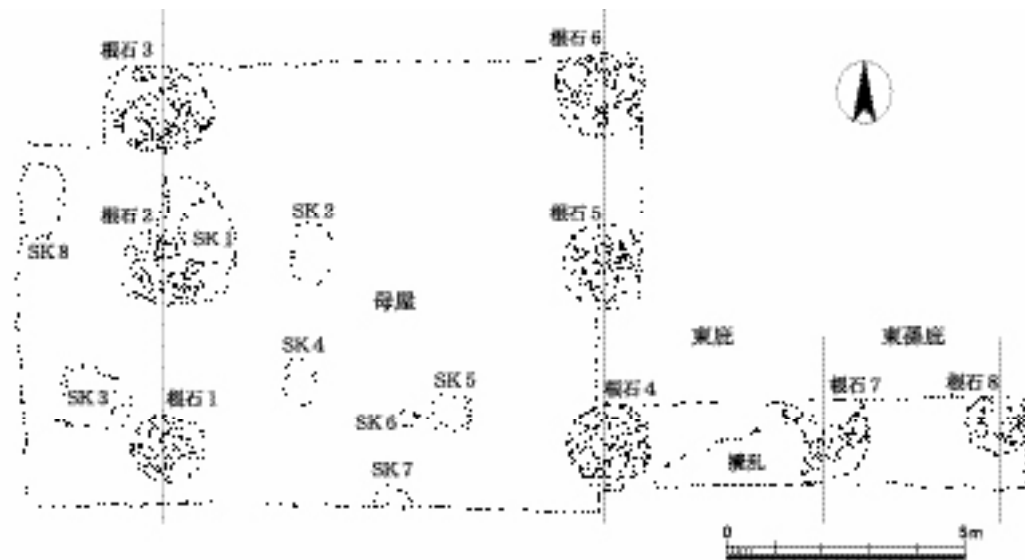


図 124 遺構平面図 (1 : 160)

き、方位はほぼ真北である。版築層・礎石据付跡から出土した土器・瓦から、時期は平安時代後期に属する。

土壌は河原石を入れ、耕作に不要な石を投棄した坑と考えられる。近世に属する。

遺物 遺物は整理箱で 10 箱出土した。遺物の種類には、石棒・石剣、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。平安時代後期の土器・瓦類が最も多く、縄文時代の石器、古墳時代の須恵器も少量出土した。

小結 今回の調査では、平安時代後期の建物の中心部を検出し、礎石や基壇上面は削平されたと考えられる。検出した建物は、礎石据付跡の配置から南北棟で、母屋が梁間 30 尺、桁行 13 尺等間で、東側廂の出が 15 尺、さらに東側孫廂の出が 13 尺と推定できる。

検出した建物は規模がかなり大きく、得長寿院または尊勝寺の三十三間堂と推定できる。

『六勝寺跡発掘調査概報 1977』1978 年報告

29 得長寿院跡 (図版 12)

経過 今回の発掘調査は、京都予備校校舎建設に伴うもので、当地は得長寿院推定地の南部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に長方形の調査区を設定した。その後東側を拡張した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層、第2層灰茶褐色砂質土層、第3層茶褐色砂質土層、第4層暗褐色粘質土層、第5層灰褐色砂質土・赤褐色砂礫層など(地山)である。第4層上面を第1面、第5層上面を第2面とする。地表面の標高は45mである。

第1面で検出した遺構には、南北溝、柱穴などがある。南北溝は調査区東部で、柱穴は全域で検出した。時期は、埋土に含まれる土器からいずれも中世から近世である。

第2面で検出した遺構は、遺構の切り合い関係によって平安時代から鎌倉時代、弥生時代に分かれる。

平安時代から鎌倉時代の遺構には、溝、配石遺構、井戸状遺構、土壇がある。溝は調査区北部で東西溝SD8(幅1m、深さ0.3m)、南部で東西溝SD23(幅2.2m、深さ0.12m)を検出した。SD23は断面U字形で上層は灰褐色粘質土、下層は灰茶褐色粘質土で、下層で礫・土器・瓦が多く出土した。配石遺構SK9は中央部で検出し、深さ0.2mで河原石を敷く。井戸状遺構SK14・32は西部で検出し、径約1m、深さ約0.7mで素掘りである。土壇は全域で検出し、形状・規模とも種々である。

弥生時代の遺構には、方形周溝墓がある。調査区全域で4基検出した。規模は、一辺約7~9m程度で、溝は断面U字形で幅0.6~1m、深さ約0.4mである。埋土は淡褐色砂質土で弥生土器を含む。方向は4号が北側で西に、他は北側で東に傾く。

遺物 遺物は整理箱で30箱出土した。出土遺物の種類には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、磁器、陶器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、鉄釘、石製品、土製塔などがある。鎌倉時代から近世の土器類が最も多く、次いで瓦類が出土した。

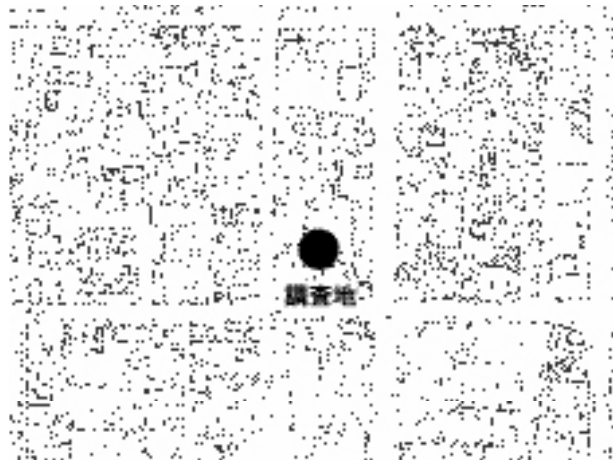


図 125 調査位置図 (1 : 5,000)

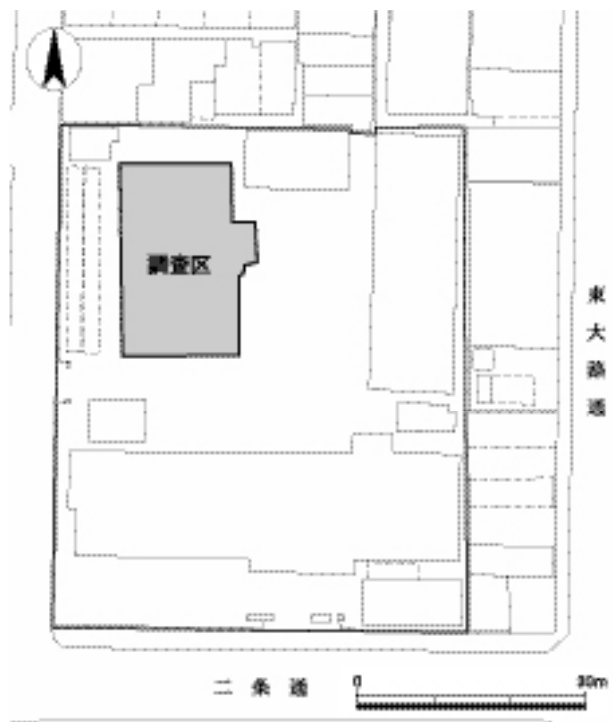


図 126 調査区配置図 (1 : 1,000)

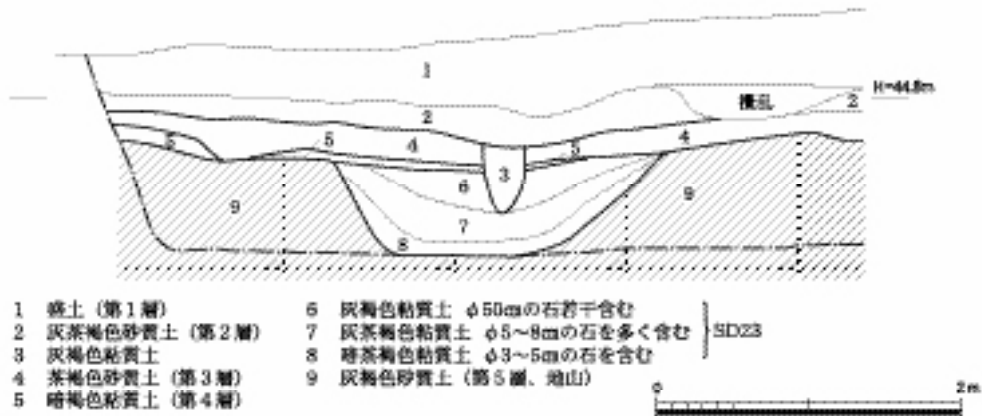


図 127 西壁南部断面図 (1 : 50)

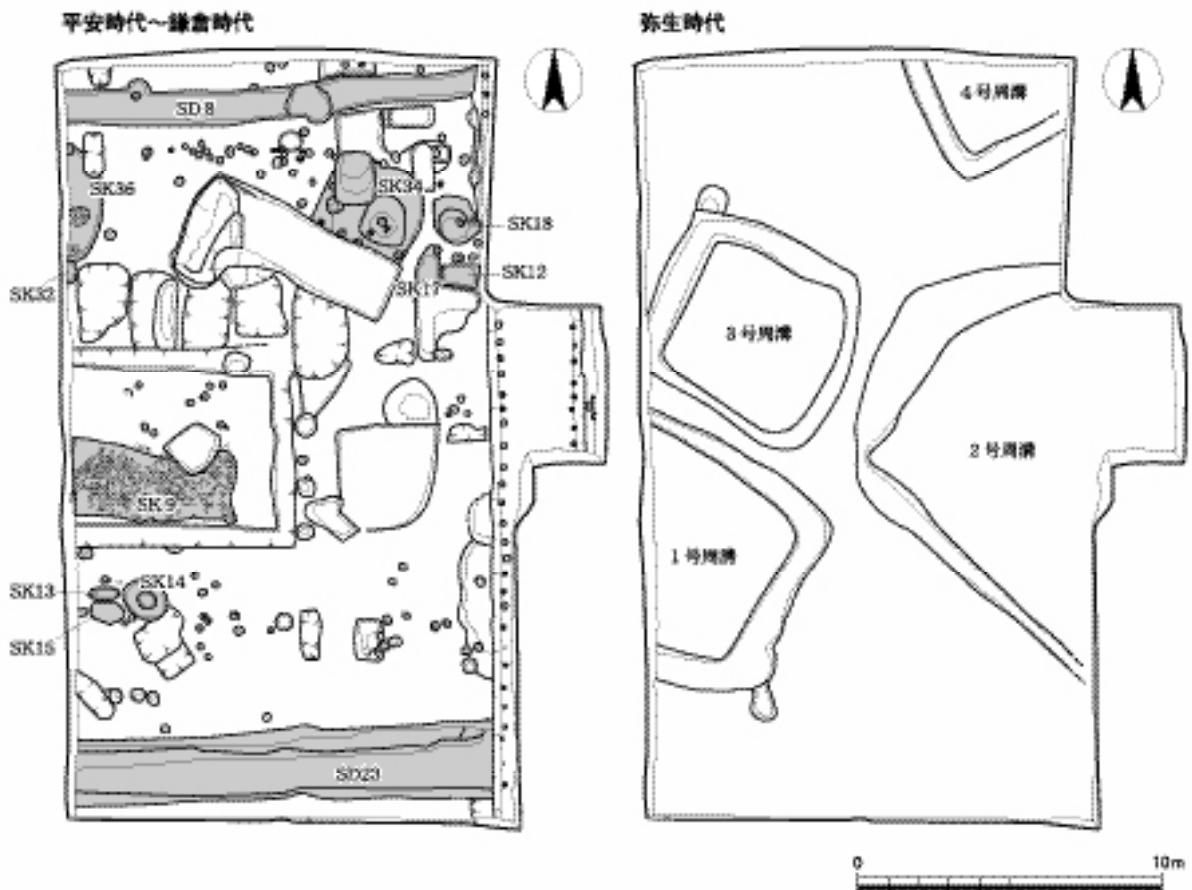


図 128 遺構平面図 (1 : 250)

小結 今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓を検出し、これに伴う遺物が多数出土した。これまで岡崎遺跡で弥生時代の遺物が出土した例はあるが、遺構が発見されたのは初めてで、周辺に当該期の集落が展開していたと推定できる。南部で検出したSD23は得長寿院の南限(二条大路末北限)にあると推定でき、当地域の地割を知る上で貴重な資料となった。

IV 鳥羽離宮跡

30 鳥羽離宮跡 29 次調査

経過 今回の発掘調査は、民家建設に伴うものである。当地は鳥羽離宮東殿跡の北西部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 29 次調査である。

北区と南区の 2 箇所の調査区を設定し、まず北区の調査を行い、調査終了後に南区の調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層現代盛土層、第 2 層茶褐色泥砂層（旧耕土）、第 3 層暗茶褐色泥砂層、第 4 層明黄褐色粘質土層（地山）である。遺構はすべて第 4 層上面で検出した。検出した遺構は、柱穴、柵、土塙、井戸、池状遺構などである。

平安時代後期の遺構は、南区中央部で柱穴、南部で池状遺構を検出した。

平安時代から鎌倉時代の遺構は、南区中央部で柱穴を多数検出したが、建物としてまとまるものはない。柵も多方向にあり、時期の判別が困難であった。池状遺構は護岸施設を作り、底部に礫を敷き詰める。

鎌倉時代から室町時代には池状遺構を埋め戻し、柱穴などが造られる。北区南端と南区南部で井戸を検出した。北区の井戸は瓦積み井戸（径 1 m、深さ 2 m）で下部は桶を用いる。

桃山時代の遺構は、黄灰色粘土の整地層を部分的に検出しただけである。

江戸時代の遺構は、南区全域で礎石が散在する。

遺物 遺物は整理箱で 74 箱である。種類には、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦類、木製品などがある。時期は平安時代後期から江戸時代で、大半が中世の遺物である。

小結 今回の調査では、平安時代後期の遺構を検出し、当地域にまで東殿関連の遺構が存在することが明らかとなった。その後、中世においても活発に利用されていることが確認できた。

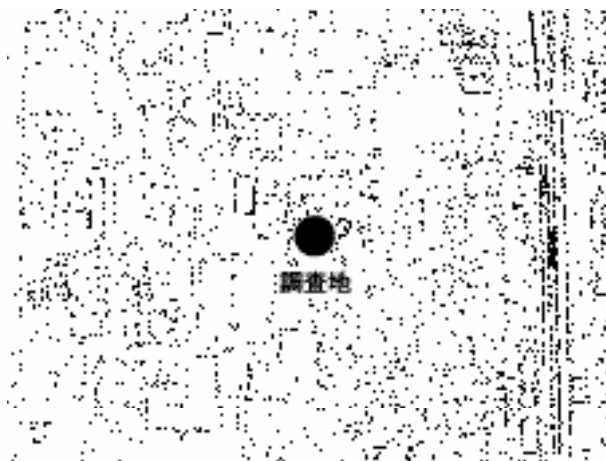


図 129 調査位置図（1：5,000）

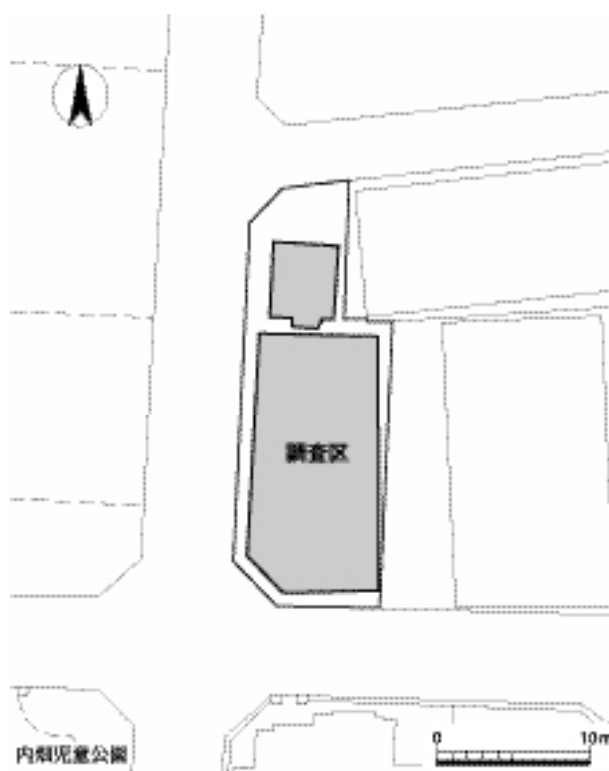


図 130 調査区配置図（1：500）

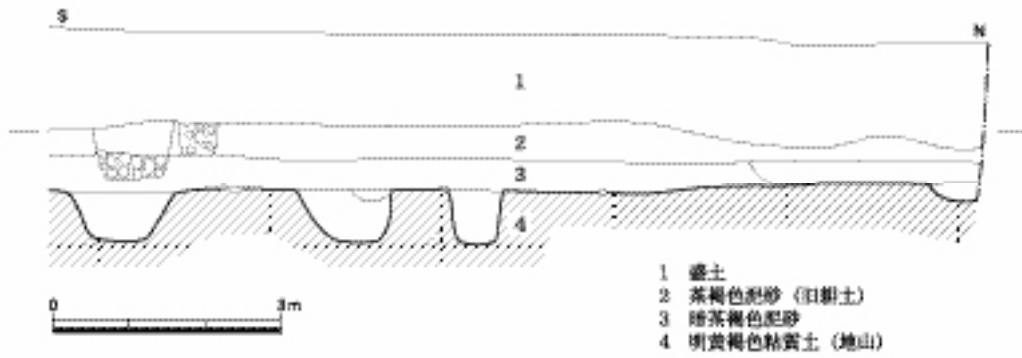


図 131 南区西壁断面図 (1 : 100)

『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和 52 年度
1978 年報告

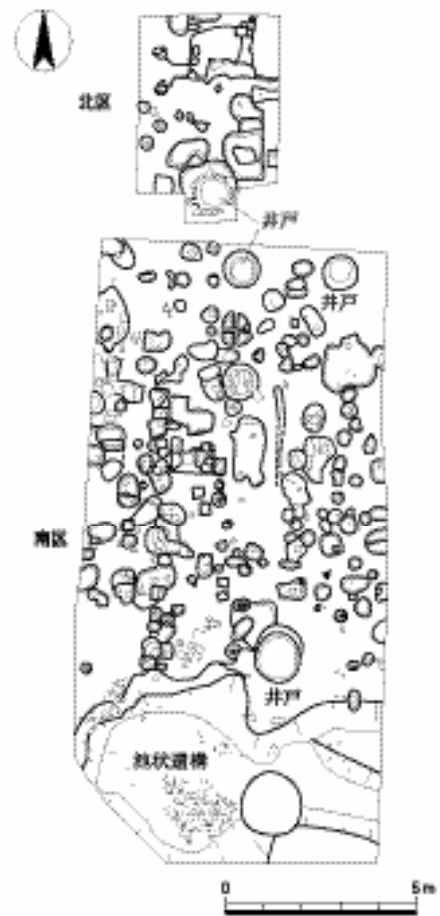


図 132 遺構平面図 (1 : 200)

31 鳥羽離宮跡 30 次調査

経過 今回の発掘調査は、民家建設に伴うものである。当地は鳥羽離宮田中殿跡の北部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 30 次調査である。

調査は、まず幅 4 m、南北 22 m の調査区を設定し、遺構を検出したため、中央部を西側に拡張した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層現代盛土層 (0.35 m)、第 2 層耕土・床土層 (0.2 m)、第 3 層黄褐色粘土層 (包含層：約 0.2 m)、第 4 層暗黄褐色粘土層 (包含層：0～0.2 m)、第 5 層青灰色砂礫層 (包含層：約 0.3 m)、第 6 層青灰色砂泥層 (包含層：0.15 m)、第 7 層灰色砂礫層 (地山) である。第 4 層は南側では見られず、中央から北側で確認し北側に向って下がり、傾斜面付近には礫を敷いている。また、第 3 層中には火ぶくれした瓦片・焼灰・焼土を含む。第 5 層上面で遺構を検出した。検出した遺構は、建物地業、礎石据付跡、溝などである。



図 133 調査位置図 (1 : 5,000)



図 134 調査区配置図 (1 : 1,000)

調査区中央部から南側で、礫敷きを検出し、上部は削平を受けたものの建物地業と判断できる。特に第 5 層傾斜面下端で礫が一線をなして並んでおり、建物の北限と推定できる。推定北限から南側 3.5 m には径約 1～1.5 m の範囲に礫が密集し礎石据付跡と推定できる。間隔は約 3 m である。

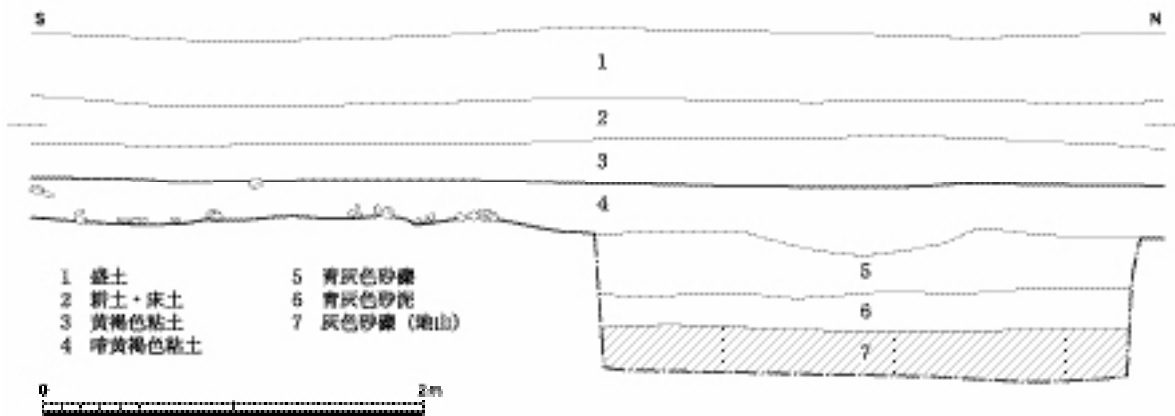


図 135 西壁断面図 (1 : 40)

建物北側では、礫の集石1箇所、東西溝1条を検出した。遺構は平安時代後期に属すると推定できる。

遺物 遺物は整理箱で27箱出土した。種類には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、陶器、磁器、瓦類などがある。時期は、弥生時代から江戸時代である。弥生土器(Ⅲ様式)、古墳時代の土師器・須恵器、緑釉陶器が下層から出土した。

小結 今回の調査では、平安時代後期の建物を部分的ではあるが1棟確認できた。規模は不明であるが、西側の14次調査では確認していないので、それまでは継続していないことがわかる。また、北側は自然堆積層となり、遺構はないものと推定できる。

『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和52年度 1978年報告



図 136 遺構平面図 (1:200)

32 鳥羽離宮跡 31 次調査

経過 今回の発掘調査は、住宅建設に伴うものである。当地は鳥羽離宮東殿跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 31 次調査にあたる。

調査地中央に南北 9 m、東西 30 m の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層耕土層 (0.15 m)、第 2 層暗灰色粘質土層 (床土: 約 0.1 m)、第 3 層淡灰褐色粘質土層 (約 0.15 m)、第 4 層灰褐色粘質土層 (0.15 ~ 0.2 m)、第 5 層黄褐色粘土層 (地山) である。第 5 層上面で遺構を検出した。検出した遺構は小溝、土壇、大溝などである。

小溝・土壇は全域で検出し、近世に属する遺構である。

南北大溝は、調査区中央で検出し、西側 SD3104 (幅約 6 m、深さ約 1 m) と、東側 SD3103 (幅約 5 m、深さ約 1 m) の 2 条がある。溝心々距離は 9.5 m で、肩間は約 6 m である。溝埋土はいずれも下層が灰色粘土、上層が青灰色粘質土と暗灰褐色粘質土の互層である。底部では平安時代後期ないし鎌倉時代初頭の土師器・瓦を含み、上層では桃山時代の陶磁器・漆器などを含んでいた。

遺物 遺物は整理箱で 39 箱出土した。種類には、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦類、木製漆器・曲物・箸・下駄などがある。時期は、平安時代後期から江戸時代である。瓦類は軒丸瓦・軒平瓦も数十点出土した。木製品は、両大溝から出土した。

小結 今回の調査では、平安時代後期の遺構はほとんどなく、主要遺構としては大溝 2 条である。調査地周辺では同様の大溝が検出され、南側の 20 次調査で東西大溝 SD1201、北側の 35 次 A 調査で東西大溝 SD3511 がある。いずれもほぼ同規模で、埋没時期は桃山時代である。これらの溝の配置から当地域に戦国時代の環壕をもつ館跡を推定できる。ただ、下層の平安時代後期から鎌倉時代初頭の状況については、不明な点が多い。

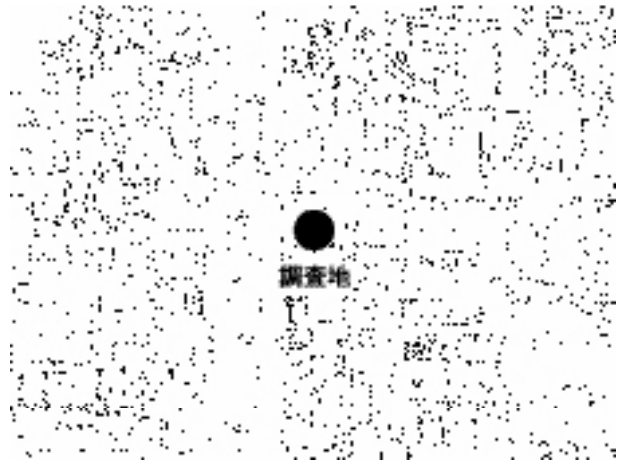


図 137 調査位置図 (1 : 5,000)



図 138 調査区配置図 (1 : 600)

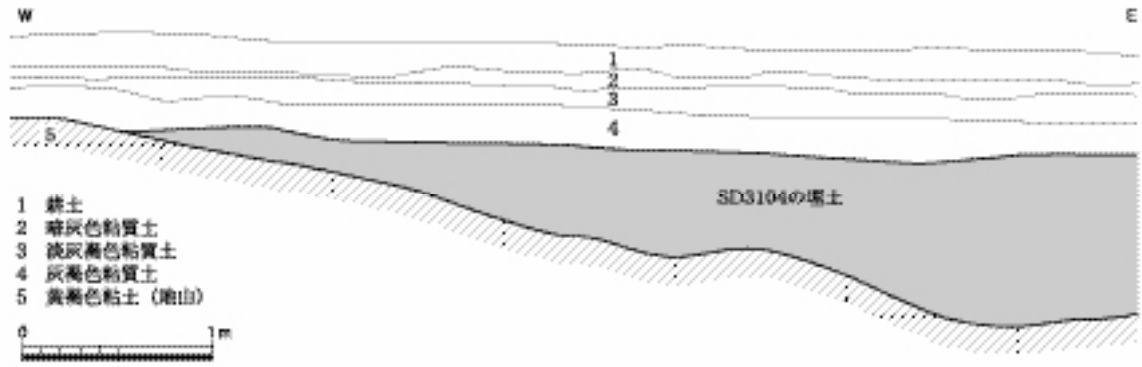


図 139 北壁断面図 (1 : 40)

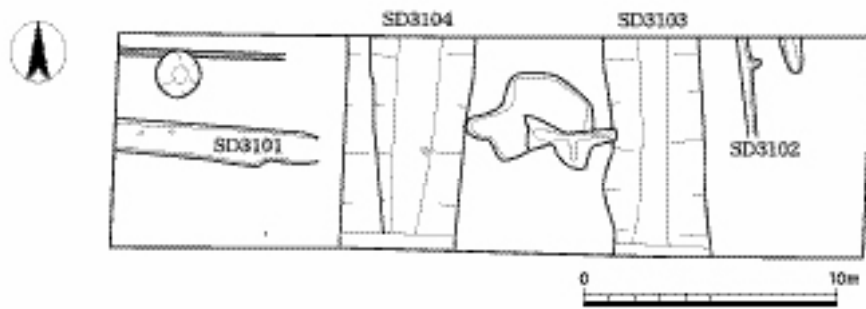


図 140 遺構平面図 (1 : 300)

『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和 52 年度 1978 年報告

33 鳥羽離宮跡 32 次調査

経過 今回の発掘調査は、土地利用変更によるものである。当地は鳥羽離宮東殿跡の東部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 32 次調査である。

調査地中央に南北 3 m、南北 9 m の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層盛土層（約 0.35 m）、第 2 層褐色土層（0.15 ～ 0.5 m）、第 3 層灰褐色土層（近世整地層：約 0.4 m）、第 4 層茶褐色土層・暗灰色土層（桃山時代から江戸時代整地層：0.1 m）、第 5 層灰褐色砂礫層（地山）である。第 4 層は調査区西側でのみ確認した。第 3・4・5 層上面で遺構を検出した。検出した遺構は石積み、土塙、礎石据付跡、小溝、大溝などである。

第 3 層上面では、調査区東部で礎石据付跡の根石を検出した。東西・南北 2 m 間隔で、小規模な建物と推定できる。江戸時代に属する。

第 4 層上面では、調査区中央部で南北小溝 SD3201（幅約 0.55 m、深さ約 0.2 m）、東部で礎石据付跡・土塙、南部で石積み遺構を検出した。桃山時代から江戸時代に属する。

第 5 層上面では、調査区中央部で南北大溝 SD3202（幅約 7 m、深さ約 1.8 m）を検出

した。溝埋土は下層が黒色粘土層、上層が青灰色粘質土と黒褐色粘土層などが複雑に堆積し、何回もの掘り換えが行われたと考えられる。最底部では平安時代後期の遺物を多量に含み、順次埋まった状況であるが、上層では桃山時代前後に再び掘り返されたため、土器類・木製品を含む。

遺物 遺物は整理箱で 9 箱出土した。種類には、土師器、陶器、磁器、瓦類、木製漆器・箸・曲物・下駄などがある。時期は、平安時代後期から江戸時代である。大半が SD3202 から出土した。

小結 今回の調査では、南北大溝を検出した。溝の位置から考え東殿の東限と推定できる。溝は平安時代後期には造られ、江戸時代まで存続していたことが明らかとなった。

『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和 52 年度 1978 年報告

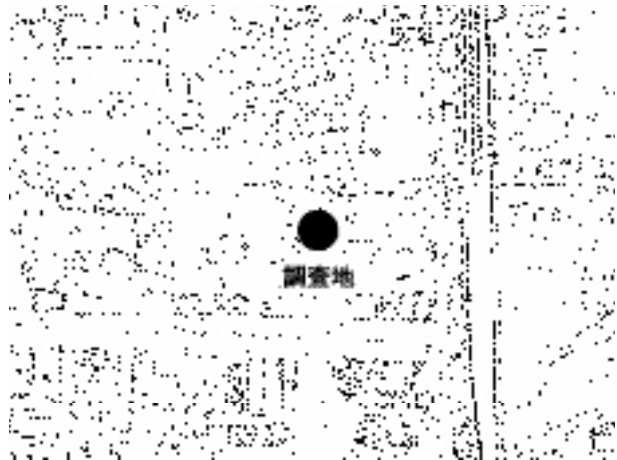


図 141 調査位置図（1：5,000）

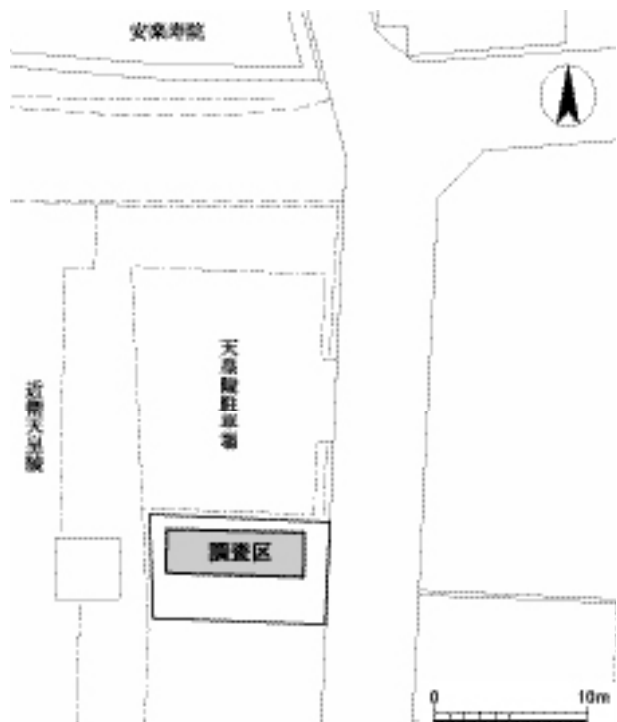


図 142 調査区配置図（1：500）

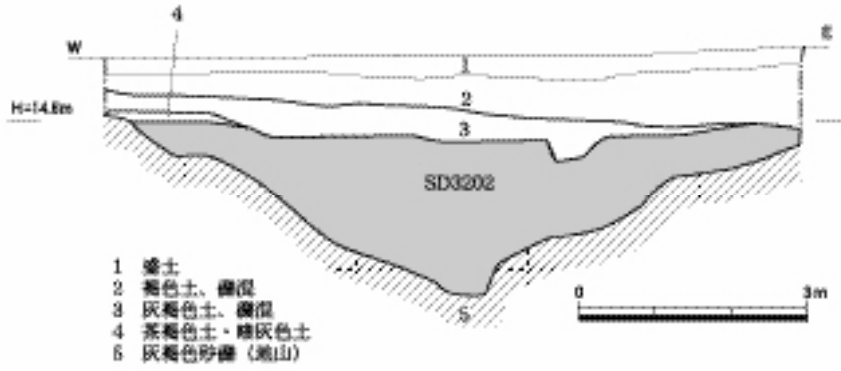


图 143 北壁断面图 (1 : 100)

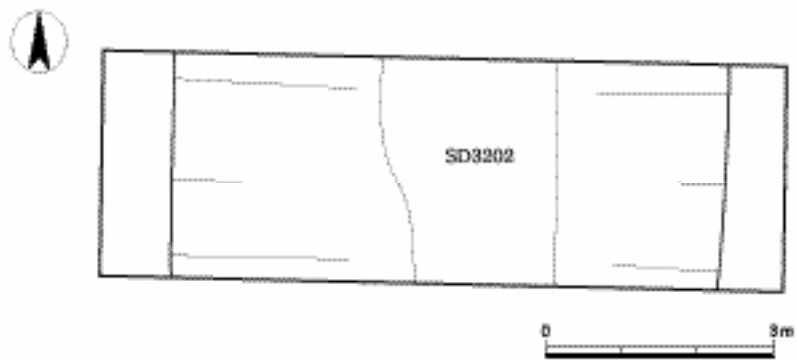


图 144 遺構平面图 (1 : 100)

34 鳥羽離宮跡 33 次調査

経過 今回の発掘調査は、住宅建設に伴うものである。当地は鳥羽離宮東殿跡の北東部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 33 次調査にあたる。

調査地中央に南北 20 m、東西 3.5 m の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層耕土層（約 0.9 m）、第 2 層灰色粘質土層（約 0.4 m）、第 3 層淡青灰色粘土層（近世整地層：0.25 m）、第 4 層青灰色粘土層（近世整地層：0.2 m）、第 5 層淡青灰色砂質粘土層（近世整地層：0.25 m）、第 6 層砂礫層（地山）である。第 3 層上面で第 1 面、第 4 層上面で第 2 面、第 6 層上面で第 3 面の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、石敷、土壇、柱穴、集石遺構、落込みなどである。

第 1 面では、調査区北部中央で南北溝 SD2201 を検出し、北から 4 m までは両側に瓦を立て、それ以南、東西溝 SD3301 までの 6 m 間は円筒形瓦を使用する暗渠となる。この暗渠との部分に交差する形で東西方向の礫層（幅約 1 m）および北辺礫列が見られ、

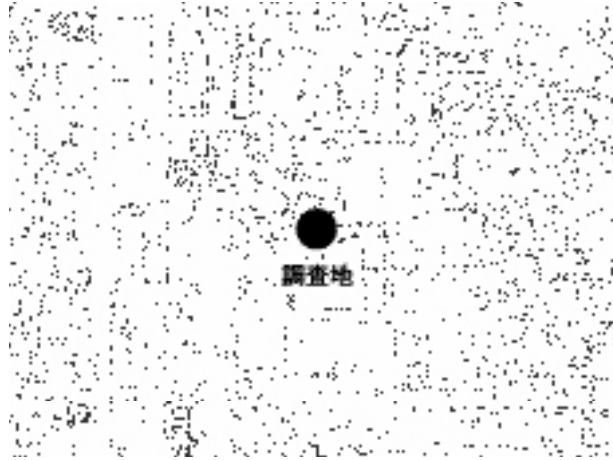


図 145 調査位置図（1：5,000）

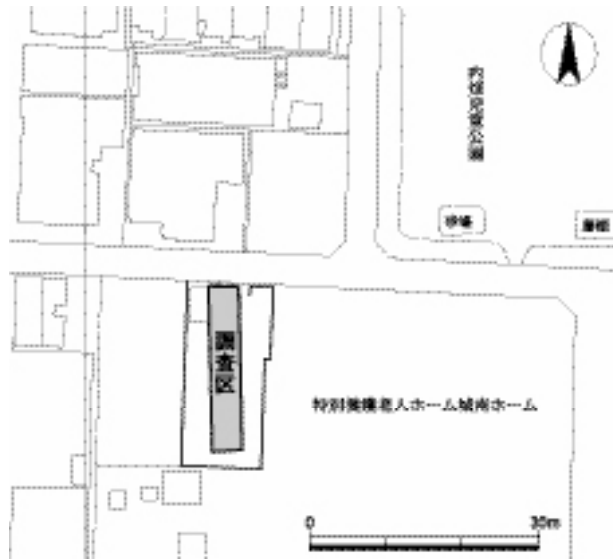


図 146 調査区配置図（1：1,000）

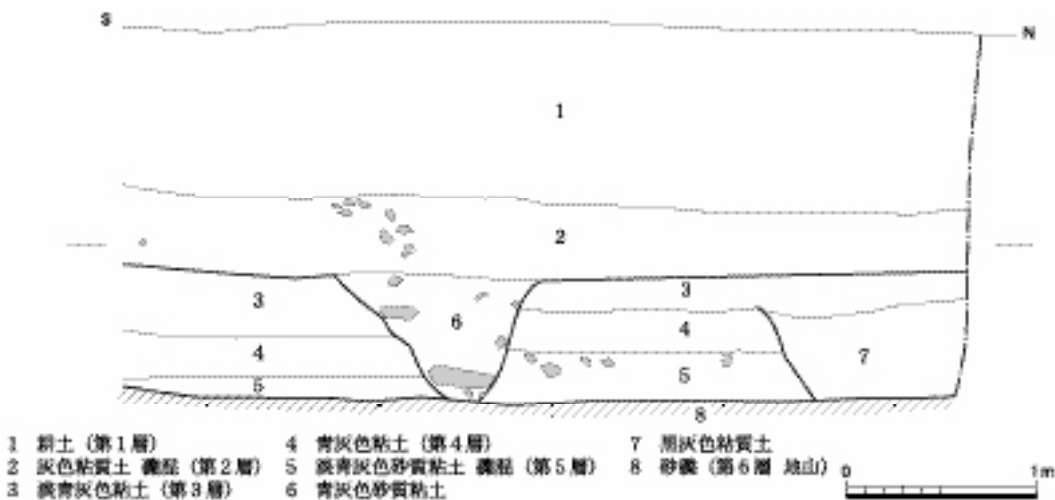


図 147 西壁断面図（1：40）

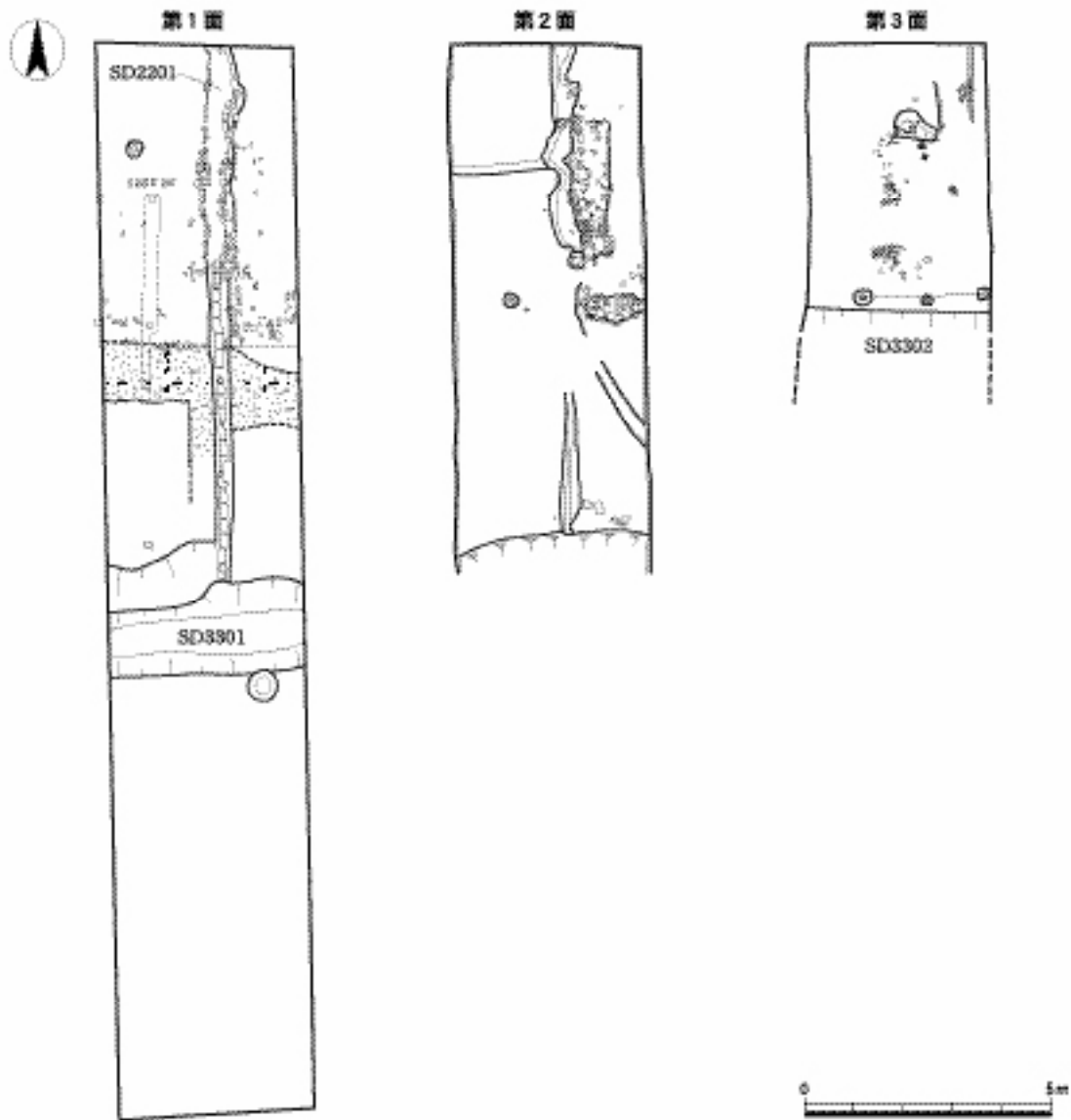


図 148 遺構平面図 (1 : 150)

築地の地業と推定できる。東西溝 SD3301 は素掘りで、それより南は砂礫であり遺構は確認できない。

第 2 面では、調査区北部で集石遺構を 2 箇所検出したが、性格は不明である。また、北西部で落込み、中央部で小溝を検出した。中央から南側は攪乱され、遺構はない。

第 3 面では、調査区北部で集石遺構と柱穴を数箇所検出したが、性格は不明である。また、調査区中央部で東西に並ぶ柱穴を 3 基検出した。柱穴の間隔は約 1.2 m である。さらに南側に東西溝 SD3302 があるが、南側は攪乱され遺構は検出できなかった。室町時代の遺物が出土した。

遺物 遺物は整理箱で 2 箱出土した。出土遺物には、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦類などがある。時期は平安時代後期から江戸時代である。

小結 今回の調査では、江戸時代の遺構面を 3 面確認し、安楽寿院子院の変遷が明らかとなった。第 3 面で検出した柱穴列は、遍照院南限の柵列と推定できる。その後、東西溝などを埋め、東西築地を造っている。また、SD2201 は遍照院と大膳院との境を示す施設である。

『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和 52 年度 1978 年報告

35 鳥羽離宮跡 34 次調査

経過 今回の発掘調査は、建物建設に伴うものである。当地は鳥羽離宮田中殿跡の北東部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 34 次調査にあたる。

調査地内に北から N トレンチ・中央トレンチ・S トレンチの 3 本の東西トレンチを設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層耕土層 (約 0.2 m)、第 2 層床土層 (0.2 m)、第 3 層黄褐色粘質土層 (0.1 ~ 0.25 m)、第 4 層黄褐色砂礫層 (地山) である。北側では第 4 層が下がり、暗黒褐色泥土 (有機質を含む) が認められる。第 3 層上面で第 1 面、第 4 層上面で第 2 面の遺構を検出した。検出した遺構は、建物、溝である。

第 1 面では、自然石を利用した礎石を検出した。小調査区のため建物としてはまとまらず、建物の規模・性格については不明である。近世に属する。

第 2 面では、各トレンチ中央付近で南北溝 (幅約 2 m、深さ約 0.5 m) を検出した。断面は U 字形、素掘りで底部は北側に傾斜する。埋土は 2 層に分かれ、上層は青灰色粘土層、下層は暗青灰色粘質土である。両層から土器類・木製品が出土した。

遺物 遺物は整理箱で 1 箱出土した。出土

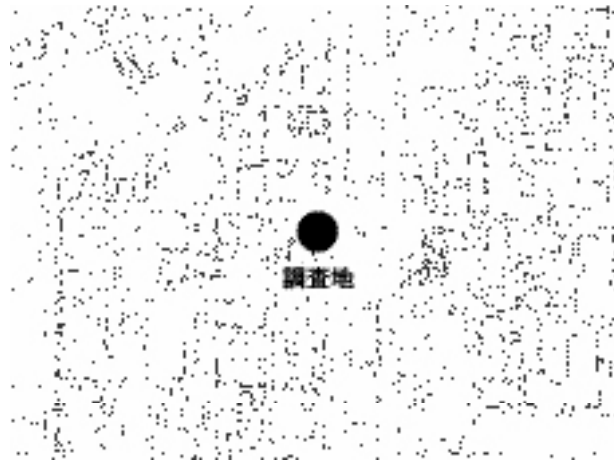


図 149 調査位置図 (1 : 5,000)

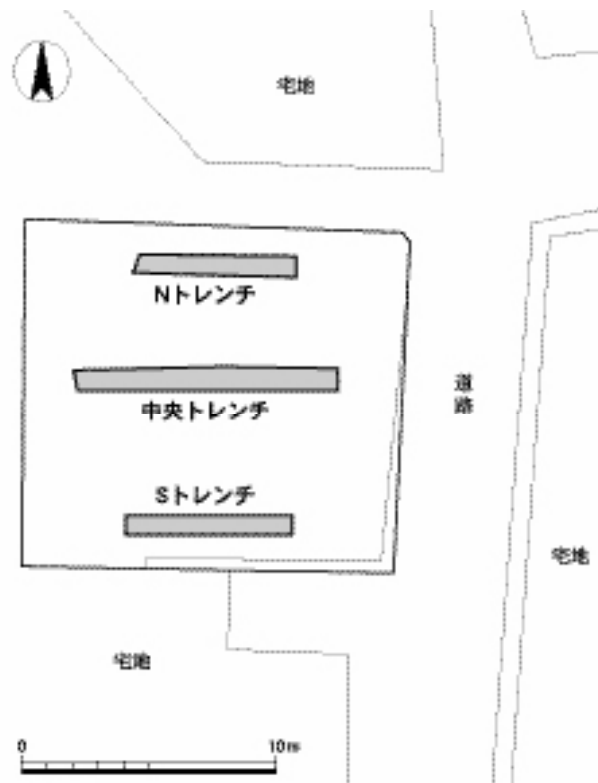


図 150 調査区配置図 (1 : 300)

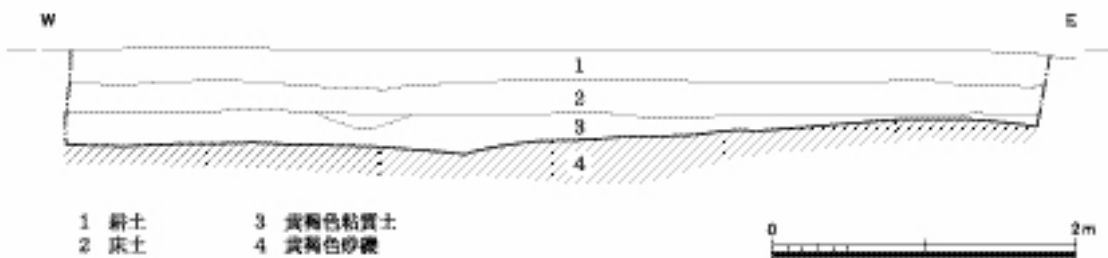


図 151 S トレンチ北壁断面図 (1 : 50)

遺物には、土師器皿、瓦器椀・皿・瓶子、丸瓦・平瓦、木製漆器椀・曲物・折敷・箸などがある。第2・3層からは近世の土器類が出土した。溝からは土器類・木製品が出土し、時期は、鎌倉時代から室町時代である。

小結 今回の調査では、平安時代後期の遺構は全く検出できなかった。検出した中世の南北溝は、調査区が小範囲であるため、性格は不明である。

『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和52年度 1978年報告

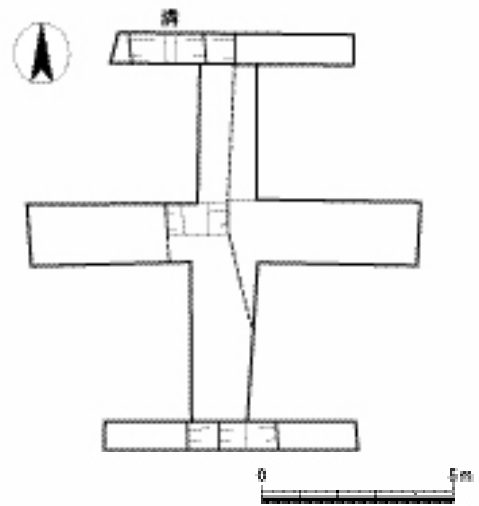


図 152 遺構平面図 (1 : 200)

36 鳥羽離宮跡 35 次調査

経過 今回の発掘調査は、街路建設に伴うものである。当地は鳥羽離宮東殿跡にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 35 次調査にあたる。

調査地は 3 箇所に分かれ、東殿中央部の A 区、北西部の B 区、南端部の C 区である。

遺構 A 区の基本層序は、第 1 層茶褐色粘質土層（盛土層：約 0.6 m）、第 2 層明茶褐色粘質土層（約 0.3 m）、第 3 層暗茶褐色粘質土層（0.25 m）、第 4 層褐色砂礫層（地山）である。第 2 層上面で第 1 面、第 3 層上面で第 2 面、第 4 層上面で第 3 面の遺構を検出した。検出した遺構には、建物、柱穴、井戸、柵、土壇、池、溝などがある。

第 1 面では、全域で溝、土壇、建物、井戸、池などを検出した。池は東岸に柵（しがらみ）を施す。時期は江戸時代末から近代に属する。

第 2 面では、全域で柱穴、溝、土壇、井戸などを検出した。柱穴は多量に検出したが、建物としてはまともななかった。時期は鎌倉時代に属する。

第 3 面は I 期と II 期に分かれる。I 期の遺構は、調査区中央で東西溝 2 条 SD20 と 21（幅約 1 m、心々距離約 16 m）を検出した。両溝間には平安時代後期の遺構はほとんど検出しておらず、北と南の地区を分ける道路と推定できる。SD21 南辺には淡褐色砂質土ないしは茶褐色粘質土が東



図 153 調査位置図（1：5,000）

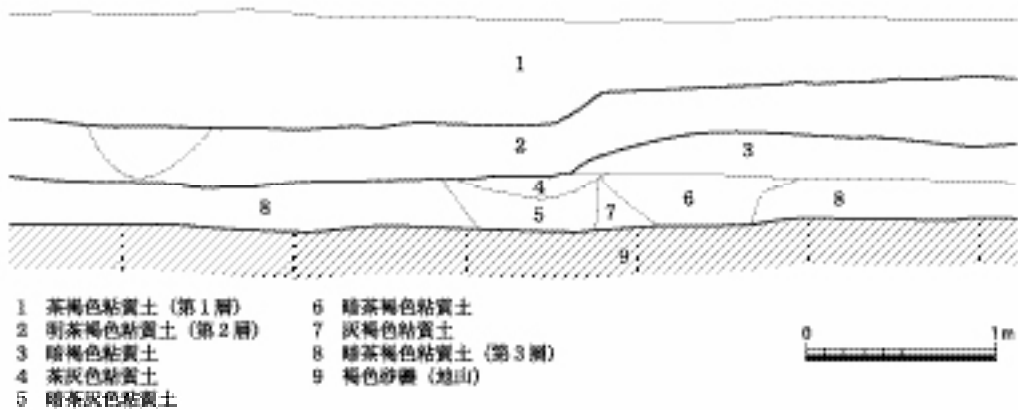


図 154 A 区北壁断面図（1：40）

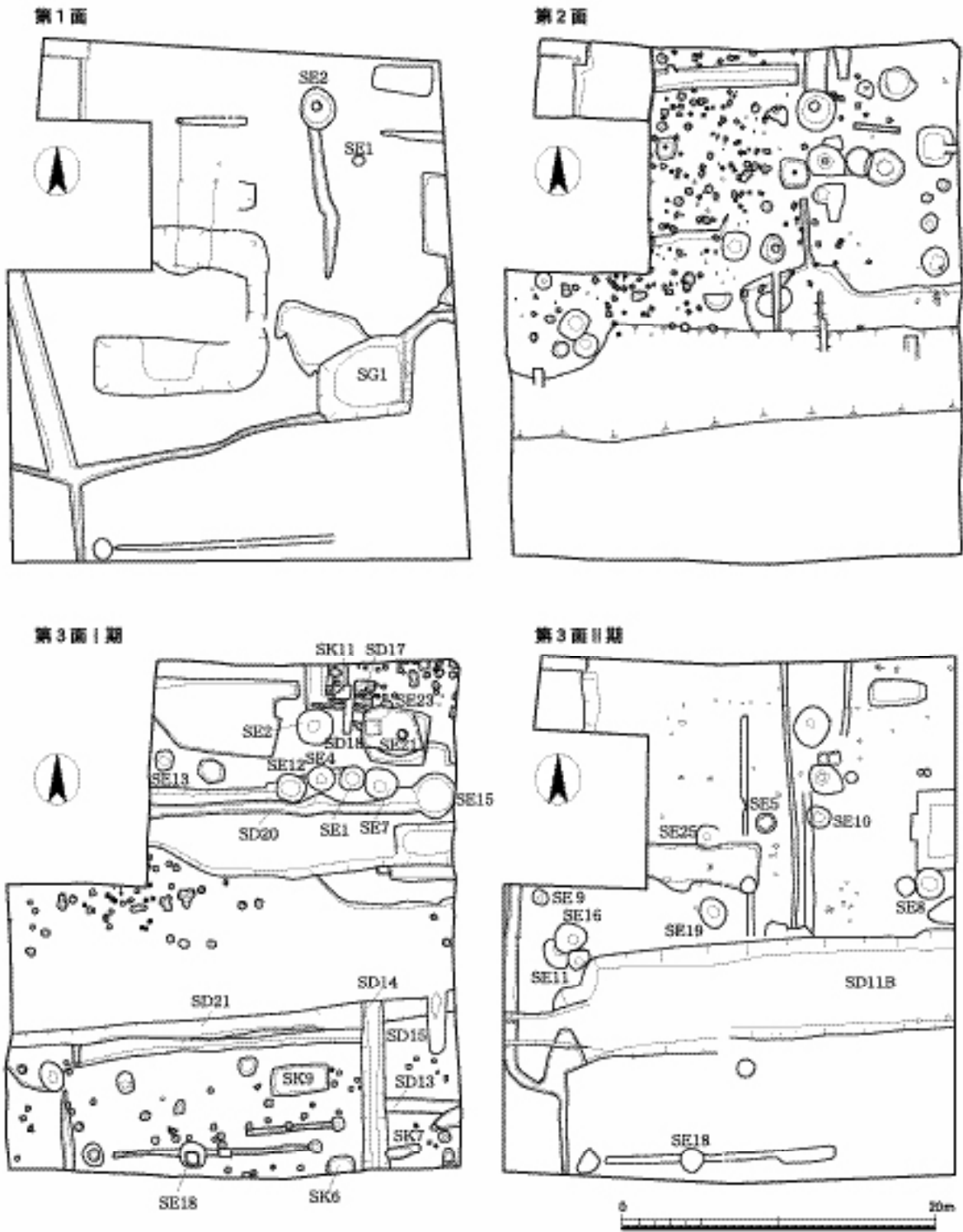


図 155 A区遺構平面図（1：400）

西に帯状に盛り土しており、築地の可能性があり、SD15は木樋を利用した暗渠と考えられる。SD20の北側とSD21の南側は全域で柱穴、溝、土壇、井戸などを多数検出した。特に北側では井戸が多く見られる。時期は平安時代後期から鎌倉時代に属する。

II期の遺構には、調査区中央で東西溝SD11B（幅約4m、深さ1.5m）を検出し、SD21北側を切る。室町時代後半には西端部で張り出しを持つ壕SD11Aとなる。溝両側はSD11を掘り下

げた砂礫を敷き、整地を行っており、SD20 など大半の遺構を埋めてしまう。

B区の基本層序は、第1層盛土層（約0.6m）、第2層茶褐色粘質土層（近世包含層：約0.9m）、第3層灰色粘土・黒灰色粘土層（約1m）、第4層粗砂層（地山）である。第2層上面で近世の掘込を検出。第4層上面で平安時代後期の遺物を包含し、湿地状の堆積であることが明らかとなった。その他、特に遺構は検出できなかった。



図 156 C区調査区配置図（1：400）

C区の基本層序は、第1層耕土・床土（約0.3

m）、第2層茶灰色粘質土層（約0.2m）、第3層暗褐色粘質土層（0.15m）、第4層青灰色粘質土層（0.15m）、第5層灰色粗砂礫層（地山）である。顕著な遺構は検出できなかった。

遺物 A区では整理箱に150箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、磁器、陶器、瓦、木製品、鉄製品、銭貨、武具、布片などがある。時期的には、平安時代から鎌倉時代で、平安時代後期の瓦を使用した井戸SE4・6・9から大量の瓦が出土した。また、土壌SK6・7・11、SD11B最下層から土師器が多量に出土した。SE22からは布片・紙片も出土した。また北側の整地土からも多数の土器類が出土した。鎌倉時代の遺物はSD11Bおよび北側の整地層、SK8、SD17・18から出土した。室町時代から桃山時代の遺物は、壕SD11Aから土器類、木製箸・漆器・曲物・卒塔婆・柿経・仏像、小刀の鞘・矢尻・脛当てなどが大量に出土した。

B区では整理箱に2箱出土した。遺物の種類は、土器、瓦の小片である。

C区では近世陶磁器片が少量出土したのみである。

小結 今回の調査では、A区で道路などの遺構および井戸など多数の遺構を検出し、東殿中枢部に関する遺構として重要な発見となった。SD11は21次B調査や31次調査でも検出しており、これらの関連で考える必要がある。

B区・C区は、調査区が小範囲であるため、性格は不明である。

『鳥羽離宮跡』区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和52年度 1978年報告

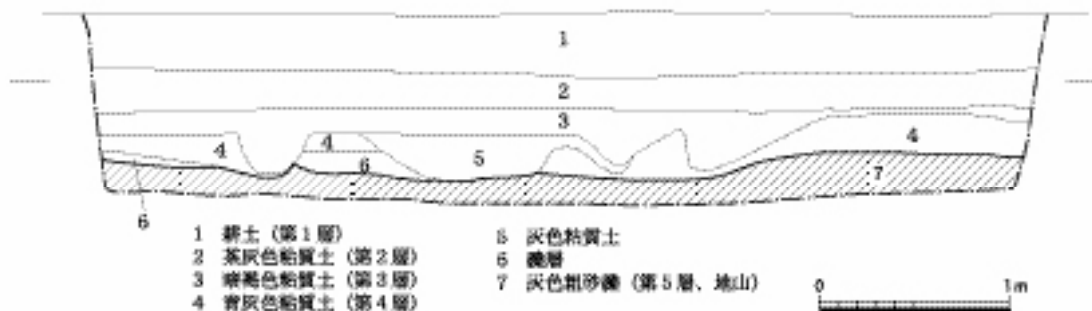


図 157 C区北壁断面図（1：40）

37 鳥羽離宮跡 36 次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地建設に伴うものである。当地は鳥羽離宮東殿跡の北東部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。鳥羽離宮跡 36 次調査にあたる。

調査地内に南北 3 m、東西 6 m のトレンチを設定し、調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層耕土・床土層、第 2 層黒灰色粘質土層、第 3 層茶褐色粘質土層（以上まで 0.6 m）、第 4 層暗褐色粘質土層（包含層：0.1 m）、第 5 層青灰色粘質土層、第 6 層黄褐色砂層（地山）である。第 4 層上面で第 1 面の遺構、第 6 層上面で第 2 面の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、柱穴などである。

第 1 面では調査区東部で柱穴を検出した。第 2 面では調査区西部で斜行溝、中央から東部で柱穴を検出した。溝埋土は灰色粘質土である。第 4 層から近世の遺物に混入して平安時代後期から鎌倉時代の遺物を含むことから、第 1 面の遺構は近世、第 2 面の遺構も近世と推定できる。

遺物 出土遺物は少量で、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦類などがある。時期は平安時代後期から近世で、主に第 3・4 層から出土した。

小結 今回の調査では、平安時代後期の遺構は全く検出できなかった。ただ、近世の遺物に平安時代後期の瓦類・土器がかなりの量混入していることから、近くに遺構の存在の可能性はある。

『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和 52 年度 1978 年報告

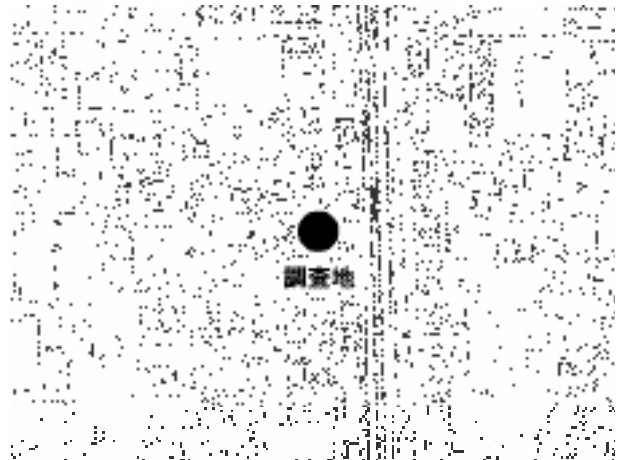


図 158 調査位置図 (1 : 5,000)



図 159 調査区配置図 (1 : 500)

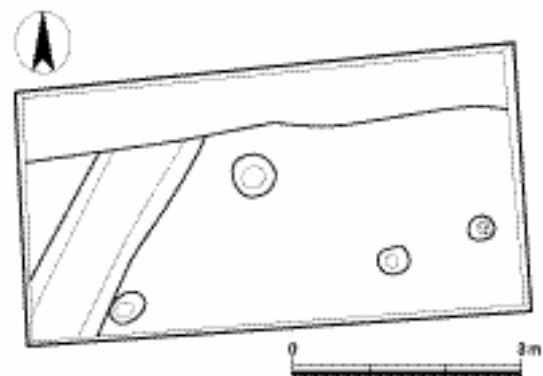


図 160 遺構平面図 (1 : 100)

V 中臣遺跡

38 中臣遺跡 8次調査

経過 今回の発掘調査は、駐車場建設に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は丘陵の南西斜面に立地する。中臣遺跡 8次調査にあたる。

調査は、4 m×4 m、3 m×11 m、4 m×14 mの3箇所の調査区を設定し、随時拡張を行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土・床土層 (0.2 m)、第2層灰褐色泥砂層 (旧耕土 0.2 m)、第3層暗褐色泥砂層 (包含層：0.2 m)、第4層黄褐色粘土層 (地山) である。第4層上面で遺構を検出した。

遺構面では、全域で柱穴、土壌を検出した。柱穴は円形で、径0.2～0.4 m程度で、散在して検出し、建物としてはまとまらなかった。土壌も全域に散在し、形態・規模ともに多様である。

遺物 遺物の種類には、土師器、須恵器などがある。遺物は大半が3層から出土し、3～4世紀の土師器、6～7世紀の土師器・須恵器がある。

小結 今回の調査では、古墳時代と推定できる遺構が少量検出されただけで、まとも

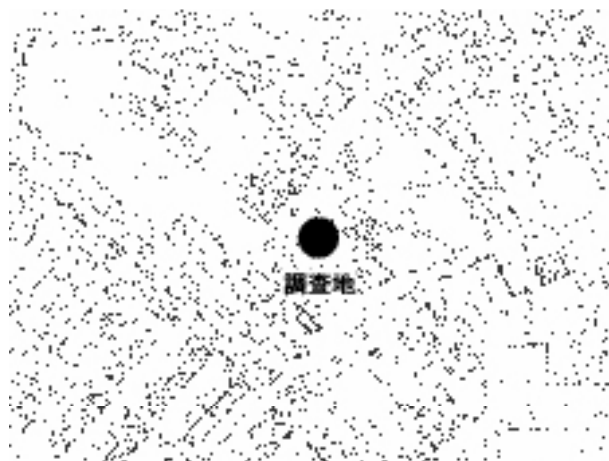


図 161 調査位置図 (1 : 5,000)

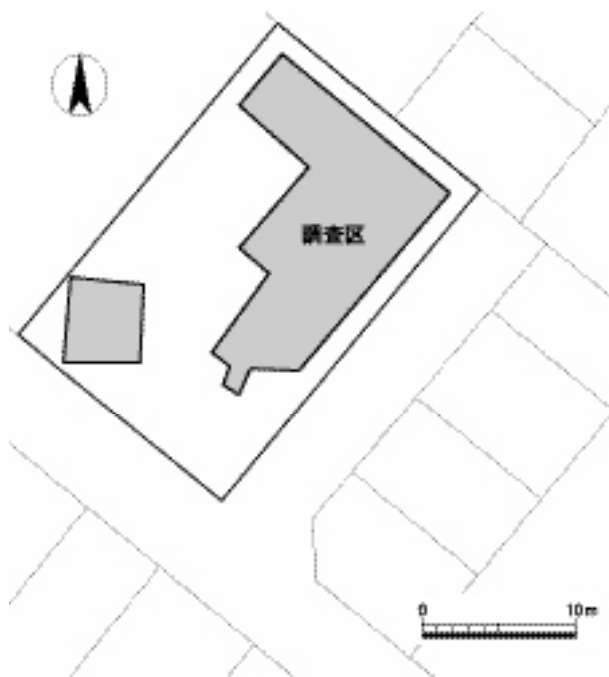


図 162 調査区配置図 (1 : 500)

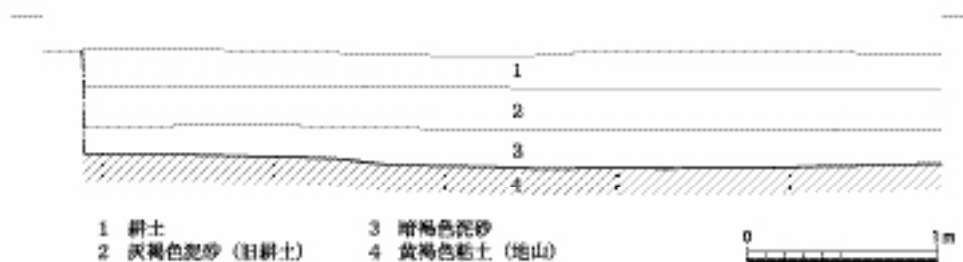


図 163 南壁断面図 (1 : 40)

た遺構は確認できなかった。しかし、包含層からは古墳時代から飛鳥時代の遺物が出土しており、周辺に遺構の存在が想定できる。

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

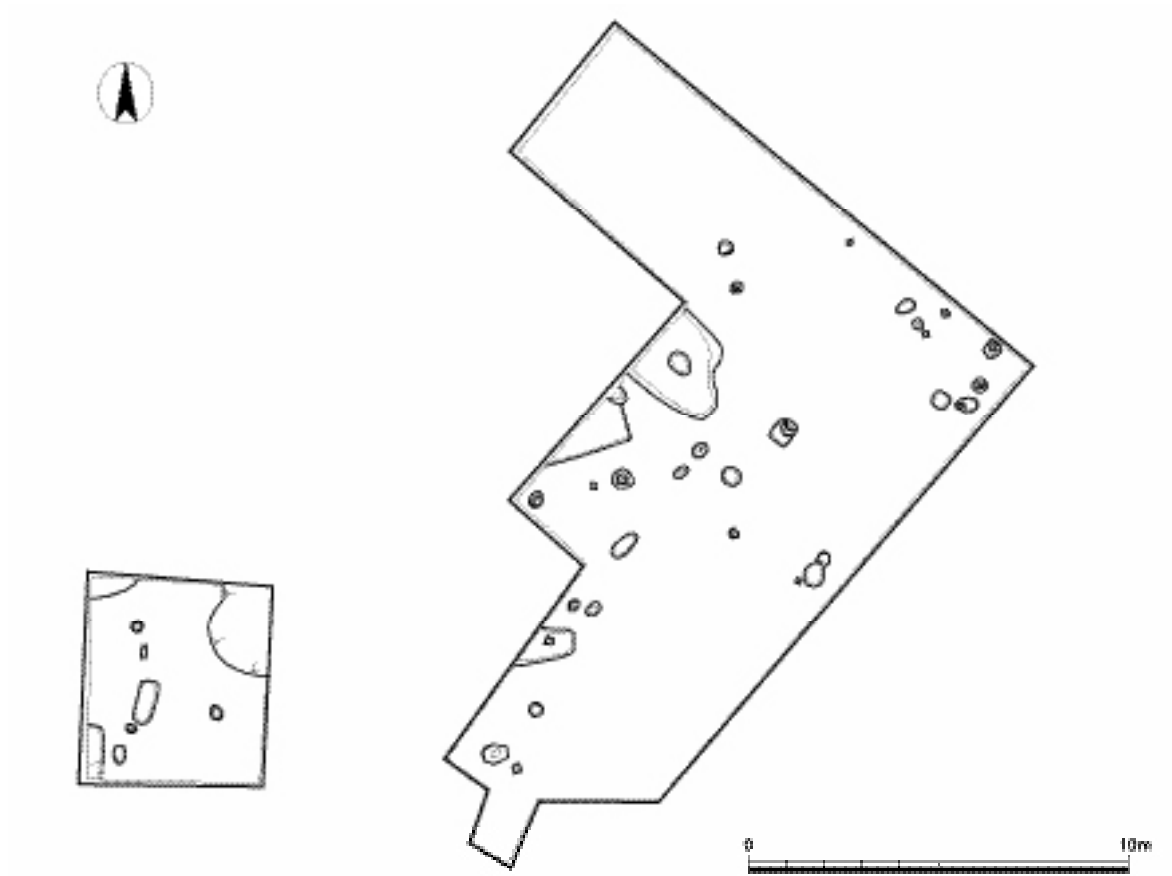


図 164 遺構平面図 (1 : 200)



図 165 2区全景 (西から)

39 中臣遺跡 9次調査

経過 今回の発掘調査は、児童厚生施設新設工事に伴うものである。当地は中臣遺跡の北西部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は丘陵の東斜面に立地する。中臣遺跡9次調査にあたる。

調査地内に逆L字形の調査区を設定した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層整地層(0.15 m)、第2層耕土・床土(0.15 m)、第3層暗茶褐色泥砂層(0.1 m：中世包含層)、第4層黄褐色砂泥層(0.3 m：平安時代から鎌倉時代包含層)、第5層黄色砂礫(地山)である。第4・5層上面で各時期の遺構を検出した。

第1面では、鎌倉時代から室町時代の土壌、掘立柱建物、溝などを検出した。土壌は北部で検出し、形状は円形・方形など多様で、規模も様々である。掘立柱建物は東西2間、南北2間を検出した。方位は北で西に振る。柱間は東西3 m等間、南北2.4 m等間である。柱穴は径0.2～0.3 m、深さ0.1～0.3 mで、中央に根石を据えている。溝は北部では南北方向、南端部では東西方向である。規模は幅0.3～0.8 mまで多様であり、途中で途切れるものが多い。

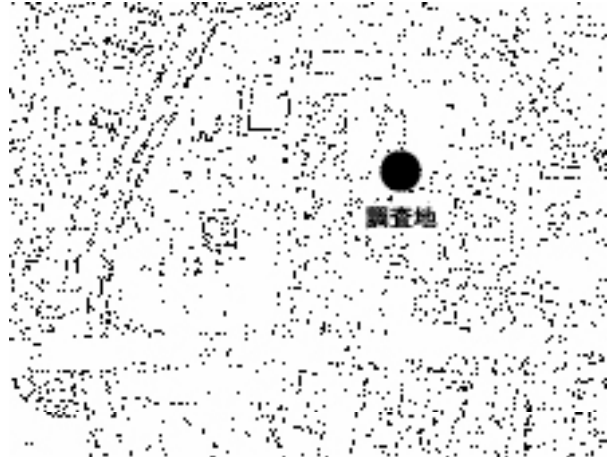


図 166 調査位置図 (1 : 5,000)

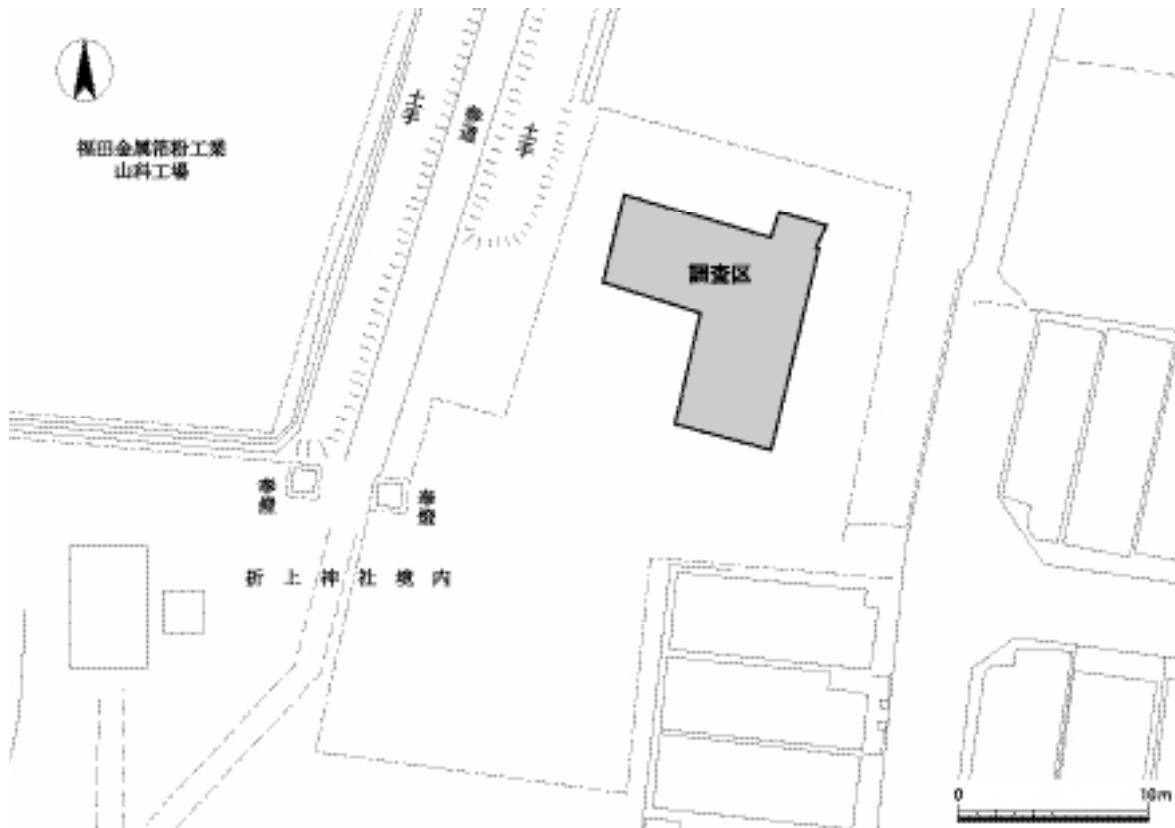


図 167 調査区配置図 (1 : 400)

第2面では、平安時代から鎌倉時代の土壌、柱穴、柵、溝などを検出した。土壌は全域に散在し、形態・規模ともに多様である。柱穴も全域に散在し、径0.2～0.4 m、深さ0.1～0.3 mで、北部では建物としてまとまるものも見られる。柵は南端部で検出し東西方向である。間隔は0.9～1.2 mである。

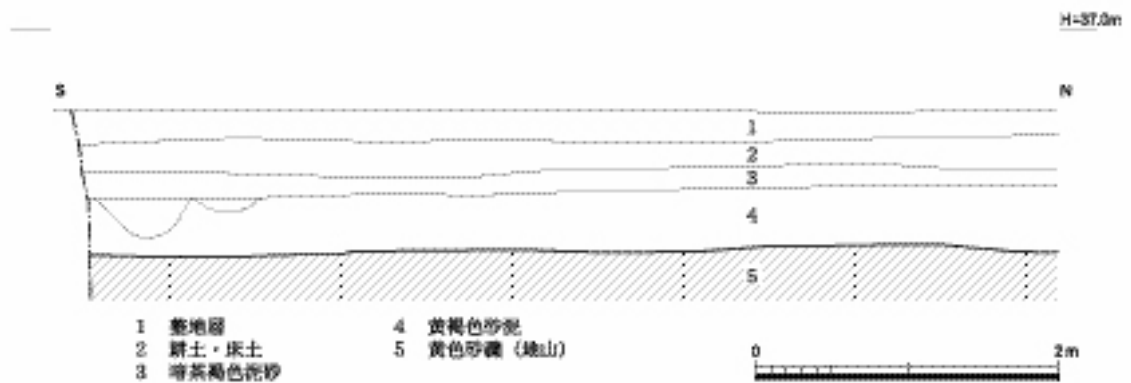


図 168 西壁断面図 (1 : 50)

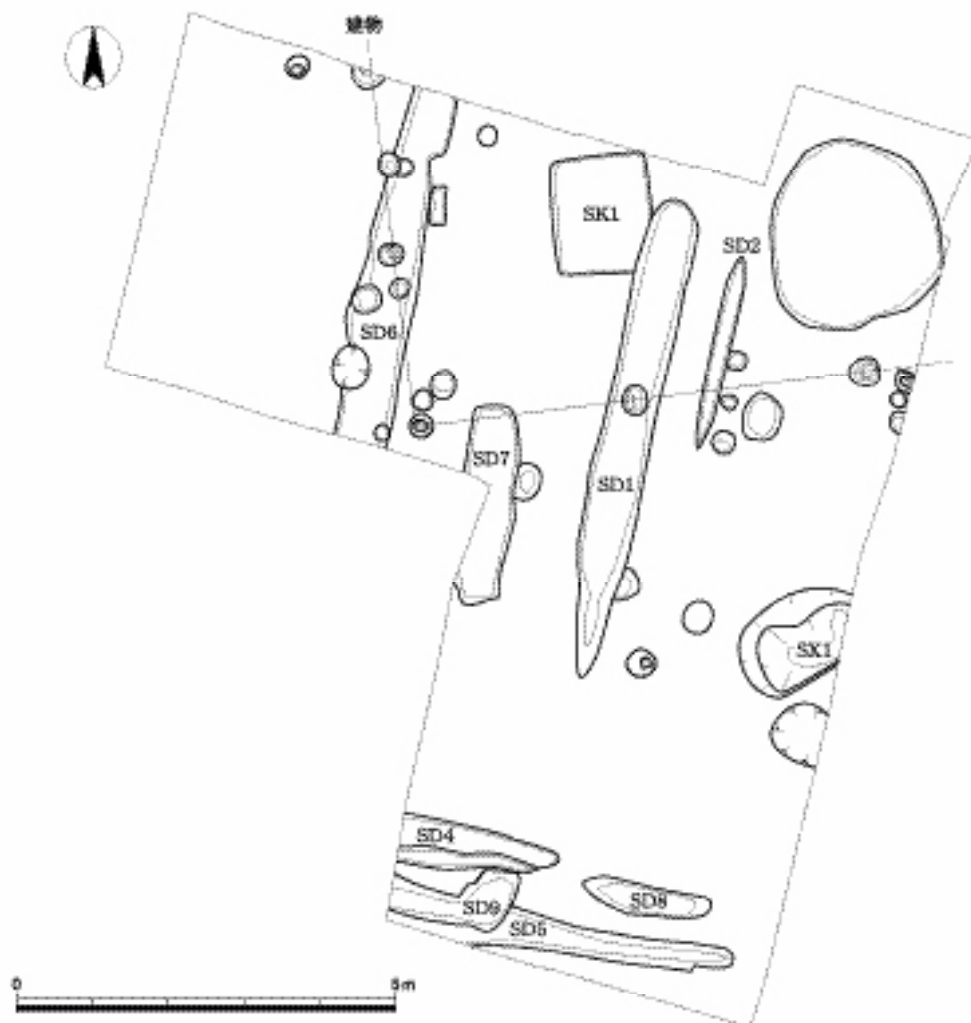


図 169 第1面遺構平面図 (1 : 100)

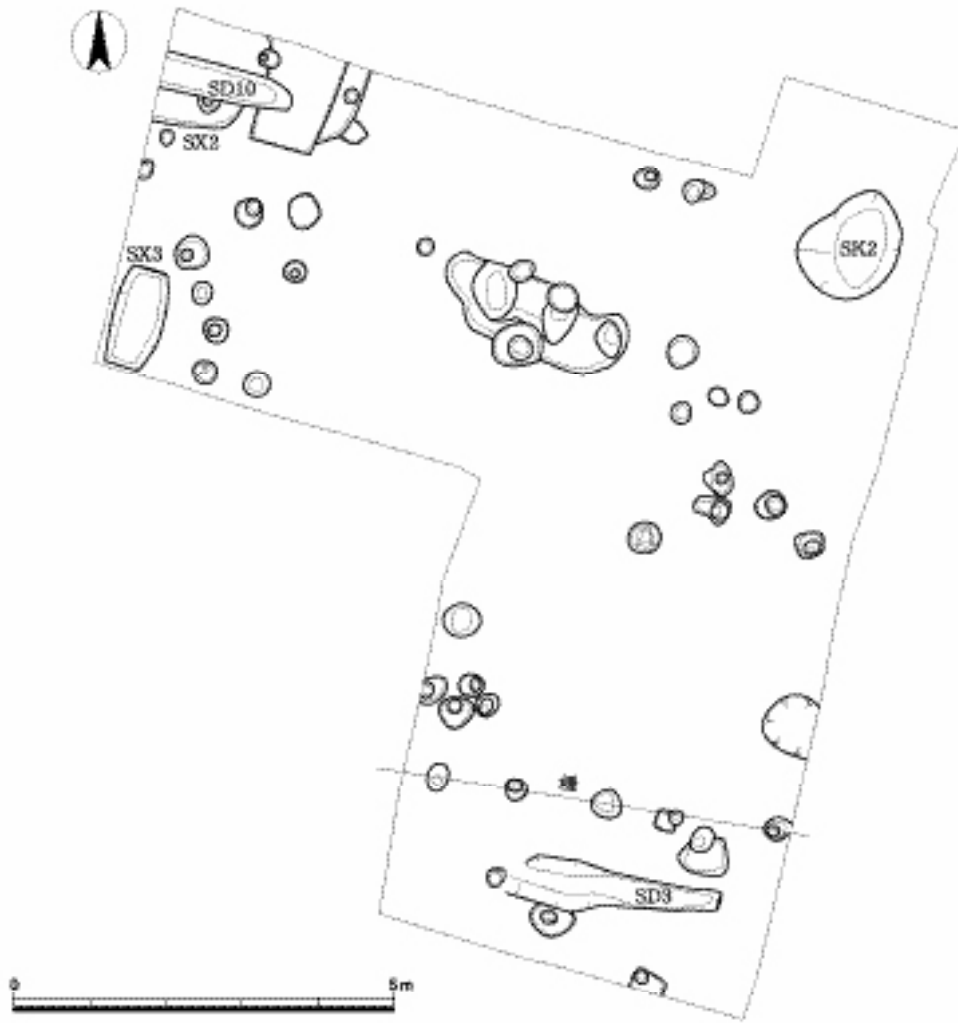


図 170 第 2 面遺構平面図 (1 : 100)

遺物 遺物は整理箱にして 2 箱出土した。出土遺物の種類には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、磁器などがある。時期は、平安時代中期から室町時代である。

小結 今回の調査は、平安時代から室町時代の遺構を検出し、当遺跡の変遷を知る上で貴重な発見となった。



図 171 調査区全景 (南から)

40 中臣遺跡 10 次調査 (図版 13・14)

(1) 10 次調査 A・B 区

経過 今回の発掘調査は、宅地建設に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵南端段丘下に立地する。中臣遺跡 10 次調査で、6 次調査の東側に位置する。

調査地内に東西 30 m、南北 15 m の三角形 (A 区) と東西 23 m、南北 12 m の長方形 (B 区) の調査区を設定した。

遺構 調査地の基本層序は、第 1 層耕土層 (0.1 m)、第 2 層床土層 (0.1 m)、第 3 層黒褐色泥砂層 (弥生時代末期から平安時代包含層 : 0.1 m)、第 4 層暗褐色砂泥層 (弥生時代末期から平安時代包含層 : 0.1 ~ 0.4 m)、第 5 層黄褐色粘土層 (地山) である。第 4 層は東側で薄く南西部は厚く、地山も南西部が低

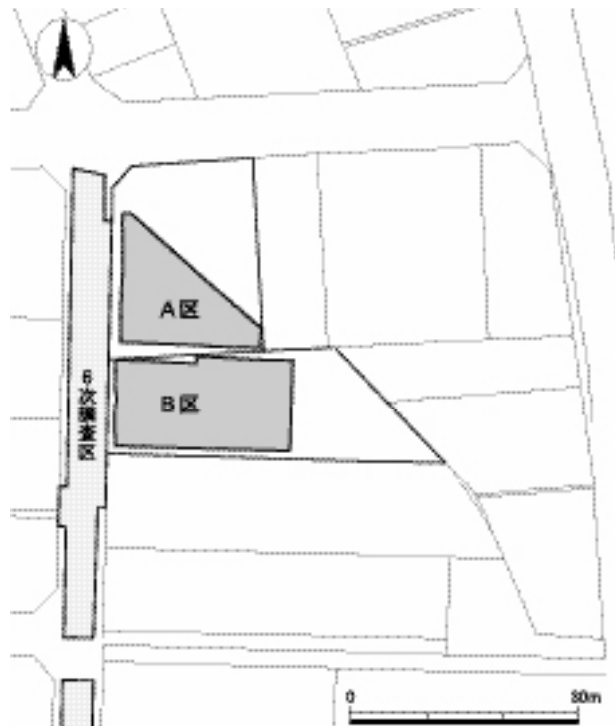


図 172 A・B 区調査区配置図 (1 : 1,000)

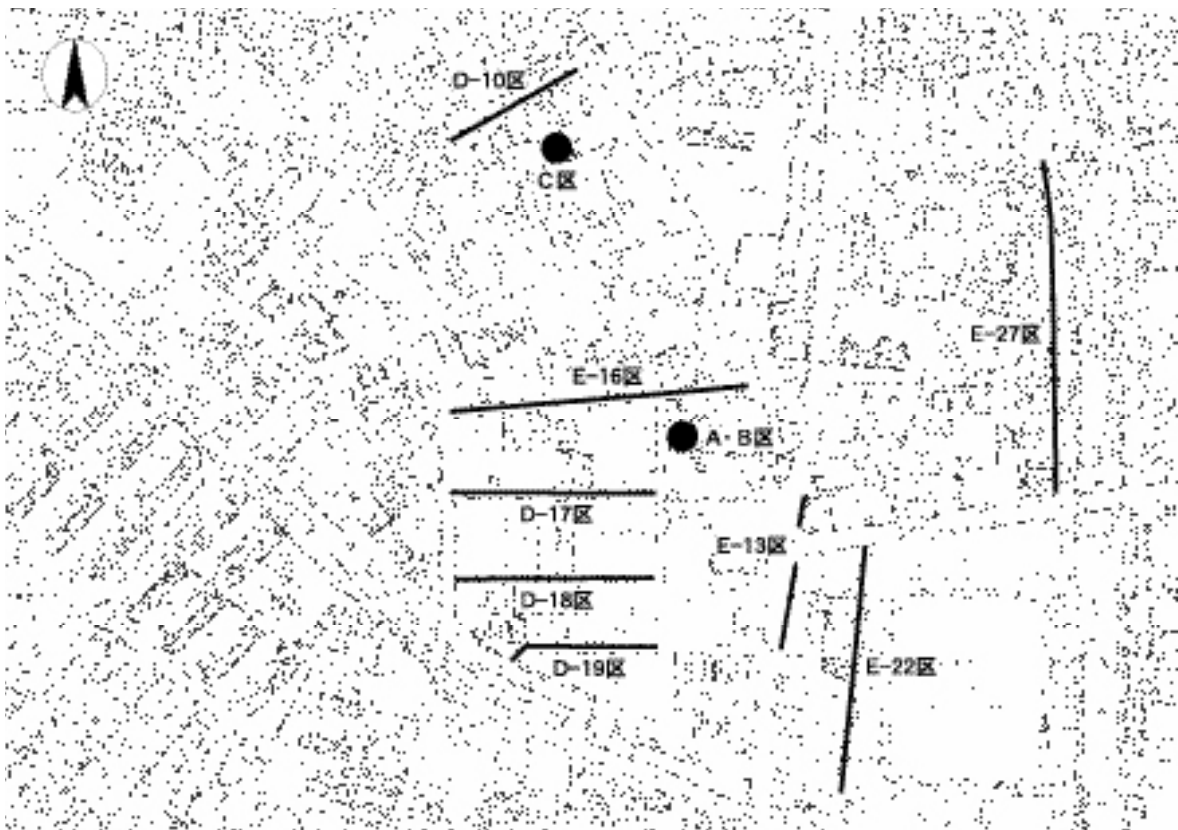


図 173 調査位置図 (1 : 5,000)

くなっていることから、井戸と掘立柱建物を建設する際の整地層と考えられる。第4層上面で各時期の遺構を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物、溝、井戸、土壇などである。

全域で柱穴を多数検出したが、建物としてまとまったのは4棟と柵1条である。A区では西側

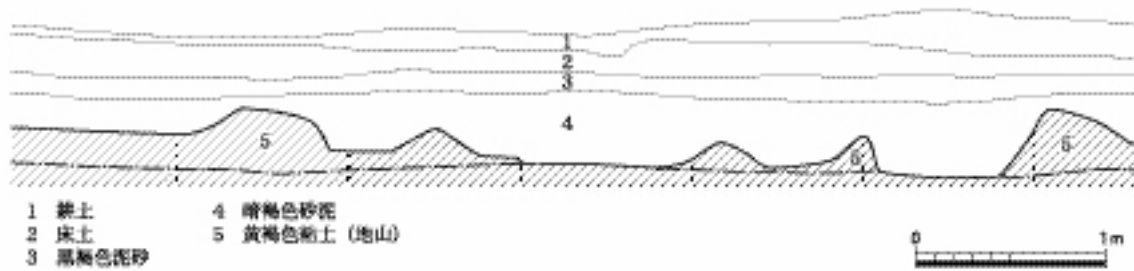


図 174 B区南壁断面図(1:40)

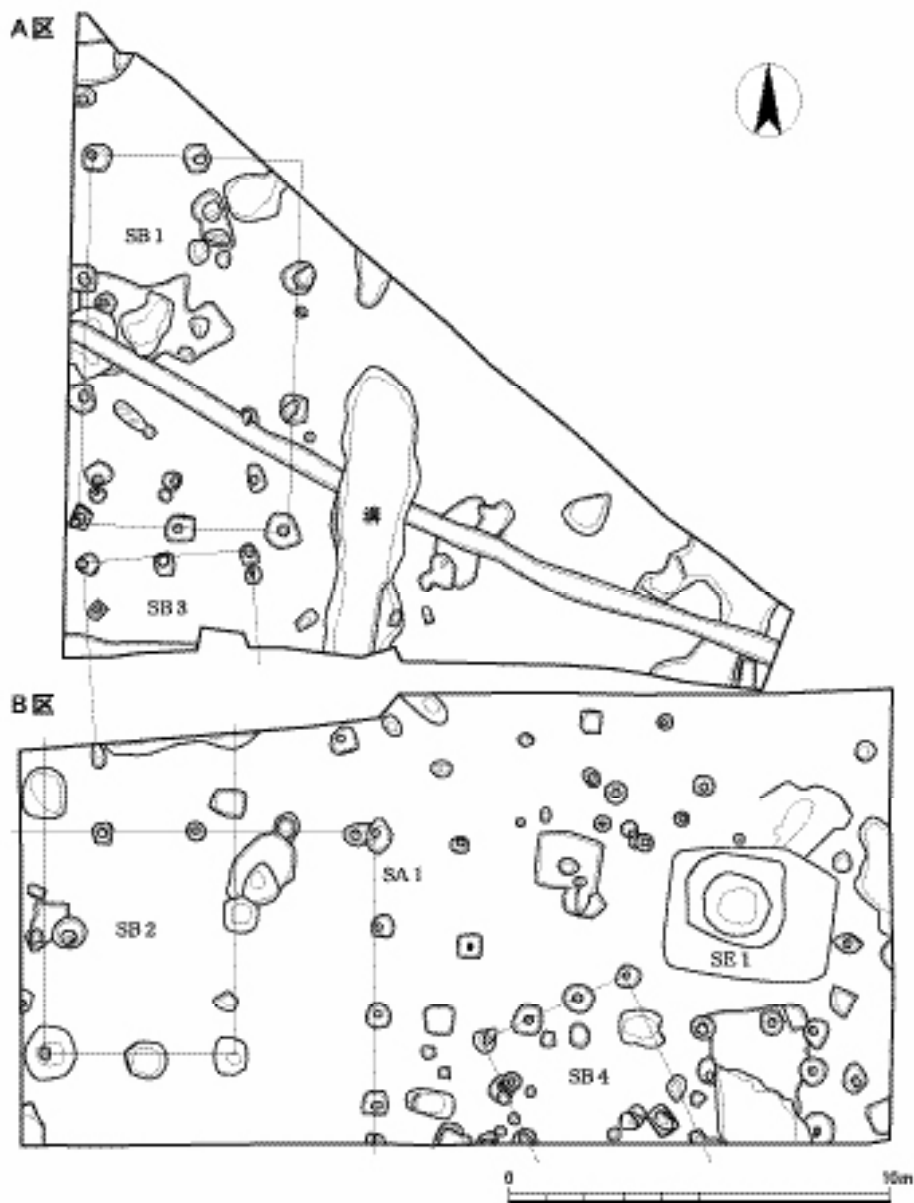


図 175 A・B区遺構平面図(1:200)

で2間×3間南北棟（SB 1）とその南側でB区にかけて2間×おそらく1間以上の建物（SB 3）を検出した。SB 1は梁間2.7m、桁行3.2mで、柱掘形は0.7～0.9mである。B区では西側で2間×2間以上の南北棟（SB 2）と東側で3間×おそらく3間以上の南北棟（SB 4）を検出した。SB 2は梁間2.5m、桁行3.6mで、柱掘形は1～1.5mと大きい。SB 4は梁間1.4m、桁行1.5mで、柱掘形0.4～0.8mである。方位は北で西に振れる。SB 1とSB 2は柱筋は通らない。柵SA 1はSB 2の東に南北方向の柱列を3間と北端の柱穴で西に折れる東西方向の3間分を検出した。柱間は2.4mで南と西は調査区外に延びる。溝は、A区中央で検出した。南北溝で幅1.7m、深さ0.7mで、断面はU字形である。

井戸はB区東側で検出した。掘形は4.4m×3.5mの隅丸長方形で深さ3.2mである。中央に約0.05mの板を円形に18枚組む。板の下部には^納を穿ち組み合わせる。埋土は上層が礫と焼土、下層は泥土で木製品を多量に含む。

土壌は全域に散在し、不定形で、大きさも様々である。

遺物 遺物は整理箱で25箱出土した。遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉

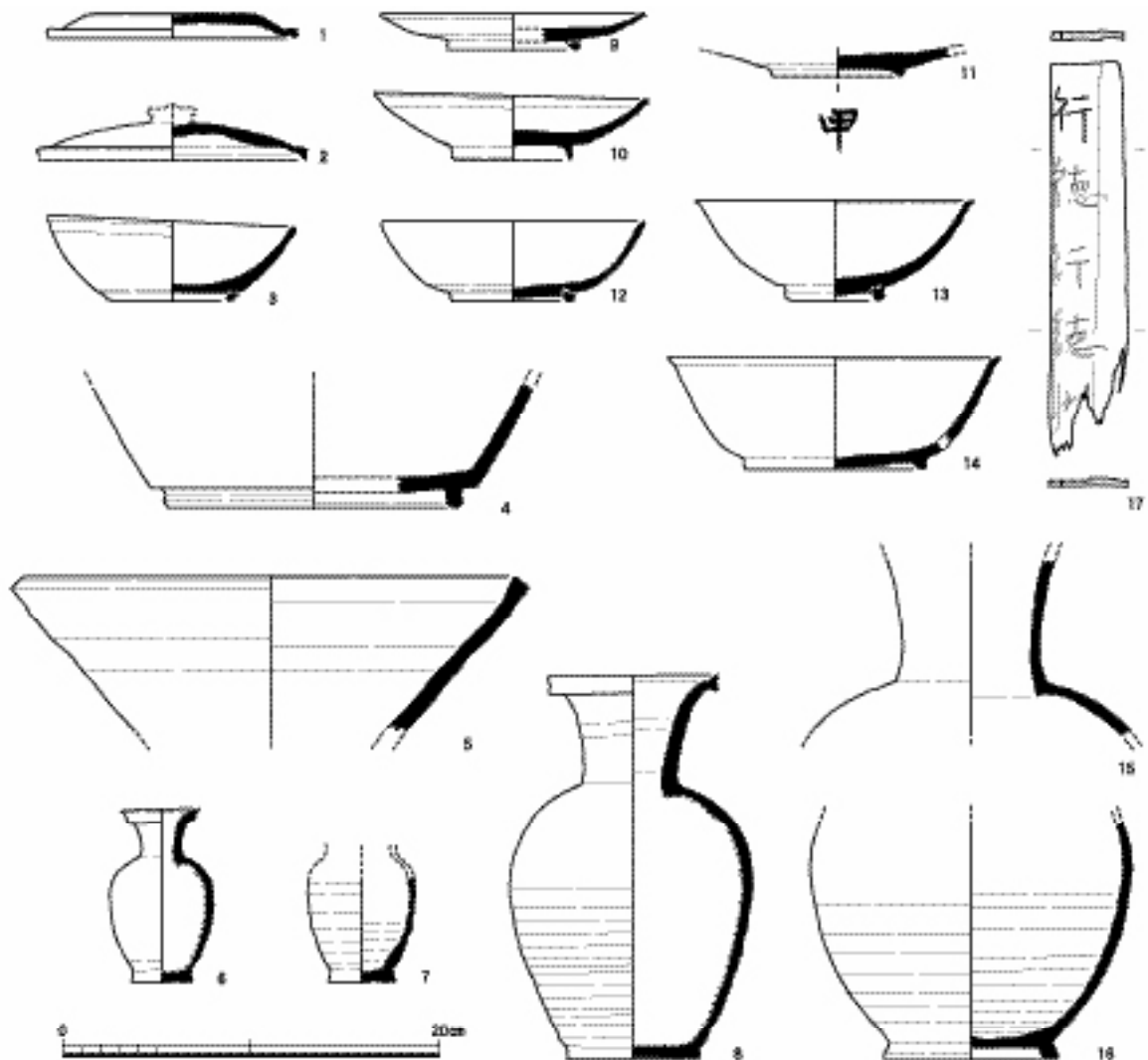


図 176 B区SE 1出土遺物実測図（1：4）

陶器、灰釉陶器、瓦、木製曲物・斎串・木簡などがある。時期は、弥生時代から平安時代である。平安時代の遺物の大半は井戸から出土し、木製品はすべて井戸下層から出土した。

SE 1 出土遺物（図 176）には、須恵器の蓋（1・2）、杯（3・4）、鉢（5）、壺（6～8）、灰釉陶器の皿（9～11）、椀（12～14）、壺（15・16）、木簡（17）がある。蓋（2）は宝珠つまみがはずれているが、蓋（1）はつまみが付かない。須恵器壺は大（8）と小（6・7）がある。灰釉陶器皿（11）には底部外面に「甲」、木簡（17）には「行徳行徳□」と墨書されている。9世紀中頃に属する。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構を多数確認し、同時期の遺物もまとめて出土した。このような時期の遺構が明らかになったのは初めてである。建物の規模、井戸内出土遺物などからかなり上流階級の人々の住居を想定でき、勸修寺の旧地に住んでいたと言われる宮道弥益を中心とした「宮道氏」との関連が考えられる。

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

（2）10次調査C区

経過 今回の発掘調査は、道路建設に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上に立地する。中臣遺跡 10次調査にあたる。

調査地内に東西約 17 m、南北 14 m の長方形の調査区を設定した。

遺構 調査地の基本層序は、第 1 層耕土、第 2 層床土層、第 3 層暗褐色砂泥層（地山）である。第 3 層上面で近世の耕作に関する遺構を検出したが、古い時期の遺構は未検出である。

遺物 遺物は出土していない。

小結 今回の調査では、遺構は検出できず、周辺の状況から考え、地山面が削平を受けている



図 177 C区調査区配置図（1：1,000）

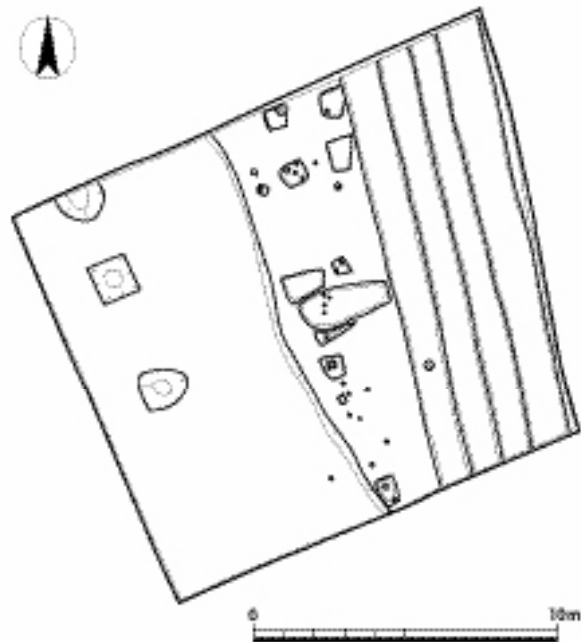


図 178 C区遺構平面図（1：250）

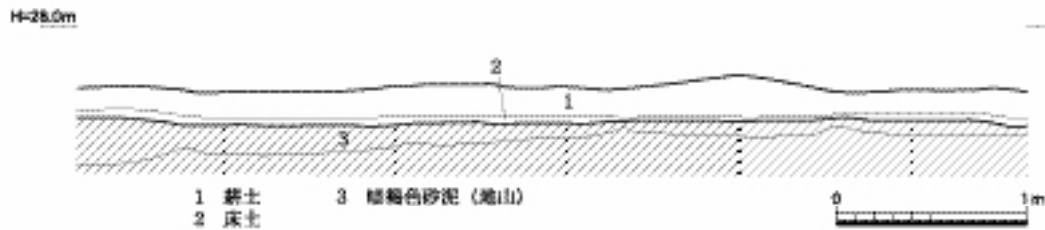


図 179 C区北壁断面図 (1 : 40)

と推定できる。しかし、昭和 49 年度土地区画整理市街地化道路 10 号線では地山面で土壌を検出しており、周辺では部分的に遺構が残っている可能性がある。

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

(3) 10 次調査 D-10 区

経過 今回の発掘調査は、道路 (10 号線) 建設に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上に立地する。中臣遺跡 10 次調査にあたり、5 次調査の東側に位置する。

調査地内に東西 3 m、南北 8 ~ 22 m の長方形の調査区を 5 箇所設定した。

遺構 調査地の基本層序は、第 1 層耕土層 (0.25 m)、第 2 層床土 (約 0.05 m)、第 3 層暗褐色砂泥層 (約 0.1 m)、第 4 層黒褐色砂泥層 (地山) である。第 4 層上面では遺構は未検出である。

遺物 遺物は土師器片、陶磁器、椀瓦が少量出土した。

小結 今回の調査では、遺構は検出できず、周辺の状況から考え、地山面が削平を受けていると推定できる。しかし、周辺調査では遺構を検出しており、部分的に遺構が残っている可能性がある。

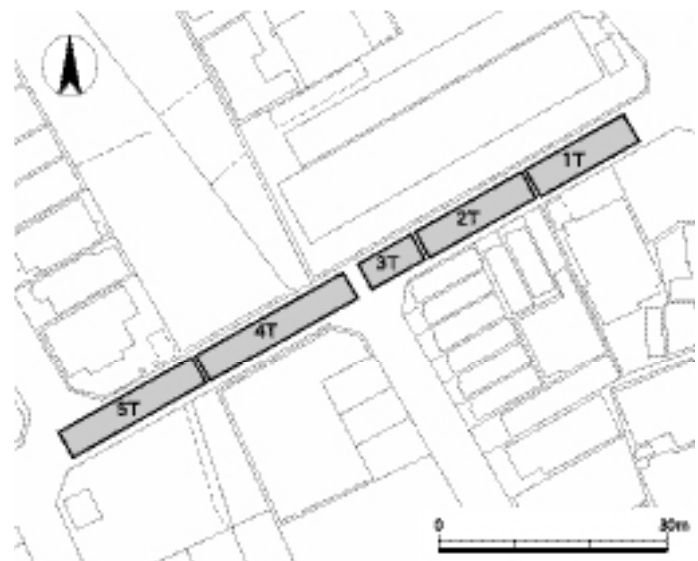


図 180 D-10 区調査区配置図 (1 : 1,000)

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

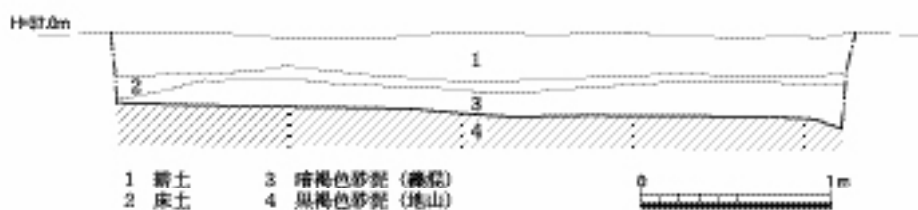


図 181 D-10 区 1 トレンチ西壁断面図 (1 : 40)

(4) 10次調査D-17区

経過 今回の発掘調査は、道路建設（17号線）に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上西斜面に立地する。中臣遺跡10次調査にあたる。

調査地内に東西20m、南北3m（1・2トレンチ）と東西55m、南北3.5m（3・4トレンチ）の長方形の調査区を2箇所設定した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層（0.2m）、第2層床土層（0.3m）、第3層暗茶褐色砂泥層（0.1m）、第4層黒褐色砂泥層（0.1m）、第5層暗褐色砂礫層（地山）である。トレンチ東部では第3層までで地山に達するが、西半では第3層の堆積が厚くなり第4層の堆積が認められる。現在の水田面は西側が一段低くなっており、地山面も東から西へ低くなる。第5層上面で各時期の遺構を検出したが、3・4トレンチの東側のみで検出しただけで、以西、および1・2

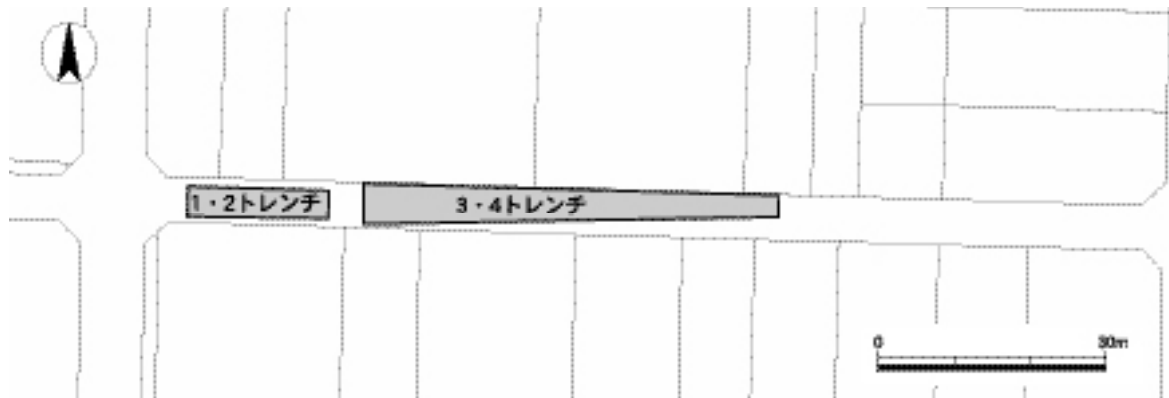


図182 D-17区調査区配置図（1：1,000）

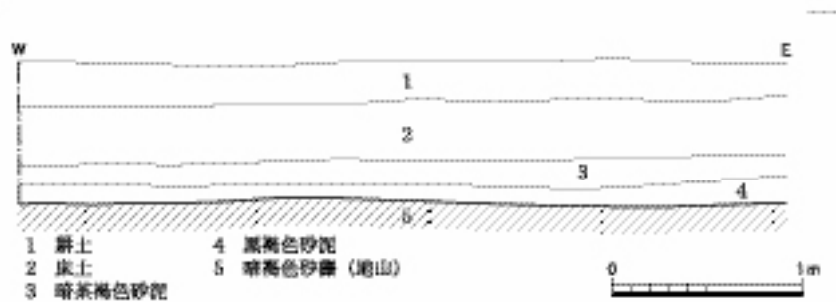


図183 D-17区2トレンチ北壁断面図（1：40）

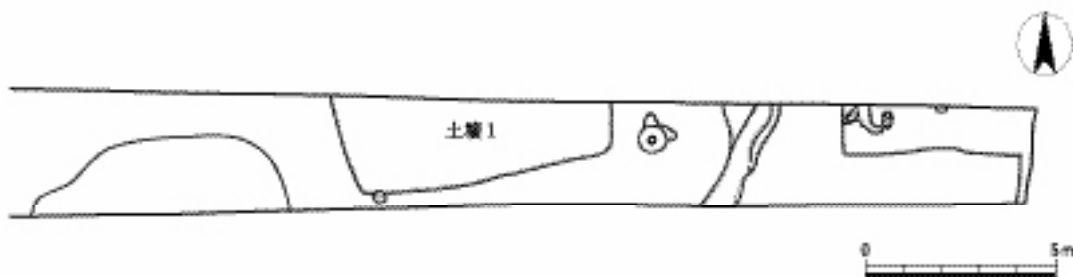


図184 D-17区3・4トレンチ平面図（1：200）

トレンチでは全く遺構は確認できなかった。検出した遺構は、溝、土壇、柱穴などである。

溝はトレンチ東部で検出し、南北溝で幅 0.9 m、深さ 0.35 m で、断面は U 字形である。底部で須恵器杯身 2 個体・蓋 3 個体、土師器長胴甕がそのまま押しつぶされた状態で検出された。

土壇もトレンチ東部で数箇所検出し、円形のものと同方形のものがある。

土壇 1 は一辺 7 m の方形で竪穴住居に近い形状を示すが、床面・主柱穴・壁溝など竪穴住居としての特有な施設は検出できず性格不明の土壇とした。遺構はすべて古墳時代に属する。

遺物 遺物には、土師器、須恵器などがある。時期は、古墳時代で 6～7 世紀である。

小結 今回の調査では、後世の削平を大きく受けており、遺構の残存状況は悪かった。ただ、古墳時代の遺構をわずかながら検出しており、周辺に同時期の遺構のある可能性が高い。

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

(5) 10 次調査 D -18 区

経過 今回の発掘調査は、道路建設（18 号線）に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上西斜面に位置し、東北から西南に緩やかに下降する。中臣遺跡 10 次調査にあたる。

調査地内に西から 1 トレンチ（東西 20 m、南北 3 m）、2 トレンチ（東西 25 m、南北 3 m）、3 トレンチ（東西 20 m、南北 3 m）、4 トレンチ（東西 25 m、南北 6 m）、5 トレンチ（東西 25 m、南北 6 m）の長方形の調査区を 5 箇所設定した。

遺構 調査地の基本層序は、第 1 層耕土層（0.2 m）、第 2 層旧耕土層（0.15 m）、第 3 層床土層（0.05

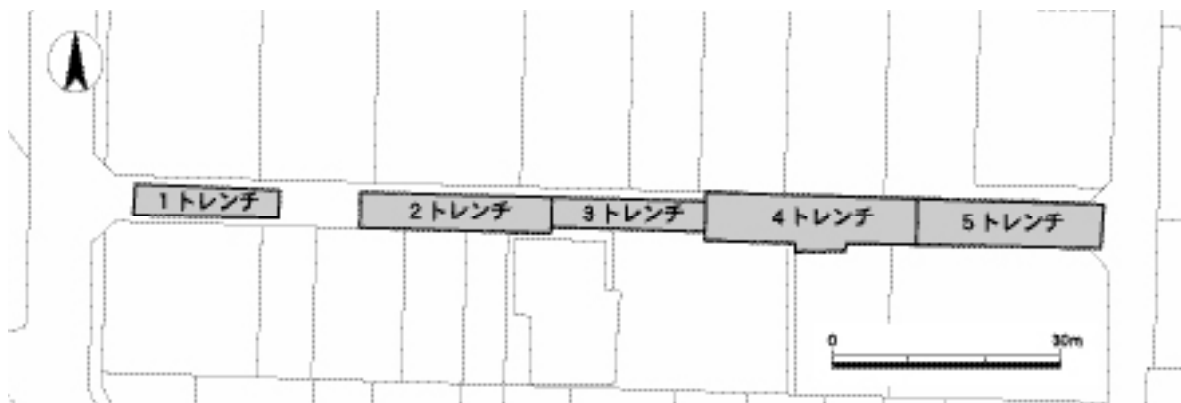


図 185 D -18 区調査区配置図（1：1,000）

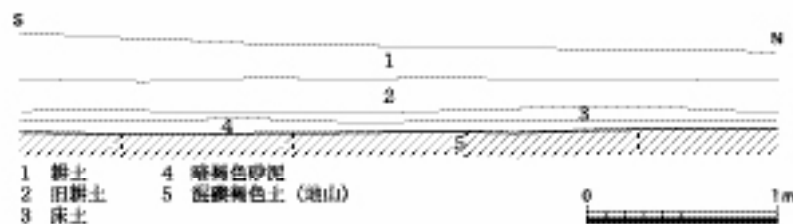


図 186 D-18 区 5 トレンチ西壁断面図（1：40）

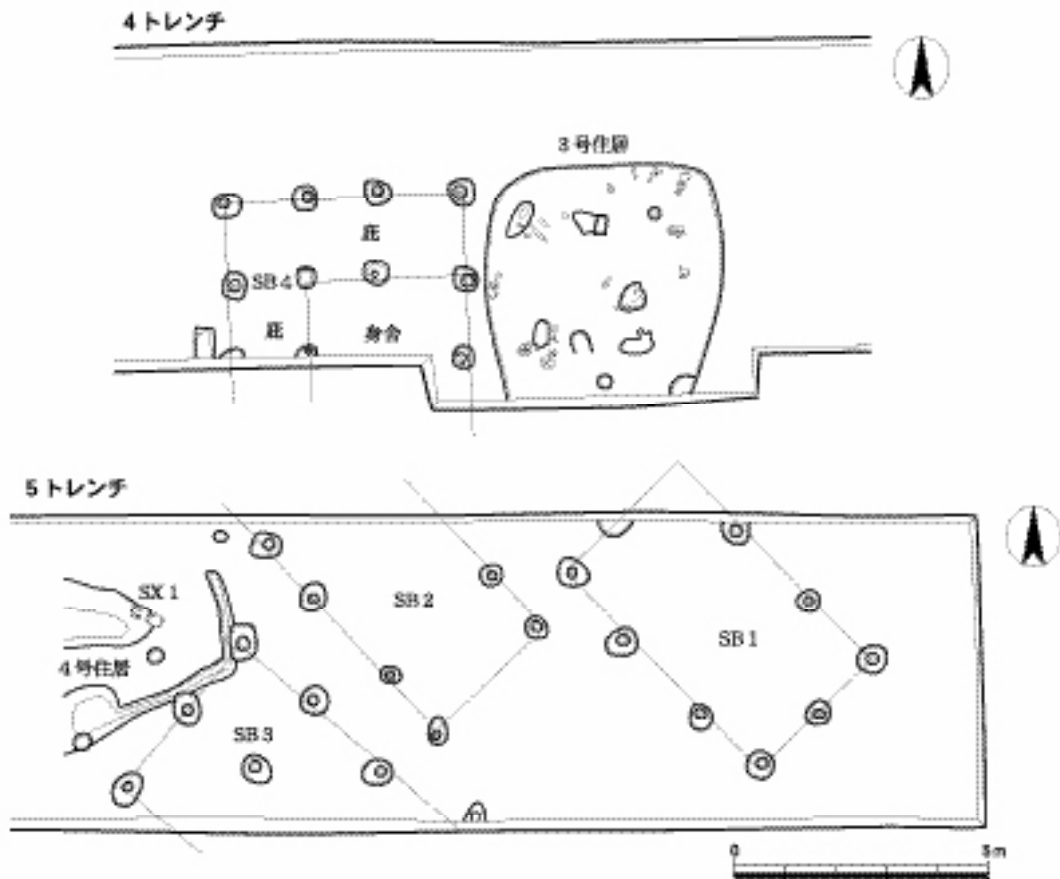


図 187 D-18 区遺構平面図 (1 : 150)

m)、第4層暗褐色砂泥層 (0.1 m)、第5層混礫褐色土層 (地山) である。第4・5層上面で遺構を検出した。遺構は4・5トレンチに集中し、竪穴住居、掘立柱建物、落込みなどがある。

竪穴住居は4トレンチで1棟(3号住居)、5トレンチで1棟(4号住居)を検出した。3号住居は、東西4.7mの隅丸方形で、深さは0.15mである。床面は不安定で、貼床は認められない。支柱穴は北側の2個は確実であるが、他は不明である。壁溝も認められない。3号住居では壁に沿って、土師器甕・壺・鉢・器台などが出土した。4号住居は北側が削平され、南壁・西壁の壁溝の一部が残存する。床面・支柱穴・規模は不明である。

掘立柱建物は4トレンチで1棟(SB 4)、5トレンチで3棟(SB 1～3)を検出した。SB 4は東西2間・南北1間以上の身舎に北・西に庇が付く建物である。柱間は梁間・桁行共に1.5mである。方向は真北である。SB 1～3はまつまり、方向は真北より45°西へ振れる。SB 1は2間×3間の建物で、梁間1.5m、桁行は中央間が2.0m、両側が1.6mである。SB 2は1間×3間以上の建物で北に延びる。梁間3m、桁行は中央間が2.1m、両側が1.5mである。梁間は2間であった可能性もある。SB 3は2間×3間以上の建物で南に延びる可能性がある。梁間・桁行共に1.8mである。建物内部にも柱穴があることから、間仕切り若しくは総柱の可能性もある。

4号住居検出面でSX 1を検出した。長胴の甕と取手付甕を合わせ口にしたもので、7世紀初頭とみられる。

遺物 遺物には、土師器、須恵器などがある。時期は、3号住居が3～4世紀頃、他は6～

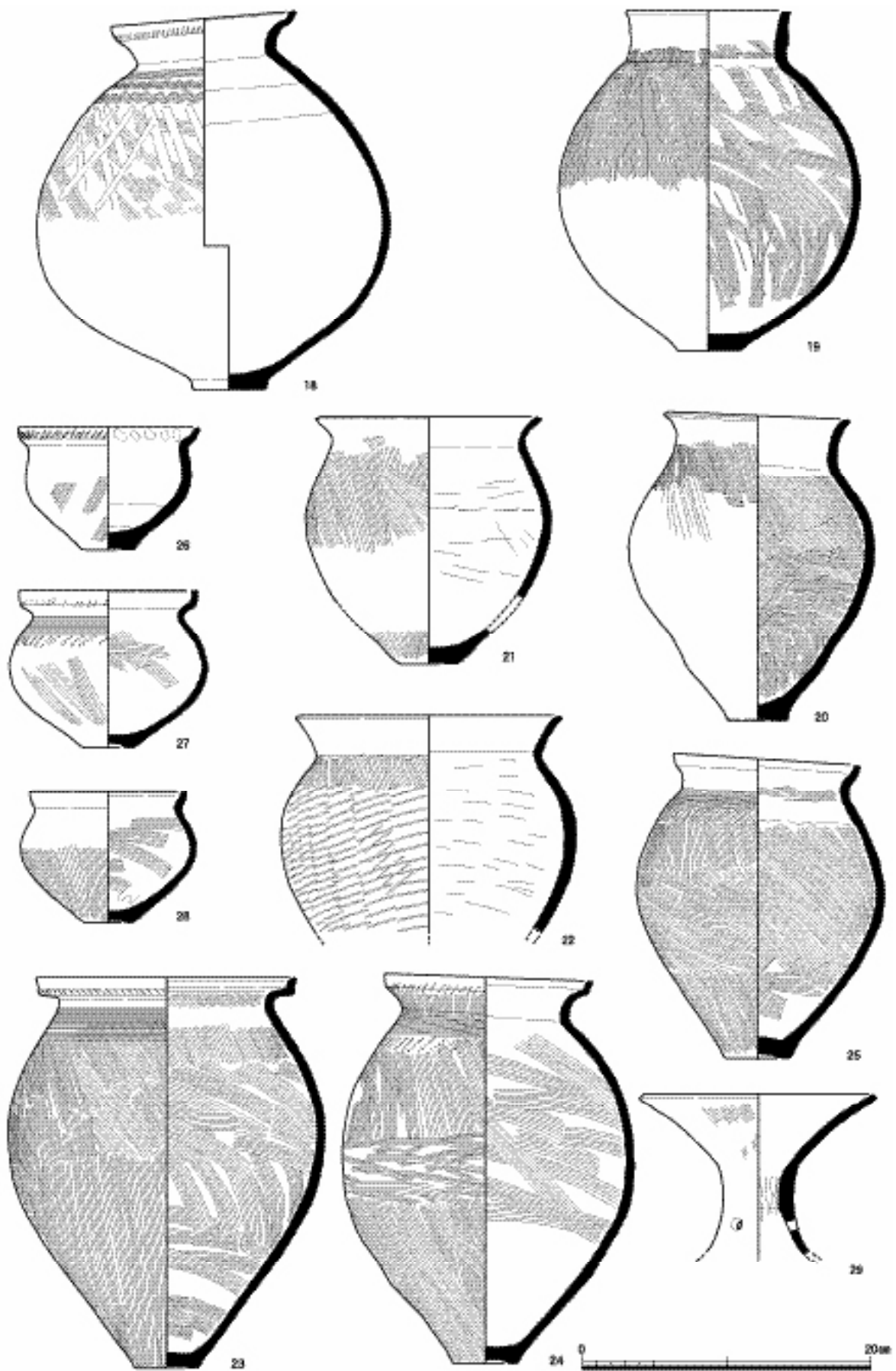


图 188 D-18 区 3 号住居出土土器实测图 (1 : 4)

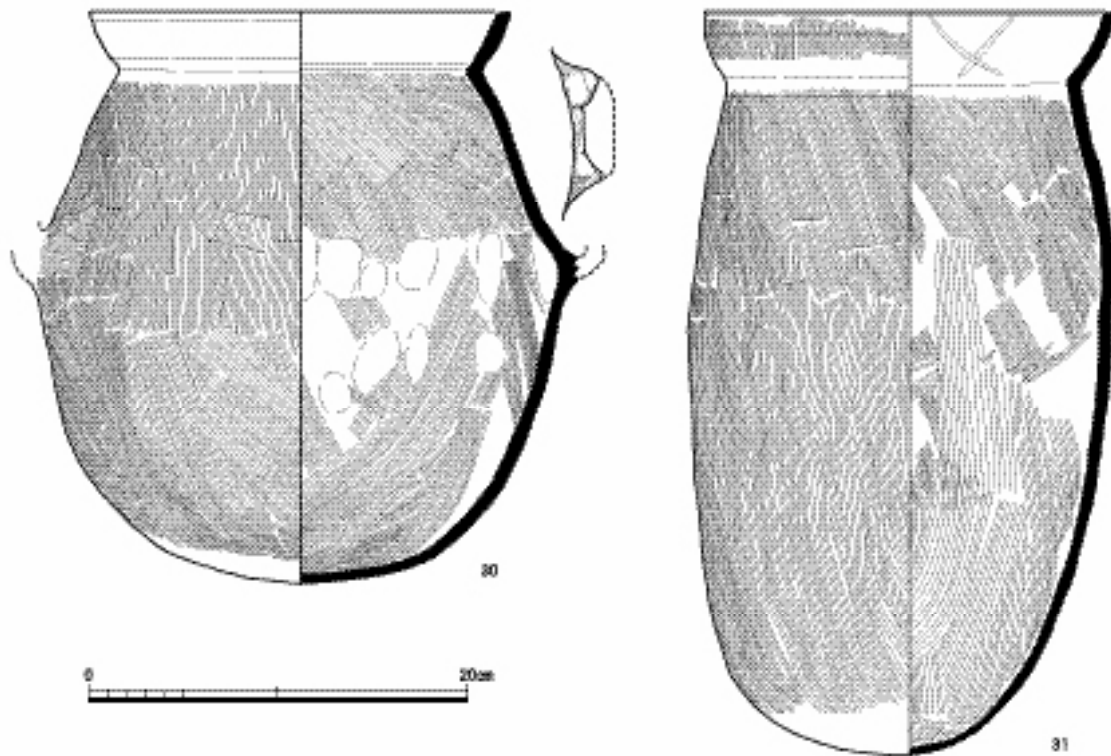


図 189 D -18 区 SX 1 出土土器実測図 (1 : 4)

7世紀である。3号住居出土土器(図188)には、壺(18~20)、甕(21~25)、鉢(26~28)、器台(29)がある。壺(18)は丸い体部に受け口状口縁をもつ。肩部に櫛描直線文と櫛描波状文、口縁部外面に列点文を施す。壺(19・20)は短頸壺で、19は直立する口縁部、20は口縁部がやや外反する。甕(21・22)はくの字口縁で、21は外面がハケ目、22は胴部がタタキ、肩部がハケ目である。甕(23~25)は受け口状口縁をもち、肩部や口縁部外面に列点文・櫛描直線文を施す。鉢(26~28)は受け口状口縁で、26・27は口縁部と頸部に列点文と櫛描直線文を施す。28は無文。器台(29)は脚部に円形透しを3箇所穿つ。弥生V-3~4様式に属する。

SX 1 出土土器(図189)には、取手付甕(30)と長胴甕(31)がある。30の取手付甕は、円形の体部中央部に上方へ反る取手を両側2箇所に貼り付け、くの字口縁をもつ。口縁部は内弯しながら立ち上がり、口縁端部に沈線を設ける。体部の内外面共にハケ目調整。31は長胴の甕で、くの字状の口縁が付く。口縁部は内弯しながら立ち上がり、口縁端部に内傾する端面を設ける。30と同様に体部内外面をハケ目調整。口縁部内面に「×」印のヘラ記号を施す。7世紀代に属する。

小結 今回の調査では、調査地東側で建物をまとめて検出でき、古墳時代の集落の変遷を考える上で貴重な資料となった。

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978年報告

(6) 10次調査D-19区

経過 今回の発掘調査は、道路(19号線)建設に伴うものである。当地は中臣遺跡範囲内にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上西斜面に位置し、東北から西南に緩やか

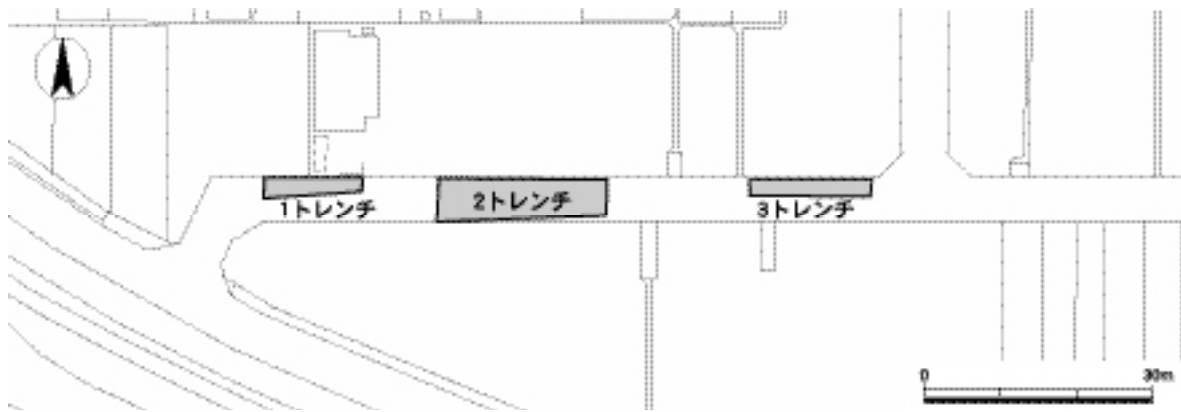


図 190 D-19 区調査区配置図 (1 : 1,000)

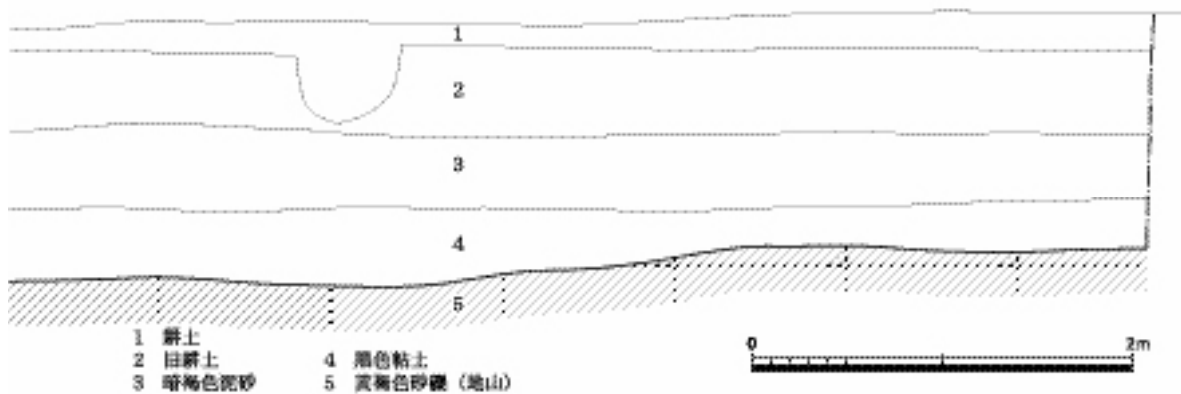


図 191 D-19 区 1 トレンチ南壁断面図 (1 : 40)

に下降する。東側水田と西側水田面では約 0.7 m 西側が低い。また、西側は安祥寺川に接している。中臣遺跡 10 次調査にあたる。

調査地内に西から 1 トレンチ (東西 13 m、南北 2 m)、2 トレンチ (東西 13 m、南北 4 m)、3 トレンチ (東西 8 m、南北 2 m) の長方形の 3 箇所の調査区を設定した。

遺構 調査地の基本層序は東部と西部では異なっている。西部 (1 トレンチ) では、第 1 層耕土層 (0.2 m)、第 2 層旧耕土層 (0.4 ~ 0.5 m)、第 3 層暗褐色泥砂層 (0.4 ~ 0.6 m)、第 4 層黒色粘土層 (0.2 ~ 0.4 m)、第 5 層黄褐色砂礫層 (地山) である。第 3 層には中世の土師器・陶器・瓦器・瓦などを含み、第 4 層からは多量の弥生時代末から古墳時代の土師器・須恵器が出土した。2 トレンチでは 1 トレンチの第 2 層と 3 層の間に灰褐色砂泥層が、第 3 層と 4 層の間に黒褐色混礫泥砂層がある。東部 (3 トレンチ) では、西部に比べ地山面も高くなっており、第 1 層耕土層、第 2 層床土層、第 3 層黒褐色混礫泥砂層、第 4 層黄褐色砂礫層である。3 トレンチの第 3 層は 17・18 号道路西部で見られた黒褐色砂泥・黒色粘土に類似し、15 号道路でも確認している。この層は粘質の腐植土層であることから、湿地であった可能性が高い。遺構は、3 トレンチ第 3 層上面で検出し、竪穴住居、土壇などである。

竪穴住居 (5 号住居) は 21 号道路に接した場所で検出した。形状・規模は不明であるが、炉・柱穴を確認したため竪穴住居と認識した。時期は弥生時代末期に属する。

遺物 遺物には、土師器、須恵器などがある。時期は弥生時代末期である。

小結 今回の調査では、竪穴住居を検出でき、弥生時代から古墳時代の集落の変遷を考える上で貴重な資料となった。

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

(7) 10次調査E-13区

経過 今回の発掘調査は、道路建設（13号線）に伴うものである。当地は中臣遺跡範囲内にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上南斜面に位置し、北から南に緩やかに下降し、北側の茶畑と南側の水田とでは南側が低い。また、西側は安祥寺川に近い。中臣遺跡10次調査にあたる。

調査地内に北から1トレンチ（東西5～7m、南北14m）、2トレンチ（東西6～7m、南北16m）、3トレンチ（東西5m、南北20m）の長方形の3箇所の調査区を設定した。その南では狭く、また水路などによってトレンチの設定は不可能であったため、その部分は道路工事の掘削に伴って立会調査を行った。

遺構 調査地の基本層序は第1層耕土層（約0.31m）、第2層床土層（0.1m）、第3層黄褐色泥砂層（約0.2m）、第4層黄褐色砂礫層（地山）である。遺構は、第4層上面で検出した。遺構は、溝、土壇などである。

溝は1トレンチで検出した。幅約1m、深さ約0.2mの南北溝で南側で広がる。

土壇は全域で検出し、不定形で、規模も様々である。遺構埋土からの遺物が少なく、時期は不明である。

遺物 遺物は、土師器片を少量検出したのみである。

小結 今回の調査では、溝・土壇を検出したが、



図192 E-13区調査区配置図（1：1,000）

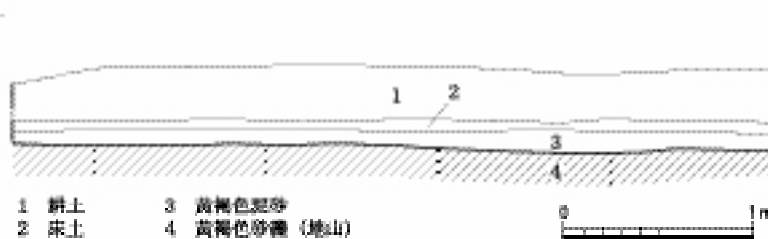


図193 E-13区3トレンチ北壁断面図（1：40）

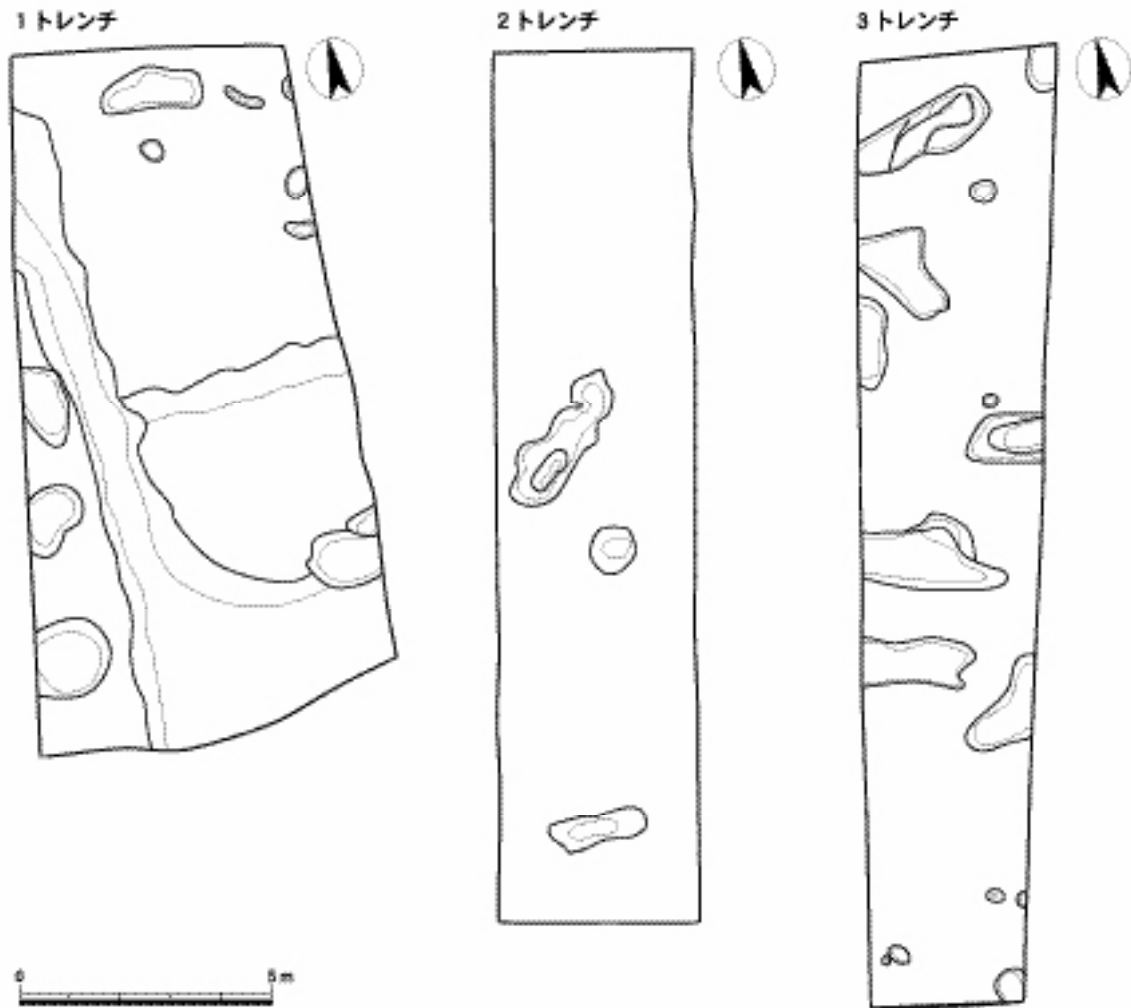


図 194 E -13 区遺構平面図 (1 : 150)

性格は不明である。1トレンチ付近で縄文時代早期の押型紋土器の表採が報告されていたが、今回の調査ではそれに関係した遺構は検出できなかった。

『中臣遺跡』建設省国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

(8) 10 次調査 E -16 区

経過 今回の発掘調査は、道路建設 (16 号線) に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上西斜面に位置し、北東から南西に緩やかに下降する。東側の 1～3 トレンチは高く西側はかなり低くなる。中臣遺跡 10 次調査にあたる。

調査地内に東から 1 トレンチ～6 トレンチ (幅約 4 m) の長方形の調査区を 6 箇所設定し、随時拡張した。

遺構 調査地の基本層序は、東側と西側で異なる。東側の 1～3 トレンチでは、近世以降の盛土・削平によって、地山面が盛土直下で見られた。遺構は検出できなかった。

西側の 4～6 トレンチでは、第 1 層耕土層 (0.15 m)、第 2 層床土層 (0.05 m)、第 3 層黒褐色泥砂層 (0.25 m)、第 4 層黄灰色砂質土層 (地山) である。4- 1・5・6 トレンチでは 3 層の下



図 195 E-16区調査区配置図 (1:1,500)

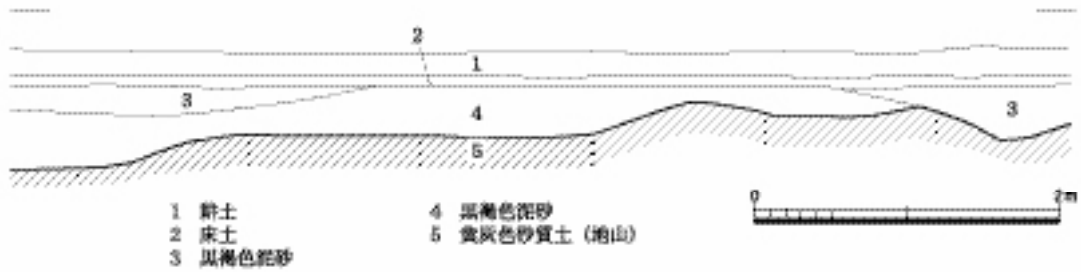


図 196 E-16区4-2トレンチ北壁断面図 (1:50)

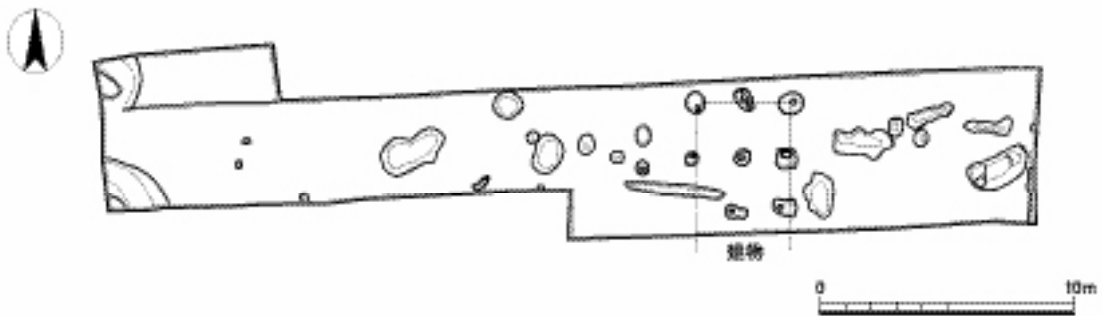


図 197 E-16区4トレンチ平面図 (1:300)

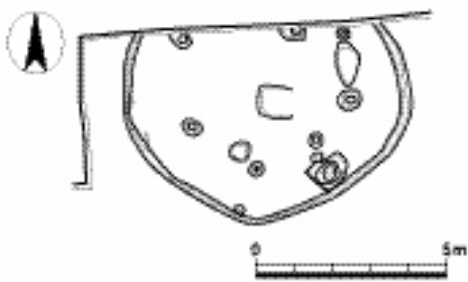


図 198 E-16区6トレンチ1号住居平面図 (1:200)

は地山となるが、4-2トレンチでは3層の下に黒褐色泥砂礫混が溝状に堆積し、弥生時代末から古墳時代の遺物が含まれていた。遺構は第4層上面で検出し、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壌、溝などがある。

竪穴住居は6トレンチで1棟(1号住居)を検出した。1号住居は、東西7.5mのややいびつな円形で、深さは0.2~0.4mである。床面は貼床は認められず、地山が床となっていた。壁溝は幅0.15mで全周する。

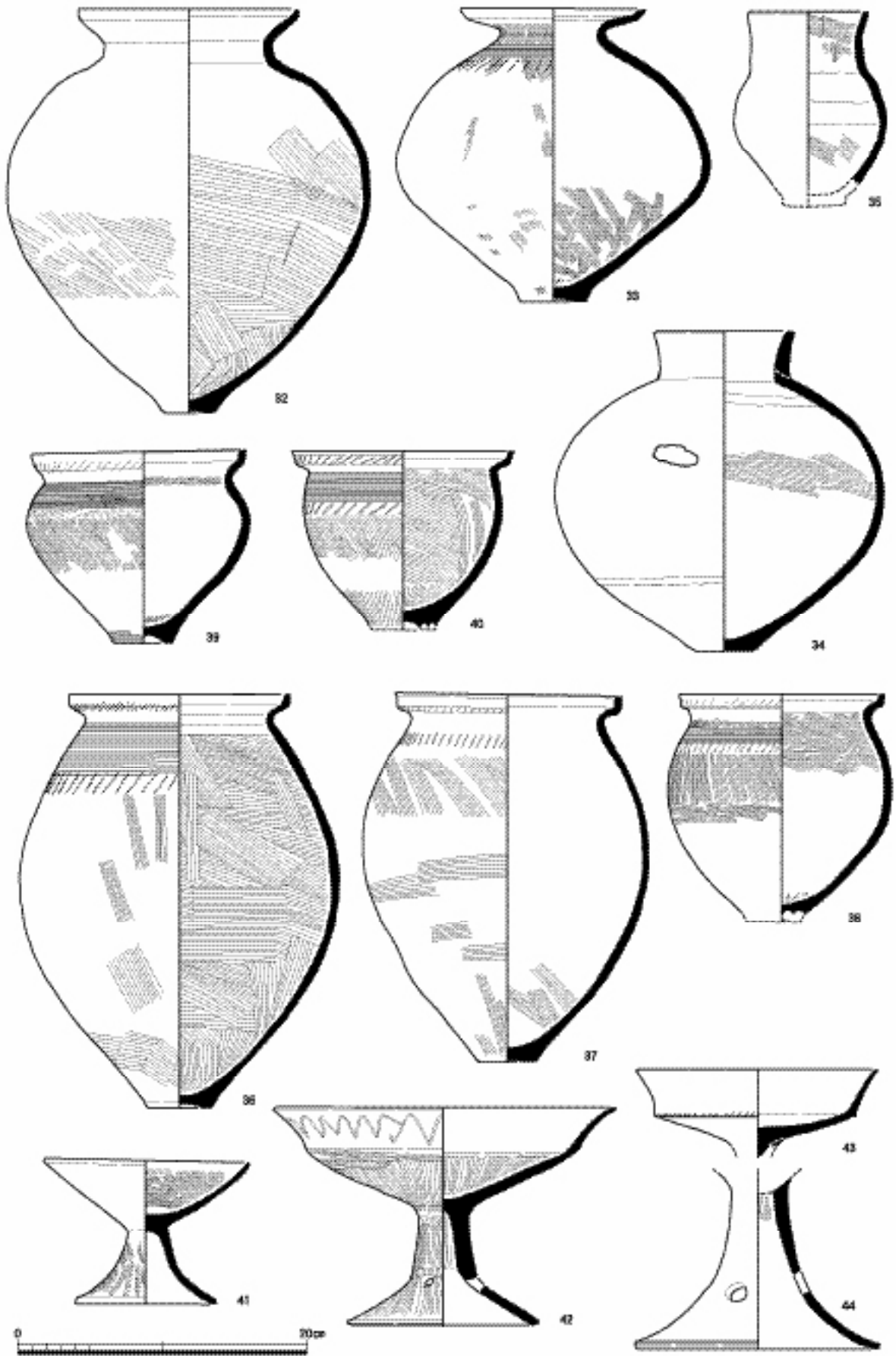


图 199 E-16 区 1 号住居出土土器实测图 1 (1 : 4)

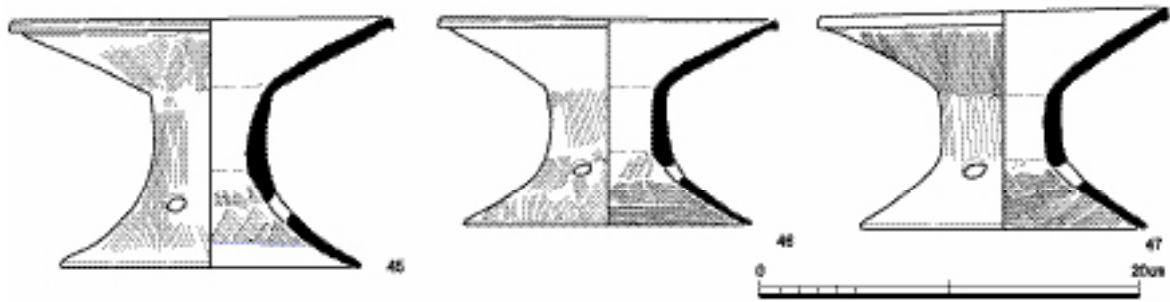


図 200 E-16 区 1 号住居出土土器実測図 2 (1 : 4)

主柱穴は 6 個検出し、未調査分も合わせると 8 個と推定できる。柱穴径は 0.35 ～ 0.55 m、深さ 0.2 ～ 0.4 m である。床面南西部に 3 段掘形の土壌があり、高杯が逆に置かれていた。その他、柱穴と異なるピットもあるが、性格は不明である。床面・壁溝には焼土・炭化物が大量に存在し、覆土中にも焼土・炭化物が含まれ、この住居が火災を受けたと推定できる。

掘立柱建物跡は 4- 1 トレンチで 1 棟検出した。建物は 2 間 × 2 間以上の南北棟で南に延びる可能性がある。総柱で梁間・桁行共に 2 m である。方向は真北である。柱穴掘形は一辺 0.5 ～ 1 m で方形または円形である。

4- 2 トレンチで土壌を検出し、底部に曲物を据える。掘形は径 1 m、深さ 0.5 m で、埋土は 1 層である。

4- 2 トレンチで南北方向の落込みを検出した。自然流路と考えられる。埋土は 2 層で上層は第 3 層 (黒褐色泥砂)、下層は黒色粘質土で、一括して弥生時代から古墳時代である。

遺物 遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、石製砥石などがある。時期は、弥生時代から平安時代である。

1 号住居出土土器 (図 199・200) には、壺 (32 ～ 35)、甕 (36 ～ 38)、鉢 (39・40)、高杯 (41 ～ 44)、器台 (45 ～ 47)、砥石がある。32・33 は受け口状口縁の壺、34・35 は短頸壺である。33 は肩部に櫛描直線文と列点文を施す。34 の体部には焼成後の穿孔がある。甕 (36 ～ 38) いずれも受け口状口縁をもち、体部と口縁部に列点文と櫛描直線文を施す。鉢 (39・40) も受け口状口縁で、甕と同様な文様で飾っている。高杯 (41) は杯部が外方へまっすぐ広がり、42 と 43 は稜を有する。42 は口縁部外面にヘラで波状の暗文を施す。42 と 44 は脚部に 3 ヶ所の円形透しを穿つ。器台 (45 ～ 47) は 3 点とも同形状を呈し、脚部に 3 ヶ所の円形透しを穿つ。杯部の口縁端面は拡張させる。45 と 46 は口縁部端面に沈線を施す。弥生 V - 3 ～ 4 様式に属する。

南北方向の落込みからも同時期の小型壺・小型高杯・壺・甕・高杯・鉢・器台・手あぶり型土器などが出土した。4- 2 トレンチの土壌からは、平安時代後期の土師器皿、須恵器片が出土した。

小結 今回の調査では、各時期の遺構を検出し、当地の集落の変遷を考える上で貴重な資料となった。

『中臣遺跡』建設省国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

(9) 10次調査E-22区

経過 今回の発掘調査は、道路建設（22号線）に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部に
あたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上南斜面に位置し、北から南に緩やかに
下降し、北部は丘陵上、南部は旧安祥寺川に至る。北部と南部の比高差は1mある。中臣遺跡10
次調査にあたる。

遺構 調査地の基本層序は、北側と南側で異なる。トレンチ北端部では第1層耕土層（0.15m）、
第2層旧耕土層（0.05m）の下は地山であるが、以南では、第1層耕土層（0.15m）、第2層旧耕土
層（0.3m）、第3層暗黄褐色泥砂層（須恵器含む：0.15m）、第4層暗褐色砂泥層（土師器含む：0.15
m）、第5層黄灰色砂質土層（地山）である。南部
では第4層の下に黒褐色粘土（弥生土器～土師器含
む）、さらに南端では暗黒色粘土層が堆積する。遺
構は第5層上面で検出し、竪穴住居、土壇などがあ
る。

竪穴住居は北部で1棟（2号住居）検出した。2
号住居は、東西6.5m、南北6mの隅丸方形で、深
さは0.3mである。床面は貼床は認められず、地山
が床面となっていた。壁溝は幅0.2mで、全周せず
西壁北半分・北壁・東壁北半分で検出した。支柱穴
は4隅で検出し、径0.4m、深さ0.45m程度である。
中央に浅い凹みがあるが焼けておらず、炉跡とは認
識できなかった。この住居跡も1号住居跡（調査E
-16参照）と同様に壁に沿って完形の土器を検出し
たが、焼土・炭化物は少ない。

土壇は南部、中央部などで検出したが、不定形で、

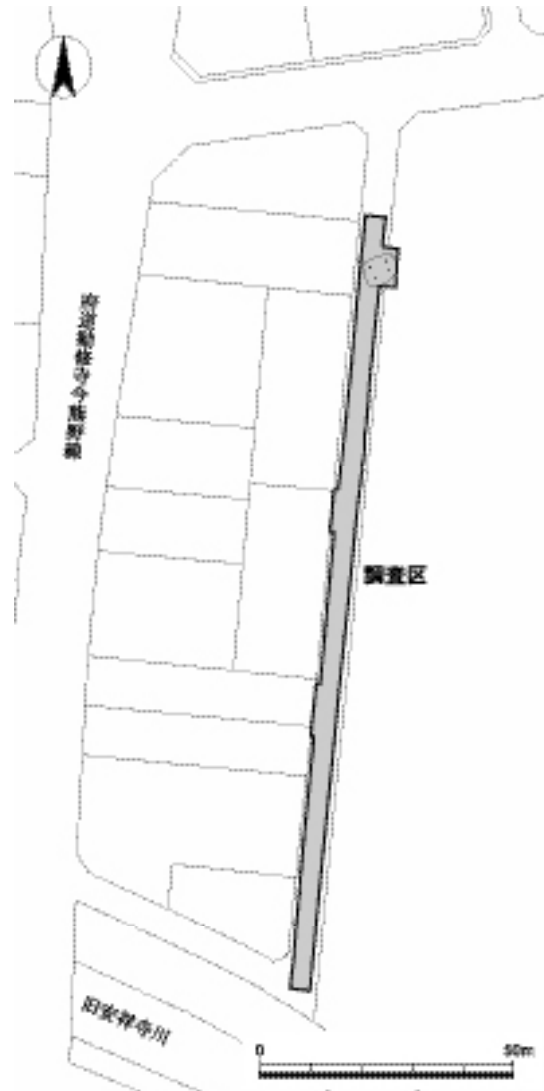


図201 E-22区調査区配置図（1：1,500）

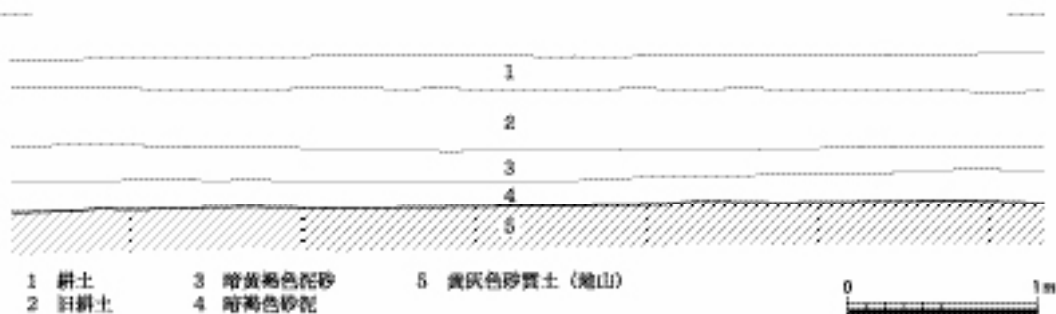


図202 E-22区西壁断面図（1：40）

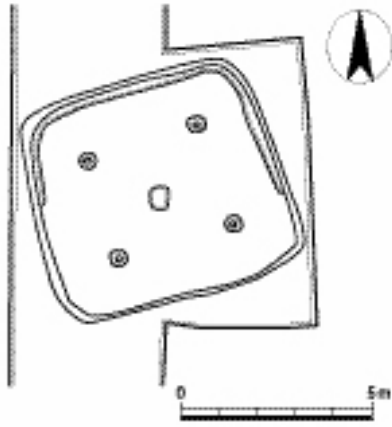


図 203 E-22 区 2 号住居平面図
(1 : 200)

規模も様々である。

遺物 遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器などがある。時期は、弥生時代から近世までである。

2号住居出土土器(図204)には壺(48~53)、鉢(54)、高杯(55~61)、器台(62)がある。48・49は長頸壺である。他は頸部が欠損し形状不明。50は肩部に波状文を施す。鉢(54)は受け口状口縁をもち、口縁部から胴部にかけて列点文・櫛描直線文・列点文・櫛描波状文を施す。高杯(55)は口縁部が外反し、56~61は椀形の杯部である。60・61は脚部は短く、杯部が深いワイングラス形の高杯である。器台(62)は胴部に4箇所、脚部

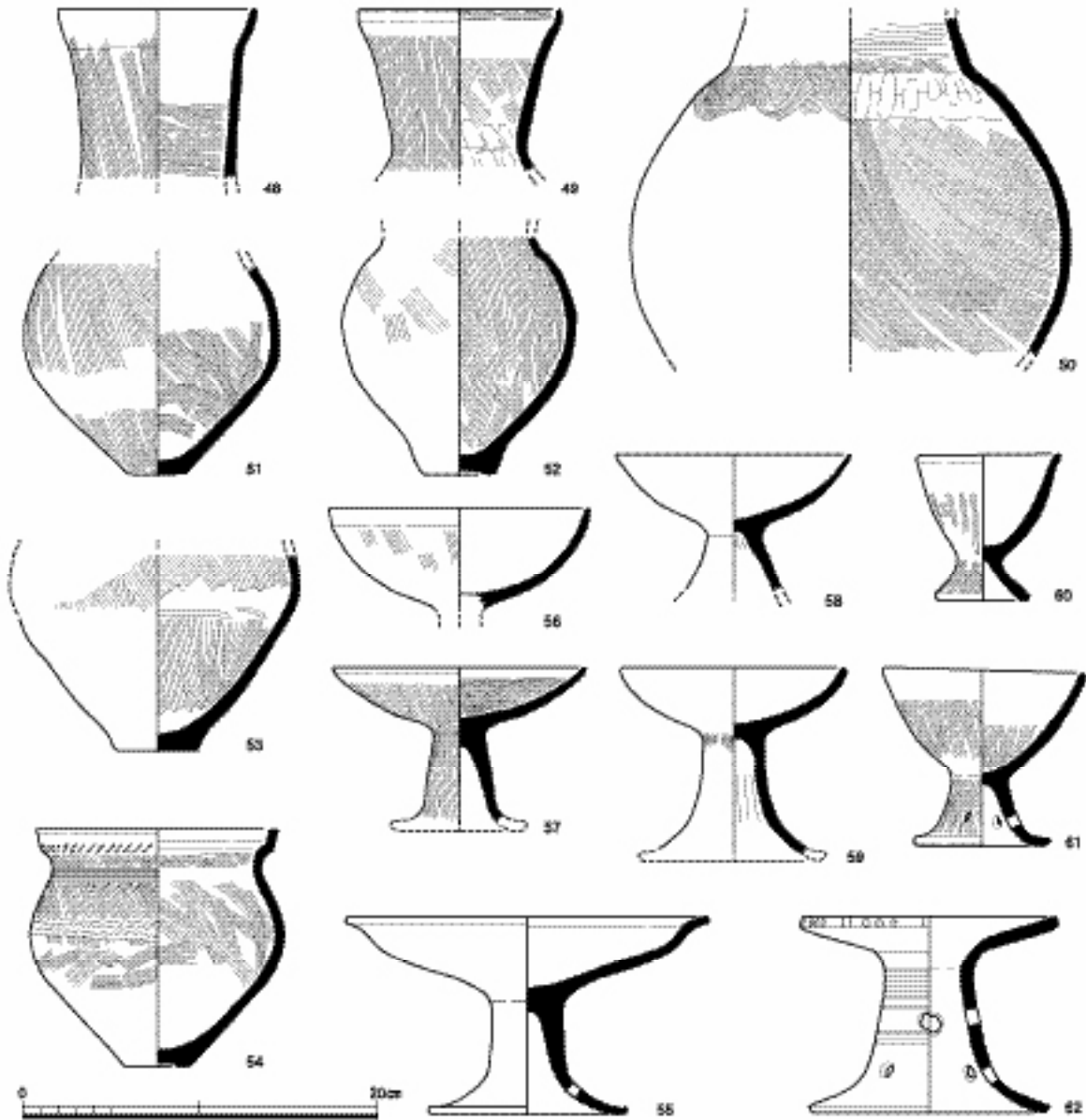


図 204 E-22 区 2 号住居出土土器実測図 (1 : 4)

に3箇所の円形透しを穿つ。胴部の透しの上段には5本の沈線、下段には2本の沈線を施す。杯部の口縁端面は面をもち、3個の竹管文と2本の縦方向沈線を施す。弥生V-3様式に属する。

南北方向の落込みからも同時期の小型壺・小型高杯・壺・甕・高杯・鉢・器台・手あぶり型土器などが出土した。

トレンチ中央部の土壌(SX 1・4)からは、古墳時代の高杯などが出土した。

小結 今回の調査では、弥生時代から古墳時代の遺構を検出し、当地の集落の変遷を考える上で貴重な資料となった。

『中臣遺跡』建設省国庫補助による発掘調査概要 1977 1978年報告

(10) 10次調査 E-27区

経過 今回の発掘調査は、道路建設(27号線)に伴うものである。当地は中臣遺跡の東部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上東斜面に位置し、北から南に緩やかに下降する。26号線調査地から山科川西側に沿った位置である。中臣遺跡10次調査にあたる。

調査地内に6箇所を選びトレンチ(幅約3m)を設定した。

遺構 調査地の基本層序は、北側と南側で異なる。南半分は氾濫が堆積し、遺構面は確認できないが、北半分(1・2トレンチ)では遺構検出面である黄褐色の粘土が確認できた。1トレンチ北端の層序は、第1層耕土層(0.2m)、第2層旧耕土層(0.15m)、第3層旧耕土層(0.15m)、第4層黒褐色砂泥層(縄文土器包含層:0~0.3m)、第5層暗黄灰色混礫粘土層(縄文土器包含層:0.15m)、第6層黄褐色混礫砂泥層(地山)である。第4層は1トレンチ北端から10m南から始まり北側に厚くなる。第5層は北端から6m南から始まり北側に落ち込む。第6層上面で遺構を確認し、1トレンチ北端で溝状の落込みを確認した。

落込みは、南北5m以上、深さ0.3m以上で、北側・西側・東側に広がる。

土壌は2・3トレンチなどで検出したが、不定形で、規模も様々である。

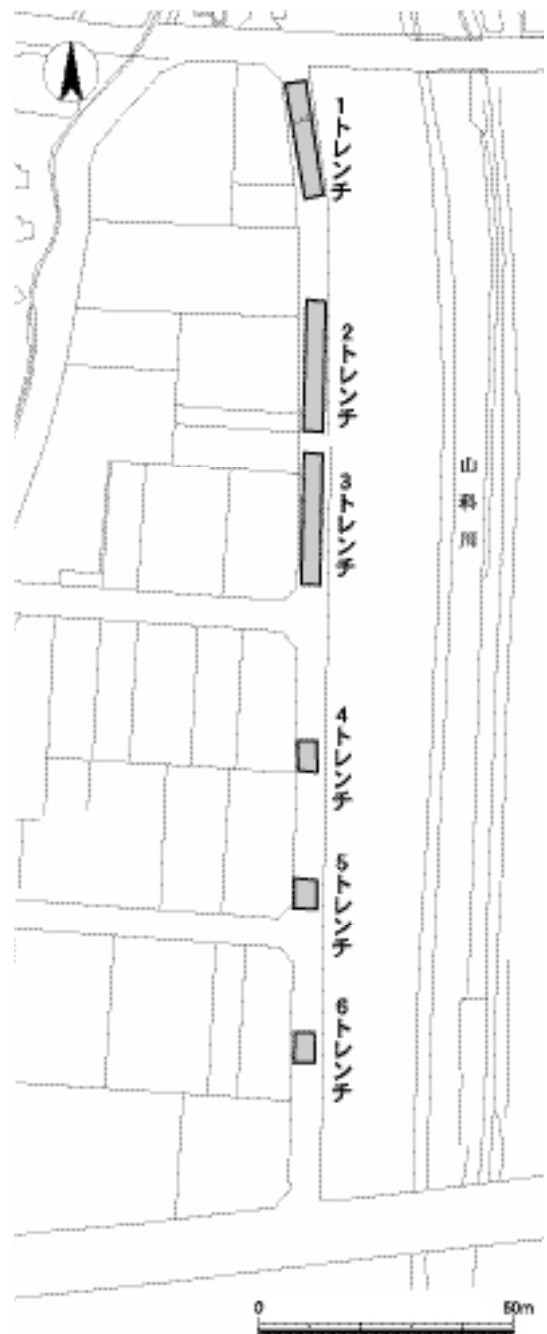


図 205 E-27区調査区配置図(1:1,500)

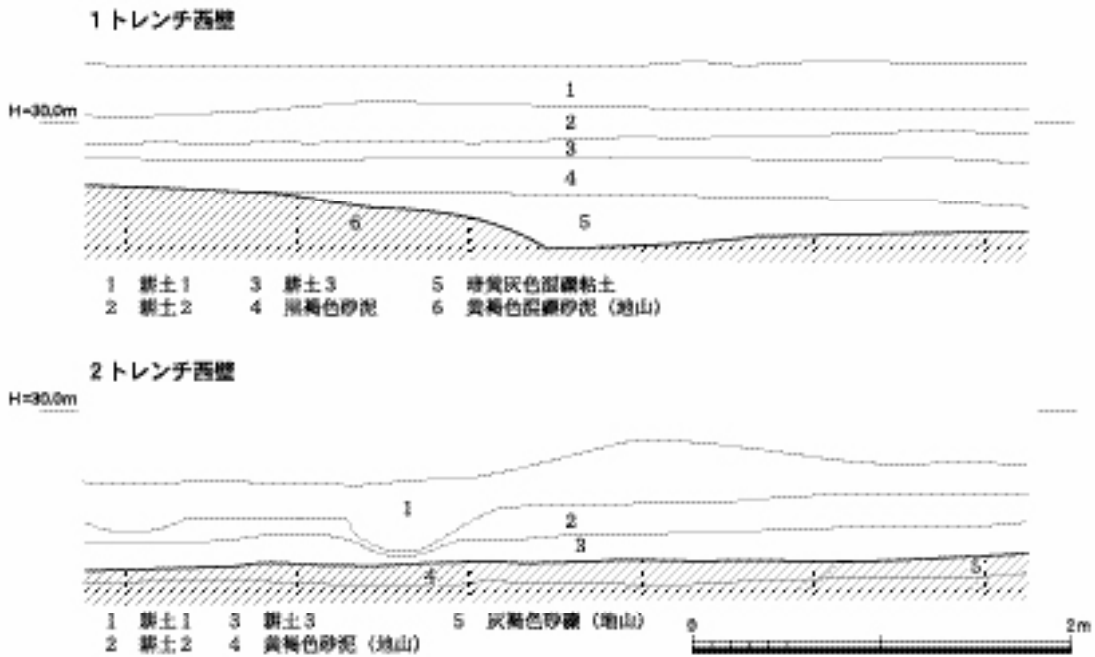


図 206 E-27 区 1・2 トレンチ西壁断面図 (1:40)

遺物 遺物には、第4層、第5層から出土した縄文土器などがある。磨滅が激しく、器形の明らかなものは少ないが、文様の状態・胎土などから縄文時代中期末を主体に、後期初頭までの時期と考えられる。

小結 今回の調査では、縄文時代の落込みを検出し、土器を発見したにとどまったが、当該期の集落の変遷を考える上で貴重な資料となった。これまで当遺跡では縄文時代後期と考えられる土壌が2例検出されているだけで、それらの遺構・遺物を残した人々の生活跡が遺跡内のどの地点であるかは全く不明であった。しかし、今回の調査で、多量の遺物を検出した包含層・落込みが確認され、栗栖野丘陵東側、山科川沿いに縄文時代の集落が形成されていた可能性が示された。

また、これまで出土した縄文土器は後期前半に比定されるもので、本調査出土土器はこれより古く、今後不明確であった京都における中期から後期にかけての編年研究にも良好な史料となる。

『中臣遺跡』建設省国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

41 中臣遺跡 11 次調査

経過 今回の発掘調査は、マンション建設に伴うものである。当地は中臣遺跡の中央部にあたるため、発掘調査を実施した。調査地は丘陵上に立地する。中臣遺跡 11 次調査にあたる。

調査では、幅 3 m、長さ 32 m の 1 トレンチと幅 6 m、長さ 41 m の 2 トレンチの 2 箇所を調査区を設定した。調査地は、西側の水田が約 0.7 m 低くなっている。

遺構 調査地の基本層序は、第 1 層耕土層 (0.2 m)、第 2 層床土層 (0.05 m)、第 3 層暗黒褐色砂泥層 (0.1 m)、第 4 層黄色粘質土層 (地山) である。第 4 層上面で遺構を検出した。検出した遺構は、溝である。

遺構面は水田開発の際に地山まで削平を受けており、中央部で東西溝 (幅約 2 m、深さ 0.5 m) を検出した。

遺物 遺物は、土師器、陶器、磁器などが出土した。近世に属する。

小結 今回の調査では、遺構面が削平を受け、近世の溝を検出したにとどまった。

『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 1978 年報告

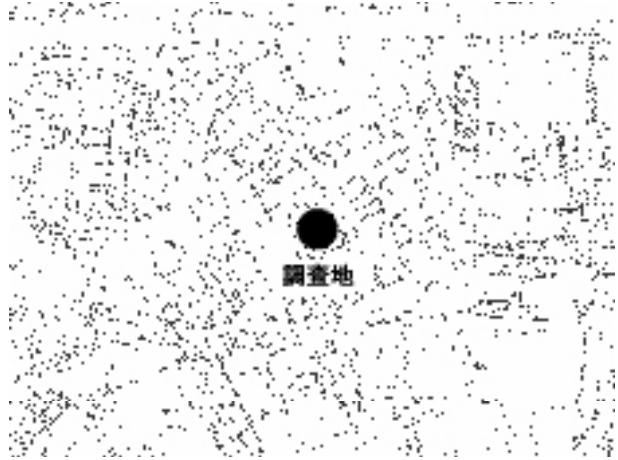


図 207 調査位置図 (1 : 5,000)

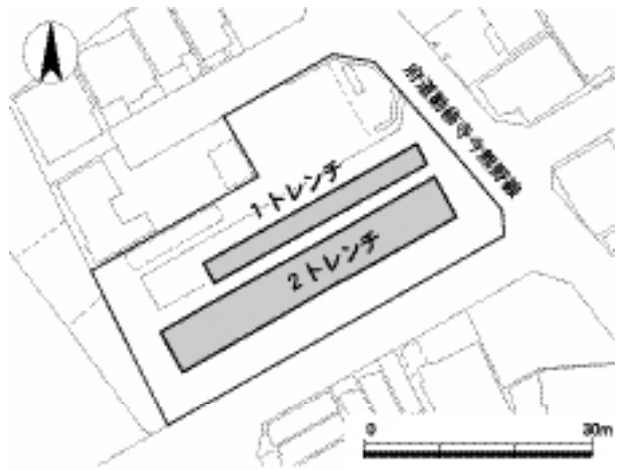


図 208 調査区配置図 (1 : 1,000)

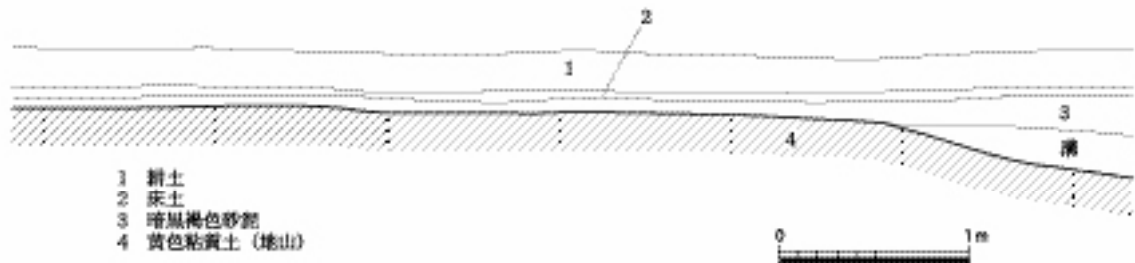


図 209 2 トレンチ東壁断面図 (1 : 40)

VI その他の遺跡

42 北野廃寺（図版 15）

経過 今回の発掘調査は、マンション新築工事に伴うもので、当地は北野廃寺推定寺域中央部にあたるため、調査を実施した。調査地周辺は北から南東へ緩やかに下降し、調査地は周辺に比べ若干段差が見られる。調査は、当寺境内の2次調査となる。

調査地内の住宅取り壊しや庭木搬出に立ち会い、遺構の残存が良好であることがわかった。調査地内に東西約18m、南北約18.5mの調査区を設定し調査を実施した。その後、回廊推定地で南辺に試掘坑を設けて調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.2m）、第2層暗灰色泥砂層（中世整地層：0.2m）、この層は基壇周辺に分布する平安時代整地層（0.1m）、第3層黄褐色礫・茶灰色土の互層（地山）である。第3層上面で2時期の遺構を検出した。

中世の遺構には、掘立柱建物跡、土壇、土段などがある。調査区南部および東側で土壇を検出し、前代の基壇と高まりが残存したものと推定できる。調査区北東部で掘立柱建物跡 SB20～22 を検出した。SB20 は南北 6.75 m で東西 6.25 m まで検出したが、さらに東へ継続する。SB21 は南北 2 間（柱間 1.05 m）東西 1 間（3.6 m）の東西棟である。SB22 は南北 2 間（4.9 m）で東西 5 間（9.7 m）まで検出したが、さら東へ継続する。東部は南北 2 つに分かれる。土壇は全域に見られ、不定型なものが多い。

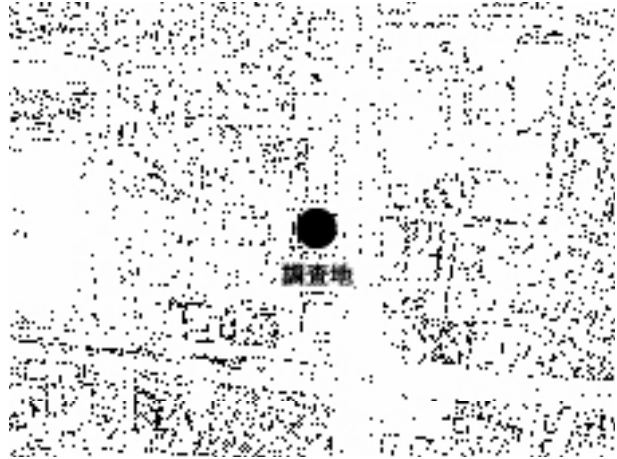


図 210 調査位置図（1：5,000）

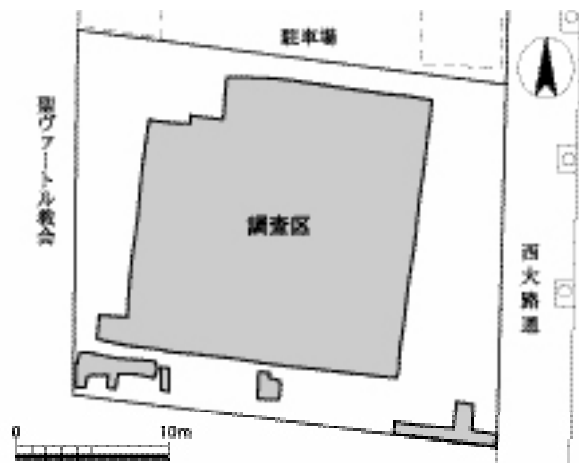


図 211 調査区配置図（1：500）

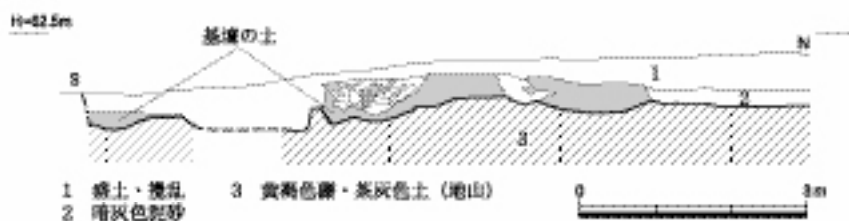


図 212 セクション西壁断面図（1：100）

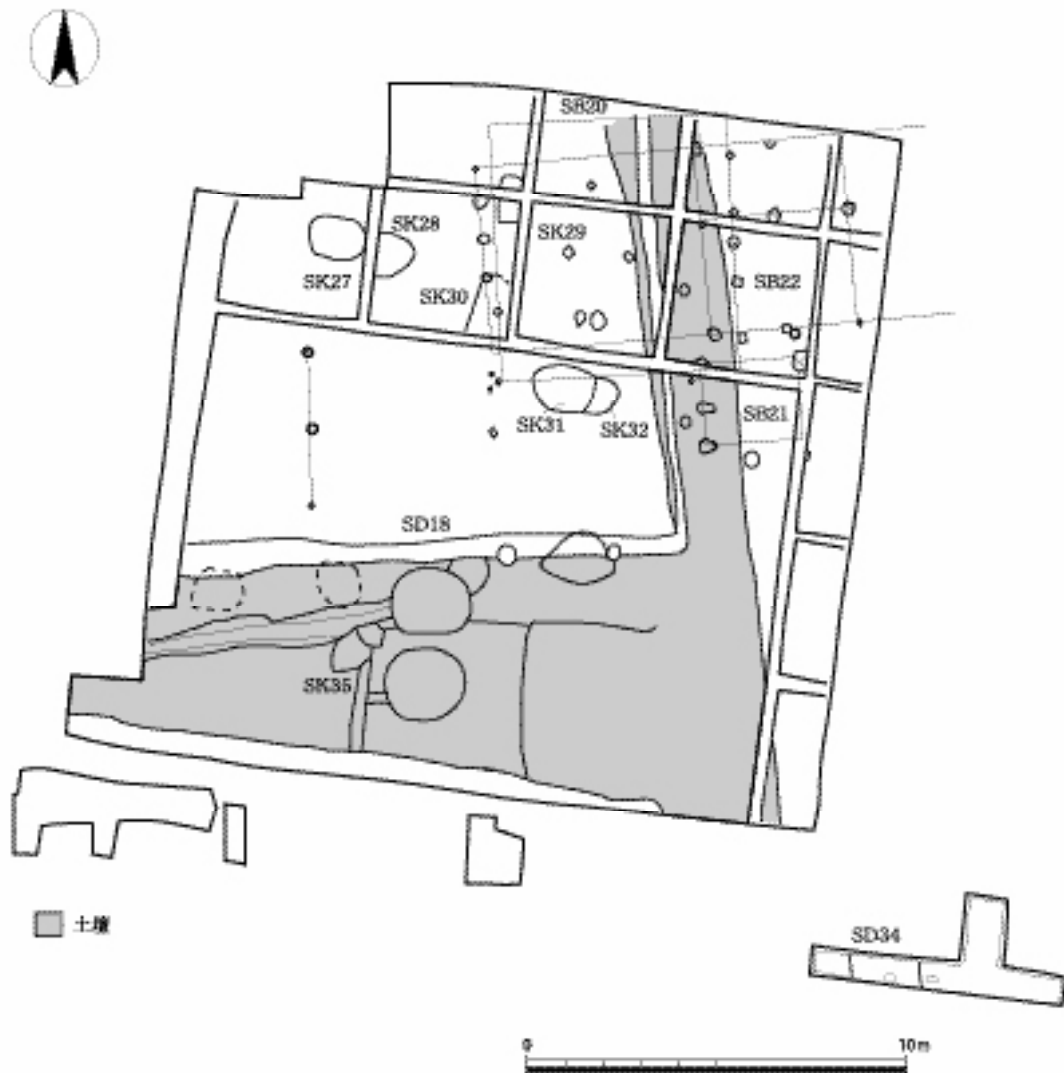


図 213 中世遺構平面図（1：200）

奈良時代の遺構には、基壇地業、掘立柱建物跡、溝、土壇などがある。調査区南部で基壇地業 SB 1 を検出し、南・西に継続する。高さは北側で約 0.15 m 残存する。基壇は地山上に黄色粘土・黒褐色土を版築で積み上げ、上面は焼け締まっている。基壇上面では 9 箇所の礎石据付跡（径約 1.3 m、深さ 0.5 m）を検出し、東西棟の北東隅底部東西 4 間分にあたる。母屋桁行約 3.4 m 等間で、庇の出が 3.15 m である。基壇化粧は平瓦積みであり、東辺に 2 段残存し、その東側で雨落溝（幅約 0.6 m、深さ 0.03 m）を検出し、埋土は上・下 2 層に分かれる。調査区南東隅試掘坑で礎石据付跡を 1 箇所検出した。また、調査区北側で掘立柱建物跡 SB 3・4 南東部を検出した。柱間は東西 4 m、南北 3.6 m である。柱位置は SB 1 柱位置にほぼ揃う。また、調査区東側には南北方向の高まり SX12（幅約 1.5 m）が存在する。土壇は全域に見られ、土取穴が多い。

遺物 遺物は整理箱で 135 箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、壁土、石器、金属製品などがある。時期は、古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、中世のものがある。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺物は、後世の遺構や整地層から出土した。奈良時代の土器類は

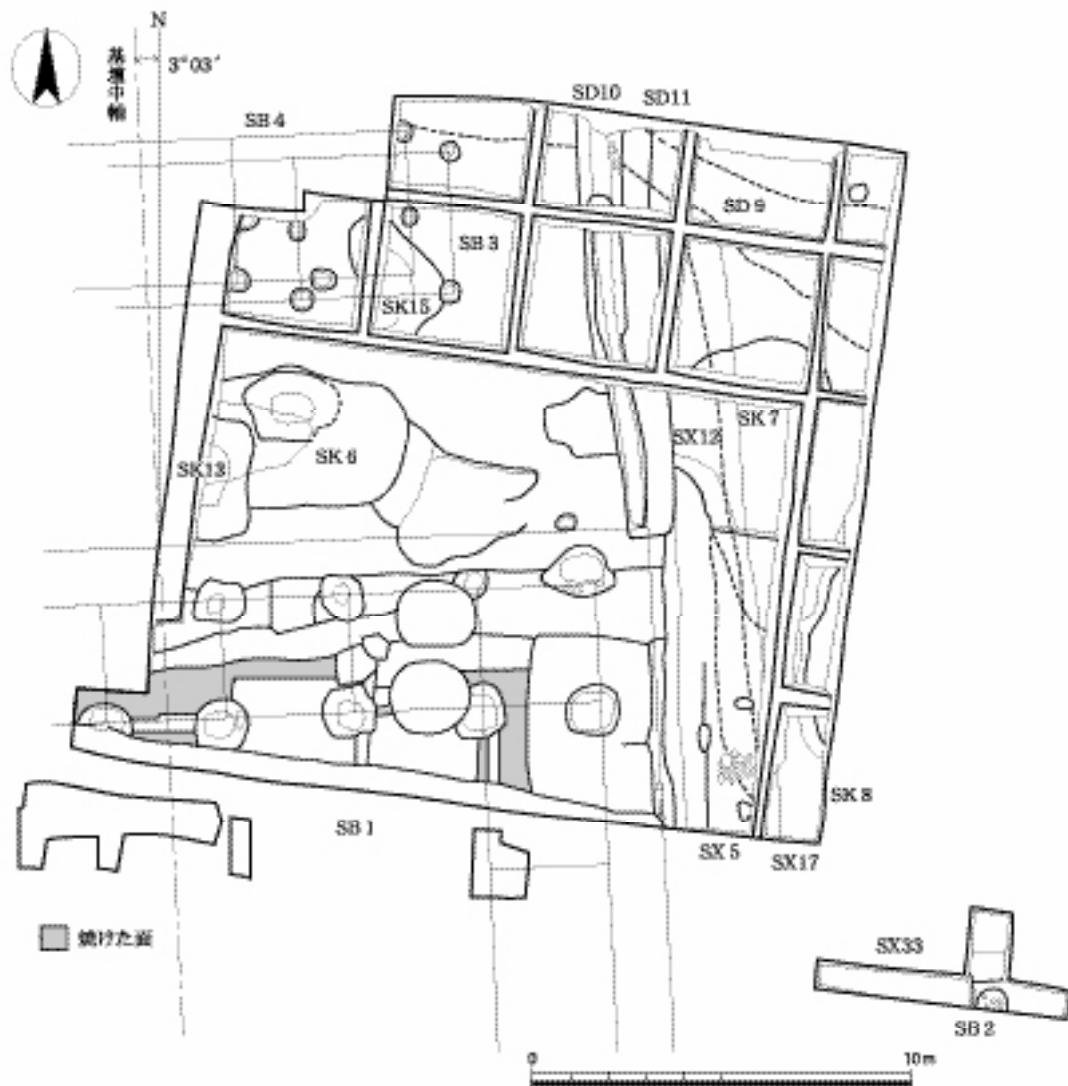


図 214 奈良時代遺構平面図（1：200）

土壇・柱穴から出土し、奈良時代から平安時代の瓦類は講堂跡周辺および土壇から大量に出土した。室町時代の遺物は土壇・溝などから出土した。

小結 今回の調査地は、位置関係から伽藍の中心部と推定でき、南部の建物跡を講堂・北部の建物跡を僧房と推定した。推定講堂は東西7間×南北4間と推定でき、基壇は東西25.95m、南北17.6mとなる。建物跡は2時期あり、いずれも火災により焼失した。前者の建物跡は奈良時代前期で、後者は平安時代前期と推定できる。前者の基壇には回廊が取り付き、それを撤去して土手状遺構が造られる。この段階に北側僧房が造られる。前者の建物の焼亡は元慶8年（884）、後者の焼亡は天慶3年（940）と推定でき、その後、中世まで土壇が残存していたと考えられる。

43 相国寺旧境内 1

経過 今回の発掘調査は、学校法人京都成安女子学園校舎建設に伴うものである。当地は相国寺旧境内の北東部にあたるため、調査を実施した。調査は、相国寺境内における1975・1976年の調査に続き、3回目の発掘調査である。

調査地内に試掘坑を設定し、土層を確認した後に、東西約18m、南北約17.6mの変形の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、現代整地層(0.3m)、第1・2層(黄褐色砂泥・暗黄茶褐色砂泥：0.2m)、第3層(茶褐色砂泥層：0.2m)、第4層(茶黄色砂泥：0.1m)、第5層(茶灰色砂礫：無遺物層、地山)である。第4層上面で第1面、第5層上面で第2面の遺構を検出した。地表面の標高は約59.6mである。

第1面で検出した遺構には、溝(SD 1・5)、土器溜りがある。

第2面では遺構の切り合いにより、2時期の遺構を検出した。前者の遺構は調査区全域で検出し、落込み(落込1～5)、土壇(SK 1～5)、溝(SD 4・6・7)がある。後者の遺構は調査区全域で検出し、落込み(落込6～11)、土壇(SK 6～8)、溝(SD 4下層)がある。

検出した遺構の時期は、伴出した遺物から、それぞれ第1面の遺構が近世



図 215 調査位置図 (1 : 5,000)



図 216 調査区配置図 (1 : 2,000)

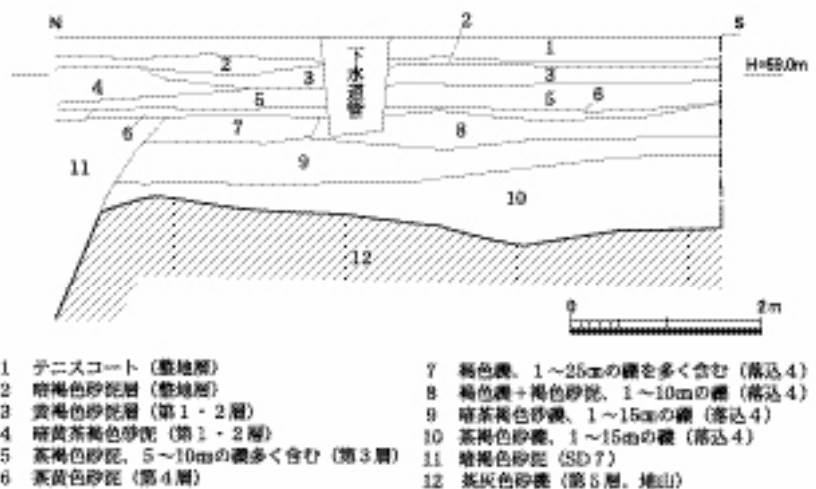



図 217 東壁断面図 (1 : 80)

と推定され、第2面が室町時代と推定できる。

遺物 遺物は整理箱で130箱出土した。出土遺物の種類には、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器鉢・羽釜、陶器椀・播鉢、磁器椀・銭貨・鉄釘、石製品砥石・滑石羽釜、墨書土器（白磁）、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、などがある。大半は瓦溜から出土した瓦類で、次いで近世の陶磁器が若干出土した

小結 今回の調査では室町時代から近世に属する遺構を多数検出し、遺構が密に存在したことが明らかとなった。室町時代の遺構は相国寺に關係するものと推定できるが、性格は不明である。

調査地周辺は『寛政2年（1790）塔頭敷地図』によれば、慶長3年（1598）に創建された豊光寺の境内に該当する。近世に属する遺構はこの塔頭に関する可能性が高い。

いずれにしても、周辺の調査と合わせて、当地域の変遷を考える上で重要な発見となった。

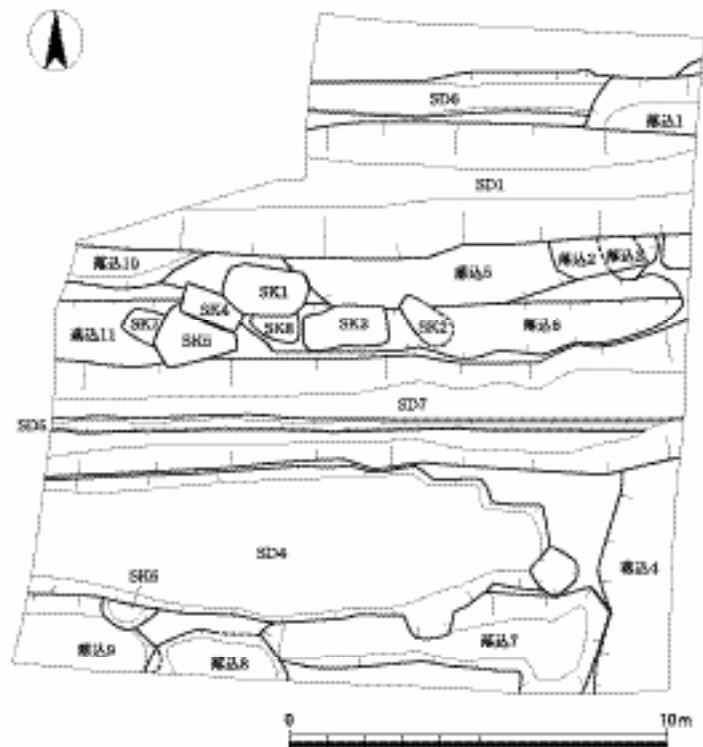


図 218 遺構平面図 (1:200)



図 219 調査区全景 (北から)

44 相国寺旧境内 2


経過 今回の発掘調査は、学校法人京都成安女子学園校舎新築に伴うものである。当地は相国寺旧境内北東部にあたるため、調査を実施した。調査は、学校法人京都成安女子学園内における2回目の発掘調査である。

調査地内に東西約17m、南北約9mの調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層淡茶褐色土層（表土：0.15m）、第2層淡褐色砂泥層（中近世包含層：0.25m）、第3層黄褐色泥砂層（焼土層含む：0.15m）、第4層灰色砂礫層（0.1m）、第5層褐色砂礫層（地山）である。第3層上面で第1面、第5層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面で検出した遺構には、中央部で東西溝、全域で柱穴・土壇、南部では南側への落込がある。遺構の時期は、伴出した遺物から中世から近世に属する。

第2面で検出した遺構には、全域で柱穴・土壇があり、東北部で石組み井戸（SE1）を検出した。遺構の時期は、伴出した遺物から室町時代に属する。

遺物 遺物は整理箱で13箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、軒瓦・鬼瓦、、銭貨、金属片がある。時期は、奈良時代から近世である。

小結 今回の調査では中世から近世に属する遺構を多数検出し、遺構が密に存在したことが明らかとなった。これらの遺構は、相国寺に関係するものと推定できるが、性格は不明である。

調査地周辺は『寛政2年（1790）塔頭敷地図』によれば、慶長3年（1598）に創建された豊光寺の境内に該当する。近世に属する遺構はこの塔頭に関する可能性が高い。

いずれにしても、周辺の調査と合わせて、当地域の変遷を考える上で重要な発見となった。

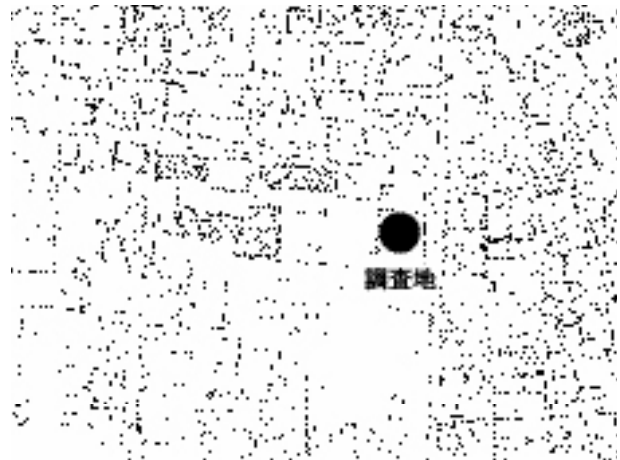


図 220 調査位置図（1：5,000）

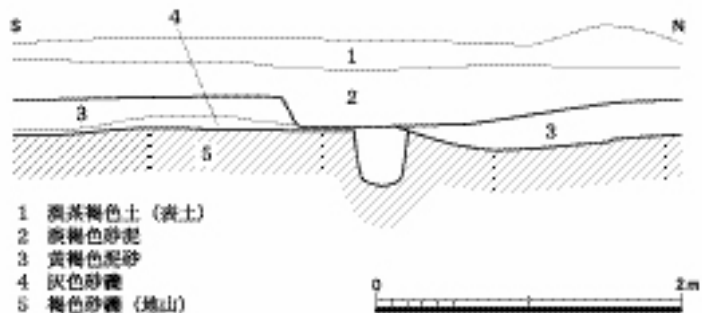


図 221 西壁断面図（1：50）

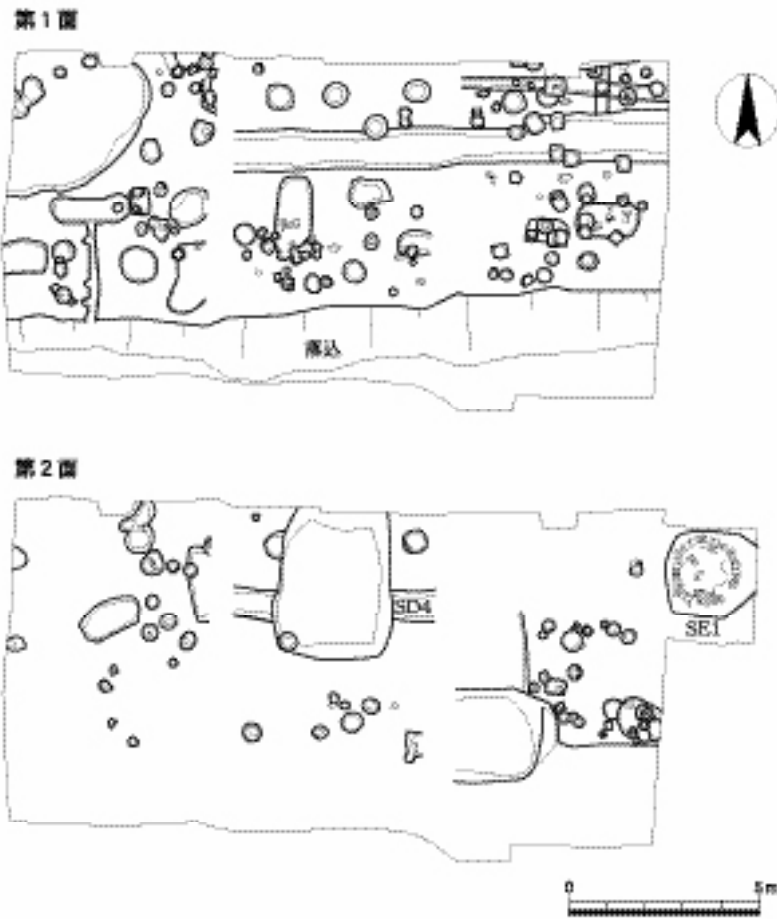


図 222 遺構平面図（1：200）



図 223 調査区全景（東から）

45 相国寺旧境内3

経過 今回の発掘調査は、学校法人京都成安女子学園校舎新築に伴うものである。当地は相国寺旧境内の北東部にあたるため、調査を実施した。調査は、学校法人京都成安女子学園内における3回目の発掘調査である。

調査地内に南北4m、東西6mの調査区を3箇所設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代整地層（約0.3m）、第2層黄褐色砂泥・灰色砂礫（地山）である。第2層上面で遺構を検出した。

1トレンチは攪乱が多く、南北溝2条、土壌数基を検出した。いずれも江戸時代に属する。

2トレンチは比較的攪乱が少なく、西側で土壌、柱穴を少数検出した。時期は中世から江戸時代に属する。

3トレンチは北西側が大きく攪乱を受け、南側で土壌を少数検出した。時期は江戸時代に属する。

遺物 遺物は整理箱で4箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、塩壺がある。時期は、古墳時代から近世である。

小結 今回の調査では中世から近世に属する遺構を多数検出し、遺構が密に存在したことが明らかとなった。これらの遺構は、相国寺に関係するものと推定できるが、性格は不明である。

調査地周辺は『寛政2年（1790）塔頭敷地図』によれば、慶長3年（1598）に創建された豊光寺の境内に該当する。近世に属する遺構はこの塔頭に関する可能性が高い。いずれにしても、周辺の調査と合わせて、当地域の変遷を考える上で重要な発見となった。

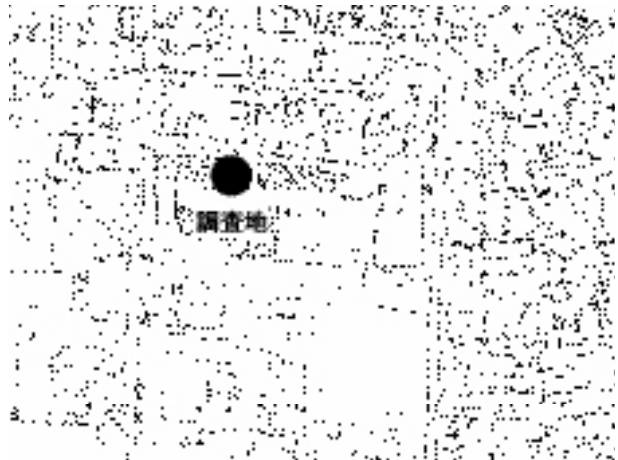


図 224 調査位置図（1：5,000）

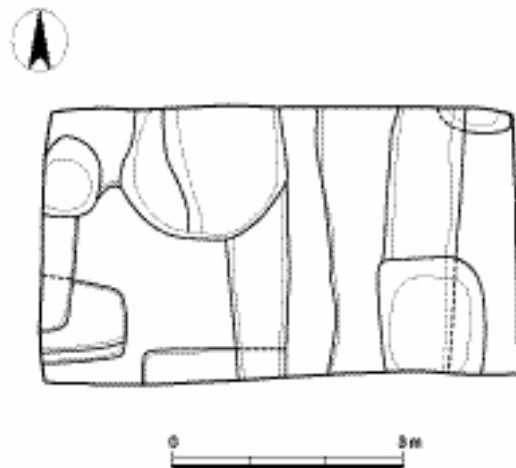


図 225 1トレンチ平面図（1：100）

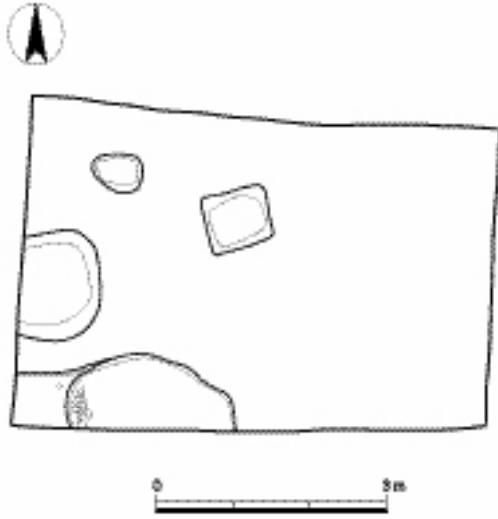


図 226 2トレンチ平面図 (1 : 100)

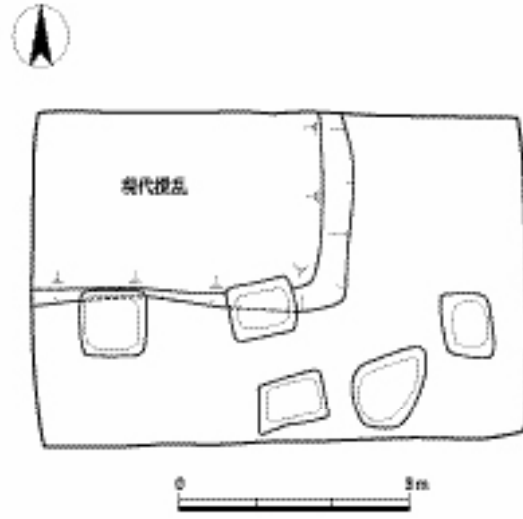


図 227 3トレンチ平面図 (1 : 100)



図 228 1トレンチ全景 (西から)

46 法成寺跡

経過 今回の発掘調査は、京都宿泊所くに荘新築に先だって実施した調査である。当地は法成寺跡の推定地域にあたるため、調査を実施した。調査地は、平安京左京北一条四坊八町の東側にあたり、鴨川の西側約30mの平坦地に位置する。1976年に立会・発掘調査が行われ、今回が2回目の発掘調査である。

調査は、既存建物の解体作業と合わせ、調査地の南側にA区、北側にB区を設定し、まずA区の調査を実施し、その後B区の調査を行った。

遺構 A区の基本層序は、盛土(0.15m)、第1層淡灰色砂礫(0.18m)、第2層茶褐色泥砂(0.2m)、第3層褐灰色砂礫(0.4m)、第4層暗褐色泥砂(0.3m)、第5層茶灰色砂礫(地山)である。遺構は、第4層・第5層上面で検出した。

第4層上面で検出した遺構は、中央部で瓦溜1、西部で石列1である。瓦溜からは瓦などが多量に出土した。第5層上面で検出した遺構は、北東部で落込2、西部で落込1である。時期は、出土した遺物からいずれも近世である。

B区の基本層序は、盛土(1.1m)、第1層暗灰色砂泥(0.2m)、第2層淡褐色砂礫(0.5m)、第3層黒褐色砂泥(0.2m)、第4層黄褐色砂礫(地山)である。第3層上面で遺構を検出した。



図 229 調査位置図 (1 : 5,000)

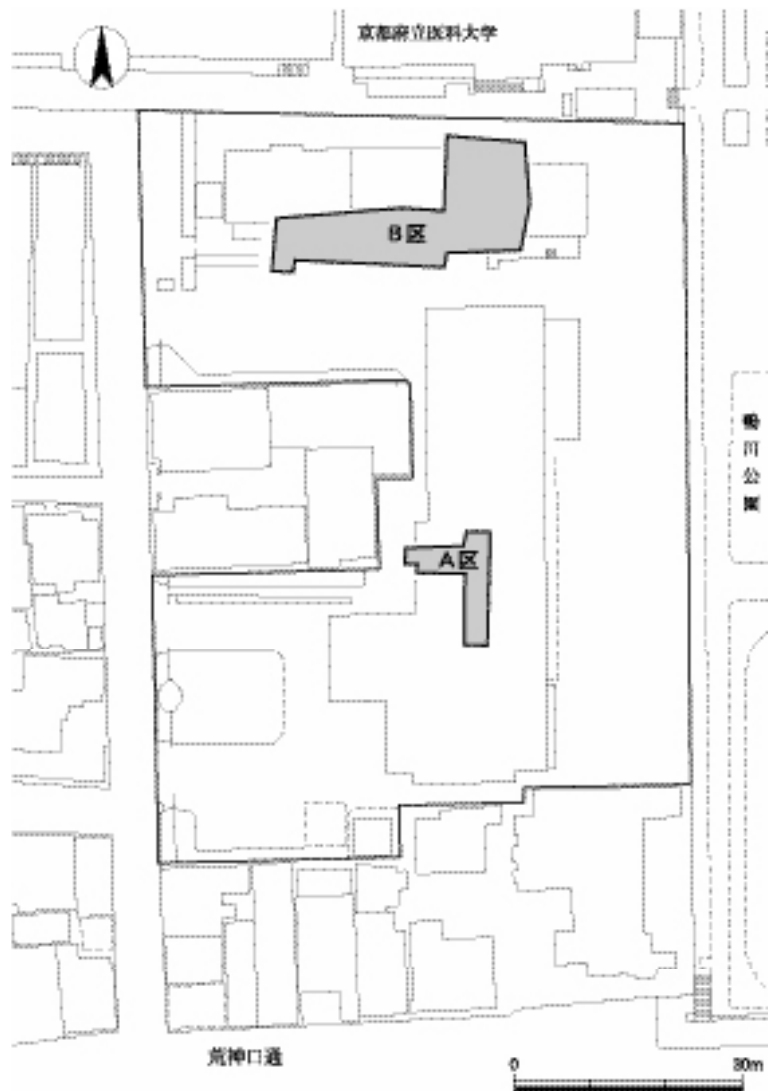


図 230 調査区配置図 (1 : 1,000)

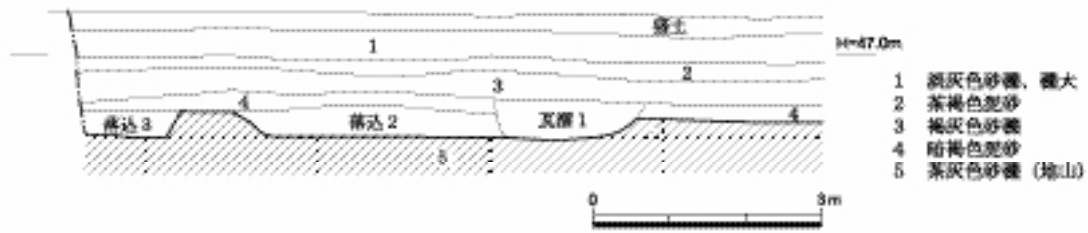


図 231 A区東壁断面図 (1:100)

第3層上面で検出した遺構は、西端部で井戸2基 (SE 1・2)、中央部で円形石組み2基、西部で溝1基 (SD 1) を検出した。井戸は石組みで底部で木杵痕跡を確認した。溝は両岸に板を当て杭で固定し、両側に石を貼り付ける。また、第1層上面からの切石組みの井戸も検出した。時期は、出土した遺物から、溝が近代、他はいずれも近世である。

遺物 遺物は整理箱で22箱出土した。出土遺物の種類には、棧瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶器、磁器、銭貨などがある。瓦類が最も多く、A区瓦溜・B区井戸などから出土した。土器類は瓦溜・落込・井戸などから出土した。

小結 今回の調査では、鴨川に近接し、A・B調査区共に全面にわたって、鴨川の氾濫による堆積層が地表下3.5mまで及ぶことが判明した。そのため、法成寺跡に関する遺構・遺物は認められない。その後、近世には当地区は安定した土地となり、多少の遺構が検出されており、居住区域として使用されたと考えられる。

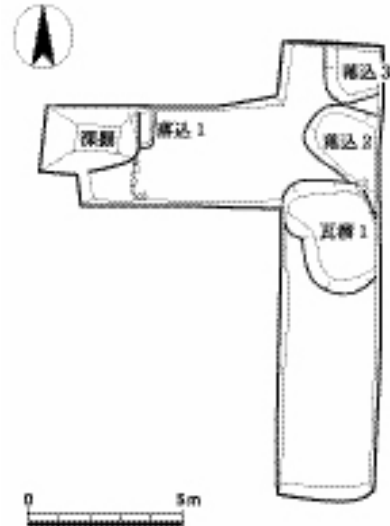


図 232 A区遺構平面図 (1:250)

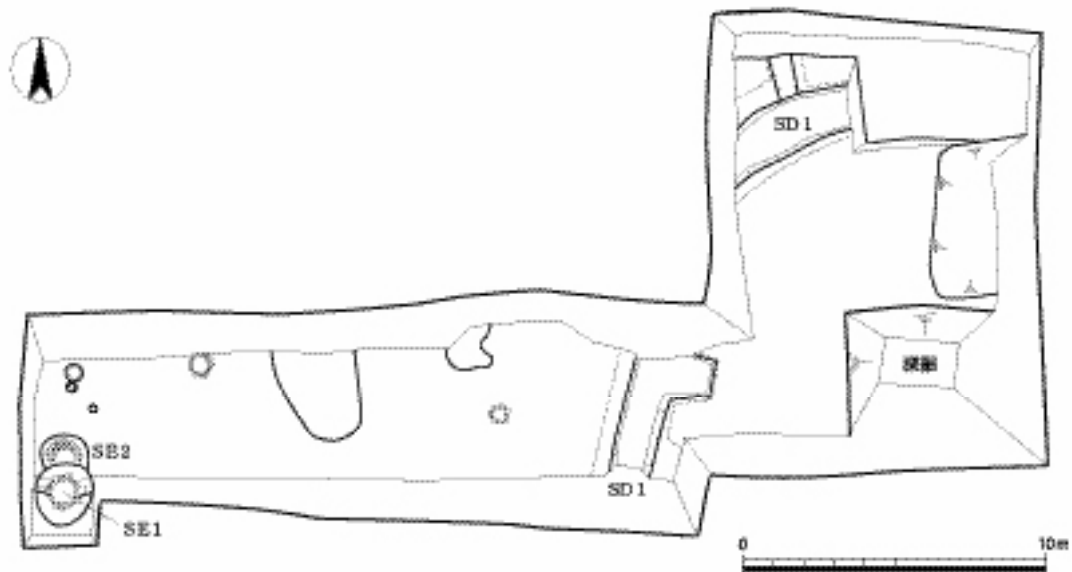


図 233 B区遺構平面図 (1:250)



図 234 A区全景（北から）



図 235 B区全景（西から）

47 常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内

経過 今回の発掘調査は、日本電信電話公社嵯峨野社宅増設工事に伴う調査である。当地は広隆寺推定寺域の北東部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。

調査は、まず2棟の新築予定地の一部で試掘を行い、層序を確認した。1次調査として調査地の南北に2つの調査区（A・B区）を設定して調査を開始した。その後、遺構がさらに広がるため、2次調査（C区・中央拡張区）として1次調査区を含め南北側・中央部に拡張して調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.5～1.2 m）、第2層暗茶褐色泥土層（整地層：0.2～0.4 m）、第3層茶褐色砂礫層（地山）である。遺構は第3層上面で検出し、北から南に大きく下降する。検出した遺構は、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・瓦溜、各時期の溝、中世から近世の土壌墓・井戸である。

古墳時代の遺構は、調査区南西部で竪穴住居23棟・掘立柱建物4棟、北西部で竪穴住居1棟を検出した。南西部の住居群は2グループに分かれ、南部の規模がやや大きい。

竪穴住居は方形と隅丸方形があり、規模は一辺3.5 mか4.5 m前後で、一辺約3 mの小型のもの、一辺6.5 mの大型のものがある。内部には約半数に竈が付く。竪穴住居は出土遺物から6世紀末～7世紀前半に属する。

平安時代から鎌倉時代の遺構は全域で検出し、掘立柱建物、溝、瓦溜、土壌墓などがある。掘立柱建物跡は4棟検出し、規模も不揃いで方向はバラつく。溝は斜行のものやほぼ東西南北を向くものなどがあり、石垣を持つものが3条ある。瓦溜SK 1・22などは瓦類や土器の一括資料を含み興味深い。土壌墓は、羽釜を



図 236 調査位置図（1：5,000）

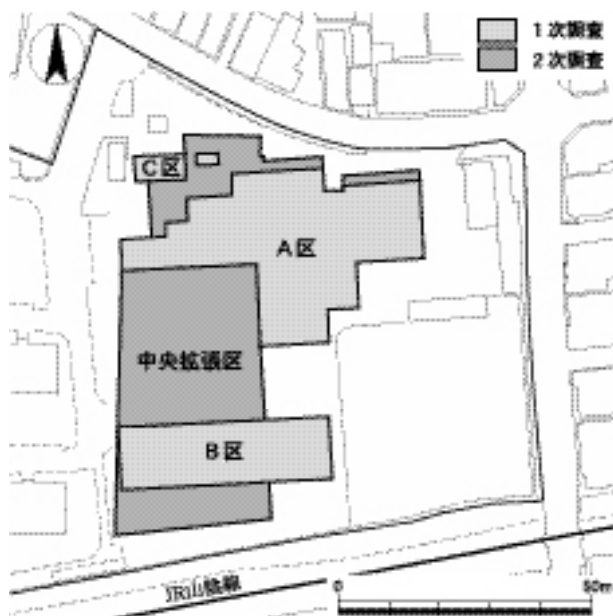


図 237 調査区配置図（1：1,500）

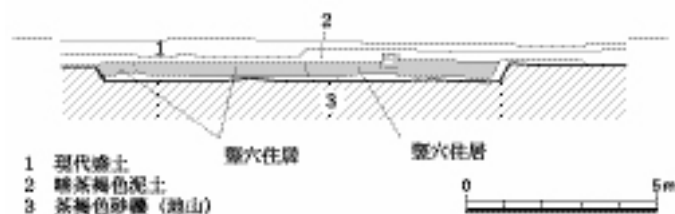


図 238 西壁断面図（1：200）

蔵骨器に転用したSK73、石を投げ込んだ土壇墓など数種類に分けられる。

鎌倉時代後期から江戸時代の遺構も全域で検出し、土壇墓群、室町時代の溝・瓦溜、江戸時代の井戸などがある。土壇墓群は北と南のグループに分かれ、北群が35基、南群が25基で、長方形・方形・円形などに分かれ、各々時期によって変遷する。

遺物 遺物は整理箱で291箱出土した。遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、石製硯、塩壺、銭貨、鉄釘、木製品などがある。大半は平安時代後期から鎌倉時代前半の瓦類で、瓦溜から出土した。古墳時代

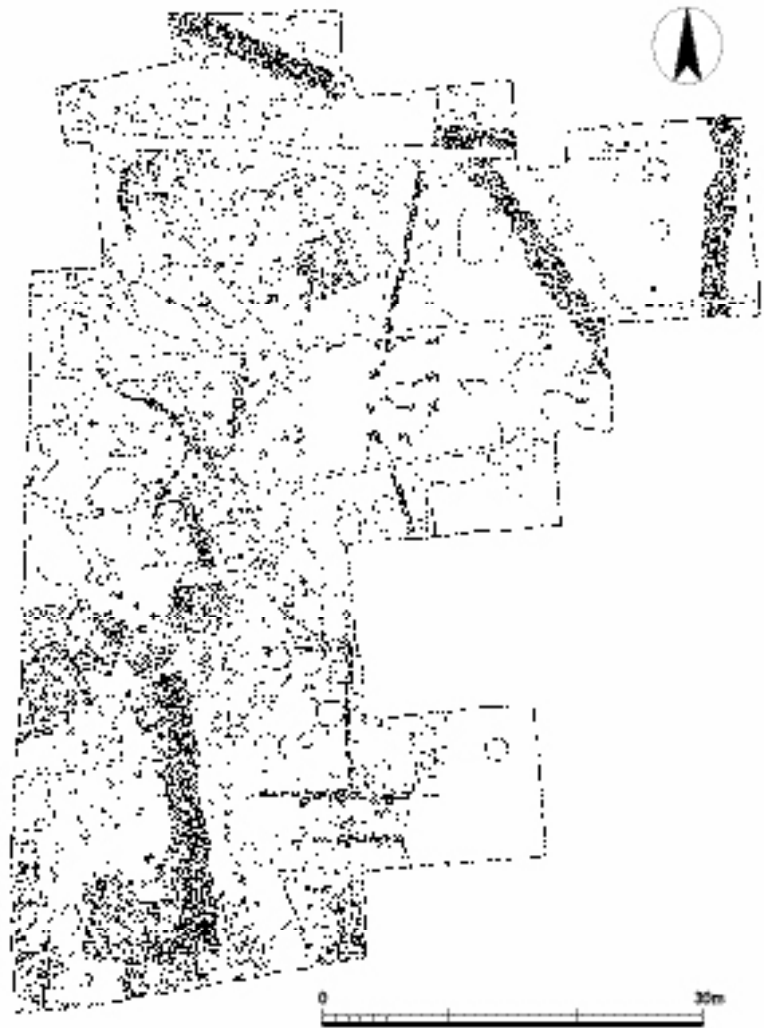


図 239 遺構平面図 (1 : 600)

の土器類は竪穴住居跡から出土し、6世紀後半～7世紀前半である。平安時代の土器類は溝から出土し、平安時代末に属する。

小結 今回の調査では、古墳時代の住居跡を多数検出し、集落の北東部の状況を明らかにすることができた。竪穴住居跡と掘立柱建物跡の関係は不明であるが、各群の構造が確認できた。また、住居跡はかなり重複し、短期間の建替えが行われたと推定できる。

平安時代から鎌倉時代の遺構は多数検出したが、性格は不明である。瓦溜は良好な一括資料であるが、遺構との関係は不明である。

鎌倉時代中期から江戸時代の土壇墓を多数検出し、長期にわたって墓域が営まれ、埋葬構造の変遷を確認できた。墓は北と南に分かれ、中央に広場が想定できる。また、墓道・柵などのあった可能性も推定できよう。

『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告―Ⅰ 1978年報告

48 常盤仲之町遺跡

経過 今回の発掘調査は、日本電信電話嵯峨野住宅集会所新築工事に伴う調査である。当地は常盤仲之町遺跡・広隆寺推定寺域北東部にあたるため、発掘調査を実施することとなった。

調査地の現況は、段を介して南側が約0.6m低かったため、まず試掘調査を行い層序を確認した。その後、南北12m、東西16mの調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代層(0.1～0.5m)、第2層茶褐色砂泥層(約0.2m)、第3層暗褐色砂泥層(約0.2m)、第4層淡黄灰色粘質土層(地山)である。第2・3層は調査区南側では見られない。遺構は第3層上面で第1面、第4層上面で第2面の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、柱穴、土壇などである。

第1面の遺構は、調査区中央部の東西溝(幅0.9m、深さ0.4m)だけである。時期は不明である。

第2面の遺構は、柱穴、土壇があり、調査区全域で検出した。柱穴は多数検出し、小規模な建物が窺えるが、具体的に復元できるものはない。土壇も全域で検出し、不定形のものも多く、性格は不明である。時期は遺構埋土からの遺物から中世である。

遺物 遺物は非常に少なく、種類には、土師器、陶器、磁器、塩壺などがある。溝から出土した江戸時代のものが大半を占め、他は少ない。

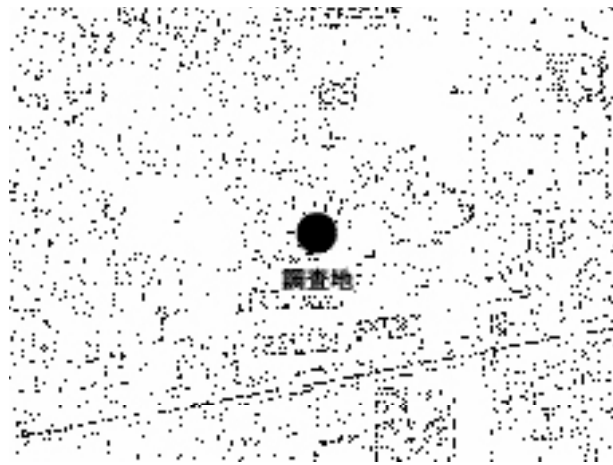


図 240 調査位置図 (1 : 5,000)



図 241 調査区配置図 (1 : 1,000)

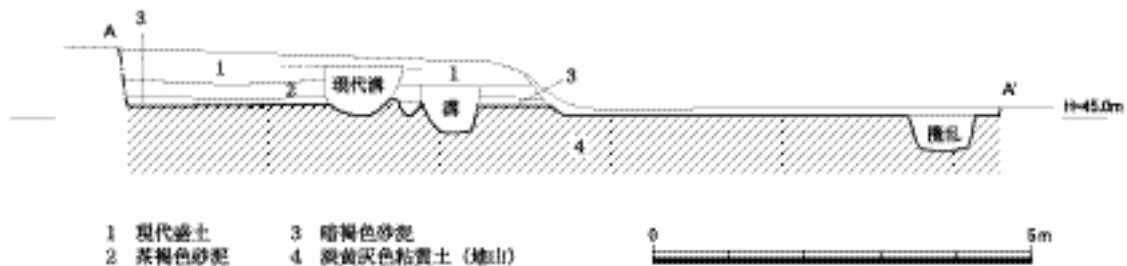


図 242 中央セクション断面図 (1 : 100)

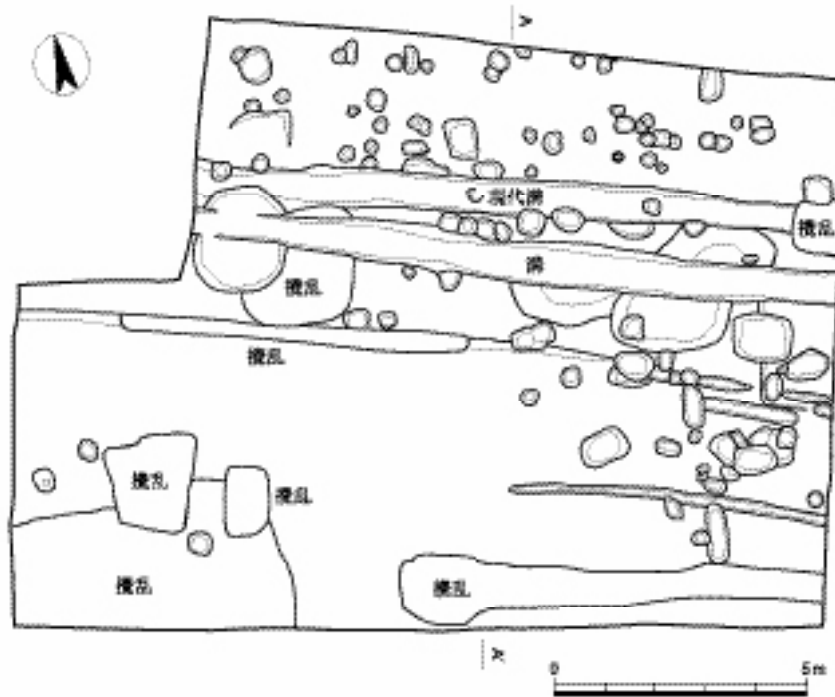


図 243 遺構平面図 (1 : 150)

小結 今回の調査では、古墳時代集落関係の遺構・遺物は全く検出できなかった。このことは、集落がこの地域まで及んでいないか、後世に削平を受けているかと推定できるが、いずれか不明である。また、仲之町遺跡で数多く検出された中世墳墓が1例もないことから、墓域がこの地区まで広がらないことを示すものである。

『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告—Ⅲ 1978年報告



図 244 調査区全景 (東から)

49 弁天島経塚

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うもので、当地は広隆寺推定寺域東部にあたるため、調査を実施した。調査地は、弁天池とその中央の中島に位置する。

中島の上に位置していた弁天社を移築した際に、社殿の下から銭貨・刀子などが出土したことから、中島上に経塚群の存在が確認されていた。このため、調査区は中島を中心として放射状に3箇所、池の汀に7箇所設定して調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層黄褐色砂質土（0.1～1m：近現代堆積層）、第2層褐色砂礫層（地山）で、中島部のみ盛土層（約1.5m）である。盛土層上面の標高は40.0mである。

池の規模は東西40m、南北30mで、中央に径12mの中島が位置する。中島は地山を掘り残し、周囲に杭を2重に打ち、外側の杭に竹の柵（しがらみ）を設け、内側に小礫を詰め、黒褐色土・褐色土などを版築状に盛り土する。盛土の表面は葺石で覆う。

盛土上面の中央部で16基の経塚を検出した。各経塚は密集して位置するが、重複はない。経塚の構造は、底石の周囲に方形小石室を作り内部に経筒を入れた外容器を据え木炭を充填するもの



図 245 調査位置図（1：5,000）

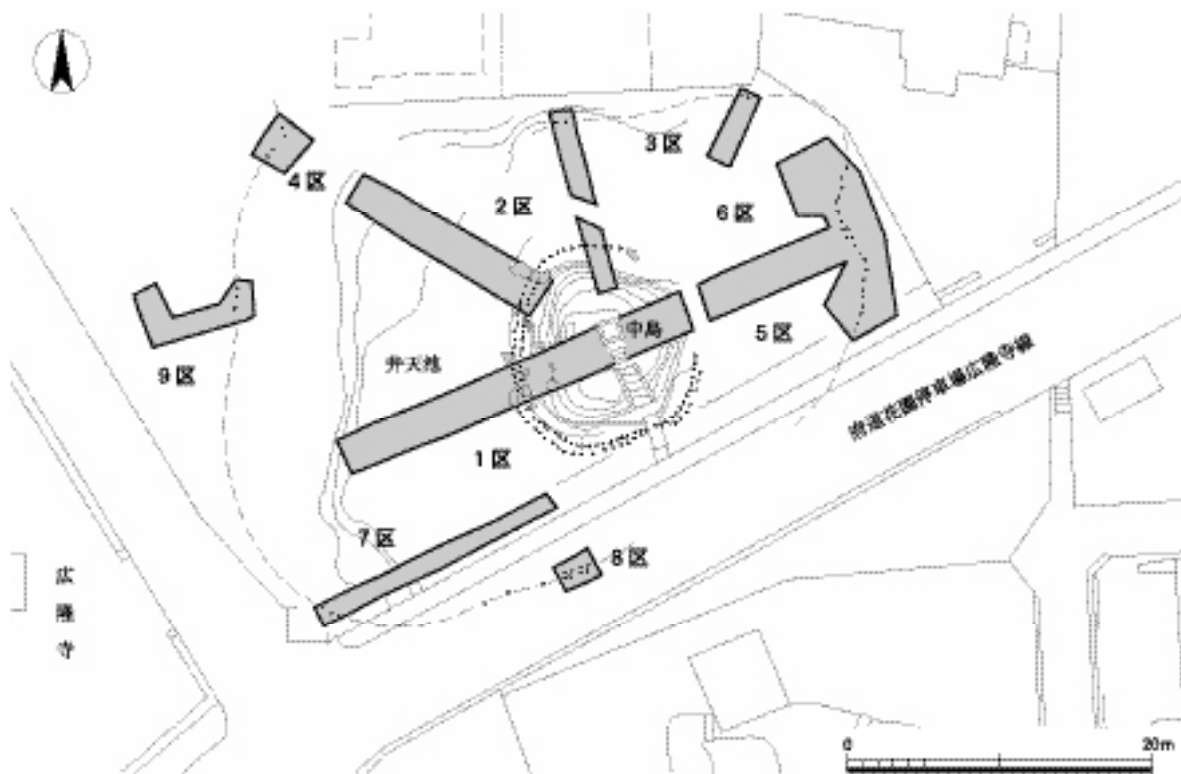


図 246 調査区配置図（1：500）

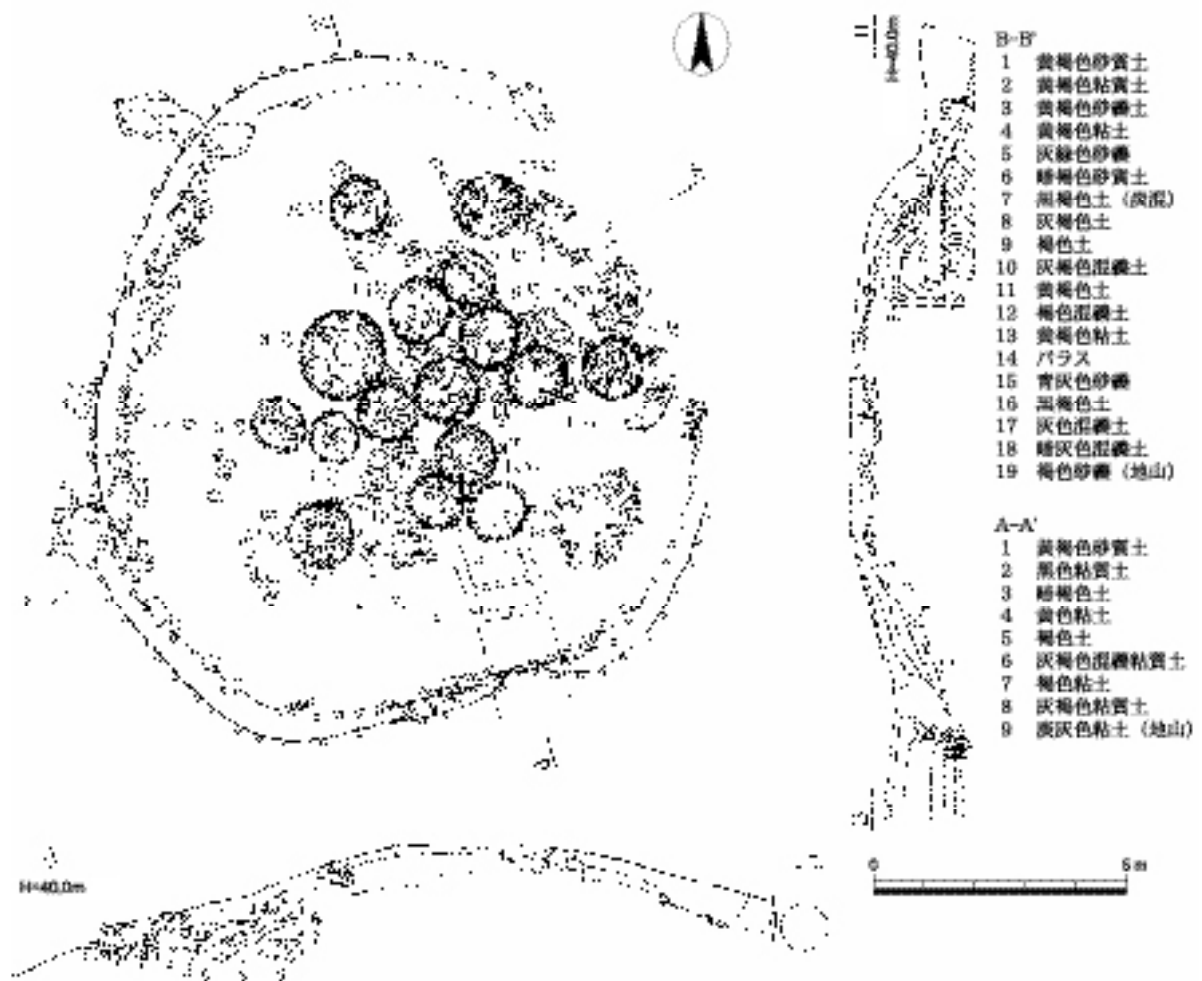


図 247 遺構実測図 (1 : 150)



図 248 調査区全景 (東から)

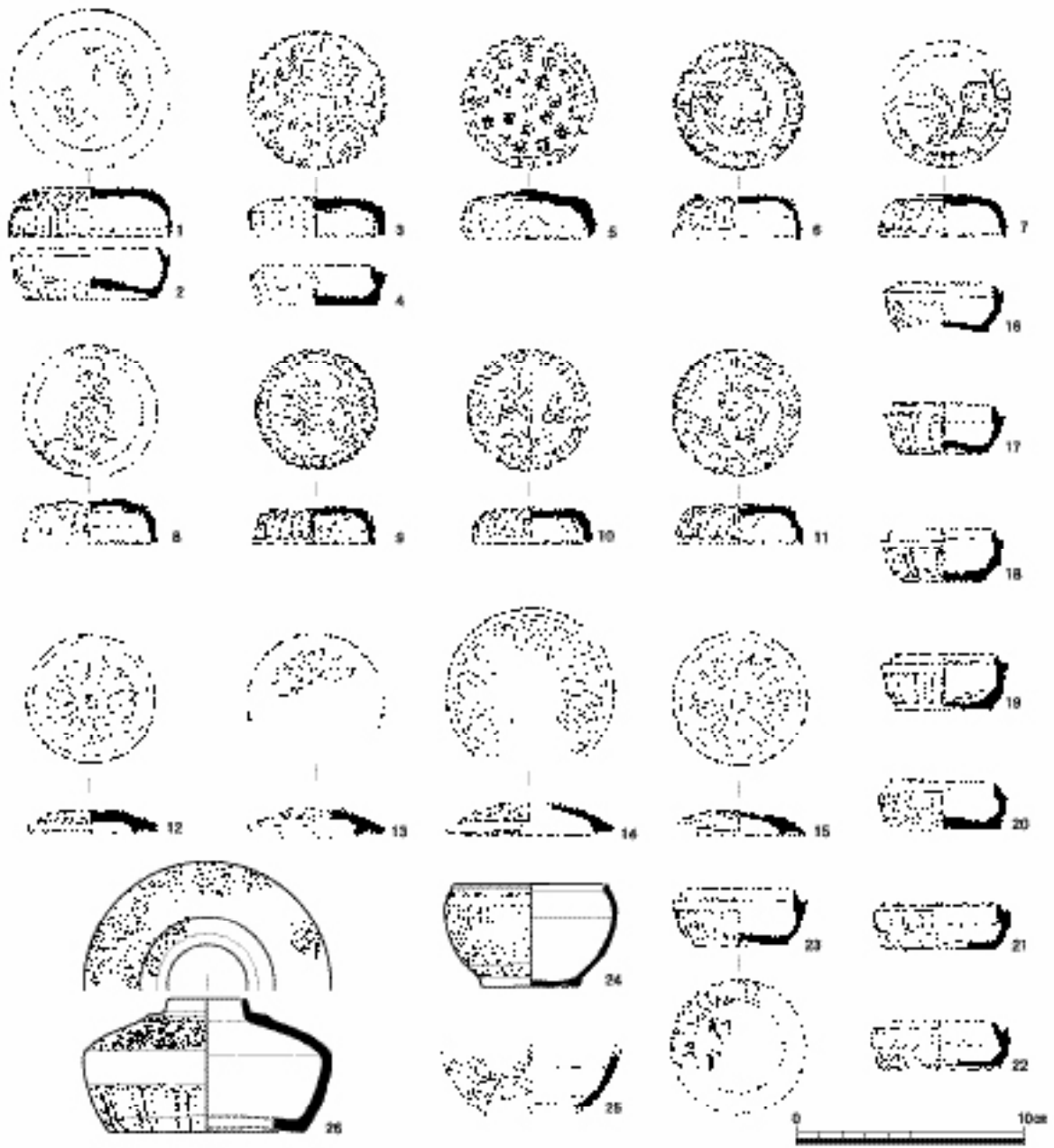


图 249 出土青白磁实测图（1：3）



图 250 出土青白磁

(3・10号)、底石の周囲に播鉢形の石室を作り内部に経筒を据え甕などで覆うもの(7・8・11～13・15・16号)、明確な石室を作らずに経筒を据えるもの(2・6・9号)に分けられる。

遺物 遺物は、整理箱で68箱出土した。遺物は、経塚に伴う経典・経筒・外容器・副葬品と、中島盛土内に含まれたものに分けられる。

経典には紙本経残欠と礫石経がある。経筒には、青銅製経筒、土師器・須恵器・瓦質土器の経筒・蓋がある。外容器には、須恵器・陶器の甕、瓦質土器がある。副葬品には、金属製鏡・椀・柄香炉・銅鈴・刀子・鋏・簪・分銅・飾金具、青白磁合子(1～25)・小皿・壺(26)、銭貨、■佛、ガラス玉、水晶玉、土玉、木玉、石製硯などがある。青白磁合子は多数出土している。

盛土内に含まれたものには、土師器、緑釉陶器、軒瓦・平瓦などがある。

小結 今回の調査で検出した経塚は、平地でしかも池の中島に造られており、貴重な例といえる。また、調査では、経塚の形成過程や構造を確認するとともに、副葬品の多様な様相が明らかとなった。経塚の築造時期は、盛土内出土遺物や副葬品から12世紀中葉と推定できる。

なお、弁天島経塚出土遺物は現在、一括して広隆寺が保管管理されている。

『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊
1997年報告

50 広隆寺旧境内

経過 今回の発掘調査は、右京区役所新築工事に伴うもので、当地は広隆寺推定寺域南部にあたるため、調査を実施した。調査地は、現講堂の南西 80 m、塔心礎推定出土地の北西約 20 m に位置する。調査地は北から南西へ緩やかに下降し、南に段差が見られ、丘陵の南先端部に立地する。調査は、1976 年に続いて当寺境内の 2 回目の調査となる。

調査地の南辺と西辺に土層を確認するために試掘を行い、東西約 13 m、南北約 14 m の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1・2 層現代整地層 (0.4 m)、第 3 層茶褐色砂泥層 (0.1 m)、第 4 層黄褐色泥砂・砂礫層 (地山) である。第 3 層上面で各時期の遺構を検出した。

飛鳥時代の遺構には、土壌 SK 5・10・13～15、基壇地業 SX12 がある。土壌は全域に見られ、埋土中に瓦を大量に含み、瓦投棄後に上面を整地する。基壇築成に関係した粘土採掘壙と推定される。SX12 は調査区中央で検出した T 字型の掘込地業である。掘形は幅 4.5 m、深さ 0.6 m で、壁は直に落込み底部は平坦である。埋土は、最下層に小礫と地山土を叩き締め、上層は褐色泥砂と黄褐色泥砂を互層に版築する。方位は N 68 E 度である。

奈良時代の遺構には、瓦溜、土壌などがある。

平安時代の遺構には、掘立柱建物跡 SB16・17、包含層などがある。建物跡は調査区東側で検出した。

その他、室町時代の土壌 (墓) などがある。

遺物 遺物は整理箱で約 200 箱出土した。出土遺物の種類には、埴輪、土師器、須恵器、瓦、陶器などがある。時期は、古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、室町時代に分かれる。

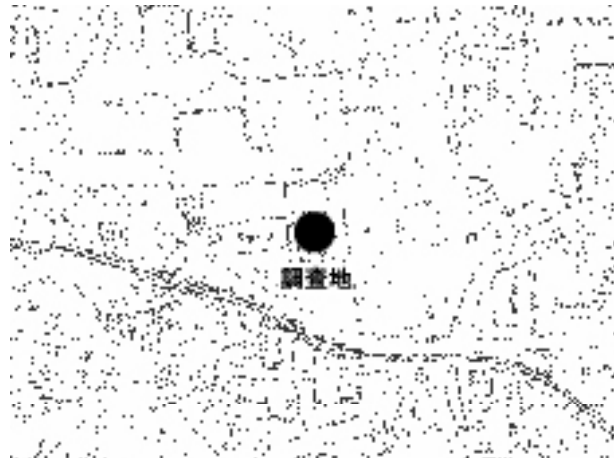


図 251 調査位置図 (1 : 5,000)



図 252 調査区配置図 (1 : 1,000)

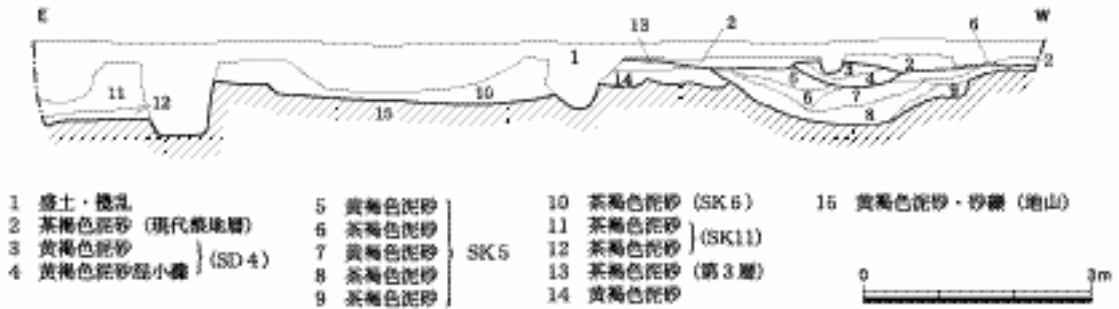


図 253 南壁断面図 (1 : 100)

古墳時代後期の遺物は、SK 5 などから円筒埴輪が少量出土した。

飛鳥時代の遺物は、土師器杯、須恵器壺・甕、軒丸瓦などがある。

奈良時代の土器類は土壇・柱穴から出土し、瓦類は土壇から大量に出土した。

平安時代の遺物は土師器杯・皿があり、土壇・地業から出土した。

室町時代の遺物は土師器皿、陶器などがあり柱穴から出土した。

瓦類には、軒丸瓦 (1 ~ 14)、軒平瓦 (15 ~ 17)、丸瓦、平瓦 (18 ~ 28) などがあり、代表的なものを図示する。1・2は素弁8弁蓮華文で、弁は凹平坦で弁端点珠を配す。間弁は楔形、瓦当側面・裏面に回転台調整を施す。3・4は単弁8弁蓮華文で、中房は盛り上がり4は竹管を押す。弁は盛り上がり稜線を持つ。間弁は3が菱形、4が楔形で、周縁は3が直立素文、4が圈線である。5は単弁6弁蓮華文で、中房は盛り上がり蓮子は4である。弁は中央が凹み、間弁は楔形。6~9は単弁6弁蓮華文で、中房は盛り上がり蓮子は不鮮明で、8は1箇所、9は数箇所竹管を押す。弁は中央が凹み、間弁はY字形、弁区周囲に圈線が巡り弁端に接する。10・11は単弁8弁蓮華文で、中房は盛り上がり蓮子は1+8。弁は盛り上がり子葉あり、弁端が反転

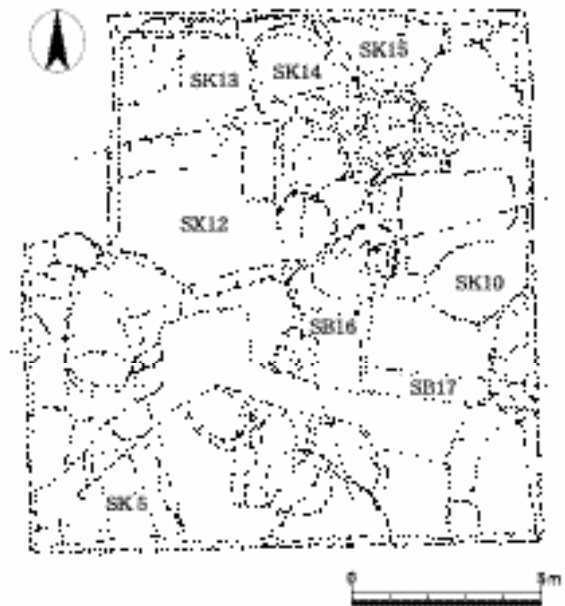


図 254 遺構平面図 (1 : 200)



図 255 調査区全景 (北から)

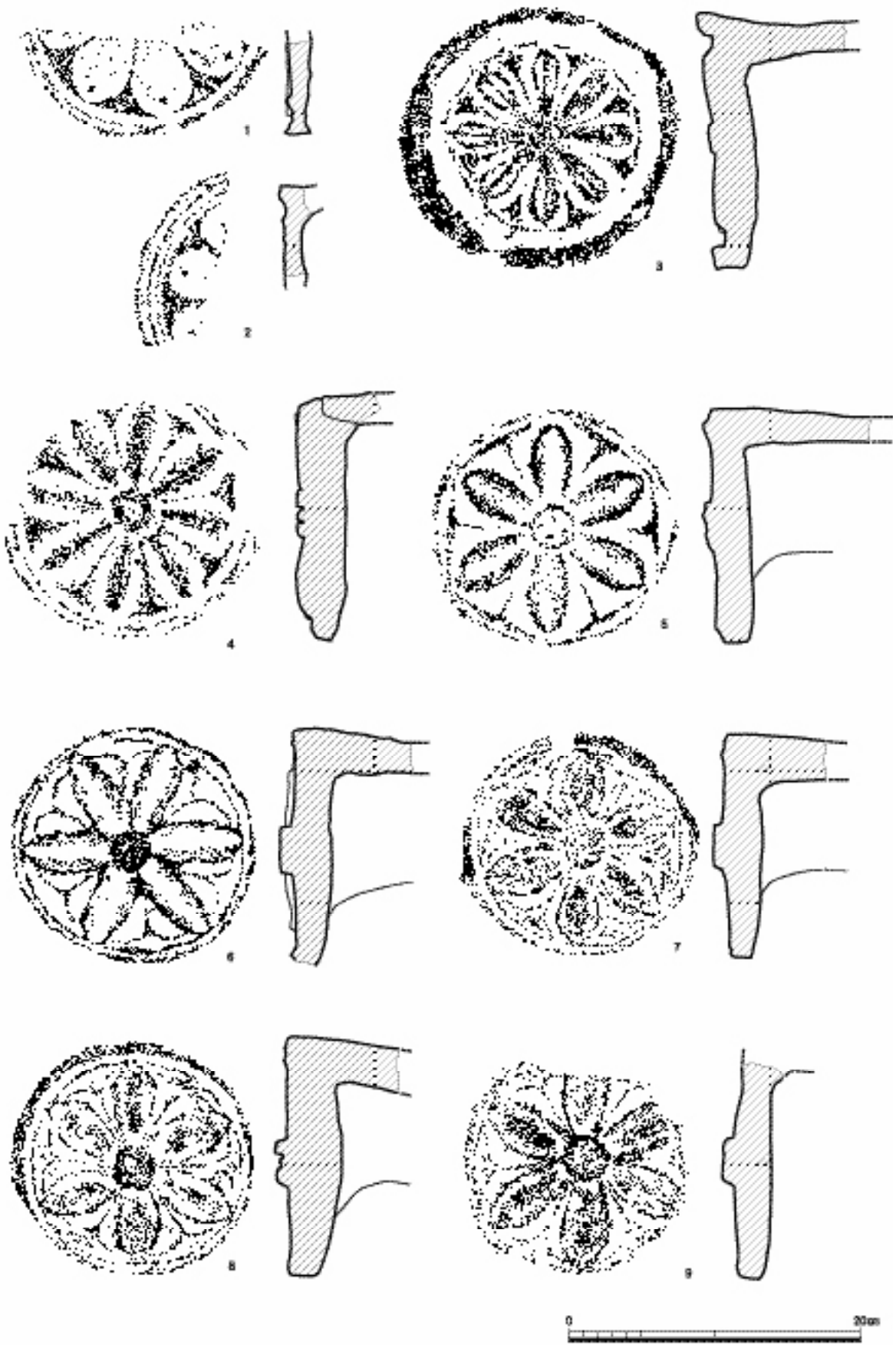


图 256 出土瓦拓影·实测图 1 (1 : 4)

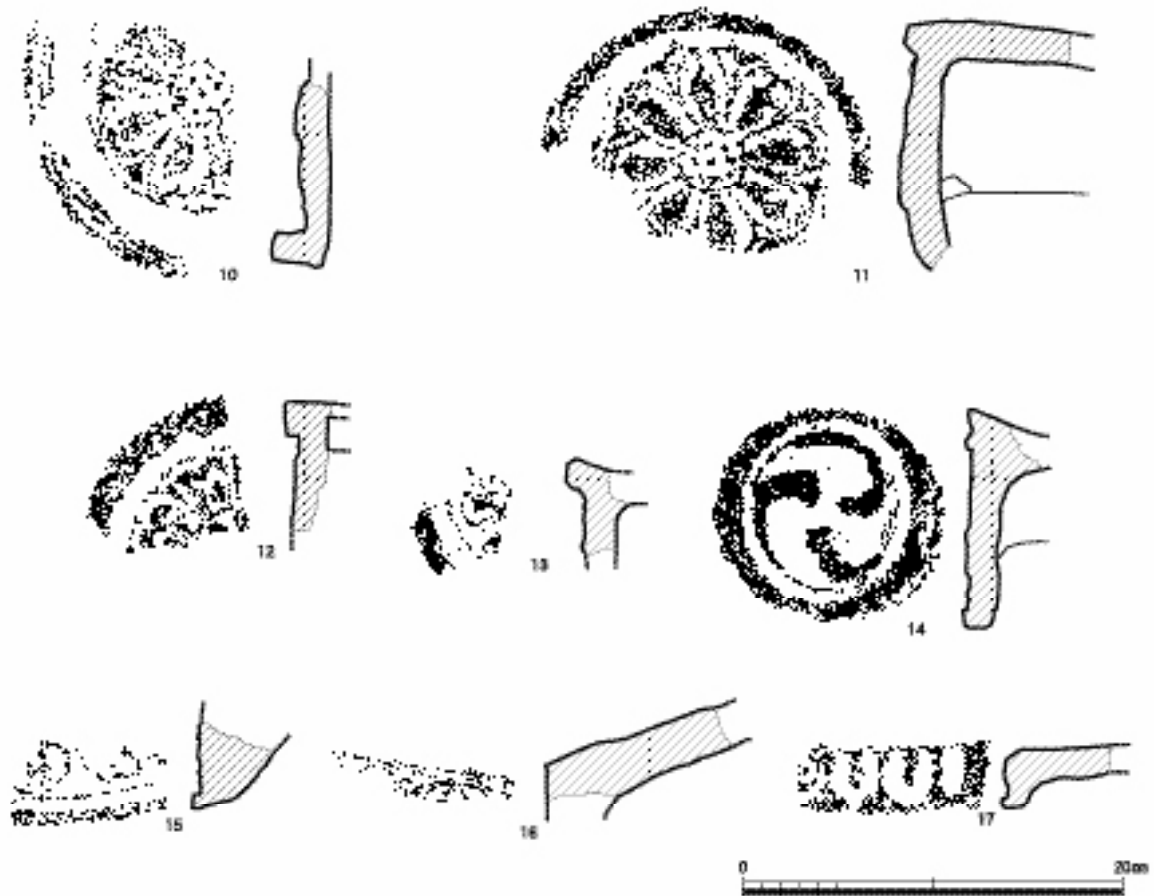


図 257 出土瓦拓影・実測図 2 (1 : 4)

する。間弁は楔形、弁区周囲に圏線が巡り弁端に接する。周縁は直立し、10は3重圏、11は素文。12は複弁6弁蓮華文で、中房は平坦、弁は盛り上がり子葉あり、間弁はY字形。周縁は素文直立。13は単弁蓮華文。弁は凸線で、子葉は短冊形。弁区周囲に圏線が巡り、周縁は素文直立。14は右巻き三巴文。頭部は離れ、尾は接する。周縁は素文直立。15は中心飾りが上向C字形で中に修を配す。両側に飛雲文が展開する。周縁は素文直立。16は中心飾りが下向C字形で、両側に唐草文が展開する。17は陰刻剣頭文で、中央に二巴文を配す。18～28はいずれも凸面の叩き目である。18は斜格子、19・20は格子、21は菱形重ね、22は放射状+格子、23は弧状+格子、24・25は楕円形+斜格子文、26は平行重ね、27は放射状+斜格子、28は弧状+斜格子である。

小結 今回の調査地は、位置関係から伽藍の南西部と推定され、検出した地業 SX12は、方位が葛野郡条理に近いこと、塔心礎推定出土地に近いことから、東院回廊の一部と推定できる。平安時代の建物は、東院内の三間堂にあたる可能性がある。

『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊
1997年報告

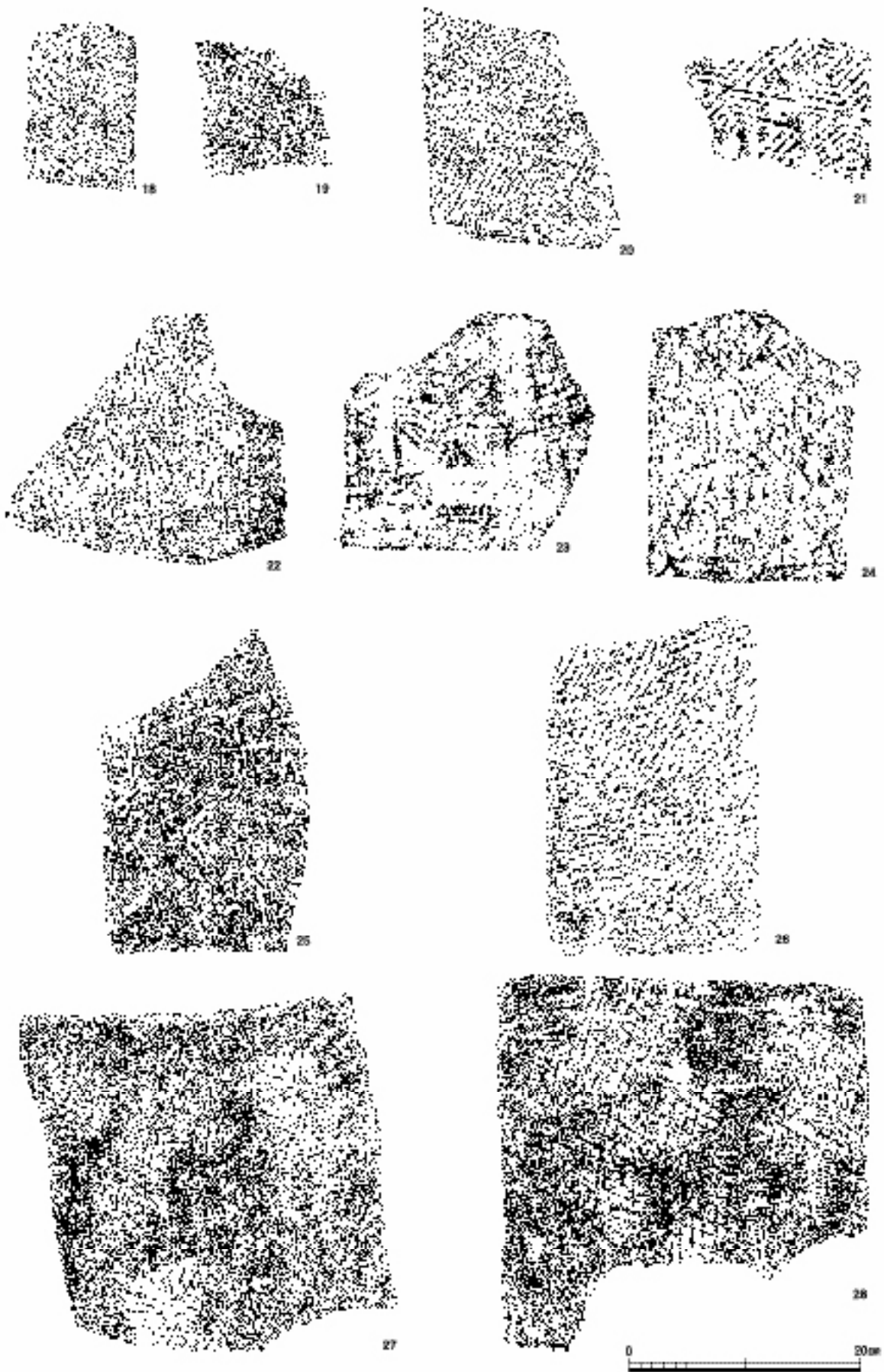



图 258 出土平瓦拓影 (1 : 5)


51 史跡・名勝嵐山


経過 発掘調査地は法然院境内北東隅で、当地は壇林寺推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北 24 m、東西 39 m の逆 L 字形の調査区を設定して調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第 1 層現代整地層（庭客土：0.4～0.5 m）、第 2 層整地層、第 3 層黄褐色砂礫土・茶褐色砂礫土層（地山）である。遺構は第 3 層上面で検出した。検出した遺構は、土壇、溝などである。

土壇 SK 1 は調査区南部で検出し、平安時代や室町時代の瓦・などが出土したが、江戸時代の投棄土壇と考えられる。他の土壇は庭木の移植や植樹に関するものであった。

遺物 遺物は、瓦類やが出土した。時期は、平安時代から室町時代である。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構は検出できなかったが、調査地周辺の分布調査で平安時代前期から中期の瓦を多数採取しており、付近に平安時代前期に造営された壇林寺が存在したことが窺える。また、室町時代の瓦類やは天竜寺に関連した遺物である。

『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊
1997 年報告

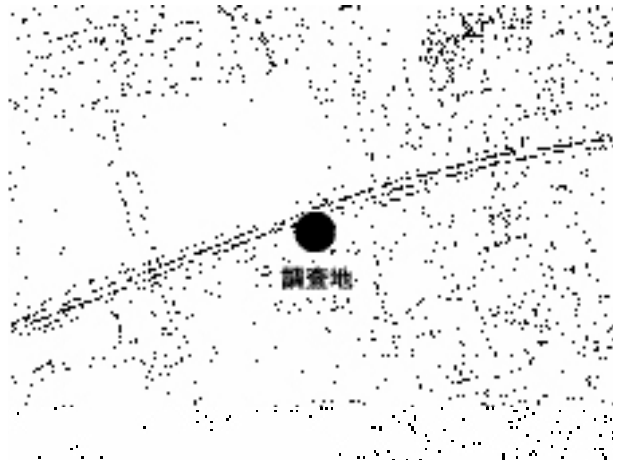


図 259 調査位置図 (1:5,000)



図 260 遺構平面図 (1:400)

52 檜原遺跡

経過 今回の発掘調査は、宅地開発に伴うものである。当地は弥生時代から古墳時代の遺物散布地にあたり、これまで、遺物が採取されていた。調査地は檜原廃寺の南方約300mに位置し、東へ張り出す丘陵の東斜面に立地する。当遺跡の1回目の発掘調査である。

調査は、まず、全体の堆積状況・遺構の残存状況を把握するために、調査地全域に幅3mのトレンチを南北2本（A・Fトレンチ）、東西2本（C・Dトレンチ）を設定した。遺

構が良好に残存したため、さらにトレンチを追加し、北側（Dトレンチ）では拡張を行った。第1面で攪乱などを掘り下げた後、遺構の調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。

その後、調査地北側では暗灰褐色泥砂層などを掘り下げ、弥生時代から平安時代の遺構面（第2面、地表下約0.8m）を検出した。第2面で遺構の調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地は、場所によって堆積状況が異なるが、基本層序は第1層耕土・床土茶褐色砂泥（0.5～0.2m）で調査地南側では薄くなる。第2層暗灰褐色泥砂層（約0.5m）で調査地南側では見られない。第3層は落込み埋土などが堆積し、第4層褐色砂礫・黄灰色粘土（地山）である。

調査は、第2層上面を第1面、第4層上面を第2面とした。第1面上面の標高は、北

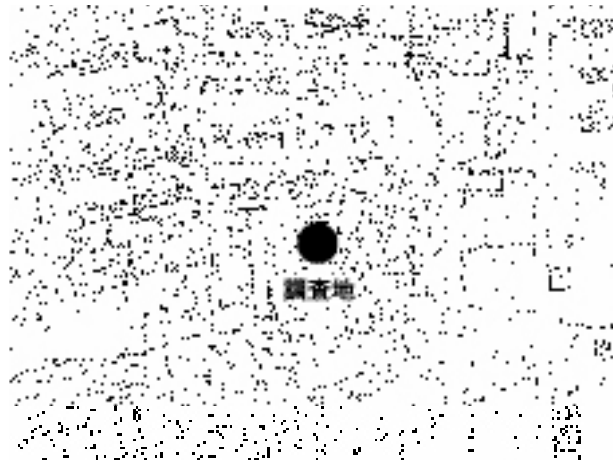


図 261 調査位置図（1：5,000）

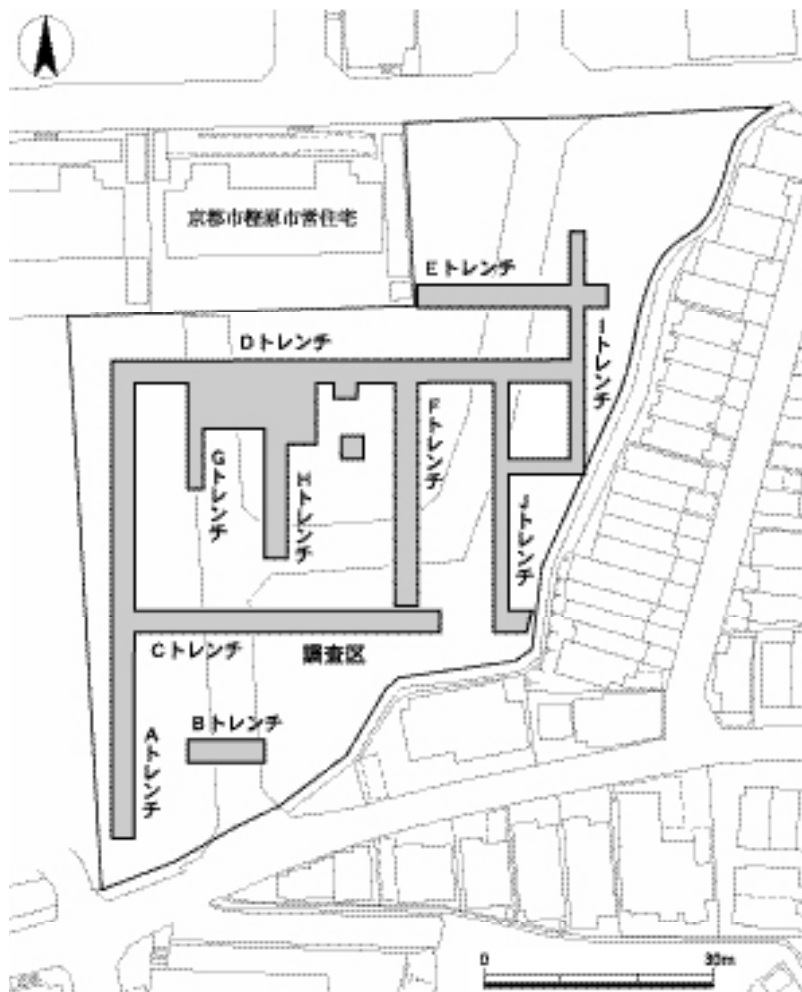


図 262 調査区配置図（1：1,000）

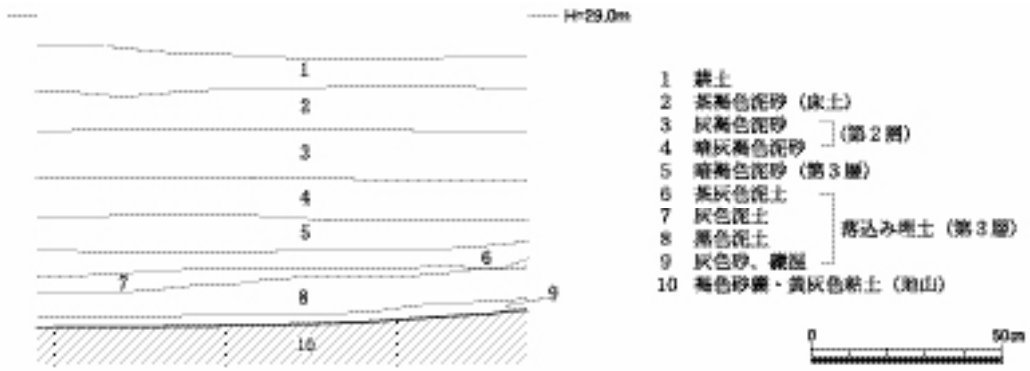


図 263 Dトレンチ北壁断面図 (1:20)

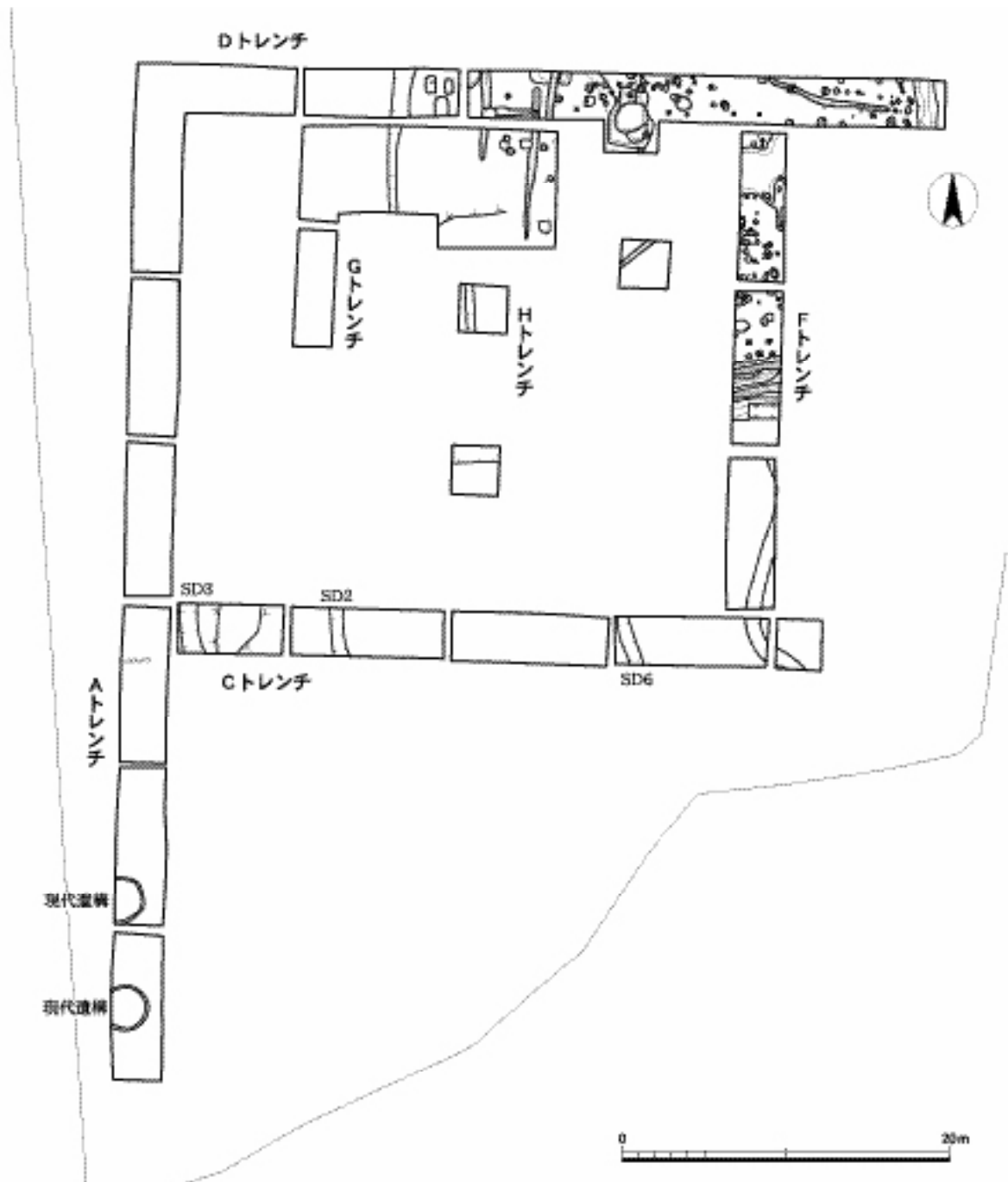


図 264 第1面遺構平面図 (1:400)

端の方が南端より高く、西側から東側に若干下降する地形を呈する。地表面の標高は、調査区中央で約 29 m である。

第 1 面では、北部で平安時代後期から室町時代の土壌、掘立柱建物跡、柱穴、井戸、溝などを多数検出した。遺構はかなり密に分布し、重複した箇所もある。D トレンチ拡張区で検出した井戸は径 2 m、深さ 0.7 m の素掘り円形井戸である。南部でも同時期の南北溝を数条検出した。

第 2 面では、北部で弥生時代の落込み、奈良時代から長岡京期の落込み、平安時代の落込みを検出した。平安時代前期の落込みは、東西約 12 m、南北 7 m 以上、深さ 0.5 m 以上で、底部は北

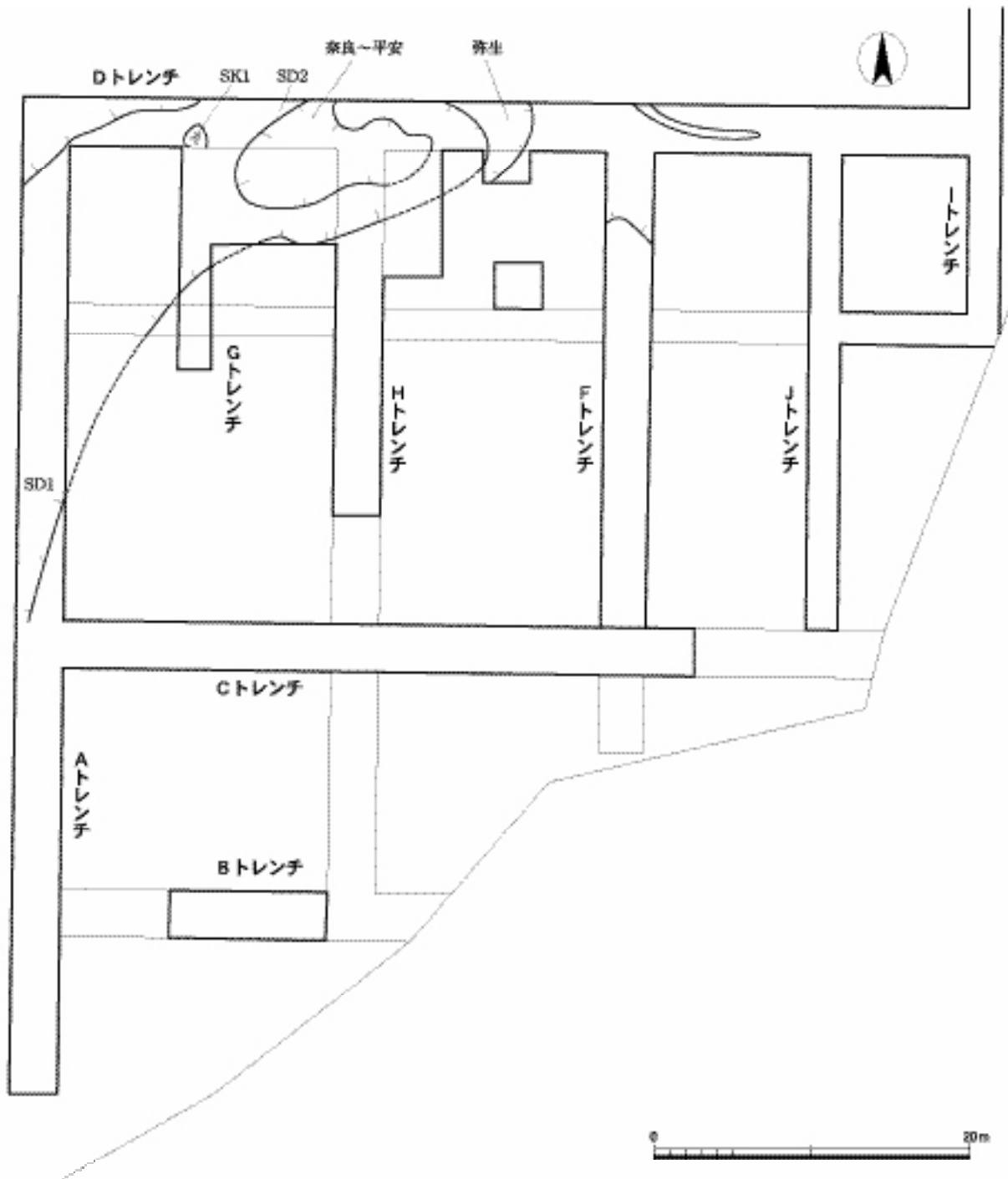


図 265 第 2 面遺構平面図 (1 : 400)

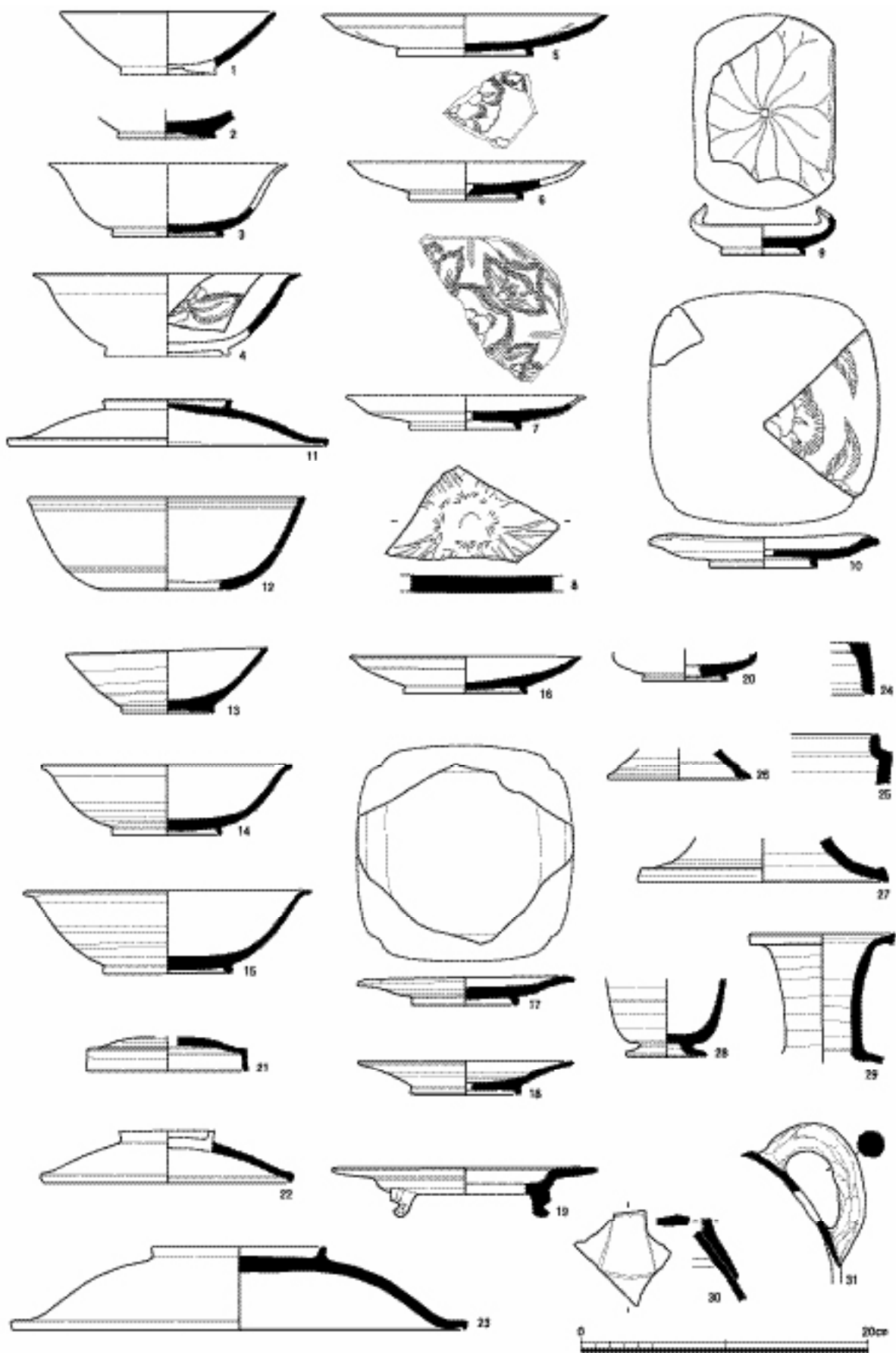


图 266 遺物実測図 (1 : 4)

側に傾斜する。埋土は黒色泥土を中心とした土で、落込みの肩口では、平安時代前期の遺物を多量に含む遺物包含層を検出した。

遺物 遺物は整理箱にして43箱出土した。出土遺物の種類には、軒丸瓦・軒平瓦、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、磁器、石鏃などがあり、大半が土器類である。

時期別には、弥生時代から室町時代で、平安時代ものが最も多く、他の時代に属する遺物は微量である。以下、種類ごとに主要遺物を報告する。

平安時代の土器類には、土師器、須恵器、緑釉陶器蓋(11)・耳皿(9)・皿(6～8・10)、灰釉陶器蓋(23)・皿(16・17)・椀(13～15)・三足盤(19)などがある。緑釉陶器は貼付高台で、体部内外面はロクロナデ、全面に丁寧なミガキを施す。6～10は内面に陰刻花文を施し、10は口縁部を切り欠き輪花を表す。胎土は灰白色で堅く焼け締まり、緑灰色の釉薬を全面に厚く施す。灰釉陶器は、13が貼付け高台、他は削出し高台である。体部内外面はロクロナデで、外面はロクロケズリである。胎土は灰白色で堅く焼け締まり、淡緑色の釉薬を施す。いずれも落込みから出土し、伴出した土師器・須恵器から、時期は平安時代前期(9世紀前半)である。

平安時代後期から鎌倉時代の土器類は、白磁椀などがDトレンチ拡張区の井戸から出土した。

小結 今回の調査は当遺跡最初の発掘調査で、遺跡が弥生時代から室町時代に至る複合遺跡であることが判明した。

弥生時代の遺構は、落込みしか検出できず、明確な遺構はない。これまで当丘陵付近では弥生時代の遺構は検出されておらず、近隣では東側約700mの低地に位置する下津林遺跡(弥生時代後期から古墳時代の集落跡)だけで、性格は不明である。

白鳳時代(7世紀後半)には、調査地北側の榎原に寺院が造られるが、当調査区ではこの時期に関する遺構・遺物は未検出で、寺院とは関係ない地域であったことがわかる。

平安時代前半の遺構は確認できなかったが、多量の緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。これらの陶器は平安京内でもあまり見ることができず、特異な出土状況を示す。榎原廃寺の廃絶は平安時代中頃であり、当遺跡が寺院と関係する可能性も指摘される。ただ、当遺跡の東側には物集女街道が通じ、これと関連する施設との考えもある。いずれにしても、遺構が明確でないために、性格については不明な点が多い。

鎌倉時代から室町時代には遺構が増加し、遺物もある程度見られることから、物集女街道沿いの集落と推定することができる。



図 267 調査区全景(北から)

53 中久世遺跡 1 (図版 16)

経過 今回の発掘調査は、大藪小学校講堂新築工事に伴って実施した調査である。当地は中久世遺跡の北東部にあたり、桂川右岸の沖積平野の微高地上に位置し、北西から南東にわずかに下降する段丘上に立地する。中久世遺跡の5次調査である。

調査は、既存の建物基礎を除き、調査地内に方形の調査区(A・B・C区)を設定し、遺構面(第1面、地表下約0.3m)まで重機で耕土・床土を掘削した。その後、調査区北東部で方形周溝墓を検出したため、東部に東西トレンチ(D区)、南北トレンチ(E区)を追加し、B・C区の北側で拡張を行った。第1面で攪乱などを掘り下げた後、遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面実測などを行い調査を終了した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層盛土(0.1～0.2m)、第2層耕土(0.2m)、第3層淡黄褐色砂質土層(0.1m)、第4層黄褐色粘質土層(0.1m)、以下地山である。第4層上面で各時期の遺構を検出した。

遺構面では溝、土壇、柱穴、落込み、方形周溝墓を検出した。

溝は全域で十数条検出し、南北のものが多く、東西のものも少数見られる。幅は0.3～0.5m、深さ約0.1m程度で、埋土は淡黄灰色砂泥で、土師器・須恵器・瓦器を含み、中世または近世と推定できる。方位はほぼ真東西南北で、耕作に関係したものと考えられる。

土壇はA～C区で散在し、方形のものもあるが、不定形のものが多い。大きさは一辺1m大のものもあるが、0.5m程度のものが多い。遺物はほとんど出土せず、時期は不明である。

柱穴は全域で散在する。形状は円形・楕円形で、径は0.5～0.2mである。掘立柱建物跡とし

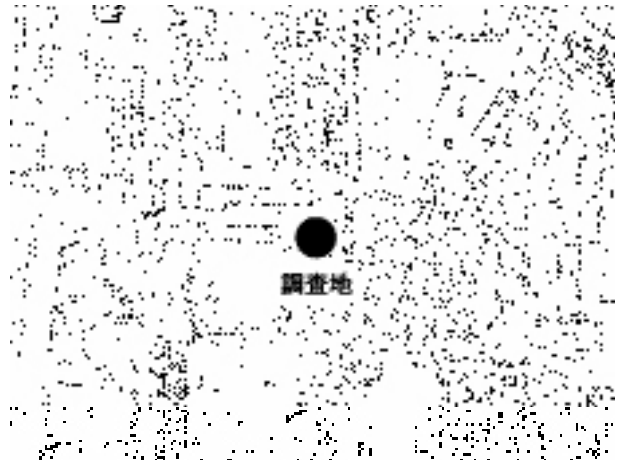


図 268 調査位置図 (1 : 5,000)

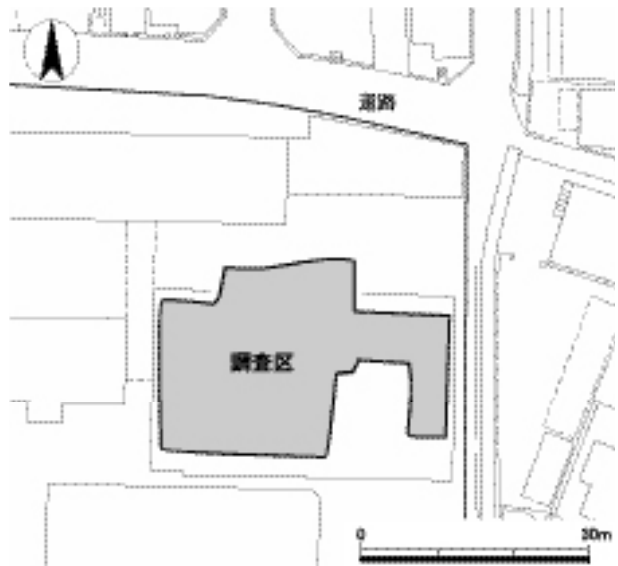


図 269 調査区配置図 (1 : 1,000)

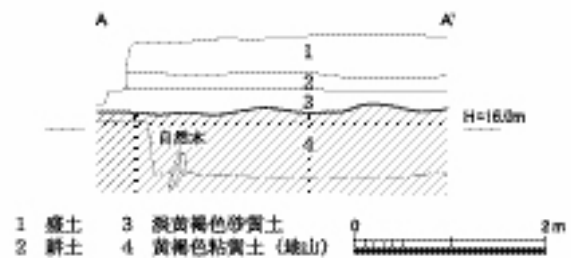


図 270 C区東壁断面図 (1 : 80)

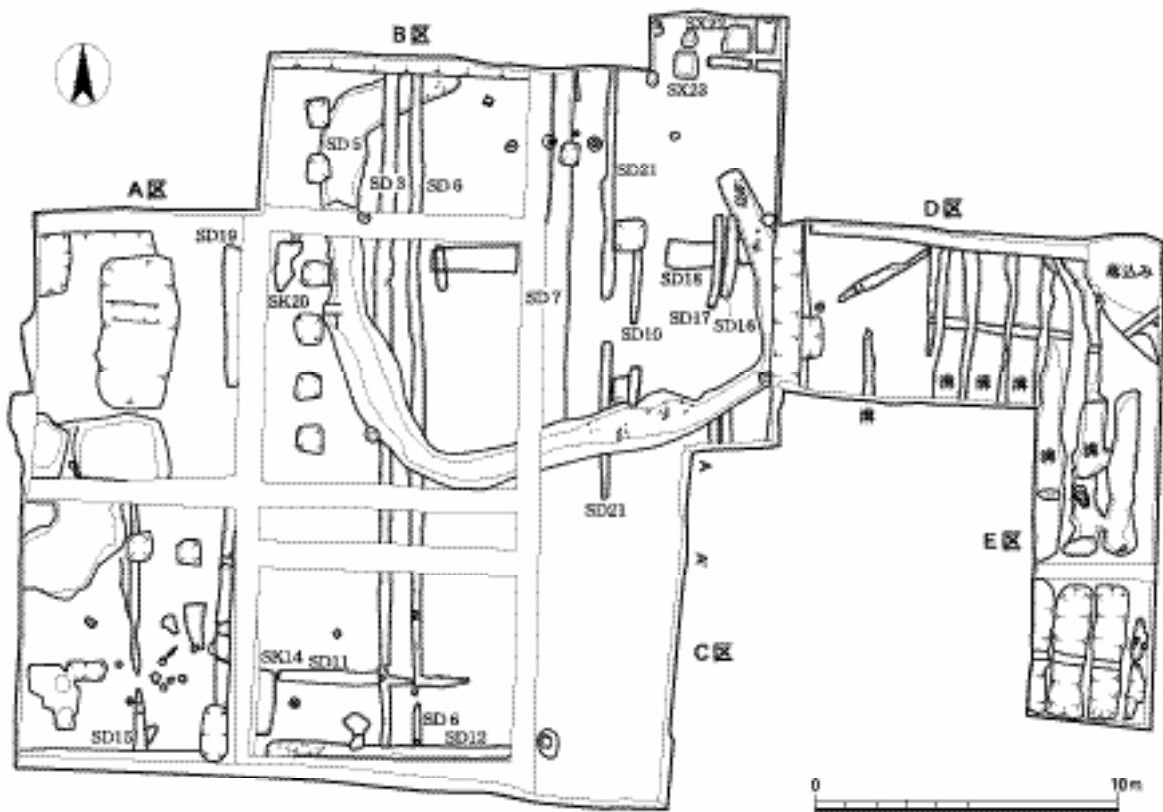


図 271 遺構平面図 (1 : 250)

てはまとまらなかった。埋土は褐色土で、土師器を含むが、時期は不明である。

落込みはD区北東部で検出した。部分的なので不明確ではあるが、西肩方位がB・C区方形周溝墓に似ることから、同様の遺構の可能性はある。

B・C区北部で検出した方形周溝墓SD 5は、規模が東西約37m、南北約35m、溝は断面U字形で幅0.2～0.4m、深さ約0.3mである。溝埋土は上層灰褐色砂泥で、下層灰色粘土、底部の南部と北東部に凹みがあり、土器が多数出土した。方位は北で西に振れる。主体部は検出できなかった。

遺物 遺物は整理箱にして7箱出土した。遺物の種類には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、銭貨などがあり、弥生土器が最も多く、土師器・須恵器が続く。近世陶磁器類もある程度出土した。時期は、弥生土器が弥生時代中期に所属するが、他の土器類は不明である。

小結 中久世遺跡は、縄文時代から中世に至る複合遺跡で、今回の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓などを検出し、桂川右岸に点在する当該期の集落の変遷や構造を知る上で重要な発見となった。

54 中久世遺跡 2 (図版 17～19)

経過 今回の発掘調査は、中央信用金庫久世支店新築工事に伴うものである。調査地は、縄文時代から室町時代の中久世遺跡の中心にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は桂川右岸の沖積平野の微高地上に位置し、北西から南東にわずかに下降する段丘上に立地する。中久世遺跡の6次調査である。

調査地内にL字形の調査区を設定し、遺構調査を実施した。その後、南北流路東肩確認のため北東部を拡張し、流路の続きを確認するためさらに北側を追加拡張した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層盛土層(0.7～1.1 m:現代)、第2層耕作土・床土(0.5 m)、第3層灰色粘土層(0.2 m:中世)、第4層暗灰色シルト層(0.1 m:中世)、第5層淡灰褐色砂礫層(地山)である。第4層下面で弥生時代、長岡京期から平安時代の2時期の遺構を検出した。遺構面の標高は15.45 mである。

弥生時代中期の遺構には、流路、溝、土壇、柱穴などがある。流路は調査区南西を除き全域で検出し、北から南に流れ、幅13 m以上、深さ約1 mで、何度も流れを変化させながら、次第に堆積した状況である。流路の西側では柱穴、土壇5基、溝状遺構が見られる。土壇

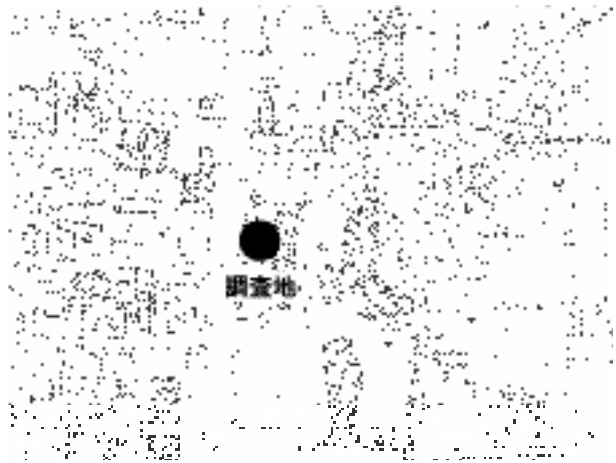


図 272 調査位置図 (1 : 5,000)

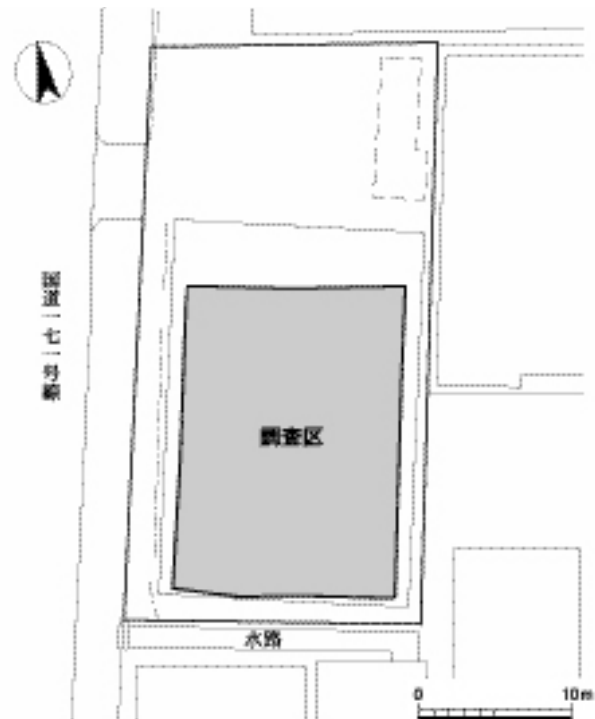


図 273 調査区配置図 (1 : 500)

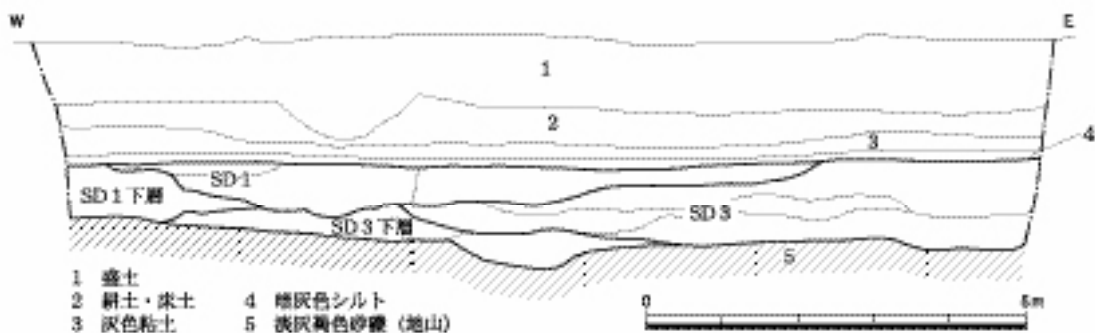


図 274 北壁断面図 (1 : 100)

は散在し、形状・規模は様々である。SK 1は楕円形で南北2.1 m、東西1.5 mで、他のものは長円形で長軸1.8～2.4 m、短軸約0.7 m、深さ約0.2 mである。溝は北東から南西に延び、北端は不明である。

長岡京期から平安時代初期の遺構には、流路などがある。流路は調査区中央部で検出し、北から南に流れ、幅約8.7 m、深さ約0.7 mで、堆積が東から西へ移ったことが確認できた。最終的には平安時代に幅約2.3 m、深さ約0.1 mとなる。流路の西側では杭列が見られる。杭列は流路の西肩部で検出し、護岸用と推定できる。

遺物 遺物は整理箱にして250箱出土した。種類には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、木製品、土製品、石器、獣骨、銭貨などがある。時期別は、弥生時代以前と長岡京期から平安時代に分かれる。

弥生時代以前の土器類には、縄文土器深鉢(11～14)、弥生土器鉢(1～7・9・35)・高杯(8)・器台(10)・水差形土器(18)・甕(25～34)・壺(15～17・19～24)などがある。石製品(石1～石28)には石包丁・石剣・蛤刃石斧・鑿状石斧・石鏃・擦石などが、木製品(木1～30)には鋤・丸鍬・角鍬・蓋・盤・ヘラ・高杯・台付き盤・柄杓・匙・把手・おさ・ちきり・板状漆製品や用途不明のものなどがある。その他植物遺体が河川から多量に出土した。

長岡京期から平安時代の遺物には、土器類では、墨描人面土器(40)、須

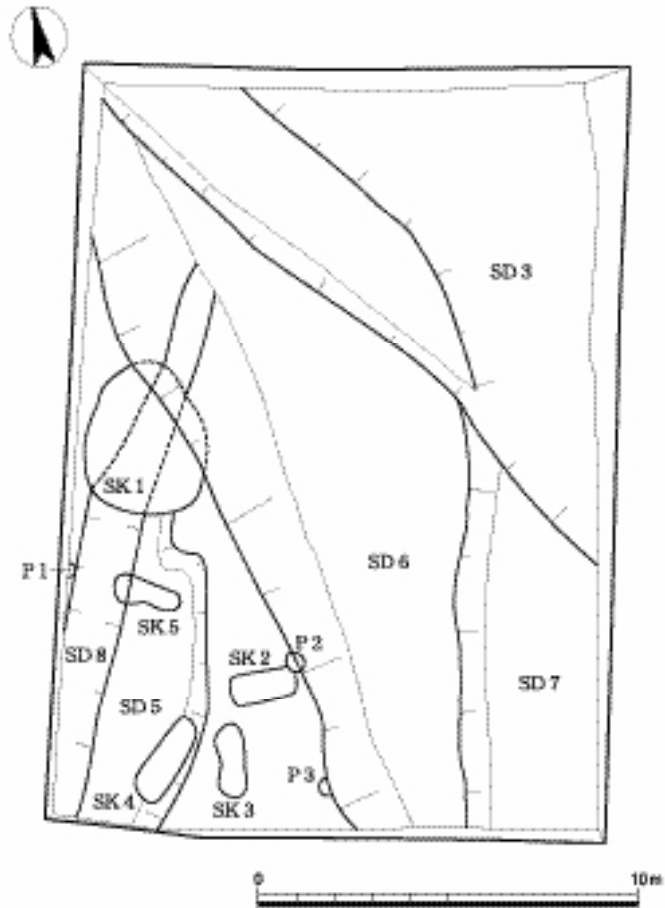


図 275 弥生時代遺構平面図 (1 : 200)

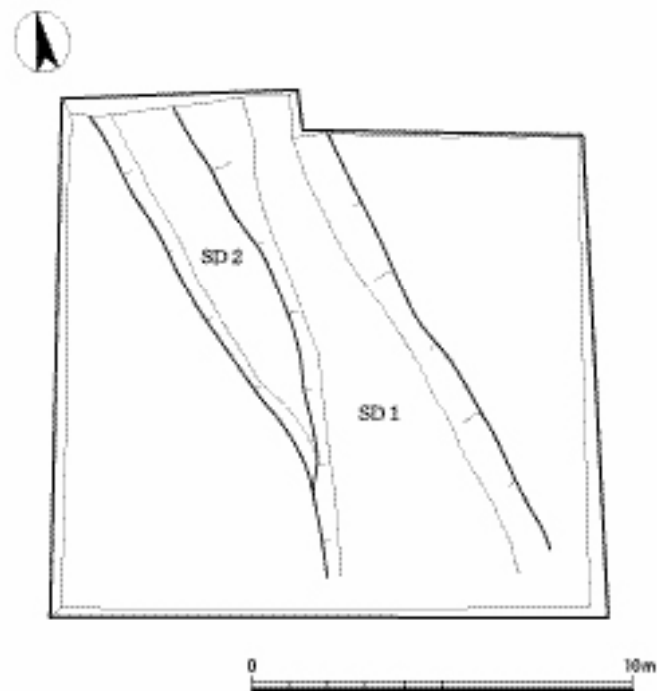


図 276 長岡京期から平安時代遺構平面図 (1 : 200)

恵器杯 (37～39)・蓋 (36)・壺 (41)、土製小型竈 (43)・甑 (42) がある。木製品には、木製人形代 (木 31～木 44)・斎串 (木 45～木 48)・張形 (木 49・51)・櫛 (木 50)・木筒 (木 52) などがある。他に図示していないが錢貨「鏡益神宝」・「隆平永寶」や獣骨が河川から出土した。

小結 調査区は中久世遺跡の中心部近くにあたり、当該期の集落の変遷や構造を知る上で重要な発見となった。

弥生時代の遺構は流路が中心で他の遺構は少ないが、流路からは土器・木製品・石器のまとまった遺物が出土し、当該期の遺物組成を確認することができた。

長岡京期から平安時代初期の遺構も流路が中心であるが、墨描人面土器、須恵器、土製小型竈、木製人形代・斎串・曲物、錢貨、獣骨などの祭祀関連遺物が多数出土し、近隣で祭祀を実施した後に流路に投棄したことが明らかとなった。

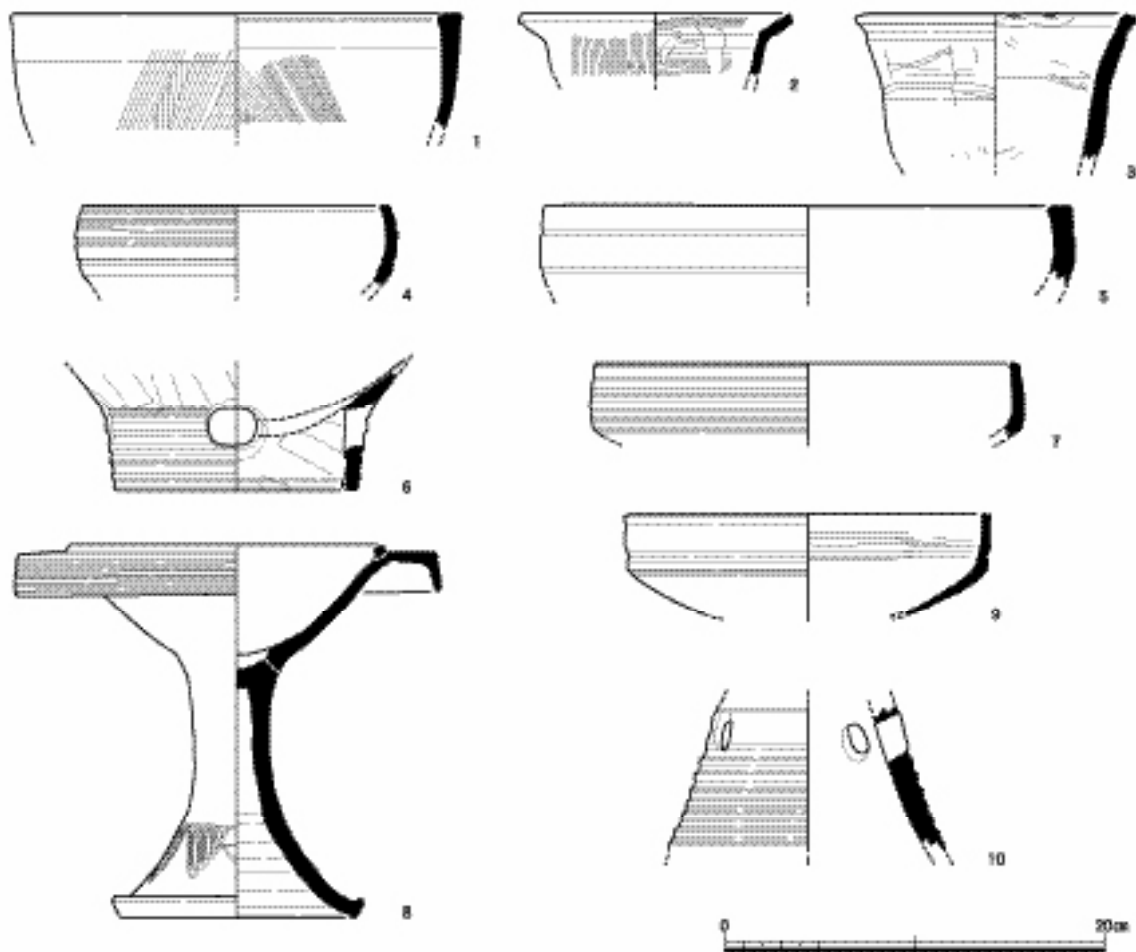


図 277 遺物実測図 1 (1 : 4)

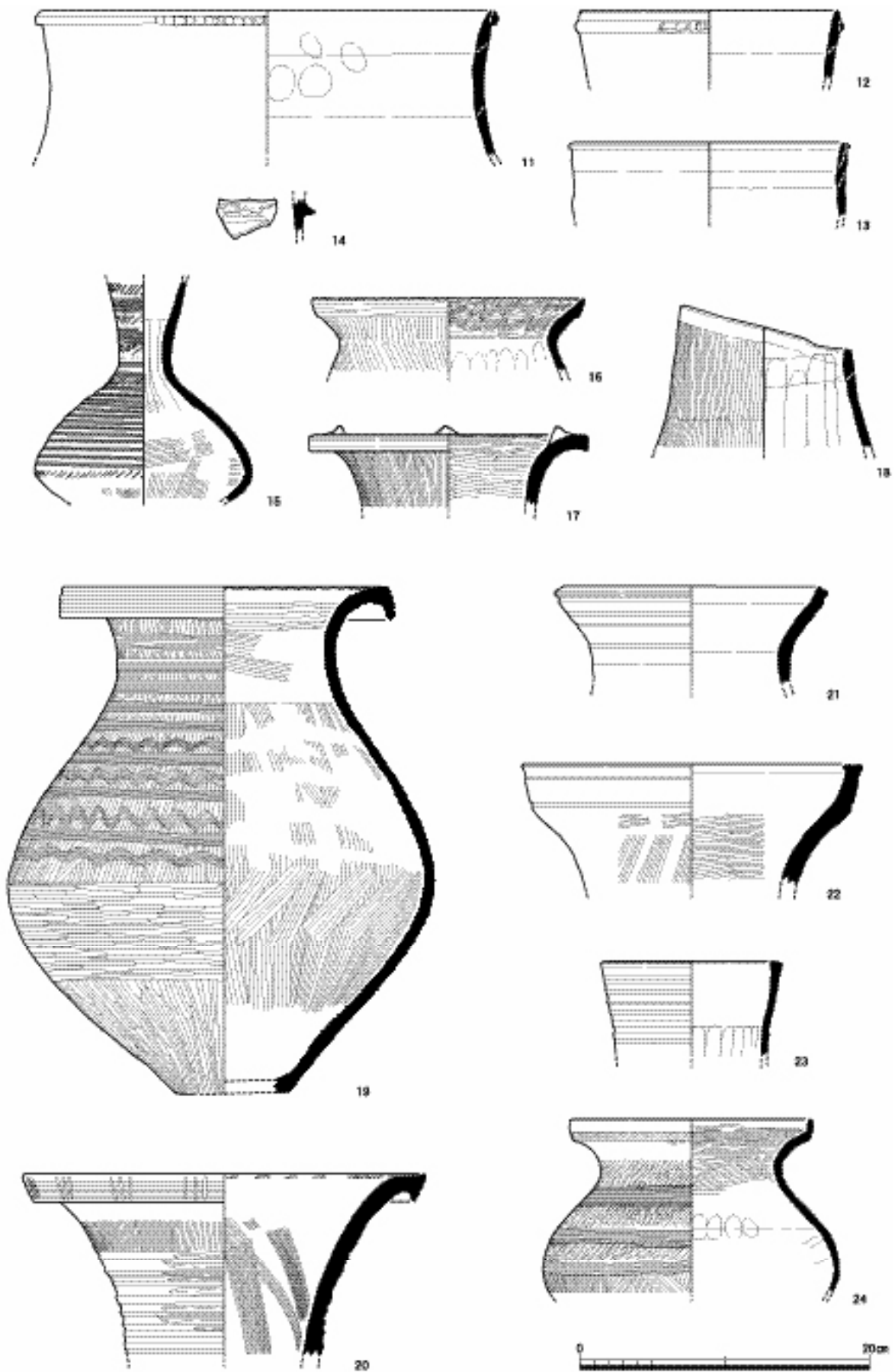


图 278 遺物実測図 2 (1 : 4)

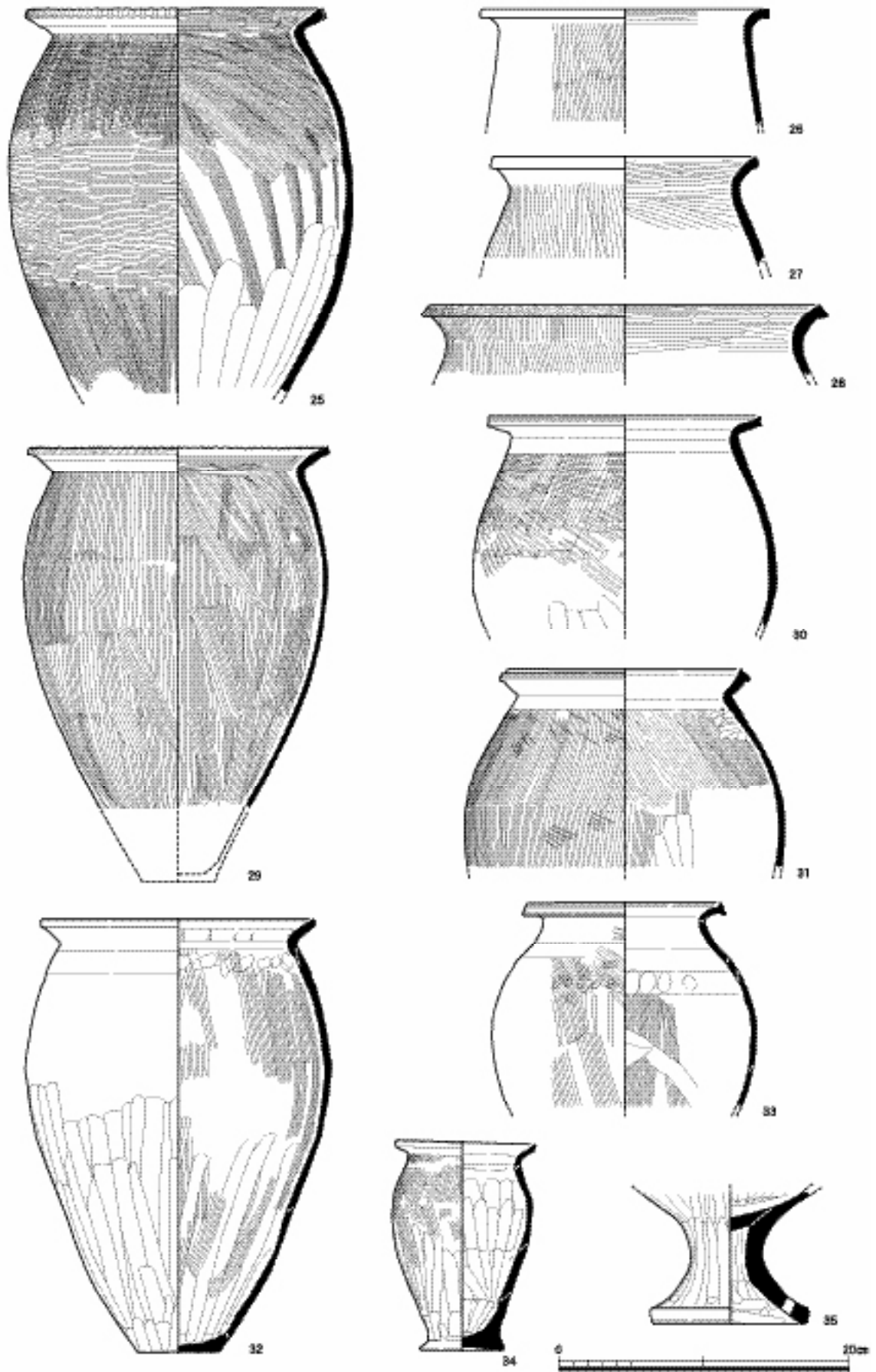


图 279 遗物实测图 3 (1 : 4)

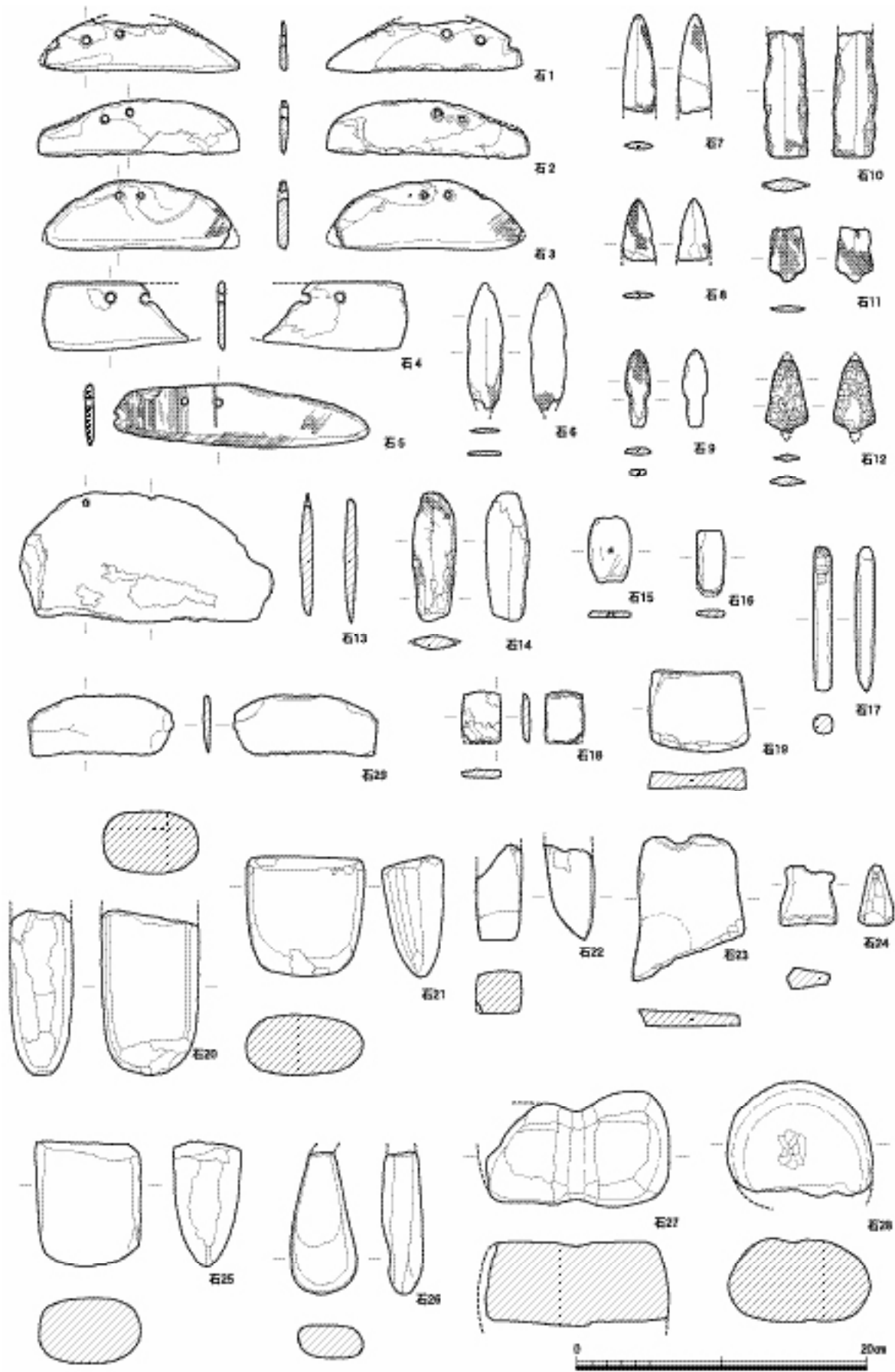


图 280 遺物実測図 4 (1 : 4)

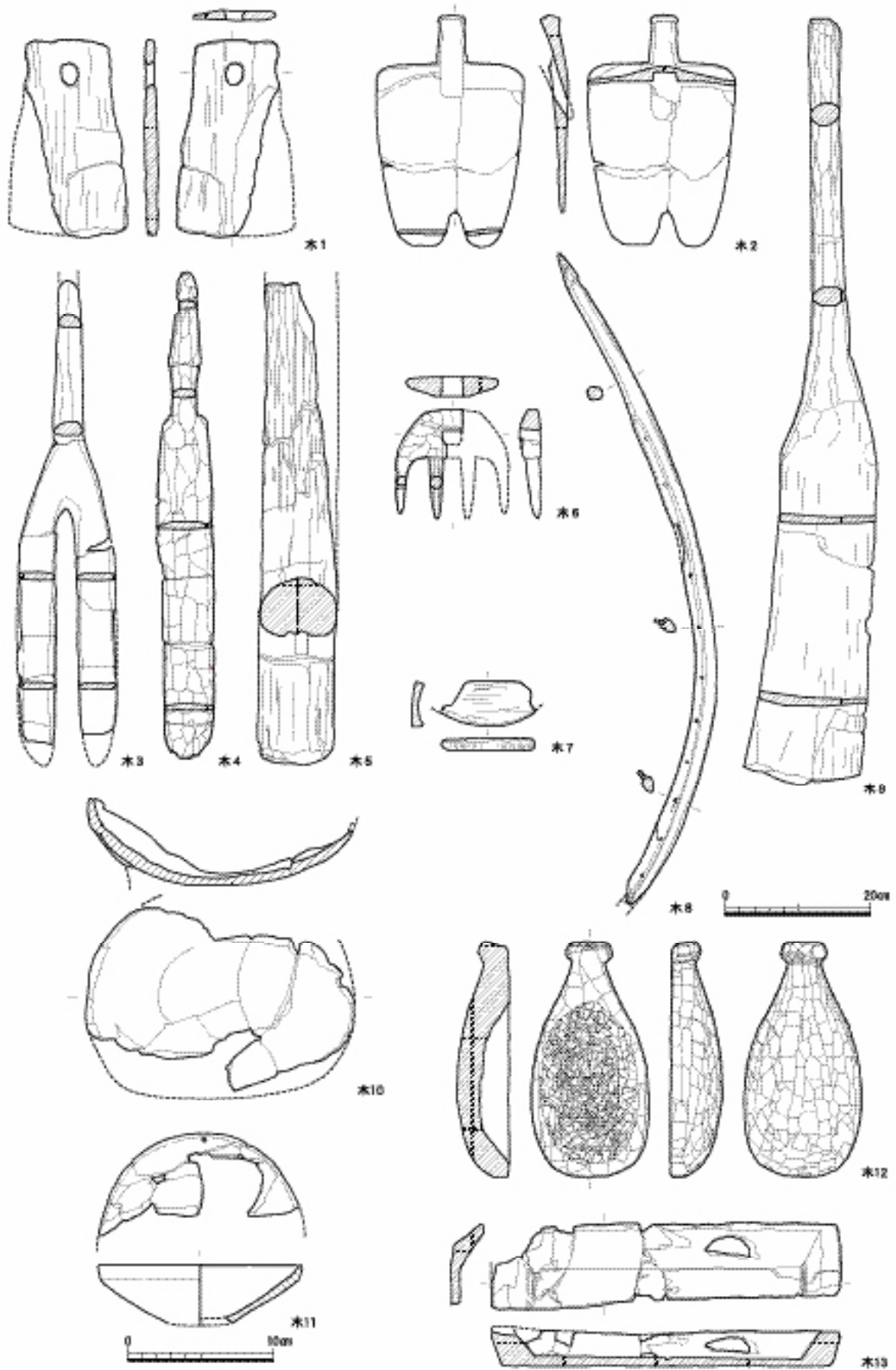


図281 遺物実測図5 (1:8、木10・11のみ1:4)

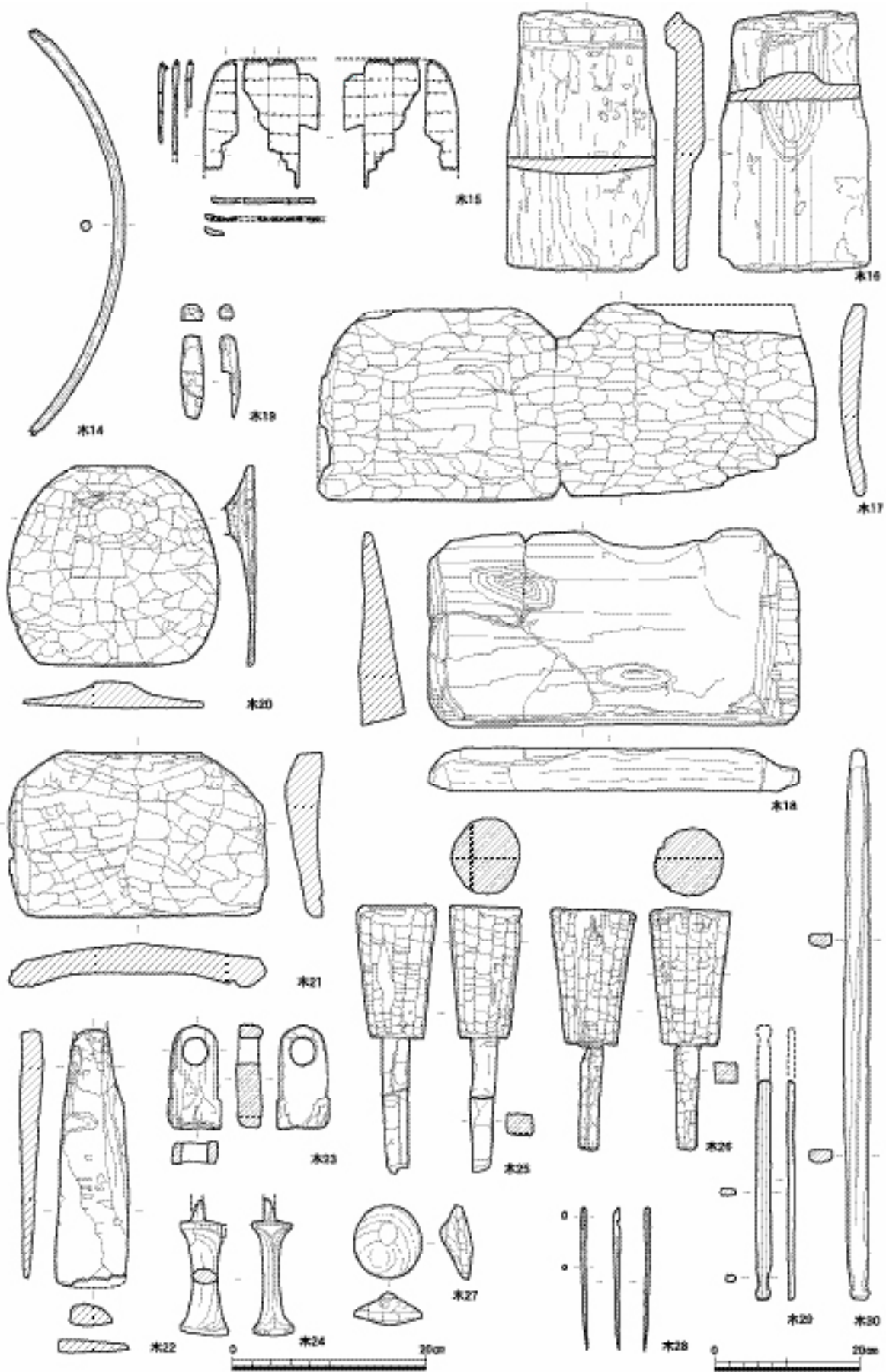


図 282 遺物実測図 6 (1 : 8、木 24・27 のみ 1 : 6)

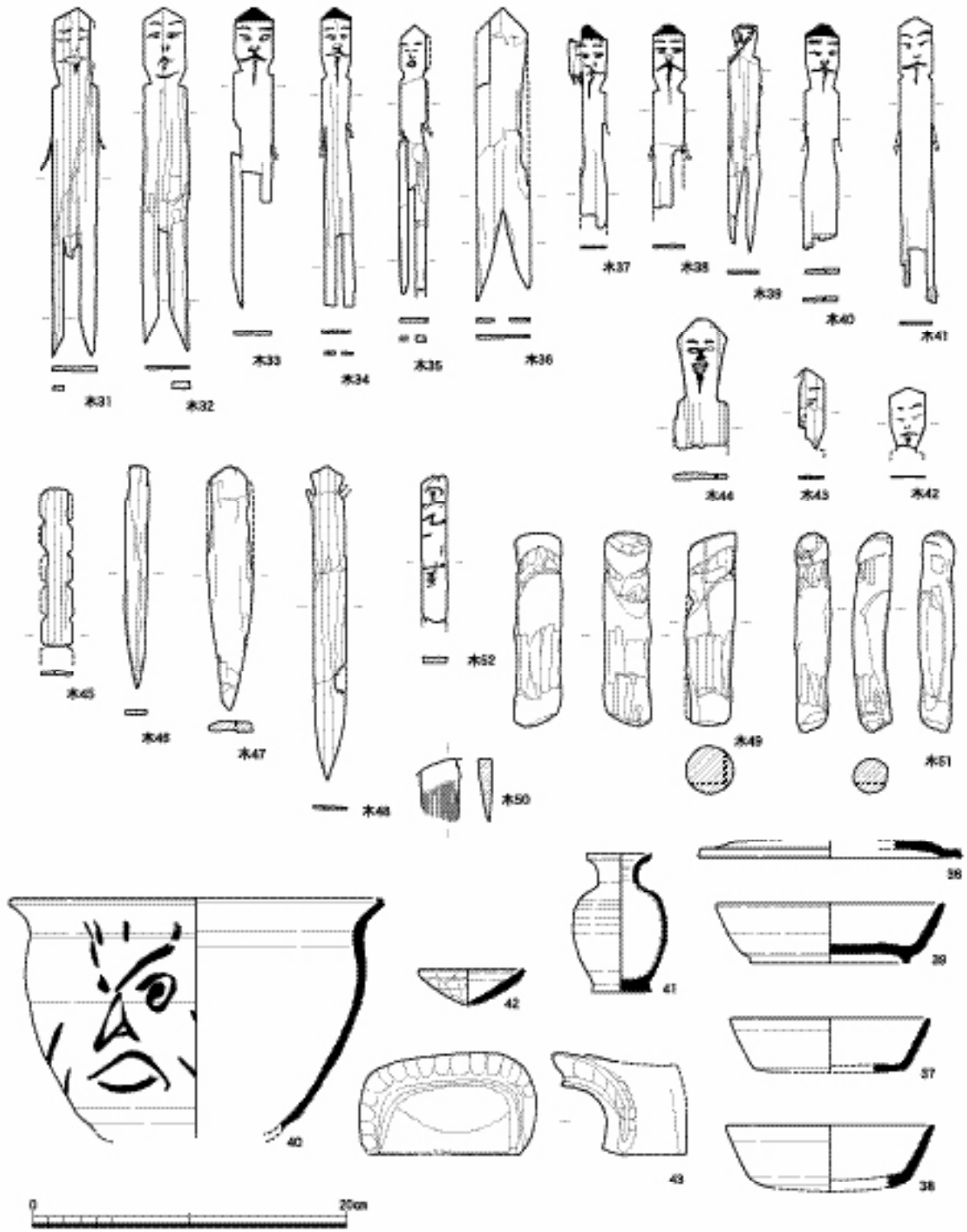


图 283 遺物実測図7 (1:4)

55 法観寺跡

経過 今回の発掘調査は、法観寺五重塔の防災施設設置に伴うものである。法観寺はこれまでの境内での採集瓦から飛鳥時代の創建とされている。

調査は、塔の北東部に正方形の調査区を設定した。53年度には塔を囲む配管工事に伴う立会調査を実施した。

発掘調査の遺構・遺物 調査地の基本層序は、第1層黄白色粗砂層（0.05～0.1 m：表土）、第2層以下は調査区西半にのみ見られ、他は近現代層である。第2層暗黄褐色泥砂層（0.1～0.2 m）、第3層淡黄褐色泥砂層（0.1 m）、第4層明黄褐色砂泥層（0.1 m）、第5層黄褐色粘土層（地山）である。第3層上面で井戸SE 1、第4層下面で土壌SK 3、柱穴P 4～6を検出した。

近世以降の遺構には、土壌（SK 1・2）、柱穴（P 1・2）があり、全域で検出した。

室町時代の遺構には、井戸（SE 1）がある。径約1.1 m、深さ約1 mである。底部には赤灰色砂が堆積し、上層は瓦のみが堆積する。永享年間（1429～1441）の塔再建に伴うと推定できる。

平安時代の遺構は調査区南西部で検出し、柱穴（P 3～6）がある。P 6は径0.3 m、深さ0.3 mである。埋土は黄色土で平安時代の瓦・土師器を含む。

遺物は整理箱にして11箱出土した。出土遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、陶器、磁器、瓦などがある。瓦が大半を占め、軒瓦が8点出土した。土器類は少量であ



図 284 調査位置図（1：5,000）



図 285 調査区配置図（1：1,000）

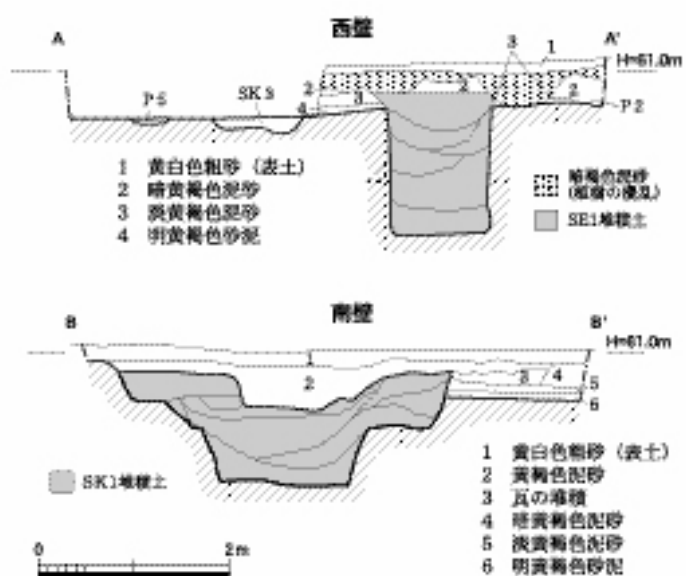


図 286 西壁・南壁断面図（1：80）

る。

立会調査の遺構・遺物 調査トレンチの層序は、塔北側では4層の堆積があり、西に向かって順に堆積する。上部2層は瓦堆積層で、下層は瓦堆積層が2層ある。なお、塔西側に落込みがあり、旧地形を埋めたと推定できる。塔東側では表土より下層は瓦堆積層2層でその下層は地山である。塔南側では攪乱層が厚く、その下層は地山である。塔西側では東側・北側と同様の瓦堆積層がある。中央部では落込みがあり、埋土は黒灰色砂泥層で、古墳時代の土師器片が出土した。

塔中央基壇部分は上部0.3mまで攪乱されるが、下層は黒褐色砂の締まった土で、周辺の地表面より、0.4～0.5m高まり旧基壇と推定できる。

遺物は整理箱にして22箱出土した。出土遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、磁器、瓦などがある。瓦が大半を占め、飛鳥時代から平安時代の軒瓦が20種出土した。

小結 今回の調査では、塔の北側・東側では廃棄された瓦上に、少なくとも2回の修復痕跡が認められた。塔基壇は従来から言われるように、創建時の位置と推定できる。また、創建以前の下層遺構の存在が確認できた。

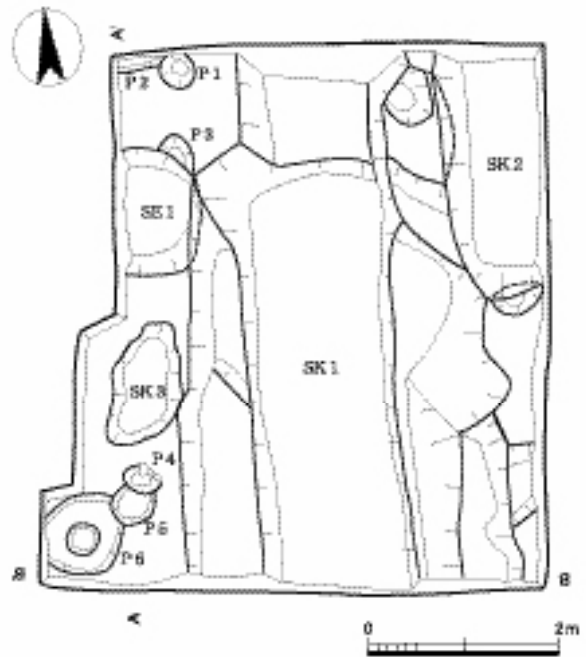


図 287 遺構平面図 (1 : 80)



図 288 調査区全景 (南東から)

56 旭山古墳群

経過 今回の発掘調査は、京都市営花山火葬場拡張工事に伴う調査である。当地は旭山古墳群にあたるため、発掘調査を実施することとなった。調査地は東山丘陵の東斜面に立地する。

調査は、まず既知の3基の古墳（E-1・2・10）の調査を開始したが、周辺の分布調査の結果、周辺で新たに多くの古墳を確認し、これまで六条山古墳群とされていたものと一連の古墳群を形成していることが明らかとなった。このため、とりえず既知の古墳3基の調査を1次調査として行い、残りの古墳などの調査を次年度に実施することとした。

古墳域の表土を手掘りで掘削し、墳丘を検出し、石室内の調査を実施した。その後、周辺地形図作成・実測・写真撮影を行い、調査を終了した。

遺構 調査地の基本層序は、地表面から約0.5～0.2 mまでが表土で、その下が褐色土の地山層で、地山を掘削し周濠を造り、その土を盛り上げて墳丘を構築する。

E支群は、古墳群の南端に位置し、尾根の南斜面に立地する。E-2号墳が最も大きく、その北東にE-1号墳、西側に離れてE-10号墳が位置する。

E-2号墳は、前方を除く三方に周溝が巡り、墳丘北側にはV字形の溝、東西両側にはU字形溝を掘ってつなげる。墳丘規模は東西9.2 m、南北9.8 m、高さ1.7 mである。石室掘形は、南に開口し、幅2.5 m、長さ6.7 mで、底部は平坦である。石室は両袖式横穴石室で、玄室幅1.2 m、長さ2.4 m、羨道幅0.9 m、長さ3.5 mである。壁面は3段目程度まで残存する。床面からは古墳時代の須恵器、奈良時代の須恵器・土師器、埋土から平安時代中期の須恵器、後期の土師器が、墳丘南裾部から古墳時代の須恵器が出土した。

E-1号墳とE-10号墳は、いずれも規模は一辺6 m前後、高さ1.3 m前後で、三方に周溝が巡り、無袖式横穴石室を持つ。E-1号は石室の残存状況が悪く、石が数個残り、石室内から鉄釘が出土した。E-10号墳は、石室の残存状況が良く、羨門から西へ続く石列が2石残る。石

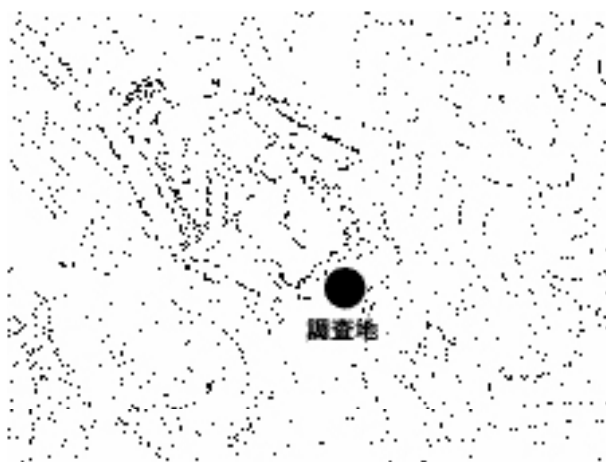


図 289 調査位置図（1：5,000）



図 290 調査区配置図（1：2,000）

室内から鉄製刀子が、外護列石前から須恵器が多数出土した。

遺物 出土遺物には、須恵器、土師器、刀子・鉄釘などがある。時代は、古墳時代後期に属するものの他、奈良時代、平安時代のものもある。

小結 今回の調査では、南端のE支群3基の古墳を検出し、当該期の古墳の構造や墓前祭祀の状況を明らかにしたことは重要な成果である。また、E-2号墳では奈良時代に再使用、平安時代に破壊されたことが明らかとなった。

『旭山古墳群発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第5冊 1981年報告

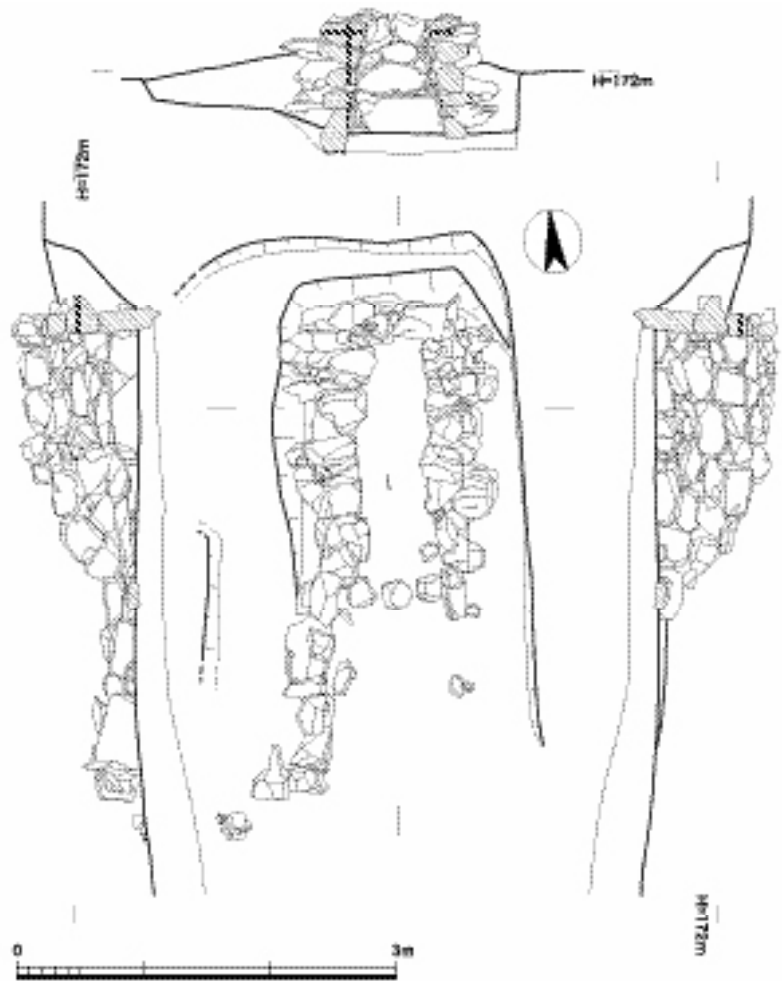


図 291 E-10号墳石室実測図(1:60)



図 292 調査区全景(北から)

57 深草遺跡

経過 今回の発掘調査は、上下水道管設置に伴って実施した調査である。当地は中久世遺跡の北西部にあたり、鴨川の沖積地から稻荷山西麓の微高地上に位置し、北東から南西に緩やかに傾斜する段丘上に立地する。1955年から発掘調査が数回実施されている。

調査は、深草西浦町一帯において工事が行われ、各要所では縦坑が掘削された。この縦坑の掘削の際に立会調査を行い、断面実測と写真撮影を実施した。この内、西浦町北中央通内でのNo.2とNo.3地点の縦坑では遺構が確認されたため、No.2は南北4m、東西3.5m、No.3は南北4.3m、東西6mの調査区を設定し、調査を実施した。

遺構 調査地の基本層序は、No.2トレンチで、第1層路面敷(0.4m)、第2層耕土(0.3~0.4m)、第3層黒灰色砂泥層(0.1m)、第4層暗灰色泥土層(0.2m:以下無遺物層)、第5層灰色砂礫層(地山)である。第3層上面、第6層上面で遺構を検出した。

No.2トレンチでは、第3層上面中央部で東西溝を検出した。溝は幅2.1

m、深さ約1.3m、埋土は暗黒灰色砂泥である。他は攪乱のみで、遺構は検出できなかった。第6層上面では暗褐色灰色泥土の落込みを検出した。

No.3トレンチでは、第3層上面南東部で流路の一部を検出した。流路は北東から南西へ流れ、西肩は確認したが、東肩は調査区外である。深さは0.4mまで確認した。埋土は灰色砂泥である。他は攪乱のみで、遺構は検出できなかった。



図 293 調査位置図 (1:5,000)

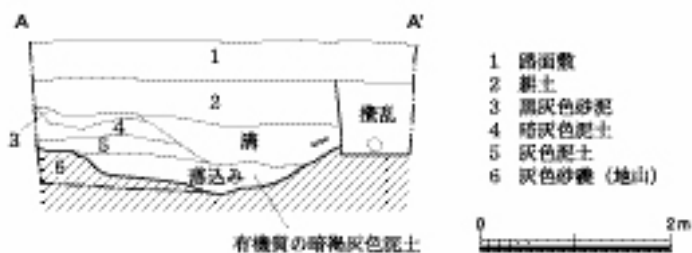


図 294 No.2トレンチセクション断面図 (1:80)

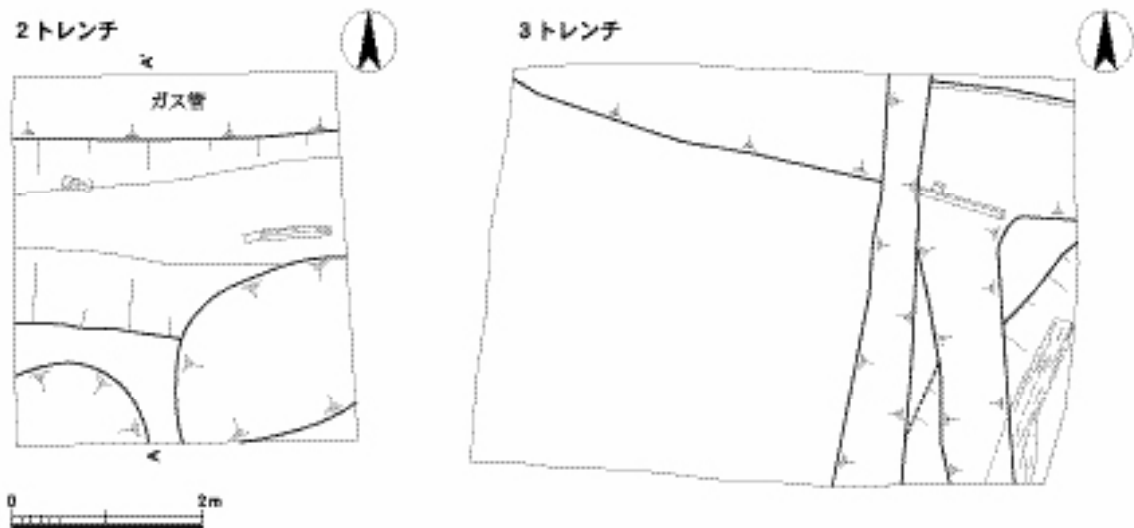


図 295 遺構平面図（1：80）

遺物 遺物は整理箱にして13箱出土した。遺物の種類には、弥生土器壺・甕・高杯、土師器、須恵器、陶器、石鏃・石包丁、木片などがあり、弥生土器が最も多く、他の土器・石製品は少ない。弥生土器は、弥生時代前期から後期に属する。遺物は、No.2トレンチ東西溝とNo.3トレンチ流路でまとめて出土した。

小結 深草遺跡は、弥生時代前期から後期に至る遺跡で、今回の調査では、弥生時代の溝や流路を検出した。周辺の立会調査と合わせて馬蹄形に約180mに及ぶことがわかり、鴨川左岸に位置する当該期の遺跡の変遷や構造を知る上で重要な発見となった。

58 深草寺跡

経過 今回の発掘調査は、京都市立深草中学校校舎建設工事に伴うもので、深草寺跡および深草遺跡の範囲にあたるため、調査を実施した。調査地は稻荷山の南西麓、七瀬川の右岸段丘上に位置する。

学校敷地の東南隅に東西 25m、南北 13m の東北部を欠いた L 字形の調査区を設定し調査を行った。

遺構 調査地の基本層序は、第 1 層グランド整地層盛土 (0.5 m)、第 2 層近～現代整地層 (0.3 m)、第 3 層淡灰黄色泥砂層 (0.3 m : 中世包含層)、第 4 層黒褐色泥砂層 (0.2 m : 包含層)、第 5 層暗黄灰色泥砂 (0.1 m : 包含層)、第 6 層淡黄灰色泥砂 (近世遺物含む)、第 7 層暗灰褐色砂泥、第 8 層黄灰色泥砂層 (地山) である。第 8 層は西側が高く、東側に下がる。このため、第 4・8 層上面で各時期の遺構を検出した。地表面の標高は約 35.2 m である。

遺構面では井戸、柱穴、溝、土壇を検出した。

近代以降の遺構には、井戸 (SE 1～5)、柱穴 (P 1・2)、溝 (SD 1～4) がある。いずれも耕作などに関する遺構である。

鎌倉時代の遺構には、土壇 (SK 1～8)、柱穴 (P 3～15)、溝 (SD 5) がある。土壇は全域に散在し、円形のものが多いが、不定形のものもある。大きさは径 1～1.5 m 程度、深さ 0.5

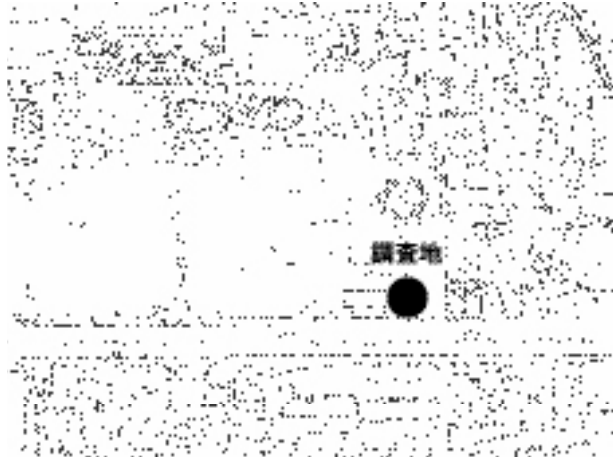


図 296 調査位置図 (1 : 5,000)

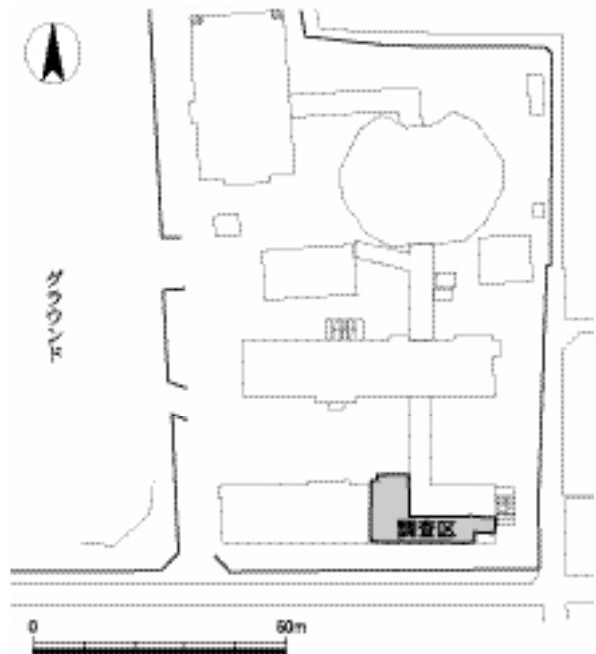


図 297 調査区配置図 (1 : 1,500)

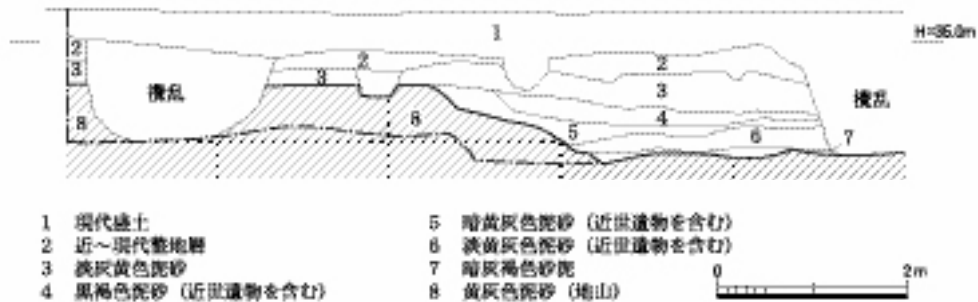


図 298 西壁断面図 (1 : 80)

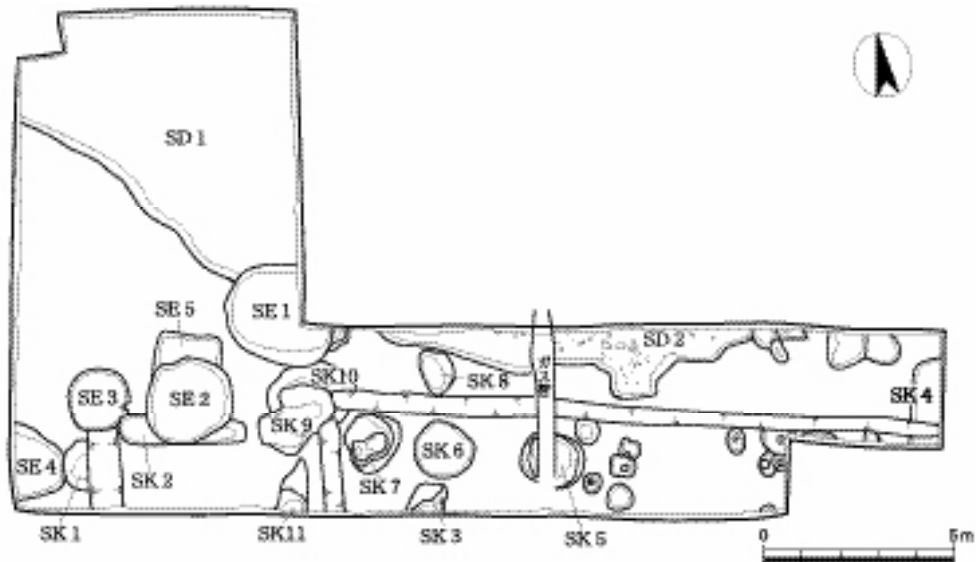


図 299 遺構平面図（1：200）

～1 mである。堆積土は、いずれも下層に灰色泥質土である。土師器、瓦器を含む。SD 2は調査区東部北端に位置し、東西に延びSD 1の下層につながると考えられる。深さは0.5～0.9 m、埋土は淡茶灰色泥砂で、肩口に人頭大の河原石が検出された。瓦器、瓦を含む。柱穴は調査区南部に散在する。形状は円形・楕円形で、径0.5～0.8 m、深さ0.1～0.3 mのものがある。掘立柱建物としてはまとまらなかった。

平安時代の遺構には、土壇（SK 9・10）がある。重複する不定形の土壇で、一辺1.5～2.0 mである。土師器を含む。

弥生時代の遺構には、土壇（SK11）がある。不定形の土壇で、一辺1.4 m程度である。弥生土器片を少量含む。

遺物 遺物は整理箱にして11箱出土した。出土遺物の種類には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦、金属製品、銭貨などがある。土師器が大半を占め、瓦器の羽釜が多いことも注目できる。また、奈良時代の須恵器、平安時代前期の軒丸瓦も少量出土した。他にSD 1の下層から古墳時代の須恵器が出土した。

小結 今回の調査では平安時代から近世の遺構を多数検出したが、寺院関係遺構は検出することはできなかった。しかし、当該期の瓦類が出土しており、近接地に建物が存在したと推定できる。また、弥生時代・古墳時代についても遺跡の存在が推定できる。いずれにしても、各時期の遺構・遺物を多数検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。



図 300 調査区全景（西から）

59 伏見城跡

経過 今回の発掘調査は、郵政互助会寮新築工事に伴うもので、当地は伏見城城下町北部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に、幅5mの東西トレンチを2本、南北トレンチを1本設定した。

遺構 調査地は東から西へ傾斜し、調査区の土層も同様に西へ傾斜する。基本層序は、第1層現代整地層（約0.9m）、第2層褐色土層（耕土：約0.3m）、第3層茶褐色砂礫層（地山）である。第3層上面で遺構を検出した。

検出した遺構には、柱穴、土壇、瓦溜、井戸などがある。柱穴は北部で少数検出したが、建物としてはまとまらない。土壇・瓦溜は全域で検出し、瓦溜では投棄した瓦の上に土を置き整地を行っている。柱穴・土壇・瓦溜は出土した遺物から桃山時代に属する。

井戸は南部で検出し、SE2のみが素掘りの井戸で、桃山時代に属すると推定できる。他の井戸は近代の肥だめと考えられる。

遺物 遺物は整理箱にして60箱出土した。遺物の種類には、土師器、陶器、磁器、塩壺、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棟端飾り瓦、鉄釘などがある。桃山時代の瓦類が大半を占め、他の土器類などは少量である。

瓦類はSX3・4から大量に出土し、家紋軒丸瓦、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦などがあり、金箔を貼った瓦も含まれる。軒丸瓦の家紋には「餅紋」・「蛇の目弦巻紋」の2種があり、棟端飾り瓦の家紋には「桐紋」・「菊紋」・「三つ巴紋」がある。

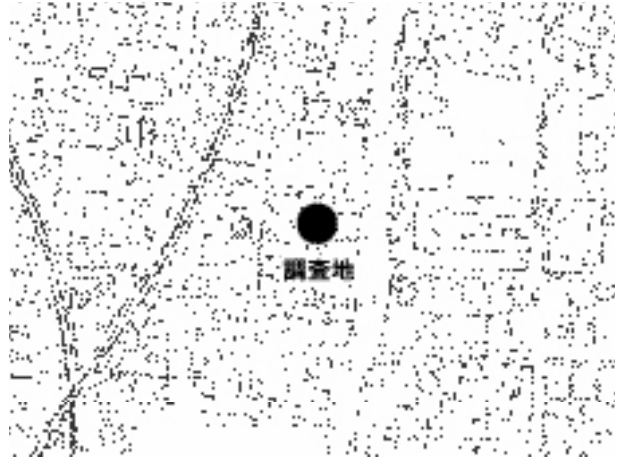


図 301 調査位置図（1：5,000）

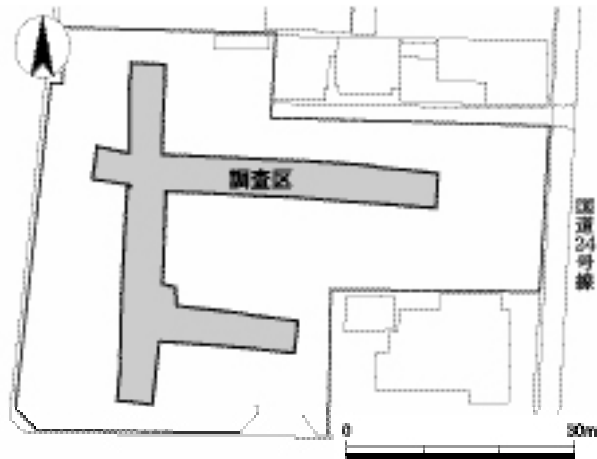


図 302 調査区配置図（1：1,000）

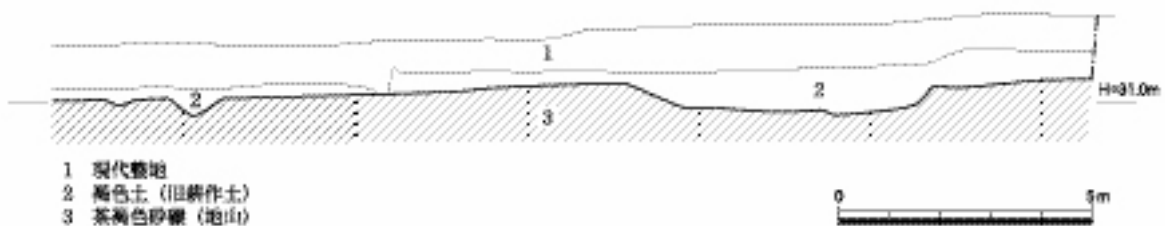


図 303 Aトレンチ北壁断面図（1：150）

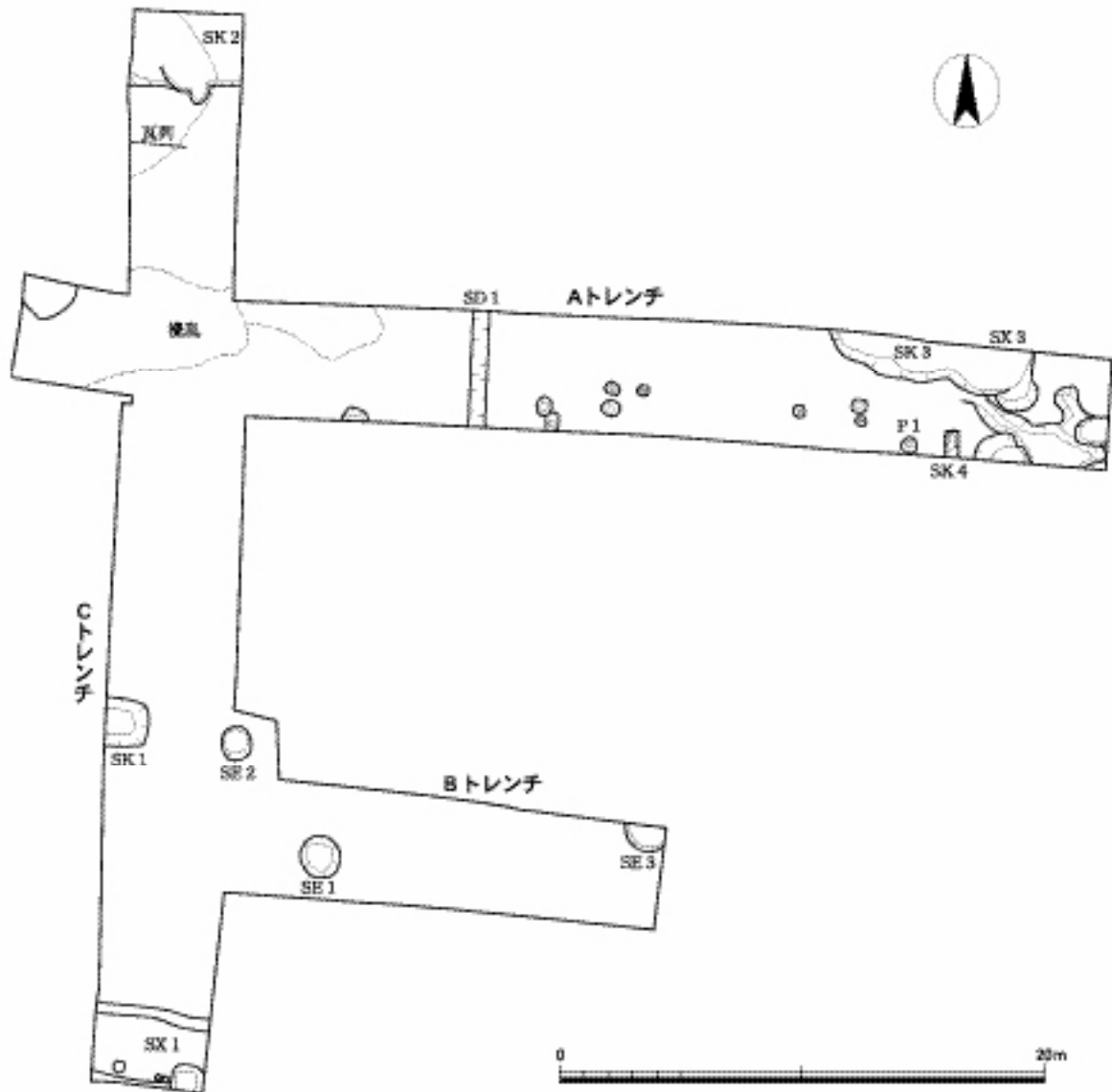


図 304 遺構平面図 (1 : 300)

小結 今回の調査では、遺構面上面がかなり削平されたと考えられ、桃山時代の遺構は少数しか検出できず、城下町の屋敷の状況は明らかにすることはできなかった。

遺物の中には家紋軒瓦が見られ、当該大名名を決定する上で重要ではあるが、同一家紋を用いる大名は多数あり、調査地が誰の屋敷に属するかは不明である。

『伏見城跡発掘調査概報 (伏見区水野左近東町)』1977年報告

第2章 試掘・立会調査

I 昭和52年度の試掘・立会調査概要

昭和52年度の原因者負担による試掘・立会調査の委託契約件数は、試掘調査4件、立会調査34件である。これらの調査は遺構・遺物が希薄であったため一覧表（表2）の記載にとどめ、調査位置を図305に示した。

平安宮・京跡 平安宮内の大蔵跡（1）では、地表下1.5mで遺物包含層を検出した。包含層は暗褐色泥土で、堅く締まり北側にやや下がる。遺物は平瓦・丸瓦、平安時代の土師器片などを確認した。他に寛永通寶3・文久永寶1・青磁片・近世陶器なども確認した。

縫殿寮跡（2）では、地表下1mの暗灰色砂泥層で、近世の井戸・溝を検出した。地表下1.1mで黄褐色砂泥の地山となる。地山直上で近世の柱穴2基を検出した。縫殿寮跡に関連した遺構は未検出である。

典薬寮・御井跡（3）では、地表下0.4mで黄褐色砂礫の地山を検出した。遺物は近世瓦を確認した。

二条城内（4）では、地表下0.5mで江戸時代の遺物を含む包含層、地表下1.4～1.5mで平安時代後期の遺物を含む包含層を検出したが、明確な遺構は確認できなかった。出土遺物は平安時代に属する土師器・陶器・軒瓦、江戸時代に属する土師器・陶磁器・瓦などである。

平安京内では、右京四条四坊六町内（12）で、地表下0.8mの地山面で弥生時代から古墳時代前・中期の溝を確認した。

他に西寺跡（15・16）で、平安時代の建物跡・井戸・暗渠などを確認した。暗渠は、西限築地跡と推定される。遺物は銭貨・墨書土器片・人形・独楽・櫛・箸などが井戸から出土した。

その他の遺跡 鳥羽離宮跡・中臣遺跡では、明確な遺構は確認できなかった。

一乗寺向畑町遺跡（25）で、耕作土直下で南に傾斜する平安時代前期の包含層と中期の川を確認した。また標高80mあたりで、縄文時代の包含層を確認した。付近一帯は高野川の堆積層で、白川通以東はその上に砂と黒色微砂の互層で扇状沈積層（洪積世末期）となる。なお、白川以西には若干中世包含層（黄灰色砂土層）が認められる。

西飯食町遺跡（31）では、中世の溝状遺構・井戸・土壇などを確認した。遺物は13世紀に属する土師器・瓦器・須恵器鉢・輸入陶磁器片などが出土した。

伏見城跡（34）では、旧大手筋の石垣と路面を確認した。石垣は現大手筋の両側溝下で確認し、最上部は地表下0.3～0.4m、最深部3.0～3.5mである。石垣に伴い直径0.2～0.25mの松材を使用した胴木状遺構を確認した。路面は地表下0.8～1.0mで確認した。遺物は、瓦・土師器・陶磁器・鏝・角釘・菜箸・銭貨（寛永通寶）などを検出した。

その他の調査区からは明瞭な遺構・遺物は検出できなかった。



図 305 昭和 52 年度の試掘・立会調査位置図 (1 : 100,000)

表1 昭和52年度発掘調査一覧表

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	1 52-049-03 平安宮内裏跡 77HK-DA001	上京区下立売通千本東 入田中町459	1977/10/13 ~1977/10/20	40㎡	京都市	平田、辻裕	国庫補助
	2 52-049-04 平安宮大極殿跡 77HK-DG	中京区東桑田町3-1	1978/02/09 ~1978/02/28	240㎡	京都市/ 山根敏三郎	平田	国庫補助
	3 52-049-02 平安宮朝堂院跡 77HK-HA001	上京区竹屋町通千本東 入新塚町863	1977/10/19 ~1977/10/22	20㎡	京都市	平田、辻	国庫補助
	4 52-049-06 平安宮朝堂院康楽堂跡 77HK-HA002	上京区千本通竹屋町下 る東桑町863-25	1978/03/15 ~1978/04/04	30㎡	京都市/ 藤田順孝	堀内明	国庫補助
	5 52-049 平安宮兵庫跡 77HK-NA001	上京区御前通一桑下る 東堀町133-1 (仁和小学校)	1977/09/18 ~1977/10/02	120㎡	京都市	鈴木広	
	6 52-046 平安宮造酒司跡 77HK-MK003	中京区東桑田松下町9	1977/11/20 ~1977/12/27	800㎡	京都市	本、辻裕	
	7 52-078 平安宮造酒司跡 77HK-MK004	中京区東桑田松下町	1978/03/02 ~1978/06/31	2700㎡	京都市	本	
	8 52-006-06 平安宮西院跡 77HK-S001	上京区管恵光院通丸太 町上る西院町	1977/07/03 ~1977/07/24	150㎡	京都市	百瀬、長来	国庫補助
	9 52-049-05 平安宮左兵衛府跡 77HK-SF	上京区下立売通日暮西 入中村町543.546	1977/12/24 ~1977/12/31	60㎡	京都市/ 上田正一	平尾	国庫補助
	10 52-006-05 平安宮太皇宮跡 77HK-DK001	上京区千本通丸太町下 る東入主税町1060	1977/07/11 ~1977/07/21	50㎡	京都市	木下	国庫補助
平安京	11 52-013 平安宮西院跡 77HK-S002	上京区日暮通丸太町上 る西入西院町746-49・ 52	1977/07/25 ~1977/08/12	25㎡	龍川長一郎	木下	
	12 52-006-01 平安宮主水司跡 77HK-MD	上京区管恵光院通丸太 町下る主税町	1977/03/25 ~1977/04/14	120㎡	京都市	本	国庫補助
	13 52-055 平安京左京四条三坊十五町 77HK-TK	中京区烏丸通六角下る 七鬮音町628.630.632	1977/11/21 ~1978/02/06	285㎡	日本興業銀行	石井、吉川	
	14 52-030 平安京左京六条一坊二町 77HK-KT001	下京区中堂寺坊城町 26-1 (光徳小学校)	1977/09/04 ~1977/09/19	130㎡	京都市	木下	
	15 52-037 平安京左京六条二坊十二町 77HK-KV	下京区桂小路六条上る ト味金仏町	1977/09/27 ~1977/11/01	100㎡	(株)井筒	鈴木久、百瀬、 家崎	
	16 52-065 平安京左京七条一、二坊、 東市跡 77HK-HI	下京区七条通 (御筒通~堀川通)	1978/02/08 ~1978/03/16	250㎡	関西電力	家崎、中村	
	17 52-072 平安京左京七条三坊十四町 77HK-HZ	下京区正面通烏丸東入 廿人塚町22	1978/02/25 ~1978/03/19	80㎡	西村七兵衛	辻裕、永田信	

	契約番号・通称名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安京	18 52-057 平安京左京八条三坊一町 77HK-TW	下京区新町道七条下る 東堀小路町595-1	1977/12/01 ～1978/01/20	288㎡	(株)京都タワ -	鈴木広	
	19 52-006-04 平安京左京九条一坊四町、 藤城門跡 77HK-RJ	南区四ツ堀町42	1977/07/11 ～1977/07/23	27㎡	京都市	木、石井、 曾田	国庫補助
	※ 52-052・53-008 平安京右京一条三坊四町 77HK-KD	中京区西ノ京南大炊御 門町1-2	1978/04/03 ～1978/06/10	1000㎡	関西電力	久世、平方	53年度で報告
	20 52-020 平安京右京二条四坊十二町 77HK-YS	右京区太秦安井樋通町 14-1 (安井小学校)	1977/07/25 ～1977/08/17	126㎡	京都市	中村、石井	
	21 52-008 平安京右京五条・六条四坊 77HK-KG	右京区西院丹双町	1977/09/12 ～1977/09/28	200㎡	上下水道	加納、平尾、 久世	
	22 52-081 平安京右京六条四坊七町 77HK-YD	右京区西院丹双町 110-1他	1978/03/06 ～1978/03/20	400㎡	(株)伊藤萬	加納	
	23 52-041 平安京右京七条一・二坊、 西市跡 77HK-NE	下京区西七条北衣田町 ～西七条北東野町 (七条通)	1977/11/01 ～1978/03/09	490㎡	上下水道	鈴木広、白藤、 辻新、家崎、 中村	
	24 52-006-02 平安京右京九条一坊十二町、 西寺跡 77HK-SG001	南区唐橋西寺町 (西寺児童公園)	1977/06/16 ～1977/06/04	91㎡	京都市	長宗、吉川	国庫補助
	25 52-019 平安京右京九条一坊十二町、 西寺跡 77HK-SG002	南区唐橋西寺町68 (唐橋小学校)	1977/08/01 ～1977/08/23	120㎡	京都市	本	
	26 52-049-01 平安京右京九条一坊十一町、 西寺跡(大井戸) 77HK-SG003	南区唐橋西寺町	1977/10/18 ～1977/10/21	12㎡	京都市	鈴木広、長宗	国庫補助
27 52-035 平安京右京九条一坊十四町、 西寺跡 77HK-SG004	南区唐橋西寺町27	1977/11/07 ～1977/11/30	280㎡	天蓮教唐橋分 教会	鈴木広		
白河街区	28 52-050 藤勝寺跡 77KS-ZH001	左京区岡崎最勝寺町	1977/12/06 ～1977/12/28	135㎡	京都市/ (株)兼彦	平田	国庫補助
	29 52-022 得長寿院跡 77KS-AA	左京区岡崎徳成町5	1977/09/05 ～1977/10/08	404㎡	京都外国語大 学	堀内明	
烏羽殿宮	30 52-048-01 烏羽殿宮跡(東殿) 77TB-TB029	伏見区竹田内畑町 51.97	1977/11/01 ～1978/03/31	166㎡	京都市	長宗、鈴木久	国庫補助
	31 52-048-01 烏羽殿宮跡(田中殿) 77TB-TB030	伏見区田中殿町27-2B	1977/11/01 ～1978/03/31	88㎡	京都市	長宗	国庫補助
	32 52-048-01 烏羽殿宮跡(東殿) 77TB-TB031	伏見区竹田内畑町40	1977/11/01 ～1978/03/31	270㎡	京都市	長宗	国庫補助
	33 52-048-01 烏羽殿宮跡(東殿) 77TB-TB032	伏見区竹田浄菩提院町 81	1977/11/01 ～1978/03/31	27㎡	京都市	長宗	国庫補助

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
鳥羽龍宮	34 52-048-01 鳥羽龍宮跡(東殿) 77TB-TB033	伏見区竹田内畑町 120-3・7	1977/11/08 ~1978/03/31	80㎡	京都市	長宗、鈴木久	国庫補助
	35 52-048-01 鳥羽龍宮跡(東殿) 77TB-TB034	伏見区竹田内畑町 70-1	1977/11/08 ~1978/03/31	44㎡	京都市	鈴木久	国庫補助
	36 52-042 鳥羽龍宮跡(東殿) 77TB-TB035	伏見区竹田内畑町64-2、 75、竹田杵杵提脱町 47-1	1977/11/01 ~1978/03/31	1430㎡	区画整理	長宗	
	37 52-048-02 鳥羽龍宮跡(東殿) 77TB-TB036	伏見区竹田内畑町 159-3・5	1977/11/08 ~1978/03/31	721㎡	京都市	長宗、鈴木久	国庫補助
	※ 52-079・53-015-01 鳥羽龍宮跡(田中殿) 78TB-TB039	伏見区竹田小屋ノ内町 57	1978/03/10 ~1978/04/10	300㎡	京都市/ 柳山増次	鈴木久	53年度で報告
中匠遺跡	38 52-006-03 中匠遺跡 77KT-NK008	山科区勸修寺西金ヶ崎 96	1977/05/09 ~1977/06/02	180㎡	京都市/ 寺田 公	菅田	国庫補助
	39 52-029 中匠遺跡 77KT-NK009	山科区西野山中田町38 (児童厚生施設)	1977/08/25 ~1977/09/10	120㎡	京都市	磯部、菅田	
	40 52-047 中匠遺跡 77KT-NK010-A	山科区勸修寺西金ヶ崎 58	1977/11/04 ~1978/03/31	150㎡	京都市	菅田	国庫補助
	52-047 中匠遺跡 77KT-NK010-B	山科区勸修寺西金ヶ崎 57-1	1977/11/04 ~1978/03/31	250㎡	京都市	菅田	国庫補助
	52-047 中匠遺跡 77KT-NK010-C	山科区勸修寺西金ヶ崎 89-2	1977/11/04 ~1978/03/31	200㎡	京都市	菅田	国庫補助
	52-047 中匠遺跡 77KT-NK010-D	山科区勸修寺西栗栖野 町・西金ヶ崎	1977/11/04 ~1978/03/31	2500㎡	京都市/ 区画整理	菅田	国庫補助
52-036 中匠遺跡 77KT-NK010-E	山科区勸修寺西金ヶ崎 ・東金ヶ崎・西栗栖野町	1977/09/12 ~1978/01/31	2900㎡	京都市/ 区画整理	菅田	国庫補助	
41 52-034 中匠遺跡 77KT-NK011	山科区勸修寺西栗栖野 町53.54.57	1977/10/11 ~1977/11/12	345㎡	京都市/ 山口杜太郎	菅田、磯部、 前田	国庫補助	
その他の遺跡	42 52-056 北野庵寺 77RH-KG002	北区北野上白梅町8	1977/12/19 ~1978/02/20	360㎡	(株) 森宮	梅川	
	43 52-014 相国寺旧境内 77RH-SH001	上京区今出川通烏丸東 入上る相国寺門前町 (成安女子学園)	1977/07/20 ~1977/08/31	278㎡		吉川、辻裕	
	44 52-077 相国寺旧境内 77RH-SH002	上京区今出川通烏丸東 入上る相国寺門前町 (成安女子学園)	1978/03/10 ~1978/04/07	162㎡	成安女子学園	吉川	
	45 52-077 相国寺旧境内 77RH-SH003	上京区今出川通烏丸東 入上る相国寺門前町 (成安女子学園)	1978/06/07 ~1978/06/12	72㎡	成安女子学園	吉川、辻純	

	契約番号・道跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
その 他 の 道 跡	46	52-009 法成寺跡 77KS-HJ	上京区河原町通広小路 下る東入東根町27-3	1977/08/01 ~1977/09/20	330㎡	国家共済組合	家崎、前田	
	47	51-026・52-006 常盤仲之町道跡・広珠寺田 境内 76UZ-DK001	右京区太秦東錦町 15-7,8-15	1977/02/01 ~1977/06/10	3040㎡	(株)緑地デザイン	鈴木広	
	48	52-062 常盤仲之町道跡 77UZ-DK002	右京区太秦東錦町18	1978/01/30 ~1978/02/18	160㎡	(財)電気通信 共済会	平尾	
	49	52-043 弁天島墓塚 77UZ-DK003	右京区太秦錦町36-1	1977/11/11 ~1978/02/11	1500㎡	(宗)広隆寺	江谷	
	50	52-003 錦尾寺跡 77UZ-UK	右京区太秦錦町31 (右京区役所)	1977/06/03 ~1977/06/12	196㎡	京都市	梅川、石井	
	51	52-016 史跡名勝嵐山 77UZ-DR	右京区嵯峨天龍寺立石 町1-36	1977/08/01 ~1977/08/12	156㎡	社会福祉法人 明照園	鈴木久	
	52	52-001 柳原道跡 77MK-QH	西京区柳原町貫62-1	1977/04/03 ~1977/06/16	600㎡	(株)明和興発	吉川、中村、 石井	
	53	52-021 中久世道跡 77MK-OY	南区久世大瀬町62 (大瀬小学校)	1977/07/26 ~1977/08/25	450㎡	京都市	百瀬	
	54	52-039 中久世道跡 77MK-NK001	南区久世殿城町 427-1・2,428,429-2	1977/10/26 ~1978/01/08	300㎡	京都中央信用 金庫	久世、中村	
	55	52-038 法観寺跡 77RT-YS	東山区八坂上町 (法観寺)	1977/11/02 ~1977/11/10	30㎡	法観寺	木	
	56	52-031 嵐山古墳跡 77RT-AY001	山科区上花山旭山町	1977/09/28 ~1977/12/21	1000㎡	京都市	梅川、木下	
	※	52-070・53-025 旭山古墳跡 77RT-AY002	山科区上花山旭山町	1978/01/25 ~1978/08/31	16000㎡	京都市	木下	53年度で報告
	57	52-054 深草道跡 77TB-FK	伏見区深草西前町一丁 目~八丁目	1977/11/10 ~1978/06/30	350㎡	上下水道	吉村	
	58	52-033 深草寺跡 77FD-FK	伏見区深草西伊達町 1-14 (深草中学校)	1977/09/12 ~1977/10/02	287㎡	京都市	木	
59	52-002 伏見城跡 77FD-MS	伏見区桃山水野左近東 町6	1977/04/13 ~1977/06/10	800㎡	(財)興産互助 会	吉村		

表2 昭和52年度試掘・立会調査一覧表

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	1 52-011 平安宮大儀 77HK-OY	上京区中立売通六軒町 西入三軒町65-42	1977/07/21 ~1977/07/24	立会 60㎡	足立五男	堀内明	
	2 52-018 平安宮跡能楽跡 77HK-SJ	上京区下長者町浄福寺 西入新御幸町44	1977/07/13 ~1977/07/15	立会 130㎡	谷 朋行	辻裕、家崎	
	3 52-058 平安宮具業寮・御井跡 77HK-K-058	中京区西ノ京車坂町12	1978/04/23 ~1978/04/25	立会	関西電力	平田	
	4 52-004 平安宮、平安京左京二条・ 三条二坊、史跡二条城 77HK-JJ	中京区二条通堀川西入 二条城町	1977/04/16 ~1977/04/26	立会 320㎡	京都市	菅田	
	5 52-071 平安宮、平安京左京三条一 坊、史跡二条城 77HK-JJ002	中京区二条通堀川西入 二条城町	1978/03/06 ~1978/03/29	立会	京都市	平田	
平安京	6 52-017 平安京左京三条二坊七町、 史跡二条城 77HK-JJ	中京区押小路通堀川西 入池元町	1977/07/27 ~1977/09/03	立会	大阪ガス	長宗	
	7 52-064 平安京左京・右京七条一・ 二坊、東市・西市跡 77HK-NE・HI	下京区七条通 (西大路~烏丸)	1977/10/26 ~1978/06/13	立会	電々公社	家崎	
	8 52-023 平安京左京八条二坊、 東市跡 77HK-HI	下京区七条通 (大宮~桂小路)	1977/08/20 ~1977/09/30	立会 90㎡	大阪ガス	鈴木久、前田	
	9 52-044 平安京左京八条三坊二町 77HK-SS-立	下京区堀小路通烏丸西 入東堀小路町614 (下京区役所)	1977/09/16 ~1977/11/15	立会	京都市	吉村	
	10 52-061 平安京右京北辺三坊三町 77HK-TS001	北区大将軍一条町37-4 (大將軍小学校)	1977/12/07 ~1977/12/16	試掘 40㎡	京都市	平尾	
	11 52-028 平安京右京二条三坊二町 77HK-SE001	中京区西ノ京中御門西 町25 (朱雀第八小学校)	1977/08/29 ~1977/09/03	試掘 50㎡	京都市	久世	
	12 52-045 平安京右京四条四坊六町 77HK-YA001	右京区山ノ内山ノ下町 22 (山ノ内小学校)	1977/09/27 ~1977/10/17	試掘 100㎡	京都市	家崎	
	13 52-080 平安京右京五条二・三坊 77HK-K-080	右京区西院東厚和院町	1978/02/27 ~1978/10/31	立会 550m	関西電力	久世	
	14 52-076 平安京右京五条・六条四坊 77HK-KG	右京区葛野大路(高辻~ 五条)、葛野大路1筋東、 南辻通、葛野東通	1978/02/20 ~1978/01/31	立会 1780m	上下水道	加納	西部2号幹線 その1~4
	15 52-026 平安京右京九条一坊、 西寺跡 77HK-SG003	南区唐橋西寺町 (東寺西門通)	1977/09/01 ~1977/10/31	立会 240m	大阪ガス	鈴木広、長宗	
	16 52-061 平安京右京九条一坊、 西寺跡 77HK-SG003	南区唐橋西寺町 (東寺西門通)	1977/11/21 ~1977/11/28	立会	京都市	長宗	
	17 52-016 平安京右京九条四坊 77HK-KG	南区吉祥院	1977/06/16 ~1978/03/31	立会 10670m	上下水道	加納、平尾	吉祥院その14 ~19

	契約番号・道路名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
白河町区	18 52-007 法勝寺跡 77KS-OH	左京区美崎法勝寺町	1977/06/20 ~1977/06/30	立 会	上下水道	平田、吉村	
	19 52-024 六勝寺跡 77KS-G-024	左京区美崎法勝寺町21 ~南禅寺草川町52	1977/09/10 ~1977/09/20	立 会	大阪ガス	平田	
烏羽瀬宮	20 52-042(4) 烏羽瀬宮跡 (東殿・馬場殿) 77TB-TB-立	伏見区竹田樋ノ井町 35-5地、中島宮ノ樋町 城南宮	1977/11/01 ~1978/03/31	立 会 256㎡	京都市	長宗、鈴木久	
	21 52-063 烏羽瀬宮跡 77TB-UW063	伏見区中島中道町~中 島堀端町	1978/01/23 ~1978/01/26	立 会 119㎡	上下水道	鈴木久	
	22 52-068 烏羽瀬宮跡 77TB-G-068	伏見区竹田浄善堤防町 105-6	1978/02/13 ~1978/02/28	立 会 150㎡	大阪ガス	長宗、鈴木久	
中區遺跡	23 52-082 中區遺跡 77KT-UW082	山科区西野山中田町~ 龍修寺西栗畑町	1978/03/29 ~1978/06/15	立 会	上下水道	菅田	
	24 52-084 中區遺跡 77KT-G-084	山科区西野山中田町	1978/03/15 ~1978/03/31	立 会 2728㎡	大阪ガス	菅田	
その他の遺跡	25 52-073 一乗寺向畑町遺跡 77KS-MJ	左京区一乗寺向畑町地 内	1978/02/20 ~1979/01/31	立 会	上下水道	梅田	
	26 52-083 法興院跡 77KS-UW083	中京区末丸町~鉢田町	1977/10/20 ~1977/12/28	立 会	上下水道	吉村	
	27 52-060 広勝寺跡 77UZ-DK-立	右京区常盤神田町~太 秦東峰岡町	1978/02/01 ~1978/10/04	立 会	近畿電気通信 局	平尾	
	28 52-010 車坂古墳 77KT-KZ	伏見区深草車坂町 10-2・3	1977/07/25 ~1977/08/22	試 掘 152㎡	山本ミチ子	菅田、磯部	
その他の遺跡	29 52-067 木津川川底遺跡 77NG-UW067	伏見区放生坪町	1978/03/01 ~1978/03/14	立 会	上下水道	百瀬	
	30 52-074 深草遺跡 77TB-FK	伏見区深草西前町四丁 目	1978/02/01 ~1978/12/28	立 会	上下水道	吉村	
	31 52-075 西飯食町遺跡 77TB-NG	伏見区深草地ノ内町	1978/02/27 ~1978/11/30	立 会	上下水道	吉村	
	32 52-012 伏見城跡 77FD-FJ	伏見区桃山町丹下、京 町十丁目	1977/07/13 ~1977/08/03	立 会	上下水道	吉村	
	33 52-027 伏見城跡 77FD-FJ	伏見区桃山町三河69-7	1977/09/06 ~1977/09/07	立 会 44㎡	大阪ガス	磯田	
	34 52-032 伏見城跡 77FD-FJ	伏見区西大手町~道河 路町	1977/08/24 ~1978/06/30	立 会	上下水道	磯田、吉村	

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	団体	委託者	調査員	備考
その他の遺跡	35 52-059 伏見城跡 77FD-F3	伏見区東大手町757～ 銀座町一丁目362	1978/01/15 ～1978/03/31	立会	大阪ガス	吉村	
	36 52-065 伏見城跡 77FD-F9	伏見区桃山堀上町69	1978/02/17 ～1978/02/23	立会	上下水道	磯田	
	37 52-069 伏見城跡、木幡岡所跡 77FD-F5	伏見区桃山紅雲町	1978/02/15 ～1978/06/30	立会	上下水道	吉村	
	38 52-083 伏見城跡 77FD-CG083	伏見区桃山紅雲町、深 草大亀谷教習町～桃山 町西尾	1978/03/ ～1978/06/	立会	大阪ガス	吉村	

版 图

昭和 52 年度
京都市埋蔵文化財調査概要

発行日 2011 年 9 月 30 日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961

